

博士学位論文（東京外国語大学）  
Doctoral Thesis (Tokyo University of Foreign Studies)

氏名	陸嬋
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	博甲第 206 号
学位授与の日付	2016 年 2 月 9 日
学位授与大学	東京外国語大学
博士学位論文題目	中島敦研究——異空間の探求と表象——

Name	LU Chan
Name of Degree	Doctor of Philosophy (Humanities)
Degree Number	Ko-no. 206
Date	February 9, 2016
Grantor	Tokyo University of Foreign Studies, JAPAN
Title of Doctoral Thesis	A Study on Nakajima Atsushi — — the Exploration and Representation about the Foreign Country ——

中島敦研究  
——異空間の探求と表象——

東京外国語大学大学院  
総合国際学研究科  
言語文化専攻  
陸嬋

二〇一六年三月

中島敦研究  
——異空間の探求と表象——

## 凡例

### (1) テキストの引用

本論で引用した中島敦の文章は、『中島敦全集 1』(2001年10月10日、筑摩書房)『中島敦全集 2』(2001年12月20日、筑摩書房)『中島敦全集 3』(2002年2月20日、筑摩書房)を底本とする。原則として旧漢字は新漢字に直し、ルビや傍点を簡略化した。

### (2) 引用・参考文献の表示

本論中に引用した文献は各章末の「注」において記し、主要参考文献は出版年月(刊行年)の新しいものから順に表示した。

### (3) 括弧の使用

引用、または言葉に含まれる問題点を示唆するために、一般的に括弧付きで用いられる語句には「」を、強調には<>を用いることとした。

### (4) 歴史的用語について

引用文における歴史的用語はそのままとした。その中、今日では不適切な用語もあるが、本論はあくまで歴史的用語という意味でのみ使用することとした。

## 目次

序章	本研究の目的とその方法及び論文の構成	
第一節	本研究の目的とその方法	1
第二節	論文の構成	5
第一章	中島敦における朝鮮表象——『巡査の居る風景』を中心に	
第一節	はじめに	10
第二節	同時代の朝鮮表象の文学言説	11
第三節	趙教英の人物造形	14
第四節	趙大煥の人物造形	22
第五節	終わりに	28
第二章	中島敦が見た昭和初期の中国の一側面——『D市七月叙景（一）』を中心に	
第一節	はじめに	31
第二節	混血の都市としての「D市」	32
第三節	二つの体験によって作られた<1929年7月の大連>	33
第四節	大連の「日常」と「非日常」	38
第五節	終わりに	42
第三章	『北方行』に関する一考察——アイデンティティーの探求を視座として	
第一節	はじめに	45
第二節	<三造物語>に見るアイデンティティーの探求	46
第三節	<白夫人母娘の物語>に潜むことばとアイデンティティーの問題	55
第四節	『北方行』の問題点と執筆の事情との関連	61
第五節	終わりに	66
第四章	日本植民地支配下の朝鮮物語——『虎狩』をめぐって	

第一節	はじめに	71
第二節	「私」が見た日本植民地支配下の朝鮮の一側面	72
第三節	虎狩体験の裏に潜む<日本>と<朝鮮>	81
第四節	<言葉>と植民地支配の問題	87
第五節	終わりに	89

## 第五章 南洋行に関する一考察——「南の空間」における<境界性>を中心に

第一節	はじめに	93
第二節	『光と風と夢』における想像上の南洋	94
第三節	南洋物から見る現実の南洋	97
第四節	南洋行と『李陵』	106
第五節	終わりに	112

## 第六章 南洋表象と<南>の記憶——『南島譚』と『環礁』を中心に

第一節	はじめに	115
第二節	同時代の作品から見る南洋表象	116
第三節	『南島譚』における<昔の南洋>	123
第四節	『環礁』における<今の南洋>	130
第五節	終わりに	135

## 第七章 『李陵』に関する一考察——「匈奴」という接点について

第一節	はじめに	139
第二節	『李陵』から見る李陵の匈奴体験と匈奴観の変化	140
第三節	司馬遷の匈奴征伐批判と「李陵の禍」	146
第四節	『史記』から見る司馬遷の匈奴観	151
第五節	『李陵』の蘇武像と昭和10年代の英雄像	155
第六節	終わりに——司馬遷と中島敦	163

終章	中島敦文学を総括して	168
----	------------	-----

主要参考文献.....173

初出一覽.....179

## 序章 本研究の目的とその方法及び論文の構成

### 第一節 本研究の目的とその方法

中島敦（1909-1942）は豊かな知性や教養をもち、短い密度の高い人生を経験した昭和初期の作家として知られている。中島敦論の嚆矢である文芸評論家・中村光夫の「青春と教養——中島敦について——」<sup>1</sup>（『批評』3、4 合併号、1944 年）をはじめ、今まで多くの研究者<sup>2</sup>によって本格的な中島敦研究の基礎が築かれてきた。これらの先行研究を主題で総括すると、概ね以下の三つに大別される。

一つ目は、典拠論である。主に、中国古典文学（漢籍）との関連である。漢文学者の家庭で長男として生まれ、幼少期から中国の古典や伝奇に親近感を抱き、「幾人が中島の中国について持った教養と同等の教養を独逸なり仏蘭西なりについて持ってあるであらうか」<sup>3</sup>と賞賛されるほど、中島敦は広く深い漢文の教養を身につけていた。そんな中島の代表的な作品の多くは、中国古典文学や歴史に題材を得ている。例えば、『悟浄歎異』『悟浄出世』は明の伝奇小説『西遊記』に、『山月記』は唐の伝奇小説『人虎伝』に、『弟子』は『論語』『史記』に、『盈虚』は『春秋左氏伝』（定公 14 年、哀公 15、16 年）に、『牛人』は『春秋左氏伝』（昭公 4 年）に、『李陵』は『漢書』（「李陵・蘇武伝」）に、『名人伝』は『列子』（「湯問篇」「黄帝篇」「仲尼篇」）『莊子』『戦国策』にというようにそれぞれ素材を仰いだものである。

これら中国物の典拠もその筋は大体同じだが、細部の話の進行には多少の相違が見られる。その相違点に注目し、中島敦の独特な創作箇所に関する研究が比較的に進んでおり、テキスト素材の典拠をめぐる比較文学的研究のみならず、その思想の影響や受容も論じられつづけている。代表的な論説は、岸達志「『山月記』の比較文学的考察」<sup>4</sup>（1953 年）、山敷和男「『人虎伝』と『山月記』」<sup>5</sup>（1960 年）、佐々木充「『李陵』と『弟子』——中島敦・中国古典取材作品研究（一）——」<sup>6</sup>（1961 年）「『牛人』・『盈虚』——中島敦・中国古典取材作品研究（二）——」<sup>7</sup>（1963 年）、濱川勝彦「『悟浄歎異』をめぐる：中島敦の方法確立期」<sup>8</sup>（1971 年）、村田秀明「中島敦『盈虚』成立考」<sup>9</sup>（1994 年）「中島敦『弟子』創作過程考（2）：『春秋左氏伝』関係蔵書の書き入れの分析」<sup>10</sup>（1999 年）、渡邊ルリ「中島敦『李陵』論」<sup>11</sup>（2006 年）、閻瑜「『列子』および老荘思想の受容——「幸福」「名人伝」」<sup>12</sup>（2011 年）などがある。

二つ目は、存在論である。これは、いわゆる「存在の不確かさ」と「自我」への探求である。「存在」と「自我」というモチーフは、時間の経過と共に深化し、次第に中島敦の内



面を覆い尽くし、中島文学の初期から、中期を経て、後期に至るまで不変である。また、このモチーフに異常なほどの関心が示されたのは、中島敦の生育環境や性格にその淵源がある。幼児期に父母が離婚、そして父親の再婚、さらに二人の継母との不仲で、決して円満な家庭生活に恵まれたと思えない一連の体験は、中島敦の生涯と作品に深刻な影響を与えている。

中島の文学は「<乏しさ>を嫌い、<豊かさ>を希求していた」ものであり、「<自我>の問題、<存在論的な苦悶>を追求した作風といった見方でもって文学史上に位置づけられてきた」<sup>13</sup>と、木村一信が指摘したように、存在論をめぐる研究は中島敦研究のかなりのウェートを占めている。代表的な論説は、菅野昭正「中島敦の自己形成」<sup>14</sup>（1959年）、鷲只雄「「狼疾」の方法（4）——中島敦研究——」<sup>15</sup>（1967年）、高橋英夫「中島敦論——運命と人間——」<sup>16</sup>（1969年）、山下真史「中島敦『わが西遊記』論——自意識過剰をめぐって——」<sup>17</sup>（1991年）、諸岡知徳「中島敦「巡査の居る風景」論——「奴等」／「俺達」の物語——」<sup>18</sup>（1999年）などがある。

三つ目は、時代論である。つまり、作品とその時代背景との関係に着目したものである。国際情勢が風雲急を告げつつあった20世紀前半を生きていた中島敦の短い人生のなかで、人類歴史における未曾有の動乱や戦争<sup>19</sup>が次々と勃発し、とりわけ中島が文壇にデビューした1942年（昭和17年）はちょうど太平洋戦争の最中である。こうした時代の特徴が、中島文学に色濃く反映されている。例えば、中島敦は父の転職で、日韓併合後の朝鮮半島で少年期（1920-1926）を送っていた。自らの京城（現・ソウル）滞在体験を素材にして書き下ろされた作品には『巡査の居る風景——一九二三年の一つのスケッチ——』『プールの傍で』『虎狩』がある。また、脆弱な体質と持病の喘息に苦しめられていたにもかかわらず、中島は五回（1924、1925、1927、1932、1936）も中国へ足を運んだ。そのうちの四回の行先は、すべて中国の東北部である。これは、旅順に親戚が居住していたほか、満州事変前後における東北部の複雑多岐にわたる社会情勢に多大な関心を持っていた由縁でもあろう。『D市七月叙景（一）』は、これらの旅の見聞に基づく作品である。そして、中原大戦という時代背景を持つ『北方行』は、作者の実体験とは無関係だが、丁寧な資料調査によって創作され、未完ながらも見事な小説であるといえる。さらに、中島敦は1941年に南洋庁編修書記として、日本委任統治下の南洋群島へ単身赴任し、今までの暮らし環境とは全く異なる南洋の地で約八ヶ月の生活を送ってきた。その生の南洋社会での見聞は、帰朝後に『南島譚』『環礁——マイクロネシア巡島記抄——』のなかに綴られている。

作者が直接に関わっている時代に材を取ったこれらの作品をめぐって、その時代に特有の事情と照らし合わせながら、テキスト自体を再解釈するという観点からは、近年の植民地文

学研究の進歩や発展とともに一層成熟してきたのだが、中島敦研究全体においては比較的新しいものである。代表的な論説は、川村湊「中島敦伝(2) 植民地の“虎”」<sup>20</sup> (2004年)、山下真史「中島敦『弟子』論」<sup>21</sup> (2004年)、南富鎮「<娼婦>と<虎>の朝鮮表象——中島敦」<sup>22</sup> (2005年)、藤村猛「中島敦「D市七月叙景(一)論」」<sup>23</sup> (2006年)、山下真史「中島敦とその時代」<sup>24</sup> (2009年)、徐東周「一九二九年の「内地」で呼び起こされた一九二三年の「朝鮮」——中島敦の「巡査の居る風景」の表象する文化政治の日常——」<sup>25</sup> (2009年) などがある。

上述の従来の研究では、それぞれ中島敦の創作活動の各段階における漢文学素材の使用、または作家の生い立ちと自我への探求との関係という観点は重視されているが、作者が実際に生活していた異国的空間(異空間)と作品の成立との関連性については、それほど重要視されていない。ただし、中島敦文学の最も顕著な特質は、作品における異空間という舞台への探求とその表象への分析を通じて当時の日本(人)像を捉えることだと思われる。

彼(注:中島敦——筆者)がほとんど無意識に、その作品の世界として経巡っていた場所が、あたかも昭和日本を象徴するような植民地空間だったのであり作品の無意識層において彼は、昭和の時代の地理的、空間的な広さを包括しようとしていたのである<sup>26</sup> (川村湊「流氷と椰子の実」)

川村湊が指摘したように、中島文学の舞台には、昭和期の日本の支配下に置かれていた朝鮮半島、中国の東北部、南洋群島などの異国的空間が包含されている。中島敦自身は東京帝国大学(現・東京大学)文学部国文学科を卒業しており、その卒業論文のテーマが「耽美派の研究」であるにもかかわらず、彼の作品は舞台を三つの初期習作<sup>27</sup>以外、ほとんど日本には置かず、朝鮮半島、古埃及、アッシリヤ、南洋群島、古代/近代中国などの異国的空間に設定している。言い換えるならば、近代の日本人作家のなかにおいて、中島敦ほど日本という空間や日本人という集団に興味や関心を示さなかった作家は、本当に稀有な存在であったといえる。

一方で、中島文学において、異空間の広さと異質さがあると共に、当時の日本(人)への作者の視線と関心も存在していることが等閑視されてきたと言わざるを得ない。例えば、(1)『巡査の居る風景』『虎狩』において、日韓併合後の朝鮮半島と現地の朝鮮人や日朝混血児をめぐる描写を通じて、当時の日本の朝鮮政策と日本人が持つ朝鮮への視線のあり方への密かな批判が示されている(第一章、第四章中心)。また、(2)『D市七月叙景(一)』『北方行』において、昭和初期の中国(人)像をえぐり出すことによって、日本が現地の

社会や文化・生活などに与えた具体的な影響を浮かび上がらせたのである（第二章、第三章中心）。さらに、(3)『南島譚』『環礁』において、未開の〈昔の南洋〉と近代化されてゆく〈今の南洋〉との葛藤や衝突を通じて、日本の南洋政策のあり方への疑惑と当時のステレオタイプの南洋（人）像の形成の裏に潜んでいる日本人の偏見・先入観の原因がある（第六章中心）。そのほか、(4)『李陵』において、古代中国の中央政権・漢王朝と異民族・匈奴との葛藤をめぐって、作者は重要な登場人物・李陵の口を借りて、異民族への理解と同情を訴えると同時に、昭和10年代の日本が実施した国民総動員の戦争体制への密かな反抗も示している（第七章中心）。つまり、中島敦は自らの作品に、異国（人）を描くことによって、日本（人）像を総括的に把握しようとするという創作方法を取り入れたのである。さらに言うならば、作品は作者によって受動的につくられる客体である以上、自らの知識の母胎となる祖国の存在を無視して作品を描くこと自体が不可能に近い。中島文学のなかに「日本」はほとんど表面上に登場していないように見えるが、本論では中島敦が昭和日本に全く無関心な作家ではないことを上述の(1)(2)(3)(4)という段取りで明らかにしたい。

こうして、作者が実体験を作品に取り入れることは、作品の現実感を増加させる効果があるが、文学作品としての客観性を失いかねない恐れもまた同時に存在することとなる。この問題を避けるために、中島敦は日本（自我）と異国（他者）という二者関係から脱出し、「第三者」の相対的な視点から異国（人）を絶対視しないことに努めている。こうした視点は中島の多くの作品（特に、後期作品の『南島譚』『環礁』『李陵』）に共通するものだが、〈南洋行〉（1941年6月-1942年3月）を経て定着させられたのである。〈南洋行〉を通じて、今まで暮らしてきた漢字文化圏（日本、朝鮮半島、中国）とは全く異なる「無文字社会」南洋の生活のなかで、中島敦は多数の挫折に遭遇した一方で、創作活動への大きな刺激も与えられた。〈南洋行〉は中島文学でもっとも大きな転換点となるまでの経緯や、「第三者」という視点に関する考察は第五章において行いたい。

本論は従来の先行研究を批判的に継承した上で、これまでそれほど注目されなかった中島文学の舞台となった「異空間」への探求とその表象への考察を主な視点とし、当時作家自身が抱いた日本（人）像を究明することを研究目的に据える。

本論は以下の方法でアプローチを試みる。

- (1) 各章において、作品の内部分析と外部検証を併用して作品の意味解明に努める。その作業にあたって、当時日本と外地の情勢及び時代背景関連の資料を調べる一方、中島敦の蔵書目録や日記、手帳、書簡などの一次資料も可能な限り分析の対象とすることで、作品の内容だけでは説明しきれない問題点の解決を試みる。

- (2) 同時代の関連文学言説を取り入れながら比較することによって、中島敦の作品の特徴を洗い出す。

## 第二節 論文の構成

全七章構成の本論は、基本的に作品の製作順に従って章を立てている。それぞれ朝鮮半島、南洋群島、中国を舞台にして書かれた作品の内容を検討し、また草稿・書簡・断片・手帳とも合わせて、中島文学に潜む〈異空間の探求と表象〉の問題を考察した上で、中島敦における当時の日本（人）像を総括的に捉えようとするものである。以下、本論の各章が目指す点をまとめておきたい。

### 第一章 中島敦における朝鮮表象——『巡查の居る風景』を中心に

「外地」という異空間に注目し、自らの外地体験を作品の素材とするのは、中島敦文学の重要な特徴である。『巡查の居る風景』（1929年）は、中島の朝鮮での長期滞在を素材として書かれたものであり、外地作品群の端緒でもある。昭和初期の文学作品において、朝鮮人の対日感情などがまだタブー視されていた中で、『巡查の居る風景』が被統治者の朝鮮人の側から物語の世界を描き出したことにこの作品の意義がある。

本章では、まず、同時代の日本の知識人から見る朝鮮像・朝鮮人像を把握した上で、『巡查の居る風景』における人物造形の独自性を究明する。次に、主人公・趙教英の場合は、彼が日本人の統治を受ける被統治者側の人間でありながら、巡查として朝鮮人同士を管理・統治する側にもいる。こうした正反対のアイデンティティの混在によってもたらされた自我認識の亀裂を考察し、さらに、自我認識の亀裂をめぐって、今まで等閑視されてきた趙教英と趙大煥（『虎狩』の登場人物）との共通性を分析しつつ、中島敦における朝鮮表象を論ずる。

### 第二章 中島敦が見た昭和初期の中国の一側面——『D市七月叙景（一）』を中心に

『D市七月叙景（一）』（1930年）は、かつて日本の支配下にあった「D市」（大連）という舞台に注目し、「M社」（満鉄）総裁、社員と中国人苦力（労働者）という重層的な社会構造への描写を通じて、昭和初期の大連における日本の植民地事情の一端を表出している。中島敦はその三つの階層に体现される大連の多層的な植民地風景を描写し、昭和初期の大

連の時代像を浮き彫りにしながら、主人公たちの日常的な生活風景の背後に潜んでいる非日常的な植民地支配の影響にも言及している。

本章では、まず、『D市七月叙景（一）』の題名に出る「D市」というイニシャルの暗号化に潜んでいる作者の思惑及び作品の成立背景を洗い出す。次に、本作品に描かれている重層的な社会構造の視点から、物語に登場した総裁、社員と苦力の「日常」と「非日常」への分析を通じて、中島敦が見た昭和初期の大連表象への考察を試みる。

### 第三章 『北方行』に関する一考察——アイデンティティーの探求を視座として

『北方行』は、中島の初期作品群における二番目の中国物である。この作品の時代背景となる1930年は、一番目の中国物である『D市七月叙景（一）』の物語が生じた翌年である。中島敦は『D市七月叙景（一）』を創作した早い時期から中国事情に熱い視線を注ぎ、連作の形で1929年以降の風雲急を告げる中国東北部の情勢を把握しようとしたのであろうが、『北方行』は1933年に着手し、1936年に未完のままで残されている。ただ、この作品は未完なものとはいえ、中島敦の作家としての姿勢を確定させる役割を果たした作品として詳論する必要がある。

本章では、『北方行』が中島文学全体にいかなる意味を持つかに関して分析を試みる。その上で、主要な登場人物である三造と白夫人母娘をめぐるアイデンティティーの問題を解明し、作品の時代背景である中原大戦と物語の舞台としての北平への分析を通して、『北方行』の問題点と執筆の事情との関連をも射程に入れて考察する。

### 第四章 日本植民地支配下の朝鮮物語——『虎狩』をめぐる

『虎狩』（1934年）は、中島敦が自身の思春期の一番多感な少年期の朝鮮滞在体験を小説化した作品である。プロレタリア文学に親近感を持たない中島は、「虎狩」において直接的な社会批判を作品の中へ取り入れることはなかったが、朝鮮という時代的な「場」を借りて、友人（趙大煥のモデル）への思いを馳せながらも、語り手の「私」の視線を通して1920年代の朝鮮の実態を次第に浮き彫りにした。

本章では、まず、日本支配下に置かれていた朝鮮と朝鮮人の一側面を考察し、日本には棲息しない虎という異国趣味的な動物のイメージの分析を試みる。次に、「私」と趙大煥の再会場面において、朝鮮語を母語とする趙大煥が、日本語で奇妙な間違いを起こしてしまう一件をめぐる、〈言葉〉によってもたらされた記憶の混乱の意味を究明する。

## 第五章 南洋行に関する一考察——「南の空間」における〈境界性〉を中心に

1941年6月から1942年3月にいたる期間、中島敦は南洋庁編修書記として当時の日本委任領であった南洋群島（現・ミクロネシア）に赴任し、現地で多数の挫折を味いながらも、現地についての多くの新たな認識も同時に得たのである。赴任頭初には、ロマンチックで未開の「南の空間」だろうと想像していたが、中島が実際に見た南洋は、文明と未開の〈境界〉的な位相に置かれている場所であった。また、南洋物に現れる外からもたらされた近代的な時空間、かつてなかった病気などへの批判を通して、中島は自らが覚えた戦争や植民地への不快感も洩らされている。帰国後に書き上げた『李陵』から読み取れる中島の〈匈奴〉に対する理解は、匈奴が持っている未開拓の社会のようであったことにその一因があり、作者の〈南洋行〉と深く関わっている。

本章では、〈南洋行〉という中島文学でもっとも大きな転換点への分析によって、南洋群島という「南の空間」における〈境界性〉を中心に、南洋物の分析及び『李陵』との関連性を考察する。

## 第六章 南洋表象と〈南〉の記憶——『南島譚』と『環礁』を中心に

『南島譚』『環礁——ミクロネシア巡島記抄——』（1942年）は、中島敦の南洋滞在体験や見聞に基づく短編集である。昭和10年代は「南進ブーム」の黄金時代と呼ばれるが、この間に出版された南洋関係出版物には官庁出版物が圧倒的な比重の大きさを示しており、一方で個人による作品はそれほど多くなかった。ただし、南洋群島と関わった文学者が少ないとはいえ、南洋関連言説の存在を見逃してはならない。同時代の日本人作者によって書き下ろされた作品を考察することによって、その時代の南洋表象を正確に把握し、『南島譚』『環礁』の位置付けと特徴を一層明瞭化し得ると考えている。

本章では、同時代の南洋関連言説などを考察することで、その時代の普遍的な南洋表象を概括した上で、中島敦の南洋物『南島譚』と『環礁』に託された作者の〈南〉の記憶を究明する。

## 第七章 『李陵』に関する一考察——「匈奴」という接点について

中島敦の代表作として知られる『李陵』（1942年）は、古代中国の漢王朝と匈奴を舞台に

して書かれたものである。従来の研究では、李陵・司馬遷・蘇武の三人の登場人物の人物像の比較に力点を置く論説が数多く存在している。しかし、これらの研究方法では、作中における「匈奴」という舞台の重要性が等閑視されてしまう傾向が見られる。実際、匈奴は李陵にとって大きな存在であったばかりでなく、司馬遷にとっても生涯癒えぬ傷を負わせる原因を生むことになったのである。中島は『李陵』を執筆するにあたり、異空間や異民族としての「匈奴」を強く意識していたと考えられる。

本章では、まず、李陵・司馬遷・蘇武それぞれと「匈奴」との接点を厳密に分析し、作家の創作プロセスを整理した上で、『李陵』に託された昭和 10 年代の日本の現実について論ずる。

注：

<sup>1</sup> この論文の主な論点を二つにまとめてみると、一つは<中島の文学の「真の教養」> ; もう一つは<その「本質的な新しさ」を私小説の伝統に反抗し、「物語と人間的現実との結婚を目指す近代小説の正道を歩む試み」>という点である。

<sup>2</sup> そのなかに、代表的な研究書は次の通りである。佐々木充『中島敦』(1968年)『中島敦の文学』(1973年)、濱川勝彦『中島敦の作品研究』(1976年)、濱川勝彦編『鑑賞日本現代文学 17 梶井基次郎・中島敦』(1982年)、鷺只雄『中島敦』(1977年)、『中島敦論——「狼疾」の方法』(1990年)、鷺只雄編『日本文学研究資料叢書 梶井基次郎・中島敦』(1978年)、中村光夫／氷上英広／郡司勝義編『中島敦研究』(1978年)、勝又浩『我を求めて』(1978年)『Spirit 中島敦 作家と作品』(1984年)、田鍋幸信『写真資料 中島敦』(1981年)、『中島敦 光と影』(1989年)、奥野政元『中島敦論』、木村一信『中島敦論』(1986年)、勝又浩／木村一信編『昭和作家のクロノトポス 中島敦』(1992年)、小沢秋広『中島敦と問い』(1995年)、勝又浩／山内洋『近代文学作品論集成⑩ 中島敦『山月記』作品論集』(2001年)、村田秀明『中島敦「弟子」の創作』(2002年)、村山吉広『評伝・中島敦——家学からの視点』(2002年)、木村瑞夫『論攷 中島敦』(2003年)、勝又浩『中島敦の遍歴』(2004年)、渡辺一民『中島敦論』(2005年)、鷺只雄『芥川龍之介と中島敦』(2006年)、ポール・マッカーシー／オクナー深山信子『世界文学のなかの中島敦』(2009年)、川村湊『狼疾正伝 中島敦の文学と生涯』(2009年)、島内景二『中島敦「山月記伝説」の真実』(2009年)、山下真史『中島敦とその時代』(2009年)など。

<sup>3</sup> 中村光夫「中島敦論」(『中島敦全集別巻』筑摩書房、2002年5月、p.6-7)

<sup>4</sup> 『近代文学攷』第1号、近代文学研究会、1953年11月

<sup>5</sup> 『漢文学研究』(8) 早稲田大学漢文学研究会、1960年6月

<sup>6</sup> 『帯広大谷短期大学紀要』第0巻、帯広大谷短期大学、1961年10月

<sup>7</sup> 『帯広大谷短期大学紀要』第2巻、帯広大谷短期大学、1963年3月

<sup>8</sup> 『文林』第5巻、松陰女子学院大学国文学研究室、1971年3月

<sup>9</sup> 『国語国文学研究』第30号、熊本大学法文学部国語国文学会、1994年12月

<sup>10</sup> 『国語国文学研究』第34号、熊本大学法文学部国語国文学会、1999年3月

<sup>11</sup> 『叙説』第33巻、奈良女子大学国語国文学研究室、2006年3月

<sup>12</sup> 閻瑜『新しい中島敦像——その苦悩・遍歴・救済』桜美林大学北東アジア総合研究所、2011年3月

<sup>13</sup> 木村一信「中島敦」(上田博／木村一信／中川成美編『日本近代文学を学ぶ人のために』世界思想社、1997年7月、p.146)

<sup>14</sup> 『近代文学鑑賞講座』第18巻、角川書店、1959年

<sup>15</sup> 『研究紀要』第4巻、福島工業高等専門学校、1967年

<sup>16</sup> 『海』第6号、中央公論社、1969年11月

<sup>17</sup> 『国語と国文学』68巻12号、至文堂、1991年12月

<sup>18</sup> 『甲南大学紀要』文学編115、甲南大学、1999年

<sup>19</sup> 1914年～1918年の世界第一次大戦、1931年～1932年の満州事変、1937年～1945年の日中戦争、1939年～1945年の世界第二次大戦(1941年～1945年の太平洋戦争を含む)

<sup>20</sup> 『アイ・フィール』NO.30、紀伊国屋書店、2004年11月

<sup>21</sup> 『紀要』第199号(文学科、93号)、中央大学文学部、2004年3月

- 
- <sup>22</sup> 『人文論集』NO56-2、静岡大学人文学部、2005年
- <sup>23</sup> 『安田女子大学紀要』NO.34、安田女子大学・安田女子短期大学、2006年2月
- <sup>24</sup> 『紀要』第224号（言語・文学・文化 103号）中央大学文学部、2009年3月
- <sup>25</sup> 『日本近代文学』第81集、日本近代文学会、2009年11月
- <sup>26</sup> 川村湊『南洋・樺太の日本文学』筑摩書房、1994年12月
- <sup>27</sup> 日本を舞台にして書かれた初期習作は、「下田の女」「喧嘩」「蕨・竹・老人」のみである。



## 第一章 中島敦における朝鮮表象

### ——『巡査の居る風景』を中心に

#### 第一節 はじめに

「外地」という異空間に注目し、自身の外地体験を作品の素材とするのは、中島敦文学の重要な特徴である。出発時の作品において、朝鮮での見聞を題材とする作品としては、年代順で並べると『巡査の居る風景——一九二三年の一つのスケッチ——』<sup>1</sup>（以下『巡査の居る風景』、1929年）『プウルの傍で』<sup>2</sup>（1933年脱稿か）『虎狩』<sup>3</sup>（1934年）が挙げられる。また、『D市七月叙景（一）』（1930年）と『北方行』（1936年）といった作家自身の中国体験に基づき書かれた作品も存在している。晩期の作品においては、赴任先の南洋の異事奇聞を『南島譚』（1942年）、『環礁——ミクロネシヤ巡島記抄——』（1942年）のなかで綴っている。

「中島敦年譜」（『中島敦全集別巻』筑摩書房、2002年）によると、父・中島田人の朝鮮・龍山中学校への転勤により、中島は1920年9月に静岡県浜松西尋常小学校から京城府（現・ソウル）龍山公立尋常小学校第五学年に転入学し、1926年4月第一高等学校文科甲類に合格して帰国するまでの五年間半の歳月を朝鮮で過ごした。その朝鮮での長期滞在を素材として中島敦が書き下ろした外地作品群の初作が、『巡査の居る風景』である。『巡査の居る風景』は、京城の朝鮮人巡査・趙教英と関東大震災で夫を失い、止むを得ず娼婦となった朝鮮人女性・金東蓮をめぐる物語によって構成されている。作品の中では二人の物語が交差せず、別々に語られているが、作品の主線はあくまでも趙教英の物語だと言える。

創作時点の時代背景を考慮すると、「当時タブーであった朝鮮人の対日感情や、祖国、民族への嘆きが大胆にとりあげられ」<sup>4</sup>、朝鮮人という被統治者の身分に注目したのが『巡査の居る風景』の独自性だと言えよう。また、作品の意義について、鷺只雄は「植民地の状況を支配者である日本人の側からでなく、被支配者である朝鮮人の側から描き出していることである。支配され、抑圧されている朝鮮人民衆の目と心を通して、悲惨な実情を描いていることである。この点の意義についてはいくら強調しても強調しすぎることはない」<sup>5</sup>と高い評価を加えている。

一方、これまでの先行研究では、主人公の「被統治者アイデンティティ」に注目しすぎる傾向が見られる。確かに、趙教英であれ、金東蓮であれ、日本人から見ればどちらも被統治者の立場の人間である。しかし、趙教英の場合は、彼が日本人の統治を受ける朝鮮人の一人でありながら、巡査として朝鮮人同士を管理・統治する側にもいる。こうした異

なるアイデンティティーの混在によってもたらされた自我認識の亀裂こそが中島敦が『巡査の居る風景』という作品を通して問いかけている主題なのである。

同時に、同じ朝鮮物である『虎狩』の主人公・趙大煥は朝鮮貴族の子弟であり、被統治の状況における支配者的な存在という二面的な「アイデンティティー」を持っている点で、趙教英と共通する属性を備えている。中島文学における朝鮮物はわずか三作しかないが、そのなかの二作の主人公が類似したアイデンティティーの問題を抱えていることは実に興味深い事実だと言える。よって、今まで等閑視されてきた二人の趙（趙教英と趙大煥）の関連性についての分析は、中島敦における朝鮮表象の問題に辿り着くために重要なことである。

本章では、まず、同時代の日本の知識人から見る朝鮮像・朝鮮人像を把握した上で、「巡査の居る風景」における人物造形の独自性を洗い出したい。次に、自我認識の亀裂をめぐって、趙教英と趙大煥との共通性を分析しながら、中島敦における朝鮮表象を論じる。

## 第二節 同時代の朝鮮表象の文学言説

『巡査の居る風景』が脱稿したのは1929年（昭和4年）5月だが、物語の舞台は1923年（大正12年）に設定されている。『巡査の居る風景』における人物造形の独自性を考えるために、まず、同時代の日本の知識人がいかなる朝鮮像・朝鮮人像を持っていたかについて、系統的に整理する必要がある。

当時の朝鮮表象を扱う作品について、内容で大別すると、朝鮮社会の現状を描いた高浜虚子『朝鮮』（1911年）、柳宗悦『朝鮮人を想ふ』（1919年）、中西伊之助『不逞鮮人』（1922年）、平林たい子『朝鮮人』（1929年）と朝鮮の風景を描写した谷崎潤一郎『朝鮮雑感』（1918年）、木下杢太郎『朝鮮風物記』（1920年）、田山花袋『満鮮の行楽』（1924年）などが挙げられよう。そのなかに、朝鮮人に対する蔑視的な見方がある一方、相手に同情と理解を示す作品も見られる。

日露戦争以降、朝鮮観光業が発展するとともに、現地に足を運んだ日本人作家や記者らによって書かれた紀行文も多く出版された。例えば、木下杢太郎の『朝鮮風物記』と田山花袋の『京城雑感』（『満鮮の行楽』に所収）には、それぞれ朝鮮への否定的な評価が書かれている。前者は「同じく支那を源流としてみながら、我我は支那のものよりもより強く朝鮮のこれ等の芸術に搏たれます。そして、芸術的文化と云ふ見道に於て、目を転じて今の朝鮮の人民を見ると気の毒な気がしてなりません。古昔も恐らく朝鮮人は詩文の才能又創造力に於ては支那人に匹敵するものではなかったでせう」<sup>6</sup>と指摘し、後者は「全体から

受ける感じが単純でなかった。何んな秘密が蔵されてあるか知れないやうな気がした。またいつ何処から何んな危険が襲って来るか知れないやうな気もした。(中略) 京城は私を失望させた。」<sup>7</sup>といった失望感を漏らす声であった。

なお、朝鮮の風物から目を逸らし、現実社会に注目した作品も存在する。例えば、明治・昭和期の俳人、小説家の高浜虚子の『朝鮮』は、作家が二度(1911年4月と6月)にわたって朝鮮旅行に出かけた実体験を題材として書き下ろした長編小説である。1911年は、韓国併合の翌年であり、朝鮮の民族主義活動家・安重根による元韓国統監・伊藤博文暗殺から二年後でもある。朝鮮半島在住の日本人の数が激増すると共に、二つの民族の間に発生した亀裂が深刻化していった時期である。『朝鮮』は、早くも朝鮮の地に関心を向け、植民地社会の絶望的な空気をとらえている。ここで、特に注目すべきなのは、原文にある次の一節である。

余は内地に在る間は我國民というものを一民族として世界の多くの人間から切り放して考えようとしなかつた。従つて海外の發展という事に就ても深い考慮を費した事も無く、陸海軍人の赫々たる功名に就ても世の多くの人の如くに酔わされなかつた。それが足一度海峡を渡つて朝鮮の土地を踏んでからは、全く矛盾した二個の考が絶えず起つた。その一はこの衰亡の國民を憫む心であつて、路傍の石に腰掛けて煙草をくわえているソクラテスのような老人は何故に他國人に征服されねばならぬかと憫みながらも、同時にこの發展力の偉大なる國民を嘆美する心持で、「さすがに日本人は偉い。」と初めてこれ為す有る民族の上で、自己もその民族の一員としての抑え難き誇を感ずるのであつた<sup>8</sup>。

高浜虚子が現地へ踏み込み、はじめて感じ取つた「衰亡の國民を憫む心」と「發展力の偉大なる國民を嘆美する心持」は一見すると矛盾した複雑な心境だが、実際これが当時の日本人が持つ普遍的な朝鮮人像なのである。日本は日露戦争に辛勝し、その後のポーツマス条約で中国の遼東半島の租借地(関東州)などを獲得してから1911年に至る間に、植民地経営政策がますます膨張していた。こうした中で、日清戦争後に始まる否定的な朝鮮人像はますます過激化していく傾向があり、とりわけ「日本人の「独立心」「進取の気性」「武の魂」が強く意識され、その対照としての「文弱」で「無氣力」で「独立心」のない朝鮮人像が強調された」<sup>9</sup>。従つて、朝鮮への同情を示す作品は多少あつても、肯定的な見方はほとんど見当たらないのである。

一方、日本の植民地支配を疑問視したり、朝鮮の文化と社会の怒りを代弁したりする異

色な作品はわずかながら存在している。ここでは、二つの作品を事例として挙げておきたい。

まず、植民地時代初期に、日本の朝鮮支配の実態を告発する長編小説『赫土に芽ぐむもの』(1922年)で登場した作家として知られる中西伊之助が、朝鮮を扱った『不逞鮮人』(1922年9月、『改造』に掲載)<sup>10</sup>である。この作品は、社会主義者である主人公・碓井栄策が、「不逞鮮人」と言われる、即ち当時の独立運動家の家を尋ね、そこで一晚泊めてもらうまでの過程における内心の葛藤を描いたものである。舞台は「三・一独立運動」(1919年)の三年後、いまだ抗日闘争盛んな朝鮮北西部である。主人公は、その奥の集落へ、排日鮮人団の主役と会見するために出かけて行く。そこで、鮮人団の主役の娘が日本人に殺害されてしまうまでの経緯を知り、主人公は動揺して、朝鮮への感情が分裂する。

『不逞鮮人』の文末に、主人公がもう一つの社会に直面しながら、「すべては自分達民族の負うべき罪だ」と告白することに関して、黒川創は以下の様に指摘する。

“もう一つの社会”の奥へと進んでいくことになるのだ。——結局、日本人社会が「不逞鮮人」という言葉で思い描いているような人物は、そこにいない。このことによって、主人公の目には、反対に日本人社会の映りかたのほうが、一変する。朝鮮北西部という土地における主人公の身体の歩みと、彼の内部における風景の逆転が、並行して起きるところに、この作品の文学的成功があるだろう<sup>11</sup>。

この“もう一つの社会”の奥へと進んでいく」というのが、旅行記のカテゴリーから脱出し、「表」の見聞に止まらず、相手国とその国民の「奥」への探求を試みることをも示している。当時、一般大衆が圧倒的に朝鮮人を蔑視し、独立運動を支配層と共に不逞とみなす時代に、中西伊之助が母国の植民地政策に対して異議を唱えた点から見れば、『不逞鮮人』はプロレタリア思想と現実味を感じさせる作品だと言える。

次に触れておきたいのは、日本の民芸運動の父として知られる柳宗悦が1919年5月20日から24日にかけて『読売新聞』に載せた『朝鮮人を想ふ』である。翌年、その朝鮮語訳が『東亜日報』で掲載され、大きな反応を得た。『朝鮮人を想ふ』は、「三・一独立運動」発生後、日本人として公に朝鮮人を弁護した最初の文章である。この文章において、柳宗悦は「自分は朝鮮に就いて十分な予備知識を持ってゐるわけではない」<sup>12</sup>と述べながら、朝鮮の旅で見聞した朝鮮人の家に貼りつけられてある乃木大将の肖像に関して、「若し乃木大将に範をとるなら、必然乃木大将の如き義臣たるために日本には反抗すべきだからである。吾々の或者が所謂義臣を好んで祭り乍ら、傍ら朝鮮人の反抗心を罵るのは、丁度何人も義

臣になってはならぬといふのと等しい。吾々は説明出来ないディレンマに陥り乍ら、様々な詭弁によってその矛盾した態度を弁じようと企ててある」<sup>13</sup>と断じ日本の植民地支配の矛盾をリアルに暴露してみせたのである。朝鮮の「三・一独立運動」の衝撃と日本の大正デモクラシーの影響を背景として形成された柳宗悦の朝鮮観は、当時の日本人の朝鮮観のなかの特異な存在であったと考えられる。

大正末期から昭和初期にわたり、当時の朝鮮表象を扱う作品を分析するにあたって、『朝鮮風物記』『京城雑感』といった朝鮮を否定する作品もあり、また『朝鮮』『朝鮮人を想ふ』のような日本の植民地統治を疑問視し、朝鮮の文化と社会の怒りを代弁するものもあるが、当時の日本の知識人が持つ朝鮮像・朝鮮人像の基調をなしているのは恐らく前者に相違ないだろう。そのなかで、多くの作品の内容はあくまでも旅行者の眼に映った出来事にすぎなかった。

他方で、中島敦の朝鮮での長期滞在を下地にして書かれた『巡査の居る風景』には「朝鮮で生活し朝鮮人の運命を生身で感じとったものだけが表現しうる何かが脈打って」<sup>14</sup>おり、作家の朝鮮との関わり方をリアルに浮き彫りにしている。『巡査の居る風景』は単なる朝鮮の否定論あるいは肯定論ではなく、朝鮮人の立場から当時の日朝関係や朝鮮人問題をより深く掘り下げて書き下ろされた重要な一作である。

### 第三節 趙教英の人物造形

植民地時代に生きた朝鮮人たちの生活と生き方を朝鮮人の立場から描いたものは、1940年代の「朝鮮ブーム」以降、次第に書かれるようになったが<sup>15</sup>、他方で昭和10年代頃までに「被支配者側の視点や立場から書かれた作品は限りなくゼロに近い」<sup>16</sup>のが事実である。当時、未だ20歳の一高学生であった中島が自らの「第二の故郷」とも言える「朝鮮」に注目し、朝鮮人巡査の視点から描いた『巡査の居る風景』は実に異色作である。では、中島敦はなぜ「朝鮮人巡査」に注目したのか。これについて、三つの側面から分析を行いたい。

一つ目は、今まで指摘されなかった京城中学校時代の同級生である湯浅克衛と関係があると思われる。植民者の子龍二と朝鮮人少女カンナニとの純恋が、三・一独立運動のさなか悲劇的に引き裂かれることを描いた植民地小説『カンナニ』（1935年）などで知られる湯浅克衛は、1916年に父の転勤に伴い京畿道水原の水原公立尋常小学校に入学し、そのあと京城中学校に進学、中島敦の同級生となった。1927年内地に戻るまで、朝鮮で幼少期と青春期を過ごした湯浅克衛は、中島敦と同じ朝鮮での長期滞在経験を持っている。また、中学校の時、湯浅は谷崎潤一郎の『痴人の愛』所持のため、放校処分になるところであった

が、その直前に中島の仲裁で図書室監禁という軽い処分ですんだという。「湯浅克衛年譜」<sup>17</sup>（梁禮先編）によると、父親・浅湯伊平はもともと朝鮮の守備だったが、1916年に守備隊をやめ、朝鮮での巡査の試験に合格し、警察署に勤めることになった。つまり、巡査の家庭で育った同級生を持つことによって、巡査が中島にとって身近な存在になったと推測できよう。

二つ目は、中島敦自身の転校体験と複雑な家庭事情によってもたらされた「疎外者」の経験である。中島が父親の転任で朝鮮の京城へ転校したのはまだ11歳の時だが、それまで、彼は既に埼玉、奈良、静岡を転々としてきた。この境遇について、中島は、「生まれは東京。その後所々を放浪。従って、故郷といふ言葉のもつ（と人々のいふ）感じは一向わかりません。猛烈な愛郷心、郷土的団結力・生活や言葉の上の強烈な郷土的色彩等々をもった方にお逢ひする度に、羨望と驚嘆との交じった妙な感じに打たれます。」（「お国自慢」、『学苑』第9号、1937年7月）と述べたことがある。『巡査の居る風景』が掲載された五年後、作家は『虎狩』のなかで、自分自身の転校経験への複雑な心境を語り手である「私」に託して、次のように告白する。

その五年の二学期に私が内地から龍山の小学校へ転校して行ったのだ。父親の仕事の都合か何かで幼い時に度々学校をかはったことのある人は覚えてあるだらう。ちがった学校へはひった初めの中ほど厭なものはない。ちがった習慣、ちがった規則、ちがった発音、ちがった読本の読み方。それに理由もなく新来者を苛めようとする意地の悪い沢山の眼。（p.74）

ここで、「新来者」の主人公の友達になってくれたのは、意外にも朝鮮人の同級生（趙大煥）であった。『虎狩』本文のなかで、「二人は同時に小学校を出、同時に京城の中学校に入学し、毎朝一緒に龍山から電車で通学することになった」のような、親密な交わりの場面まで描写されている。よって、同じ日本人の同級生に疎外されながらも、異国民の朝鮮人と友情の契りを交わす体験は、後に朝鮮人への関心を促すことになる契機だと考えられる。

また、中島敦の朝鮮物に属する『プールの傍で』から、彼の朝鮮での暮らしぶりの一側面を想像することができる。

ある日、三造（注：中島敦の分身——筆者）が妹と女中とで夕飯をたべてみると、父と新しい母とが外から帰ってきた。彼等と一緒に何か物を見に行き、帰

りに飯もすませて来たといった。それを聞きながら、彼は妙に気持がとがって来るのを感じた。何故妹を連れて行ってやらないんだ、と、彼は妹を愛してゐなかつたにも係はらず、とっさに、さう思った。明かに嫉妬であると彼は[自分でも]気がつき、気がついただけ余計に腹が立った。彼等はみやげだといって蒲焼のをりを三造に与へた。それがまた理由もなく彼の気持に反撥した。彼は苦い顔をして一口それを食べた。それから、その残りを卓子の下にゐた猫に与へた。突然、父が黙って立上った。そして咽喉を鳴らしながら食べてゐる猫を蹴とばし、三造の着物の襟を左手でつかむと、右手で続けざまに彼の頭を三つ四つ殴った。それから、はじめて、父は、怒りにふるへた声で、どもりながら叫んだ。

「何といふことをするんだ。折角、買ってきてやったのに。」

三造は黙ってゐた。父はもう一度繰返した。息子はみにくく顔をゆがめながら強ひて笑った。

「一度貰った以上、それからはどう処分しようと、僕の勝手ぢやありませんか。」

激怒が再び彼の父を執へた。父は、その拳がいたくなる位、はげしく息子の頭を打った。打つてゐる中に次第に病的な凶暴さが加ってくるのが、打たれてゐる三造にまで感じられた。彼は、しかし、少しも防がうとはしなかつた。むしろ打たれるのを楽しむやうな気持さへ何処かにあつた。(p.222-223)

この蒲焼事件を通じて、当時の中島家の日常風景を垣間みることができる。中島敦は二歳の時、親の離縁によって父の実家、埼玉の祖母（きく）の元へ預けられ、父と一緒に住むようになったのが五歳の時であつた。その後、二人の継母（カツ、コウ）が迎えられたが、円満な親子関係に恵まれなかつた。すなわち、学校と家庭の両方において人一倍疎外感を味わわされた体験が、被統治者の身分でありながら、日本人の支配の末端機構に取り込まれ、そして双方から疎外されつつある朝鮮人巡査に関心を寄せることになった主因の一つであろう。

三つ目は、『巡査の居る風景』の時代（1920年代）において、日本人の目に映つた朝鮮像・朝鮮人像に誤解や歪みがあることに、作家が気づいたのではないかと考えられる。近代日本における朝鮮人像の形成過程について、南富鎮の研究で既に明瞭に指摘されているため、ここで簡単に紹介しておきたい。

征戦論から台頭した否定的な朝鮮人像は、壬午軍乱や甲申政変、または日朝修好条規以来の地理書や旅行書などによって新たな要素が加えられ、深化してきた。

そして、これらの断片的な朝鮮人像は、日清戦後に膨大な否定的要素を包含するかたちで体系化されていく。以前の朝鮮人像の言説が新たな言説を生みだし、それが拡大再生産されるかたちで増殖し、日清戦後になると巨大な悪徳の根源としての朝鮮・朝鮮人像が完成されるのである。このような朝鮮人像はさらに日露戦後に成熟した日本国民性論の形成に大きな影響をあたえ、否定的なイメージとして貫かれた朝鮮人像が陰画となり日本国民性の美德を浮き彫りにしている。一方で、韓国併合を前後には、日韓同祖論に裏打ちされた同化主義の政策的な意図から朝鮮人像においての一部変化もみられる。しかし、その根柢にある朝鮮人悪徳論は依然として続いていたといえる<sup>18</sup>。

中島敦が京城へ転校した1920年は、第一次世界大戦の終戦から二年後であり、日本のシベリア出兵政策が実施されている最中でもある。大正末期に入ってから、明治初期の「無礼」「生意気」「頑固」「凶暴」などの朝鮮人像が、日本の同化政策の需要に応じて多少変化してきた傾向が見られるとは言え、上述の「朝鮮人悪徳論」がすでに消滅したとは到底想像できない。さらに、『巡査の居る風景』の金東蓮の物語で言及された「朝鮮人虐殺事件」も、こうした根深い否定的な朝鮮人像に深く関連している。つまり、中島敦は『巡査の居る風景』において、日本と朝鮮の狭間で揺れる人物を主人公に設定することによって、当時の日本人が持つ朝鮮像・朝鮮人像や日本の朝鮮統治政策に対して疑問視する姿勢を示しているのである。

『巡査の居る風景』は習作として扱われるため、一般の認知度がそれ程高くない事を考慮し、ここで場面ごとの分析によって趙教英の人物造形を明らかにしたい。この作品は、「磐石には凍った猫の死骸が牡蠣の様にへばりついた。其の上を赤い甘栗屋の広告が風に千切れて狂ひながら走った」と始まり、関東大震災の年の1923年冬の京城の景色の描写に終始するものである。ただし、目に見える京城の風景は別として、『巡査の居る風景』は当時の朝鮮人の心のなかの風景を描き出そうと試みたのである。

まず、趙教英が作中で初めて登場した場面に、仕事の帰りに乗った電車のなかの風景が書かれている。当時、中島敦は京城府漢江通六（龍山区）にある家に住んでおり<sup>19</sup>、京城中学校の校舎は慶熙宮址にあった<sup>20</sup>。京城の地図<sup>21</sup>を開いてみると、中島の住居と京城中学校の間の距離は徒歩で通学できるものではなかった。また、郷右近堪という龍山小学校の卒業生が書いた文章には、「私が朝鮮に来たのは明治四十三年五月。（中略）その頃漢江通りが馬車にかわって電車が通るようになり、一区三銭で区間ごとに車掌が料金を受け取りにまわって来た。」<sup>22</sup>という記述があり、中島敦が朝鮮での生活を始めた1920年（大正9年）



の時点で、電車は既に現地の大衆には一般的な交通手段になっていたことがわかる。さらに、中島敦と共に龍山小学校と京城中学校に通学していた山崎良幸によると、「彼（注：中島敦——筆者）は龍山から市電で通学していました」<sup>23</sup>という。従って、趙教英が居る電車のなかの風景は、中島敦の記憶から再生されたものである可能性が高い。題名は「巡查の居る風景」であるものの、実際その風景を見たのは中島自身である。無論趙教英が作家の等身大の人物だとは言わないが、中島は朝鮮人巡查である趙教英を通して「朝鮮人問題とは何か」を問いかけているのではないかと考えられる。

次に、テキストにおいて電車のなかの風景に関わる二つの場面が描かれている点である。一つは、趙教英が思い出した、ある夏の朝電車に乗った時の出来事である。その日、彼は電車に乗り、いつものように運転手台に立っていた。登校の途中のある日本人中学生が彼と同じ電車に乗り込み、涼しい風に当たりたいのか、この学生は電車の中に進めず趙教英と同じ運転手台に立っていた。運転手は、運転の邪魔になる恐れがあるので中に入れてくれと言ったが、この中学生は趙教英を指して「オイ、其の人を中へ入れないんなら、俺もいやだよ。」と断った。これに対して、趙教英は不快を覚えながらも、相手の前で卑屈に対応し、一種の無気力さを味わわされた。彼は職業上の特権があることで、無料で乗車でき、普通の朝鮮人との間に一線が引かれる一方、日本人の中学生の前では巡查の威力を発揮することさえできない曖昧な存在である。

1910年代の武断統治期に、朝鮮社会の末端で警察の職務を担ったのは主に憲兵補助員と巡查補であった。前者は抗日義兵闘争を弾圧する目的で1908年に設置された朝鮮人「軍属」であり、後者は韓国併合前に従来の朝鮮人巡查を引き継いで設置された日本人巡查の補佐役である。「三・一独立運動」を契機として、日本の朝鮮での統治方針は一気に<武断政治>から<文化政治>に転向した。朝鮮総督府警務局が編集した『大正十五年 朝鮮警察の概要』では、「憲兵制度の撤廃」について次の様に述べている。

大正八年八月十九日総督府官制を改正し総督府に警務局を置き警察及衛生事務を分掌せしめ、同時に警察官署官制を廃止し地方官官制を改正して警察権を道知事に移属し各道に第三部を置き（第三部は後に警察部と改む）道事務官を警察部長と為し、各府郡島に警察署を設け、警視、警部を警察署長に充て、是等地方官をして警察衛生事務執行の任に当らしめ、以て民衆的警察制度の確立を期し又警視、警部の下に新に警部補を設け、従来朝鮮人に限り任命したる巡查補の階級を廃して一律に巡查となし以て警察官吏の待遇を改善せり<sup>24</sup>。

趙教英の職務は、もともと巡査に昇格した朝鮮人の巡査補なのか、それとも普通警察に移行し巡査になった朝鮮人の憲兵補助員なのかは不明である。しかし、いずれにせよ、＜文化政治＞が実施されて以降、その本質は＜武断政治＞とは大きく変わっていないため、親日勢力として利用し育成するために支配の末端機構に取り込まれた朝鮮人巡査に対して、朝鮮民衆は強い蔑視感情を持っていた。同時に、朝鮮人巡査が日本側からも疎外されるのは皮肉な事実である。例えば、『巡査の居る風景』のなかには、1919年朝鮮総督暗殺未遂事件をモデルにして創作された一節がある。これは、一人の朝鮮人男性が京城の南大門駅で総督を狙い、射殺しようとしたところ警官に捕われてしまう場面である。

（略）彼は少しも抵抗しなかった。青ざめて幾分小刻みにふるふる口許に蔑すむ様な微笑を浮べて彼は警官達を見た。青白い額には乱れた髪が長くたれ下って居た。眼にはもう周章と昂奮の跡が消えて、絶望した落着きと憐憫の嘲笑とが浮んで居るだけだった。

彼の腕を捕へて居た趙教英はとてもその眼付きに堪へられなかった。その犯人の眼は明らかにものを言って居るのだ。教英は日頃感じて居る、あの圧迫感が二十倍もの重みで、自分を押しつけるのを感じた。

捕はれたものは誰だ。

捕へたものは誰だ。(p.76-77)

朝鮮人巡査のアイデンティティーの曖昧さは、上述の「捕はれたものは誰だ。捕へたものは誰だ。」という疑問文によって明示されている。同化政策が段階的に実施されるにつれ、朝鮮人が自らの民族的同一性を奪われ、アイデンティティーの混乱に陥った危機に直面するようになった様子が趙教英に集約的に現れているのである。また、1919年朝鮮総督暗殺未遂事件と巡査の関係について、山辺健太郎によると、以下の通りである。

斎藤総督が着任したさい、南大門で爆弾を投げられたが、その時のことを、当時の朝鮮総督府警務部長であった千葉了が話をしている。「日本人の給仕が爆弾を投げた男らしい者を見て、その男が去って行くのを尾行し、朝鮮人巡査にむかって、あの男が犯人らしいと告げたところ、その朝鮮人巡査は＜ア、ソウカ＞といった調子で、その給仕の報告をまじめに取り上げなかった。それで朝鮮人巡査はどうも信用できないということになった<sup>25</sup>。

暗殺未遂事件が発生したのは1919年であり、『巡査の居る風景』の副題に示された「1923年」とは時期が離れているものの、中島敦があえて客観的な史実に逆行する形で、1923年の舞台に1919年朝鮮総督暗殺未遂事件を登場させたのは、当時の朝鮮人巡査が日本人から疎外されてしまう現状、すなわち統治者と被統治者の狭間で動揺する皮肉な事実を浮き彫りにするためであろう。

もう一つ電車のなかの風景に関わる場面は、趙教英と同じ電車に乗っていた粗末な身なりをした一人の日本人女性と白い朝鮮服を身につけた学生らしい青年の間に起きた「呼び名」に関する口争いの場面である。

——折角、親切に腰かけなさい、いふてやったのに。——と女は不平さうに言  
って居るのだ。  
——併し、何だヨボとは。ヨボとは一体何だ。——  
——だから、ヨボさんいふてるやないか、  
——どっちでも同じことだ。ヨボなんて、  
——ヨボなんていやへん。ヨボさんといふたんや、(p.69-70)

「ヨボ」とは、人を呼びかける時に用いる朝鮮語の「여보 yeobo」から来たものであり、夫婦の間で「あなた」「おまえ」「おい」ということ、及び「もし」「おい」のような、軽く呼びかける時に使う言葉である。「ヨボ」に「さん」と付けた「ヨボさん」は、当時の子供や女性がよく使っており、一応敬語ではあるものの、同時に蔑称でもあるという矛盾を孕んでいる。つまり、朝鮮人に多大な侮辱を与えた「ヨボ」という蔑称が、ある種の誤解から、時に「さん」を付けても、この言葉が侮辱の意味から自由ではありえなかった<sup>26</sup>ということである。

1911年と1922年にそれぞれ第一次朝鮮教育令と第二次朝鮮教育令が公布され、同化政策が盛んに進められていた中で、日本人と朝鮮人との間にはアイデンティティ認識のギャップの問題は益々深刻化していった。例えば、「ヨボ」に関わるシーンは、『巡査の居る風景』においても一箇所ある。趙教英は府会議員の選挙演説を監視するために会場に出かけ、そこで一人の朝鮮人候補が巧みな日本語で自分の抱負を述べていた途中、突然聴衆の中から一人二十歳にもならない位の汚い身なりをした若者が立ち上がって、「黙れ、ヨボの癖に。」と怒鳴った場面を目撃した。これを耳にした朝鮮人候補は一段と声を高くして叫んだ。

——私は今、頗る遺憾な言葉を聞きました。併しながら、私は私達も又光榮ある日本人であることを飽く迄信じて居るものであります。(p.70)

その汚い身なりをした若者は恐らく日本人に相違なからう。日本人によって蔑視や差別されたなかで、朝鮮人候補は日本人社会へすり寄り、朝鮮人であるということを忘却、または隠蔽して、日本人(「他者」)としてのアイデンティティーに執着している。さらに、『巡査の居る風景』には第二次朝鮮教育令を思い浮かせる風景も描かれている。

普通学校の日本歴史の時間、若い教師は幾分困惑しながら、遠慮がちに征韓の役を話した。

——かうして、秀吉は朝鮮に攻め入ったのです。——

だが、児童達の間からはまるで何処か、ほかの国の話しでともあるやうな風に鈍い反響が鸚鵡がへしに響いてくるだけなのだ。

——さうして秀吉は朝鮮に攻め入ったのです。

——さうして秀吉は朝鮮に攻め入ったのです。(p.75)

第二次朝鮮教育令の公布によって、朝鮮総督府が普通学校のためにはじめて『普通学校国史』を編纂した。それまで普通学校には歴史という科目はなく、歴史教科書もなかったが、「三・一独立運動」の影響で朝鮮人児童に歴史教育が行われるようになった。ただし、国史とはいえ、実は天皇の事跡を中心にして記される日本史の教育なのである。その『普通学校国史』の第三十五課「豊臣秀吉(つゞき)」には、豊臣秀吉と征韓の役について「秀吉は軽き身分より起り、其の智勇を以て国内を平げ、皇室を尊び人民を安んじ、更に外征の軍を起して国威を海外にかがやかしたる豪傑なり」<sup>27</sup>と紹介し、対外侵略が国威の発揚として美化された。

当時、朝鮮人に対して「一視同仁」という言葉が日本人支配層によって盛んに使われた一方で、その同化政策はすでに民衆レベルで破綻を迎えていたという事実が以上の二つの例からうかがわれる。つまり、いくら「内鮮共学」などをスローガンとし宣伝しても民族差別を温存するままでは、「光榮ある日本人」と「ヨボ」の間にあるアイデンティティー認識のギャップが消えるはずがないのである。

こうした中で、主人公の趙教英は1923年冬の京城の風景を見て、何を考えたのかについて、中島敦は次のように述べている。

(略) それからもう一度日本といふ国を考へて見た。朝鮮といふ民族を考へて見た。自分といふものも考へて見た。更に、自分の職業を、それから、今そこに帰らうとして居る妻と一人の子供のことを思ひ浮べた。

事実彼の気持は近頃「何か忘れ物をした時に人が感じる」あの何処となく落ちつかない状態にあった。果されない義務の圧迫感がいつも頭の何処かに重苦しく巣くって居るといった感じでもあった。併しその重苦しい圧力が何処から来るかといふことに就いては、彼はそれを尋ねようとしなかった。いや、それが恐かったのだ。自分で自分を目覚ますことが恐ろしいのだ。自分で自分を刺激することがこはかったのだ。

では、何故怖いのだ？何故だ？ (p.71)

ここに見られる、趙教英の「日本——朝鮮——自分」、つまり「他者の集合——自分の集合——個としての自分」という思考順路に注目すべきだろう。趙教英は「他者の集合体」にも「自分の集合体」にも属さず、すなわち二つの集団から逸脱し、無意識のうちに「自分」を相対化しようと試みている。民族的同一性を奪われていたのは朝鮮人全体であり、それが趙教英に集約的に現れている。そのため、彼は「日本か朝鮮か」の枠組みから脱出し、両国の狭間に存在する第三者の立場で民族問題や自分のアイデンティティーの問題を考えようとしている。この部分から、中島敦が朝鮮人巡査である趙教英を中心人物とし、1920年代の朝鮮を観察させるという設定に込められた意図が読み取れる。

#### 第四節 趙大煥の人物造形

『虎狩』は中島敦が1934年（昭和9年）の始めに脱稿し、4月の『中央公論』の懸賞小説に応募<sup>28</sup>、同年7月の発表で選外佳作となった70枚ほどの作品であり、中島の朝鮮物の最後の作品でもある。この作品の主人公・趙大煥は、韓国時代に相当な官吏を務めていた父と日本人の母の間で生まれ、被統治者としての朝鮮人でありながら、長い歴史のなかで朝鮮の支配階級に属していた両班の子弟でもある。こうした二面的なアイデンティティーを持っている点で、「巡査の居る風景」の趙教英と共通する属性を備えているため、中島敦の朝鮮表象を論じる際に、趙大煥の人物造形に関する分析が必要になる。

まず、作中において、語り手である「私」は趙大煥と知り合った経緯をこう説明している。

趙と私とは小学校の五年の時から友達だった。その五年の二学期に私が内地から龍山の小学校へ転校して行ったのだ。(p.74)

「中島敦年譜」によると、1920年（大正9年）、当時九歳の中島は父の転勤に伴い、京城龍山公立尋常小学校第五学年口組に転入学し、家族と一緒に京城に住んでいた。よって、趙大煥のモデル人物は、龍山公立尋常小学校の同級生、すなわち実在の人物の可能性が高い。その友達の思い出を書こうというのが『虎狩』の出発点だったとも考えられる。この詳細に関して、いくつかの説が残されている。例えば、伊東高麗夫は「興味ある存在、中島敦」において、こう指摘する。

「虎狩」中の同級生、趙大煥については、趙という柔道部にいた大きな男があるいはモデルだったかと思われます。なお金大煥という同級生もおり、趙大煥とはこの二人の同級生を合わせた名前だと言えます<sup>29</sup>。

周知の通り、朝鮮人の姓は多くが一字姓である。二字姓もわずかながら存在するが、三字姓はない。朝鮮総督府が編集した『朝鮮の姓』（大海堂、1934年3月31日）によると、1930年（昭和5年）の時点では、全朝の五万世代以上の姓を人口順で並べると、一番多い姓は金（キム）であり、その下に李（イ）、朴（パク）、崔（チュエ）、鄭（チョン）、趙（チョ）、姜（カン）などと続く。これらの大姓のなかには多数の名門豪族があり、各地方に同族の集団部落を構成し発展していたと知られている<sup>30</sup>。従って、「金大煥」にせよ、「趙大煥」にせよ、いずれも朝鮮人らしい名前だが、中島敦はなぜ「金大煥」のままでなく、あえて「趙」と「大煥」を合わせたのか。すでに指摘されているように、趙大煥という名前を姓と名に分けてみると、「趙」は「朝鮮」、「大煥」は「大韓帝国」と暗に示している<sup>31</sup>。しかし、「趙大煥」はただの国名の組み合わせではなく、その裏には李氏朝鮮と日本政府が潜在していることを見逃してはいけない。

1894年の日清戦争で清国に勝った日本政府は、「下関条約」により清国に朝鮮が自主独立国であることを認めさせた。3年後の1897年、当時の李氏朝鮮は国号を大韓帝国（略称、韓国）と改め、清の冊封時代と日本統治時代の狭間の短い間に、朝鮮史上初の近代国際法に基づく独立主権国家を作った。だが、1910年の韓国併合とともに、日本政府は韓国国号を朝鮮と改め、朝鮮での植民地支配を始めた。

『虎狩』には中島敦自らの実体験が多く投影されている。作中の「私」は中島敦の分身だと考えれば、同級生の趙大煥の生まれ年が中島に近いはずであり、つまり1909年頃だと

推測できよう。従って、大韓帝国時代生まれ、日本統治時代に生きる代表的な朝鮮人として、中島敦は『虎狩』の主人公に「趙大煥」（「朝大韓」）と名付けたといえよう。また、趙大煥の身分設定からも李氏朝鮮と大韓帝国時代の影が見当たる。中島は、趙大煥のアイデンティティーについて「名前で見るとは、彼は半島人だった。彼の母親は内地人だと皆が云ってゐた。」と説明し、彼の父親が「元来昔からの家柄の紳士で、韓国時代には相当な官吏をしてゐたものらしい。さうして、職を辞した今も、いはゆる両班で、その経済的に豊かなことは息子の服装からでも分った。」と記されている。

湯浅克衛によると、趙大煥のモデル人物は朝鮮貴族である。

「虎狩」に出て来る朝鮮貴族の同級生は、李達宰君がモデルであろう。日韓併合に功労があった、貴族の子弟だけが、京城中学に入学資格があった。李達宰は、長身、色白、柔和で、いかにも貴族の子弟らしく、又、三番、五番と云ういい成績で、四年ではいった敦のあとを追ってたしか、一高にはいったのではないかと思う。或いは三高だったかも知れないが<sup>32</sup>。

1925年の時点で、朝鮮の中学校は全部で10校あり、総生徒数174に対して、朝鮮人生徒の割合はわずか4%しかなかった<sup>33</sup>。その中、京城中学校の場合は、中島在学時点で学級数19、生徒数907名を有していた。その内訳は、日本人が868名、他方で、朝鮮人がわずか39名であった（「中学校状況表」<sup>34</sup>（大正14年5月末現在）より）。しかも、その4%程度の朝鮮人中學生は、ほとんど日本の植民地政策に協力的な「親日派」といわれる朝鮮人の子弟たちである。日本人生徒に囲まれたなかで、趙大煥が疎外感を強く感じたことは『虎狩』の行間に滲み出ている。また、日本語を母語としない趙大煥と龍山小学校で居心地の悪さを味わった「私」とを結びつけた最初の紐帯こそが、この疎外感であったのである。

一方、趙大煥も「私」も異邦人の存在だが、二人の「異邦人性は全く同じ性質のものではあり得ない。＜私＞のは一時的、趙大煥は半永久的という点で異なっている」<sup>35</sup>とも指摘される。「親日派」といわれる朝鮮人の子弟のなかの一人である趙大煥のアイデンティティーについて、まず「両班」そのものに触れておきたい。

現代の朝鮮語辞書を引くと、「両班」について、以下の四つの項目が書かれている。

양반<sup>36</sup>

- (1) <史>ヤンバン（両班）；朝鮮王朝時代の階級制度で、東班[文官の班列]と西班[武官の班列]の上流階層；

- (2) 威厳があつて人柄が上品な人；
- (3) 婦人が第三者に対して自分の夫を指す語；
- (4) 男性をやや敬う語（さげすむ語）；方[男]。

現在まで「両班」の明確な定義はまだないが<sup>37</sup>、用法は時代が下がるにつれ、(1) から (2) (3) (4) の語義へと拡大している。高麗、李氏朝鮮王朝時代の官僚機構と支配機構を担った両班は、とりわけ李氏朝鮮王朝時代には科挙の受験資格を有し、良民（両班、中人、常人<sup>チュウイン サンミン</sup><sup>38</sup>）と賤民（奴婢、白丁<sup>ノビ ベクチョン</sup>）に分けられる身分階級の最上位に位置していた貴族階級に相当する。両班は、兵役の免除、刑の減免、地租以外の徴税・賦役の免除という優遇政策を享受していた。さらに、世襲の両班の嫡子は自動的に両班になるのが当然であった。

しかし、両班の意味は李氏朝鮮時代中期以降、すでに変容を迎えていた。岡田浩樹が指摘するように、両班は官僚の世襲化が進むにつれ、単なる官僚の総称から社会的、身分的な特権へと意味が変わる。さらに、特定の氏族集団同士の結婚などを通じて、血縁的身分として固定化し、ある種の身分階層を構成するまでになった。同時に、中国から伝えられてきた朱子学を思想的基盤とした両班は、知識人や道徳的指導者を輩出する身分階層となる。これによって、いわゆる両班社会が形成される<sup>39</sup>。つまり、両班は、文字どおりの東班と西班の中央官吏を指したものであったが、次第に両班を輩出した一族を指す、社会的な概念として用いられるようになった。

李氏朝鮮時代を通して特権的な階層であった両班は、1894 年の「甲午農民戦争（東学党の乱）」と「甲午改革」の際に、大きな変動期に直面した。今まで享受してきた数多くの特権を奪われるほかに、両班の身分の根拠であった科挙までも廃止され、封建的身分制の廃止が宣言された。さらに、国王は両班によらず、単独で施政を行うようになった結果、経済的に貧窮化し、零落した両班の数が少なくなかったのである。その後、李氏朝鮮王朝は日本による植民地統治の開始によって 1910 年に終焉を迎え、王朝の制度は植民地統治期以降の社会変化の衝撃の中で消滅し、両班は政治的、経済的、社会的優位性を失ってしまった<sup>40</sup>。

『虎狩』の趙大煥は経済的には申し分ない条件の生活を送っている点で、無論上述のような零落した両班のなかの一人ではありえないが、植民地統治が実施されるとともに、本来の統治階層としての優位性を失われた趙大煥には、過去と現在それぞれのアイデンティティーの混在によってもたらされた自我認識の亀裂が見られる。例えば、虎狩の現場において、私の前に現れたのは「此の地の豪族の血」が流れている趙大煥である。一人の勢子



は不意に虎に出会い、恐怖のあまり気を失ったことに対して、趙大煥は次のように反応する。

(略) 彼は、その気を失って倒れてゐる男の所へ来ると、足で荒々しく其の身体を蹴返して見ながら私に言ふのだ

——チョッ！怪我もしてゐない。——

それが決して冗談に言つてゐるのではなく、いかにも此の男の無事なのを口惜しがらる、つまり自分が前から期待してゐたやうな惨劇の犠牲者にならなかつたことを憤つてゐるやうに響くのだ。そして側で見てゐる彼の父親も、息子はその勢子を足でなぶるのを止めようとしめない。ふと私は、彼等の中を流れてゐる此の地の豪族の血を見たやうに思った。そして趙大煥が気絶した男をいま／＼しさうに見下ろしてゐる、その眼と眼の間あたりに漂つてゐる刻薄な表情を眺めながら、私は、いつか講談か何かで読んだことのある「終りを全うしない相」とは、かういふのを指すのではないか、と考へたことだつた。(p.97-98)

川村湊も指摘するように、「何百年もの伝統に裏打ちされたそうした感情は、たかだか三十何年かの植民地支配よりも、もっと深く、大きな断絶を彼らの間に作つていたかもしれない」<sup>41</sup>。長い歴史のなかで、朝鮮の支配階層に属していた両班の子弟として、趙大煥は勢子などの同族人に対して極めて冷淡で、酷薄な視線を向けたことが以上の例から読み取れる。

一方、「私」を含め、多くの日本人の前で、まったく違う趙大煥像が浮かび上がつてきたのである。例えば、作中において、趙大煥は「私」を誘い、京城の三越のギャラリーで熱帯の魚を見に行く場面が描かれている。異国的な美に対する愛好を持つのが趙大煥と「私」の共通点だが、あまりにも興奮した口調で熱帯魚の美を讃える趙大煥を見ると、「私」はわざと「そりや綺麗でないことはないけれど、けれど、日本の金魚だつてあの位は美しいんだぜ。」と水を差してやった。日本の金魚のことを知るはずがない趙大煥にとって、「私」からの「意地の悪いシニカルな態度」が、彼がいくら「親日派」であっても、統治される朝鮮人に過ぎないことを暗示している。また、「私」の記憶によれば、趙大煥はあまり朝鮮語を話すことを好まず、自分が「半島人」であるということを非常に気にしている人物である。さらに、周りの友人達は彼の身分を何時も意識し、恩恵的に自分と遊んでくれていることにも神経を尖らせている。

こうした中で、物語がクライマックスを迎えたのは、三年生の時の冬の演習の夜であつ

た。趙大煥は上級生達の思い上がった行為に対して時として憫笑を漏らしたり、また永井荷風の小説を耽読することで硬派の上級生に睨まれたりすることが原因で、演習の後に上級生らに散々殴られた。普段なら絶対屈折した態度を示さない趙大煥だが、その日、「私」の前で「裸の、弱虫の、そして内地人ではない、半島人の」自分を見せてくれた。

——どういふことなんだろうなあ。一体、強いとか、弱いとか、いふことは。——  
- (p.85)

——俺はね、(と、そこで一度彼は子供のやうに泣きじゃくって)俺はね、あんな奴等に殴られたって、殴られることなんか負けたとは思ひやしないんだよ。ほんたうに。それなのに、やっぱり(ここでもう一度すすり上げて)やっぱり俺はくやしいんだ。それで、くやしいくせに向って行けないんだ。怖くって向って行けないんだ。—— (p.85-86)

上記は、強者の日本と弱者の朝鮮、強い日本人と弱い朝鮮人が対照される箇所である。日本人が内鮮一体を提唱し、朝鮮人を同化しようと試みたが、朝鮮人は受けている民族差別から抜け出せないのが皮肉な現実である。また、「私」の「父などは自ら常に日鮮融和などといふことを口にしてみたくせに、私が趙と親しくしてゐるのを余り喜んでゐなかつた」ことから、こうした同化政策や日鮮融和のスローガンが民衆レベルで歓迎されていなかったことを暗示する意味を持っている。特に、強い両班と弱い朝鮮人の混在といった二律背反的な要素の結合によって、趙大煥は自己認識の亀裂に直面せざるをえない状況に置かれている。その趙大煥の人物像は、『巡査の居る風景』の趙教英のイメージにも重なっている。

最後に、趙教英も、趙大煥も、どちらも作品の終盤で朝鮮から離れる運命を迎える。前者の趙教英の場合は課長との言い争いが原因で職を失い、ぼんやりと「京城——上海——東京」を思い描く様から、彼がこれから独立運動に参加する可能性が示唆されているのであろう。後者である趙大煥については、『虎狩』のなかで「それから(注：冬の演習の夜以降——筆者)間もなく(まだ私達が四年にならない前に)彼は突然、私にさへ一言の予告も与へないで、学校から姿を消して了ったからだ。(中略)やがて、彼に関する噂が伝わってきた。彼がある種の運動の一味に加はって活躍してゐるといふ噂。彼が上海に行って身を持ち崩している話」と明確にその運命が記されている。二人の趙の人生の顛末は結末で一致をみせるが、その裏には上海で樹立され大韓民国臨時政府(1919年)と京城で極秘に

結成された朝鮮共産党（1925年）の存在が見られ、中島敦は『巡査の居る風景』と『虎狩』の最後において民族解放運動に身を投じる朝鮮人青年を描くことによって、当時の日本の朝鮮統治政策に対する密かな抵抗を示していると考えられる。

#### 第五節 終わりに

中島敦の朝鮮物を考察すると、作家の眼は植民地における階級差別の実相と朝鮮人のアイデンティティーの問題に注がれていることが分る。

本章では、まず『巡査の居る風景』に関して、同時代の朝鮮表象の文学言説を整理し分析を行った。その中で、朝鮮社会に注目する作品や朝鮮を代弁する異色作も存在するが、強い日本・日本人と対照的な弱い朝鮮・朝鮮人を対照的に描き出す作品が主流であることが明白なものとなった。このような舞台背景の下で、朝鮮人の視点から描かれた中島敦の『巡査の居る風景』は実にユニークな作品であるといえる。作中の主人公たる趙教英は、日本に統治される朝鮮人でありながら、朝鮮の民衆を管理する巡査でもある。彼は「朝鮮」と「日本」の対関係について思索し、自分のアイデンティティーと立場に疑問を感じてはいたのだが、最終的には「朝鮮か日本か」という二者択一問題から逸脱し、統治と被統治のアイロニーのなかで揺らいでいる人物になった。

また、身分の混乱によってもたらされた自我認識の亀裂の問題は、趙教英のみならず、『虎狩』の主人公・趙大煥にも存在していたため、次に趙大煥像の分析も試みた。中島敦の同級生がモデル人物だと言われている趙大煥は、朝鮮の特権的な階層であった両班の子弟である。他方で、彼は日本の従属国の国民という弱い立場にいる人間でもある。同化政策が進められた中で、現地にいる朝鮮人と日本人の間にはアイデンティティー認識のギャップは消えないままであり、また階級差別の重層的な構造も読み取ることができた。

さらに、『巡査の居る風景』以前の初期習作については、中島自身が濃く投影されている「第一人称小説」がほとんどであった。自己への凝視に社会への関心を加えた作品としては、『巡査の居る風景』が最初である。『下田の女』で見せた女性への関心や『ある生活』のロマンティズムから卒業し、「第三者」の視点から時代の状況を把握しようと試みたのは、当時の中島敦の心境そのものだったのかもしれない。その視点は、後に仕上げた『D市七月叙景』『虎狩』『北方行』などの作品からも見受けられる。特に、二つの集団（日本と朝鮮）の狭間で動揺しつつある主人公・趙教英の人物像は、中島敦の後期作品『李陵』の李陵像にも一貫している。そのため、『巡査の居る風景』は中島敦の朝鮮表象を現す一作であり、作家中島の成立の契機ともなっていると言える。

注：

- <sup>1</sup> 『巡查の居る風景』は『蕨・竹・老人』とともに、第一高等学校文芸部『校友会雑誌』第322号（1929年6月1日発行）に「短編二つ」という総題の下に発表された。
- <sup>2</sup> 『プールの傍で』の原稿は第一次全集刊行（『中島敦全集』全3巻、筑摩書房、1948年）以降失われたままである。本稿の引用箇所はすべて第一次全集第3巻を参考にしたものである。
- <sup>3</sup> 『虎狩』は1934年に『中央公論』の懸賞創作で選外佳作となったが雑誌には掲載されず、生前の単行本『光と風と夢』（1942年7月、筑摩書房）に収録され、初めて発表された。
- <sup>4</sup> 濱川勝彦『中島敦の作品研究』明治書院、1976年9月、p.7
- <sup>5</sup> 鷺只雄『芥川龍之介と中島敦』翰林書房、2006年5月、p.216
- <sup>6</sup> 木下柰太郎『朝鮮風物記』（『木下柰太郎全集 第十巻』岩波書店、1981年12月、p.291-292）
- <sup>7</sup> 田山花袋『京城雑感』（『満鮮の行楽』大阪屋号書店、1924年1月、p.360-361）
- <sup>8</sup> 高浜虚子『朝鮮』（黒川創『＜外地＞の日本語文学選（3）朝鮮』新宿書房、1996年3月、p.20）
- <sup>9</sup> 南富鎮『近代日本と朝鮮人像の形成』勉誠出版、2002年7月、p.10
- <sup>10</sup> この作品について、「中西伊之助が朝鮮を扱った「不逞朝人」は一九二二年に雑誌『改造』に出るんだけど、これが植民地問題を扱った世界で最初の文学作品ですよ。」と言われている。（『中島敦 生誕100年、永遠に越境する文学』河出書房新社、2009年1月、p.21）
- <sup>11</sup> 黒川創『＜外地＞の日本語文学選（3）朝鮮』新宿書房、1996年3月、p.332
- <sup>12</sup> 柳宗悦『朝鮮人を想ふ』（鶴見俊輔編『近代日本思想大系24 柳宗悦集』筑摩書房、1975年6月、p.177）
- <sup>13</sup> 柳宗悦『朝鮮人を想ふ』（鶴見俊輔編『近代日本思想大系24 柳宗悦集』筑摩書房、1975年6月、p.179）
- <sup>14</sup> 渡邊一民『＜他者＞としての朝鮮 文学的考察』岩波書店、2003年6月、p.32
- <sup>15</sup> 例えば、金史良の『草深し』（初出：『文芸』1940年7月号）や李淳木の『冬の橋』（初出：『せたがや文学』第5号、1971年12月）などがある。
- <sup>16</sup> 鷺只雄『中島敦論——「狼疾」の方法』有精堂、1990年5月、p.65
- <sup>17</sup> 池田浩士編『カンナニ 湯浅克衛植民地小説集』に所収、インパクト出版会、1995年3月
- <sup>18</sup> 南富鎮『近代日本と朝鮮人像の形成』勉誠出版、2002年7月、p.44
- <sup>19</sup> 「中島敦年譜」（『中島敦全集別巻』筑摩書房、2002年）を参照。
- <sup>20</sup> 京城中学校の略史は『さらば京中！—時人を待たず—』（京城中学校同窓会誌、百周年記念事業実行委員会編、2009年12月20日）を参照。原文は以下のようである。  
「本校は併合前の明治四十二年（皇紀二五六九年）五月二十二日の創立にかゝり、京城居留民団立京城中学校として当時橋北町にあった独立館及国民演説台を仮校舎として開校した。翌四十三年四月一日統監府に引継がれ、統監府中学校と改称され、同年八月韓国併合なるや十月一日朝鮮総督府中学校と改称され、予ねて慶熙宮址（現在の敷地）に新築中であった校舎の落成をみたので、同年十一月一日に移転したのである。越えて大正二年四月一日京城中学校と改称され、其後大正十四年四月一日京畿道に移管せられ京城公立中学校と改称され現在に至っている。」（p.9）
- <sup>21</sup> 詳しくは『仁旺ヶ丘～京城中学卒業五十周年記念誌～』（『仁旺ヶ丘』編集委員会企画、京喜会、1982年1月）の付録地図「思い出の京城」と『龍山小学校史・龍会史』（京城龍山公立小学校同窓会・龍会発行、1999年12月）の付録地図「思い出の京城」を参照。
- <sup>22</sup> 京城龍山公立小学校同窓会・龍会発行『龍山小学校史・龍会史』1999年12月、p.108-109
- <sup>23</sup> 山崎良幸『中島君を憶う』（田鍋幸信編『中島敦・光と影』新有堂、1989年3月、p.185）
- <sup>24</sup> 朝鮮総督府警務局編『大正十五年 朝鮮警察の概要』大和商会印刷、1926年8月、p.9
- <sup>25</sup> 山辺健太郎『日本統治下の朝鮮』岩波書店、1971年2月、p.118
- <sup>26</sup> 権錫永「「ヨボ」という蔑称」（『北海道大学文学研究科紀要』第132号、2010年）
- <sup>27</sup> 朝鮮総督府編『普通学校国史 下巻 児童用』1924年3月28日翻刻発行、p.23-24（『旧植民地・占領地域用教科書集成 一九二二年～一九二八年 朝鮮総督府編纂教科書』に所収、あゆみ出版、1985年）
- <sup>28</sup> 1934年1月、『中央公論』は社長長嶋中雄作の署名記事で、「新人出でよ、新人出でよ、今こそ新人輩出の秋である。」と呼びかけ、「論文」「中間物」「創作」の三部門にわたって新人の作品を募集した。
- <sup>29</sup> 『中島敦全集 別巻』筑摩書房、2002年5月、p.246
- <sup>30</sup> 朝鮮総督府編『朝鮮の姓』第一書房、1934年3月31日初版、1977年8月25日復刻、p.60
- <sup>31</sup> 南富鎮「＜娼婦＞と＜虎＞の朝鮮表象——中島敦」（静岡大学人文学部『人文論集』N056-2、2005年、p.11）
- <sup>32</sup> 湯浅克衛『敦と私』（中村光夫、氷上英広、郡司勝義編『中島敦研究』筑摩書房、1978年12月、p.231-232）
- <sup>33</sup> 橋谷弘「一九三〇・四〇年代の朝鮮社会の性格をめぐって」（『朝鮮史研究会論文集』27号、1990年3

月)

<sup>34</sup> 朝鮮総督府学務局編『大正十五年 朝鮮教育要覧』大和商会印刷所印刷、1926年7月、p. 57

<sup>35</sup> 山下真史「中島敦『虎狩』論」（東京大学国語国文学会『国語と国文学』1987年9月号、p. 59）

<sup>36</sup> 朱信源編著『標準 韓国語辞典』白帝社、2005年5月、p. 1624

<sup>37</sup> 吉田光男は「士族と両班のあいだ——歴史の時間・文化の時間」（韓国・朝鮮文化研究会『韓国朝鮮の文化と社会』第1号、風響社、2002年10月26日）において、似た観点（p. 9、「両班は輪郭線の不明確な存在であり」）に言及した。

<sup>38</sup> 日本語の「常人」（じょうにん、じょうじん）の概念とは相違なるものだという事に注意すべきなのだ。

<sup>39</sup> 岡田浩樹『両班——変容する韓国社会の文化人類学的研究』風響社、2001年2月、p. 28

<sup>40</sup> 岡田浩樹『両班——変容する韓国社会の文化人類学的研究』風響社、2001年2月、p. 34

<sup>41</sup> 川村湊「中島敦伝2 植民地の“虎”」（『アイ・フィール』NO. 30、2004年11月、p. 35）

付記：

『巡査の居る風景』中、現在から見れば差別用語が使用されているが、作品の文学性や歴史性を考慮してそのままにしている。

## 第二章 中島敦が見た昭和初期の中国の一側面

### ——『D市七月叙景（一）』を中心に

#### 第一節 はじめに

『D市七月叙景（一）』（以下『D市七月叙景』）は、第一高等学校『校友会雑誌』第325号（1930年1月）に発表された中島敦の初期習作である。この作品は、かつて日本の支配下にあった「D市」（関東州大連市、現在の遼寧省大連市）を舞台に、シャックリに悩まされる「M社」（南満州鉄道株式会社）の総裁「Y氏」（山本条太郎）と、「海水浴場」（星ヶ浦海水浴場）でのほのぼのとした「M社」の職員一家と路頭に迷う二人の苦力（中国の下層労働者の呼称）を描く三つの断章によって構成されている。

こうした重層的な社会構造について、川村湊は「互いに関わりを持たない並列的な階層としてとらえられているだけで、そこに階層を縦断するような接点を見出すことができない。」<sup>1</sup>と指摘するが、その並列的な階層がいずれも昭和初期の大連における日本の植民地事情の一端を表出しているという共通点を見逃してはいけないと考える。

当時の大連は外国の租界を抱えることで、混血の都市として成立していた。中島が日本人、中国人、ロシア人などがともに暮らす多人種社会を『D市七月叙景』の舞台にしたのは、ただの文人趣味・異国趣味であるのみならず、重層的な社会構造の視座から昭和初期の中国の一側面を映し出そうとする意図的なところもあつたのではなからうか。けれどもタイトルから見ると、作者は（二）（三）と書く予定であつたことが想定されるにもかかわらず、『D市七月叙景』は（一）のみで未完のまま中断された。シリーズ放棄の理由として、藤村猛は中島が「プロレタリア文学への憧れと畏敬の念から、初期作品群の後半は描かれたのだろう」と述べた上で、書き手自身が作品に登場したキャラクターに「愛情を持たず、結局「享樂的世界に自己を投入」するしかない」と結論づけた<sup>2</sup>。

確かに、『D市七月叙景』の執筆時期に当たる昭和初期の日本文壇ではプロレタリア文学全盛期を迎えており、作品との関係を考えるのは妥当である。当時一高の『校友会雑誌』の編集メンバーに加わっていた中島敦もまた、その風潮に全く影響されなかったとは考えられない。だが、労働者や社会現状の改革などを主題に配置するプロレタリア文学作品<sup>3</sup>とは違い、『D市七月叙景』を含む中島の初期作品群には、それぞれ日本、朝鮮半島、中国東北部の舞台に登場する現地人の日常風景を点描するものが多い。例えば、『D市七月叙景』には「苦力」と呼ばれる労働者の姿が現れるものの、テキストの構図を見る限りでは、中島敦は労働者問題に執着せず、満鉄総裁と満鉄社員と満鉄の支配下で辛うじて暮らしを立

てようとする中国人苦力と、その三つの階層に体现される大連の多層的な植民地風景を描写している。「この三つの階層のそれぞれの人物の日常的な一瞬を切り取るという作品の技法」こそが、その作品における「もっとも幅広くとらえる方法」<sup>4</sup>だといえよう。中島敦はこの技法を用いて、昭和初期の大連の時代像を浮き彫りにすることを試みた。

満州で一番日本に近い街として知られる大連は、満州の入り口であると同時に、ほとんどの日本人にとっては中国東北部に入る際の第一歩を印したところでもある。1906年9月、日本人の大連自由渡航が許可されて以来、本土からの渡航者数（移民も含む）は増加を続けてきた。これに伴って現れた満州関連の日本語文学言説や記事なども少なくないが、本格的な「満州ブーム」は1940年代に入ってから始まった<sup>5</sup>。そのため、昭和初期といったごく早い時期に満州に着目し、ブームに先んじ中島敦が書いた『D市七月叙景』は、20世紀前半の日本による支配の象徴的都市空間としての大連を物語る貴重な証左だと考えられる。

だが、一つの都市の現状を厳密に把握すること自体が決して容易い事ではなく、とりわけ大連のような多人種的・多民族的な植民地都市を描くのは一層難しさを増す仕事である。『D市七月叙景』の面白さは、日常の即物的描写に終わらず、不安や動揺をはらんで揺れ動く植民地風景の本質を描き出している点にある。この作品は三つの階層の日常をそれぞれ記したものだと思われがちかもしれないが、実はその日常的な生活風景の背後に落とし込んだ非日常的な植民地支配の影がテキストの行間に漂っている。

本章は、まず、題名のなかの「D市」というイニシャルの暗号化に潜んでいる作者の思惑を究明し、その次に、作品の成立についても触れておきたい。最後に、重層的な社会構造の視点から、満鉄総裁、中年社員と中国人苦力の「日常」と「非日常」への分析を通じて、中島敦が見た昭和初期の大連事情を考察する。

## 第二節 混血の都市としての「D市」

『D市七月叙景』において、中島敦が直接に「大連」と書かず、かわりにイニシャルの「D市」という一種の暗号を読者に解釈させる設定を行ったのは何故であろう。

周知のように、現在一般的に中国沿岸部の都市として広く知られている大連だが、かつてその地に関して幾つかの呼び名が存在していた。1898年（明治31年）にロシアの関東州租借が始まり、ロシアはその地をロシア語で「遠方」という意味をもつ「ダルニー」と名付け、その翌年、東清鉄道に託して都市建設を始め、そののちに「露西亜町」が形成されるようになった。ヨーロッパとアジアの間を結ぶ鉄道の終着点に都市を建設することは、最初から「ダルニー」が鉄道と一体となる町として位置付けられたことを匂わせる。

日露戦争の旅順陥落後、遼東守備軍が「紀元節」をもって「ダルニー」を廃して「大連」と改称するという軍令が出され、施行された。その後、日露戦争に辛勝した日本は、「ポーツマス条約」（1905年9月5日）でロシアが満州にもつ権益の一部、すなわち旅順・大連とその付近の領土・領水の租借権及び東清鉄道南部線の“長春～旅順間”などを継承し、それを「満州ニ關スル条約」（「満州善後条約」とも呼ぶ、1905年12月22日）で清国に承認させた。

木村遼次によると、「大連」という語源には二つの説がある。一つは、日清戦争終結後の下関講和会議で、清国の代表として知られている李鴻章がその統治下にある大連湾を、大利俺（ダリエン）と命名していたのを、日本人がダイレン（大連）ともじって軍人や民間で使っていたという説である。もう一つは、大陸に連なるので大連だという解釈である<sup>6</sup>。この二つの説に関して、はっきりした確証はないが偶然ながらも「ダルニー」「大利俺」「大連」、三つの地名ともにローマ字ではDのイニシャル文字を伴っている。

大連をはじめ、遼東半島は古くから満族と漢族が定住していた土地である。19世紀後半から人口が急増し、そのなか、南から漢人、東から朝鮮人、北からロシア人、さらに日本人までもがなだれ込んできた。日本は日露戦争の結果大連を南満州鉄道の起点と定め、内地の満州進出の拠点として鋭意経営したが、未開拓の地とは違い、当時大連の街には既にロシアと中国とが絡み合った文化が存在していた。露西亞町の存在は無論だが、満鉄の鉄道沿線は日本資本の進出によって急激に発展し、一方で沿線以外は敵として中国伝統の世界が存在している。この三つの要素は、『D市七月叙景』の舞台をなす混血の都市としての大連を有機的に構成しているのである。

従って、「大連」といった明確な地名を付けてしまうことによって求められる、日本の支配下に置かれる半植民地の都市像の肉付けが、この作品には不要であると判断されたのではないか。昭和初期の大連は、ロシアが名付けた「ダルニー」、清国の地図に表記される「大利俺」、および日本によって改名された「大連」が混じり合う混血の都市である。中島敦が「大連七月叙景」のような単純明快なタイトルにせず、わざとイニシャルで暗号化したのは、こうしたロシア、中国、日本のいずれなくしても成立しない「D市」の複雑な様相を示唆するためであったとも考えられる。

### 第三節 二つの体験によって作られた<1929年7月の大連>

『D市七月叙景』の舞台である大連をはじめ、中島敦は実に中国東北部の都市と深い縁を持つ日本人作家である。1924年夏、15歳の中島は従兄弟たちと旅順の比多吉叔父宅に一



ヶ月程遊んだ。その翌年、父・中島田人は龍山中学校を退職し、10月から関東庁立大連第二中学校教諭嘱託となり、大連市弥生町二ノ六に住んでいた。伯母・志津とともに京城滞在していた中島敦は、1925年5月に修学旅行で南満州を訪れた。また、1927年夏、大連に帰省中に肋膜炎で満鉄病院に入院し、一年間休学した。中島は1930年以降も中国を旅していたが、時間軸で考えると『D市七月叙景』との関わりがないため、ここでは取り上げないことにする。

この作品の成立について、安福智行は、本文中の満鉄総裁の演説原稿を満鉄の御用新聞という性格を持つ『満洲日報』の記事内容と照らし合わせながら、『D市七月叙景』は「あくまでも資料を元にして成立した作品なのである」<sup>7</sup>と指摘する。確かに、演説原稿部分の内容の類似度に基づき、作者が『満洲日報』の記事を参考にした可能性は否めない。また、今回の調査によって、中島敦が創作するにあたって参考した可能性の高い、もう一つの資料の存在が判明した。その資料とは、南満洲鉄道株式会社が1927年に出版した『大連地方案内』（国立国会図書館所蔵）である。

『大連地方案内』は関東州のうち、主として大連及びその以北の地域に関するガイドブックである。内容としては、〈総説〉（「自然」「人文」）、〈大連〉（「交通、旅館、案内所」「展望、概観」「見学、観光」）、〈大連から普蘭店まで〉（「周水子」「南関嶺」「柳樹屯」「金州」「三十里堡」「石河」「普蘭店」「貔子窩」）といった三つの部分から成り立っている。『大連地方案内』のなかで紹介される大連の象徴的な風景の内容が、『D市七月叙景』の描写とほぼ一致していることは非常に興味深い。例えば、

(1)

埠頭の施設は大連港の価値を裏書するものであり、大連港の消長は満蒙に於ける我が経済的活動のパロメーターとなる。(中略) 中にも埠頭の設備として珍らしいのは積込能力一時間二百吨を有する給炭船撫順丸と船積能力一時間九百吨のカーダンバー式石炭積込機及び平均一日六千人乃至八千人の出働を見る支那苦力の荷役労働の状態である。(『大連地方案内』、下線——筆者、下同)

トロッコのレールを避けて、埠頭倉庫の日陰に荷揚苦力が二三十人も、ゴロ／＼と死んだ様になって眠って居た。(『D市七月叙景』p.97)

(2)

油房は市の東部と軍用地宝町一帯の地と西崗子とに多い。約八十を算する油房(中

略)により満洲の特産たる豆油、豆粕を大量に生産してゐるが、油房内、油にまみれて苦力の円粕を扱ふところなどは珍しい作業振である。(『大連地方案内』)

此の地方の主要工業製品である豆粕や豆油が、近来、外国のそれに、圧倒されてきたこと。殊にドイツの船ねどは、直接此の港から大豆のまを積んで本国の工場に持ち帰つて了ふこと。それに第一、肥料としての豆粕が、近頃は已に硫酸アンモンにとって代られて居ること。こんなことを彼等苦力が知らう筈はない。七月に入ってから、このD市市内の、バタ／＼閉鎖して行つた油房の最後まで残つて居たS油房が昨日の朝閉ぢることになった、彼等は全く途方に暮れて了つた。(『D市七月叙景』 p.100)

(3)

市街はアカシヤの街とも呼びたい程、通りの並木にアカシヤが多く、初夏は白い花の群りに風さへかほる。(『大連地方案内』)

かつとした日ざしが白い舗道の照り返しと共にアカシヤの街路樹の葉を萎えさせて居た。(『D市七月叙景』 p.84)

(4)

小盗児市場の称ある露天市場には盗難品の出ることがあり、日本人と支那人との生活程度の大きな差から生じた交換経済の奇現象が見れる。ここは畜に支那日常生活必需品のマーケットであるのみならず実に支那下層民にとっては又となき民衆的娯楽地で梨園、書館は更なり寄席、見世物小屋、奇術師、さては覗きからくりなど、食べ物店で口腹の欲を充たすと共に慰安を得る様になってゐる。(『大連地方案内』)

二人は、ふら／＼と露天市場の方に歩いた。市場のそこ、こゝの空地には、手品師や曲芸師の類が炎天にさらされながら客を呼んで居た。(『D市七月叙景』p.100)

後の家の扉があいて、厨房の中から熱い臍物の揚げ物の匂ひが彼等の嗅覚を襲つた。(『D市七月叙景』 p.101)

上記の四つの例のほかに、『大連地方案内』で紹介される「敷島広場」「露西亞町」「電気遊園」「碧山荘」「星ヶ浦」「海水浴場」<sup>8</sup>なども、『D市七月叙景』において舞台として設置されている。『大連地方案内』の出版年・1927年は、中島敦が大連の満鉄病院に入院した年である。中島が現地で『大連地方案内』を手に入れ、後ほど『D市七月叙景』の創作に使った可能性を以上複数の例から読み取れよう。すなわち、この作品の創作資料として、『満洲日報』の記事と『大連地方案内』が挙げられるのである。

一方、作品の成立過程から作者の満州体験を排除してしまうのは早計である。とりわけ、『D市七月叙景』には実体験なしでは描けないほど生々しい、大連という街の日常の細やか情景を緻密に描写する場面が散在している。例えば、本文の断章（二）の冒頭にある満鉄社員の一家が海辺で家族休暇を楽しむ場面を読んでも、下記の部分に巡りつく。

よく晴れ日であった。海にも空にも一面に金色に光る無数の微粒子が躍りながら充滿して居た。のぼせ上った空は、遠く水平線近くに、ポッと立昇った硝子の様な水蒸気の層を見せ、その下に、チカ／＼して目に痛い真昼の海が細かく揺れ動く小皺を畳んで居た。まだ午食のすぐあとなので、海に浸って居る人は少なかったが、砂の上には翠と朱黄の明るいオーヴァーを着けたロシヤの娘達が三四人、もう、日傘をぐる／＼まはしながら歩いて居た。はちきれさうに白く滑らかな彼女等の踵が濡れて光った砂の上を踏む度に、その踏まれた箇所だけは、砂地が急に引緊り、水気がいそいで逃げ出して、俄かに小さな艶のない白い洲ができるのであった。(p.90-91)

上記に示したように、風光る自然の描写であれ、人物の細微なディテール表現であれ、いずれもダイナミックで臨場感溢れるシーンである。このシーンの舞台は、1910年代後半の中国東北地方では数少ない海水浴場のひとつ、星ヶ浦海水浴場である。「海からの風は心地よく、夜は満天の星の海原になった」<sup>9</sup>ため、1909年に日本人はこの地を星ヶ浦と名づけたという。やがて、大連を訪れる日本人が増えるにつれ、星ヶ浦は格好のリゾート地となった。『D市七月叙景』（1930年）が掲載されるまでに、中島敦は三回にわたって満州へ旅に出たことがある。これらのいずれにおいても、中島は当時の海水浴好きな日本人のなかで評判となった星ヶ浦海水浴場へ足を運んだ可能性が高いと推測できよう。

また、三つの断章において、各登場人物に相応しい舞台を用意したことから、中島は大連の街の事情に実に詳しいことがわかる。断章（一）の満鉄総裁には、「ロシア町」「敷島広場」「満鉄本社」；断章（二）の満鉄社員の一家には、「星ヶ浦海水浴場」「貸別荘」；断

章（三）の苦力には「大連港」「碧山荘」「露天市場」「酒場」などが登場舞台として配置されている。これらはそれぞれ当時の大連社会の上層・中層・下層階級にとっての象徴的な居場所である。例えば、中国下層労働大衆が寄り集まる場所として知られる「露天市場」を一例として挙げてみると、中島敦は『D 市七月叙景』において如何に現実描写の手法を用いたのかがわかってくる。

市場のそこ、こゝの空地には、手品師や曲芸師の類が炎天にさらされながら客を呼んで居た。青龍刀と旗指物とをもって、一人で芝居をする髯だらけの大男。珍らしく辮髪をたらし居る狡るさうな顔の手品師。七つ八つの子供を二三人使って声をからして叱って居る軽業師達。彼等の額は汗に濡れ、眼は太陽の直射に赤く充血して居た。軽業師は子供を仰向きに砂の上に引き倒した。そして、身体を全く蝦折りにまげて、頭と足の爪先とを背中にくっつき合ふ様にさせた。それから自分は片足をその子供の弓の様なそった腹の上ののせて踏みつけながら、見物に金銭を求めるのであった。少年の髪は砂に擦れ、その眼は汗に沁み、頬は小石にすり切れて細い血を出して居た。軽業師が足に力を入れて、腹部を踏みつける度毎に少年は、かすかな悲鳴をあげた。客の投銭が少ない時は、軽業師は、その陰はしい眼付きを意地悪く光らせて一層強く少年を踏みつけるのであった。(p.100)

ここで描かれたのは、露天市場で機敏さやコーディネートを要する全身運動を用いた一種の「芝居」を観客に見せ、糊口を凌ごうとする軽業師と少年に関する日常風景である。中島敦は細部にわたるきめ細やかな描写を通じて、やや冷酷な軽業師と不憫な少年の人物像を造形した。特に、少年の身体や表情に関する詳細な表現には、作者の被支配者への思いやりやあたたかい視線、さらに大正ヒューマンズムから受けた影響が見られるのではない。

これと対照的なのが、田山花袋が書いた『露天市場』（『満鮮の行楽』所収）という一文における描写である。花袋は満鉄の招聘で1923年に満州と朝鮮を旅行し、翌年『満鮮の行楽』を刊行した。同じ大連の露天市場をめぐる文脈は、「混雑」「汚い」「不整な不愉快な空気」<sup>10</sup>といった否定的な表現に終始する。客観的な現状描写も内包されているが、当時支配的であった日本の軍国主義政策による満州への侵略を肯定する「満州観」や支配者側から見る発展の遅れた現地社会への否定と軽蔑が読み取れる。こうした満州体験の叙述に見られるような支配者側の普遍的な満州観と違い、中島敦の視点は常に現地の支配者と被支配者とを共時的な空間において捉えようとしている<sup>11</sup>。つまり、作者自身の実体験の延長線に

ある、支配者（総裁、社員）と被支配者（苦力）のそれぞれの立場から捉えた複合的な大連こそが、『D市七月叙景』の舞台なのである。

なお、作品において、関東軍によって中国東北の指導者・張作霖が暗殺された事件として知られる「張作霖爆殺事件」（1928年6月4日）が取り上げられ、これを「あの重大事件」「有名な昨年（1927年）の事件」と曖昧にしているが、ここから、この作品で描かれた時空を＜1929年7月の大連＞に同定することができる。一方、「中島敦年譜」（『中島敦全集別巻』筑摩書房、2002年）によると、彼は1928年4月に一高の二年に復学し、1929年には満州にいなかったのである。つまり、中島敦が見た昭和初期の中国の一側面とは、1927年以前の大連滞在の直接体験と1927年以降のマスメディアなどから作者が得た情報によって作られた間接体験を混ぜ合わせ、支配者と被支配者両方の視点から捉えた1929年の大連の姿のことである。

#### 第四節 大連の「日常」と「非日常」

この作品の時代背景となる「1929年」といえば、張作霖爆殺事件を機に瓦解した田中義一内閣にかわる、浜口雄幸内閣成立（7月2日）、中ソ国交断絶（7月18日）、田中内閣辞職を機に辞任した山本条太郎の後継として、仙石貢が満鉄第11代総裁に着任（8月14日）、世界恐慌の開始（10月24日）、などといった出来事が継起した、不安と混乱に満ち満ちた一年であった。こうした時代の不安と混乱は『D市七月叙景』の登場人物の日常にも色濃く投影されている。例えば、断章（一）の主人公である「Y氏」に関して、中島敦は彼をシャッキリに悩まされる滑稽なイメージを持つ人物として造形している。

前日の昼頃から、ふと出初めた吃逆が不思議に続いて止まないのである。大抵の吃逆なら五分か十分で止まってさふ筈であるのに此の場合には十時間も続くのであった。全く、南満洲の王様も——事実彼は王様に違ひなかった。関東州だけの行政権を持って居るにすぎない関東庁長官などの威勢は、とても彼の足下にも及ばなかった。——此の痛烈な全身的の震動にはすっかり手古ずって了った。（中略）惨虐で奇妙なこの発作は殆んど六十秒毎に彼を襲ひ、彼の神経をおびえさせ、彼の全身の筋肉に震動を起させた。（p.83）

「Y氏」のモデルである満鉄第10代総裁山本条太郎は、1927年7月19日から1929年8月14日まで満鉄の総裁を担当し、大胆な改革を行い「満鉄中興の祖」とも言われた満州の

大物である。日清戦争が始まる前の満州に渡り商売を行った山本が、その地との間に持った関わりはかなり古いといえる。彼はかつて三井物産の上海支店長として長く勤務し、中国語にも英語にも通じており、中国事情には随分詳しい人物である。さらに満鉄の草創期には「歴代満鉄総裁のなかでこのような素質をもった人物は山本以前はもちろん山本以後にもついに現れなかった。」<sup>12</sup>（加藤聖文）と評価されるほどの積極的な事業拡大を行い、またそれに見合った収益を挙げた人物でもある。にもかかわらず、『D市七月叙景』においては、中島は彼の存在を「南満洲の王様」と認めつつも、シャックリに「すっかり手古ずって了った」といった少々滑稽気味な普通な日本人として描いている。それは何故であろう。

その要因としては、1929年時点での山本条太郎はもうすでに、権威を笠に自分の思うままに振る舞いをすることができる立場にいられなくなった点が考えられる。1920年代に満鉄が直面した問題は、中国の民族主義の台頭下にどう権益を維持し、事業を展開するかであった。「張作霖爆殺事件」が引き金となって起きた中国の「打倒日本帝国主義」ブーム問題の処理に追われると同時に、この事件で暴走してしまった「関東軍」の行く先の不確実性・不透明性は、山本から見れば実に厄介な問題であった。また、大連市内で「D遊園」の民間払い下げを要求する運動が発生し、度々満鉄本社を訪れる中国人の陳情委員への対応に手を焼く山本については、『D市七月叙景』のなかで以下のように描写されている。

と、その時、扉にノックの音が聞えて、給仕が頭を下げながら、はひって来た。

「あの、市の陳情委員の方が見えられましたが。」

「イヤ、駄目、駄目、そんなものは。」と、彼は乞食でも追払ふ様に右手を烈しく振ると、その時、丁度、同じ扉口からはひって来た M 秘書官をつかまへて云った。

「君。また来よったんちゃとよ。此の間の奴が。どうも仕方がないな。D 遊園を民間に払下げろちふんちゃ。」(p.89)

文中の「D 遊園」とは、電気遊園のことを指している。この遊園は、満鉄の市内への電力供給に合わせて 1909 年に開設され、西公園、北公園とともに大連の三大公園となった。電気遊園について、山田花袋は 1923 年の満州旅行に基づき書かれた『大連の三公園』（『満鮮の行楽』所収）において、こう紹介する。

電気遊園は大連と小崗子の中央にある伏見台の東端にある。矢張、こゝも高台に

なっている。市街の万景をはじめ、碧い海を隔て、向うに大和尚山の雄姿を望むことが出来る。西公園ほどではないが、樹木がかなり栽えられてあって、中でも梅、桃などの多いのが此処の特色である。それに温室があり、花壇があり、小動物園があり、簡易図書館があり、音楽堂がある。メリイゴウラウンドなどもある。喫茶店の電気料理、登瀛閣の支那料理などもある。夜はイルミネーションで昼のやうである。電気遊園の名のある所以である<sup>13</sup>。

上述の「メリイゴウラウンド」と一年を通して行われた夜間の「イルミネーション」は電気遊園の目玉であり、「それだけ余剰電力を供給できることを誇示していることにほかならず、満鉄の存在を宣伝するのに役立っていた。」<sup>14</sup>（西澤泰彦）とも言われている。

ロシア時代の大連都市計画では、市街地を東西に二分し、東には欧米人の街、西には中国人の街が配された。こうした人種による住み分けは日本統治期に入ってから承継されていた。特に、本来なら公共性が高い公園などは、ここでは中国人の街と外国人の街の間に両者を隔絶するように設けられた象徴的な存在となった<sup>15</sup>。植民地経済の繁栄を誇るシンボルとして知られる電気遊園は、支配者階層が被支配者階層から離れて生活するための「ベルリンの壁」のような存在である。こうした植民地的性格が色濃く投影される場所の民間払い下げの要求を受け、作中の総裁「Y 氏」は秘書に向かって、「いくら民間に渡しても、すぐあんな奴等に占領されて了ふんぢやよ。みんな苦力共の寝場所になるんぢや。少しも民衆のためになんぞなりやせんぢや。君。」と躊躇わず却下する。

大連支配の頂点に立つ満鉄の総裁を含む日本人支配層のなかには、満州における底辺の労働力を支える苦力たちは統御しきれない存在であり、彼らが何時か反乱者となるかもしれないという恐怖感が常に存在している。一見すると、『D 市七月叙景』の断章（一）は、シャックリに脅かされた満鉄総裁の日常を中心に物語が展開しているが、その日常の背後には、「張作霖爆殺事件」で高まった中国の反日感情や暴走してしまった関東軍の存在、および植民地統治のシンボルとしての電気遊園、被支配者側に置かれた苦力をめぐる管理の問題など、非日常の植民地的要素が盛り込まれているのである。

こうした「日常」と「非日常」の混在は断章（二）と断章（三）からも読み取れる。例えば、満鉄の中年社員が家族を連れて大連の海水浴場で楽しい時間を過ごす日常風景が淡々と描かれるが、現地日本人の内地回帰の念願が断章（二）の伏線となっている。

1906年6月の「南満洲鉄道株式会社設立ニ関スル件」の公布を経て、満鉄は同年11月に正式に設立された。鉄道会社、調査研究機関と植民会社の集合体として知られる満鉄は、半官半民の国策会社である。営利的諸事業を営むばかりではなく、満鉄附属地経営の行政

の事業をも担当したため、この巨大な組織は「満鉄王国」とも称せられた。日本の満州支配の中核が満鉄であるなら、その満鉄を支えているのはまさに一人一人の満鉄社員と膨大な数の中国人労働者であった。

『D市七月叙景』の断章（二）と（三）の舞台には、こうした日本の植民地支配の背景なくして語られない満鉄社員と苦力がそれぞれ登場している。断章（二）において、満鉄の社員クラブ<sup>16</sup>の書記長を勤める中年社員は内地の苦しい生活から逃げるため、満州に飛び立った。そして、満州での生活は予想以上に楽であり、収入も内地の倍となったために、彼はそれ以来、満鉄から離れなかった。一方で、中年社員の一家は「中島の理想の家族像であったのかもしれない」<sup>17</sup>（藤村猛）と指摘されたが、登場人物が感じ取った一見幸福に見える日常に潜む不安の背景には内地回帰の念願がうごめいている。

かうして満洲は彼にとって、極楽であった。にもかゝらず、彼は、子供達ももう少し、成長するのを待って、日本に帰らうとして居るのである。まだ日本を知らない子供達に、彼等の父の生れた国を見せるために、雨戸といふもの、<sup>(あずまや)</sup>阿屋、築山といふものを見せるために、それから、老年は、どうしても彼の故郷の蜜柑と小川と遠い海とのさゝやかな風景の中に小さな家でもたてゝ暮したいといふ彼自身の<sup>(いか)</sup>如何にも日本人らしい望みのために。……（p.95-96）

西澤泰彦によると、1920年代の大連における高等教育機関は、南満州工業学校を1922年に改組して設立された南満州工業専門学校のみであり、旅順にも旅順工科学堂（1910年設立、1922年に旅順工科大学に改組）があっただけで、普通教育を行なう高等学校や大学は大連だけでなく旅順にもなかったという<sup>18</sup>。そのため、高等学校や大学への進学を希望する日本人学生は、満州の中学校を卒業すると、ほとんど内地に帰っていた。

満州のイメージは昭和初期においては、「陸の生命線」としてさらに強く意識されるようになり、内地からの移民の到来は無制限に歓迎されていた中で、中年社員たちが時代のブームに逆行するように内地への帰還を希望していたのは、子供の教育問題のみならず、異国の地で裕福な生活を送りながらも消えない「根無し草」の意識から発したのもであった。

昭和初期は、日本の中国進出が本格化する一方で、現地に生きる日本人や中国人が不安と混乱のなかで動揺していた時代であった。断章（三）においては、こうした不安の時代のなかで、職を失って、全く途方に暮れてしまう二人の中国人苦力の様子が描かれている。

1929年の満州は主要工業製品である豆粕、豆油の生産が外国のそれに圧倒され、大連の



油生産拠点（「油房」）は次々と閉鎖されていった。さらに、鉄道工場やガラス工場なども不景気の風に襲われ、あたかも年末の世界恐慌の前兆が大連の地に現れたように見える。だが、「こんなことを彼等苦力が知らう筈はない」と、中島敦は述べる。『D市七月叙景』には二人の苦力が仕事を見つけるためにひたすら歩き続ける中での数々の日常風景が描かれている。

ある酒場で、彼らはアルコールを飲み、「何か、ひどく乱暴なことをして見たいといふ欲望が起って」きた。彼らは酒場で暴れたあげくに店の亭主に散々殴られ、外へ投げ出された。断章（三）の終盤に、次のような描写があり、苦力の物語はこれで結末を迎える。

二人は白い埃と彼等自身の顔から流れて居る血の匂ひとをかきながら、ひどく好い気持で、重なり合ったまゝ、昏々と眠りに落ちて行った。(p.104)

この場面について、藤村猛は「「昏々と眠りに落ちて行」く苦力たちの姿は、「D市」の象徴であろう。」<sup>19</sup>と指摘している。中国における植民地都市、特に大連のような街は、建設事業や港湾荷役をはじめ、労働力を中国人労働者に頼らなければ成立しないといえる。大連経済の浮沈とともに「苦力」の数は増減し、昭和初期の満州労働問題は換言すれば苦力問題である。だが、中島敦が満州生活者の下層部に属する苦力に焦点を合わせ、不安の時代を背景として失業に悩まされ、行く先が見えない彼等の姿を描いたのは、被支配者の位置にいたながらも、支配者の現地統治を支える不可欠な力でもあるという、彼らが持つに至っていた二面的な性格を浮かび上がらせるためではなかろうか。

「日常」と「非日常」の混在は、こうやって『D市七月叙景』全篇を貫いて存在している。一見して、この作品は登場人物の日常生活の風景を点描しているようだが、そこに垣間見られるのは、上層・中層・下層の別なく、それぞれに不安を抱えて1929年の大連に生きる人々の姿である。

## 第五節 終わりに

本章は、中島敦の習作『D市七月叙景』を中心に、作家が見た昭和初期の大連についてテキスト分析を試みた。作家とは所詮時代の子である以上、その所産である作品は生きた時代の特性から逃がるべくして逃れ難いものがある。『D市七月叙景』にも独特な時代の姿が影を落としている。一つは、中島自身の1928年までの満州直接体験である。もう一つは、その後のマスメディアなどから得た間接体験によって作られた1929年の時代像である。当

時、大連は日本人、ロシア人、中国人が混在し、歴史的にも政治的にも、三つの民族による渦巻き状の葛藤の中心地であった。支配したロシア、支配する日本、支配される中国、いずれなくとも大連の町が形成されないという本質的な条件に焦点をあて、中島は満州生活者上層部の満鉄総裁、中層部の満鉄社員と下層部の中国人苦力をそれぞれの断章の主人公として登場させた。三つの階層の間には明確な相関関係は存在しないものの、三者の日常生活に垣間見える「不安」と「混乱」にはいずれも植民地支配の非日常的要素が潜んでいることで一致する。

初期中島文学においては、中島敦は「おのれ」と「他人」との「同一」「差異」の反復運動を通じて、それぞれの民族性意識を追求している。『D市七月叙景』は即物的日常描写と植民地の非日常的要素を同時に取り入れ、日本人である「おのれ」と中国人である「他人」の共通点、すなわちますます植民地化されてゆく日本支配の現実への不安を抉り出した。このような視点とそれを描き出した筆法は、昭和初期に中国を訪れた多くの日本人作家たちの中であって、ほとんど異例な作品であると言ってよい。

注：

<sup>1</sup> 川村湊『異郷の昭和文学——「満州」と近代日本——』岩波書店、1990年10月、p.77-78

<sup>2</sup> 原文は「当時、彼が抱いていたであろうプロレタリア文学への憧れと畏敬の念から、初期作品群の後半は描かれたのだろうが、各場面の描写はうまいとしても、そこに描かれる人々に愛情が持てないとしたら、それは空回りであり、当人にとってはしんどいことである。揺れ戻しのように、彼が享樂的世界に自己を投入したとしても、不思議ではない。それが大学時代の文学的沈黙や、「D市七月叙景」シリーズの放棄の理由の一因ではなかったろうか。」藤村猛「中島敦「D市七月叙景（一）」論」（安田女子大学、安田女子短期大学編『安田女子大学紀要 NO.34』2006年2月、p.9）

<sup>3</sup> 宮島資夫『坑夫』（1916年）、宮地嘉六『放浪者富蔵』（1920年）と小林多喜二『蟹工船』（1929年）などが挙げられよう。

<sup>4</sup> 川村湊『異郷の昭和文学——「満州」と近代日本——』岩波書店、1990年10月、p.78

<sup>5</sup> 「満州文学関連年表」（川村湊『異郷の昭和文学——「満州」と近代日本——』より）を参照されたい。

<sup>6</sup> 木村遼次『大連物語』星共社、1983年12月第9刷発行、p.13

<sup>7</sup> 原文は「『満洲日報』という新聞を題材にして、上層・中層・下層階級を象徴する人物を抽出し、それぞれにテーマを設定して描いた作品、と捉えるべきではないだろうか。一見すると〈満洲体験〉によって成立した作品なのであるが、その内実はあくまでも資料を元にして成立した作品なのである。」安福智行「D市七月叙景（一）論——「満洲日報」を視座として——」（佛教大学国語国文学会『京都語文』2001年10月、p.83）

<sup>8</sup> 『大連地方案内』において、以下のように書かれている。

「電気遊園は人工的の公園でメリイ・ゴー・ラウンド」、「支那人の大集団は西崗子の全街を始め寺兒溝、千代田町附近、奥町監部通あたりであって此の都市としては筋肉労働を提供する苦力、馬車人力車夫の鮮やかな民族的色彩以外に支那街の情調も随所に滲み出てゐる。」「社会施設として地方色の興味あるものには、市の東端東山町に福昌華工株式会社の碧山荘華工収容所がある。」「近郊風景に秀でゝあるところとして星ヶ浦は市の西南里余、群青の海が開け、（中略）西は黄昏浜が大きく弧を描いて居り波濤に打たれて丸くなった小石が白く美しく布かれてゐる。夏は大連人士の海水浴場として賑ふ。」

<sup>9</sup> 井上ひさし、こまつ座『井上ひさしの大連 写真と地図で見る満洲』小学館、2002年1月、p.54

<sup>10</sup> 原文は「私は混雑と支那人の集って罵り合つてゐるのを見た。バラックのやうな小さな店がそれからそれと連つて、或は古着屋、或は古物商、或は古金物商と言ふやうに、一軒々々低い庇を並べてゐるのを見た。汚い着物を着た脊の高い支那人が頻りに何か声を張り上げて言つてゐるのを見た。不整な不愉快な空気があたりに満ちた。」田山録弥『定本 花袋全集 第28巻』臨川書店、1995年8月、p.39

<sup>11</sup> これに関して、川村湊は『異郷の昭和文学——「満州」と近代日本——』（岩波書店、1990年10月、p.78）

---

において、「植民地都市の状況を、植民者と被植民者とを共時的な空間において階層としてとらえたことは、彼の文学およびに昭和の文学を語る時に、もっと強調されてもいい事柄のように思える。」と指摘する。

<sup>12</sup> 加藤聖文『満鉄全史「国策会社」の全貌』講談社、2006年11月第3刷発行、p.91

<sup>13</sup> 田山録弥『定本 花袋全集 第28巻』臨川書店、1995年8月、p.51-52

<sup>14</sup> 西澤泰彦『図説 満鉄「満洲」の巨人』河出書房新社、2000年8月、p.103

<sup>15</sup> 西澤泰彦は『図説 大連都市物語』（河出書房新社、1999年8月、p.24）において、「もともと、その人種差別の問題を都市計画的観点から見れば、ヨーロッパ市街と中国市街のあいだに両者を隔絶するように設けられた公園と苗圃は、ベルリンの壁の如く、両者を区別する象徴であったといえよう。」と指摘する。

<sup>16</sup> 大連では、「大連クラブ」と称する現地在住の欧米人を中心としたクラブがあったが、のちに満鉄は大連クラブとは別に「大連満鉄社員倶楽部」を興し、これが「満鉄の欧米列強への対抗意識のあらわれ」（西澤泰彦『図説 満鉄「満洲」の巨人』河出書房新社、2000年8月、p.102-103）だとも言われる。

<sup>17</sup> 藤村猛「中島敦「D市七月叙景（一）」論」（安田女子大学、安田女子短期大学編『安田女子大学紀要 NO.34』2006年2月、p.7）

<sup>18</sup> 西澤泰彦『図説 大連都市物語』河出書房新社、1999年8月、p.91-92

<sup>19</sup> 藤村猛「中島敦「D市七月叙景（一）」論」（安田女子大学、安田女子短期大学編『安田女子大学紀要 NO.34』2006年2月、p.8）

付記：

(1) 「満州」「支那」といった名称は、日本の植民地支配との深い関わりのなかで使用されたもので、今日では不適切なものであるが、本章はあくまで歴史的用語という意味でのみ使用することにする。

(2) 戦前の日本語出版物には「満洲」という表記が主流であったが、戦後の漢字改革により、「洲」を廃して「州」に統一したため、本章は「満洲」ではなく、「満州」を使うことにする。ただ、引用の場合は、原文に従い、「満州」または「満洲」のままに引用させておきたい。

### 第三章 『北方行』に関する一考察

#### ——アイデンティティーの探求を視座として

##### 第一節 はじめに

『北方行』は、中島敦が1930年（昭和5）夏の蒋介石（中央軍）と反蔣勢力（西北軍、山西軍ら）との拮抗や共産党の長沙占領という中国政変を舞台にし、北平<sup>1</sup>（現・北京）で出会う二人の日本人青年（黒木三造、折毛伝吉）と、二十年前の中国人留学生との結婚を機に中国に渡航した未亡人（白夫人）という三人の主要な人物を、それぞれ独立した視点から描いた作品である。この作品には1933年に着手し、1935年の創作ピークを経て1936年に未完のままで終わった<sup>2</sup>。その後、原稿は散佚し、第一篇の（一）が消失されたために（二）から始まり、全部で五篇の作品となっている。

第一篇では、自意識過剰に苦しむ青年・黒木三造が北平の従姉・白夫人のもとへ向かう船上での自省と、彼が日本語を教えている英国海軍軍人トムソンとの交流が描かれている。第二篇では、中国人の夫に先立たれた日本人妻・白夫人の回想を中心に、折毛伝吉と彼女、そして彼女の長女・麗英との関係、更に白家の人々について語られている。第三篇では、折毛伝吉の「存在の不確かさ」と「生への無関心」が、彼の回想のなかで提示される。第四篇では、登場人物たちは白夫人の家で一堂に会し、中国政変について様々な議論を展開し、中国内戦がもたらした暗影などが取り込まれている。第五篇では、三造と伝吉の二人の交流が描かれ、三造が従軍記者に仕立てられて戦線へ赴こうとするところで、断筆した状態のまま残存し今に至っている。

その執筆中断の要因に関しては、先行論では以下のように二つの観点に分類することができる。一つは、三造と伝吉をはじめとする登場人物が自意識過剰や自己分析癖の傾向を持っていることで物語の進行を阻害していたという見方であり、これに関する代表的な論説については、田鍋幸信「中島敦の文学——「北方行」を中心に——」<sup>3</sup>（1967年）、菅野昭正「忘れられた胎児——中島敦『北方行』——」<sup>4</sup>（1974年）、濱川勝彦「北方行と『過去帳』と」<sup>5</sup>（1976年）などが挙げられる。もう一つは、『北方行』の物語世界と時代背景は当時の若き中島の手には負えないほど非常に複雑だったとする見方である。例えば、勝又浩『中島敦の遍歴』<sup>6</sup>（2004年）と渡邊ルリ「中島敦『北方行』に見る一九三〇年中原大戦下の中国——『北方行』序論——」<sup>7</sup>（2010年）などにはこうした観点が言及されている。

確かに、『北方行』の登場人物の描写と物語の構造を見る限りでは、上述の問題の存在は否定できないが、もともと大河小説の構想で書き出された『北方行』のなかには、初期習

作の世界がすべて包摂され、小説自体は中断したとはいえ、「これを踏み台にして、短篇または中篇小説として、のちに中島は昇華させ得た」<sup>8</sup>（布野栄一）とも言われている。また、『北方行』は「中島敦の中期、後期のすぐれた作品群を生み出す源であり」<sup>9</sup>（濱川勝彦）、中島敦の作家としての姿勢を確定させるための役割を果たした作品だと、高く評価してもよいのではないだろうか。

『北方行』は中島の初期作品群における二番目の中国物の作品である。最初の中国物は、1929年の中国・大連を舞台にして、満鉄総裁、満鉄職員、中国人労働者の「日常」と「非日常」が点描される『D市七月叙景（一）』（1930年）である。『北方行』の時代背景は1930年と設定されており、これは『D市七月叙景（一）』の物語が発生した翌年である。つまり、中島敦は『D市七月叙景（一）』を創作した早い時期から中国事情に熱い視線を注ぎ、連作の形で1929年以降の風雲急を告げる中国東北部の情勢を把握しようとしたのである。しかし、中島文学、特に初期作品世界に対する先行研究においては、『北方行』の存在が大きい一方で、数少ない先行論では三造と伝吉を中島敦の分身と見なし、多様な国籍の登場人物を配した物語構造の分析ばかりに集中しすぎてしまう傾向が見られる。

本章では、上述の問題意識を持ちつつも、『北方行』が中島文学全体にいかなる意味を帯びるかに関して、まず主要な登場人物である三造と白夫人母娘をめぐるアイデンティティーの問題を解明することによって追究していく。その次に、作品の時代背景である中原大戦と物語の舞台としての北平への分析を通して、『北方行』の問題点と執筆の事情との関連をも射程に入れて考察したい。

## 第二節 <三造物語>に見るアイデンティティーの探求

中島文学において、『北方行』『プウルの傍で』『狼疾記』を一つの系譜として見ることができる。なぜならば、次の四つの点を指摘し得るからである。第一に、三作ともに<三造>という名を持つ主人公が登場しているからである<sup>10</sup>。中島敦の諸作品のなかで、第一人称（主人公は「私」または「俺」）小説を除き、同じ名前を持つ主人公が複数の作品に登場したのは、『プウルの傍で』『北方行』『狼疾記』の三作品のみである。第二に、これらの三造は全く同一人物だとは言い切れないが、いずれの身にも中島敦の性格が投影されている。第三に、三作の三造は、ともに肉体と精神の二元論的問題に悩まされながらも自らのアイデンティティーを探求し続ける姿が描かれている点から、彼らが相似的な人物だと捉えられる。第四には、『北方行』の起稿時期（1933年）と執筆中断時期（1936年）は、ちょうど『プウルの傍で』（1933年）と『狼疾記』（1936年）それぞれの脱稿時期と重なっている

ためである。いわゆる創作時期において、これら三作は時間的連続性を有している。従って、1933年から1936年に至る間に創作された『北方行』『プウルの傍で』『狼疾記』は、＜三造物語＞という系譜を形成したといえよう。さらに、自らのアイデンティティーの探求という面からみれば、三造という人物像の造形が、実はその後の中島文学の人物像の原型ともなっている点について、これまでの先行研究ではあまり重視されていなかったようだが、中島文学をより正確に考察するためには、これら＜三造物語＞の研究が不可欠なのではないかと考える。

まず、一番目の＜三造物語＞である『プウルの傍で』を見てみよう。この作品に、「満洲旅行からの帰途、道を朝鮮に取った三造は八年ぶりで京城の地を踏んだ」との一節があるが、これは大学卒業前年の1932年8月、中島が関東庁外交部翻訳課長から満州<sup>11</sup>国執政府諮議となった旅順在住の叔父・中島比多吉を頼って、大連、京城などを旅行した事実を踏まえたことであろう。中島敦が京城中学校を四年修了で第一高等学校へ入学したのは1926年であるから、「八年ぶり」との表現ともほぼ合致する。本文において、三造は母校の中学校（京城中学校がモデルになっているのだろう）の校庭を歩いた際、葱畑だったところに小さなプールが出来ていることに気づく。このプールについて、三造は「ごく最近出来たものにちがひなかった」と断言する。さらに、もともとの草稿には「此の夏のオリンピックへの刺戟から出来たものであらう。」の一節が抹消されたが、これを合わせて考えると、新しいプールの建設は、1932年7月30日からロサンゼルスで第十回オリンピックが開催され、男子競泳では日本勢が400メートル自由形を除く5種目を制覇したことに理由があったのだろう。上述の事実に鑑みれば、作品の執筆時期は大体1932年から1933年に至る間だと推測できる。つまり、『プウルの傍で』は＜三造物語＞の最も早い一篇となる。

『プウルの傍で』は全部で三章によって構成されている。各章にはプールで泳ぐ三造が見た景色を織り交ぜながら、中学生だった時の思い出が緻密に描かれている。その思い出の内容を、少年期の三造が経験した家庭の事情、色町体験や上級生からのいじめなどに分類することができる。そして、この作品の三造像に関しては、主に二つの特徴が見られる。

一つは、「肉体への屈服」である。作者と等身大の三造のなかには、自らの弱い肉体への軽蔑と他者の強い肉体への屈服が潜んでいる。『プウルの傍で』の中には、三造が自らの外形への軽蔑を示す場面が何箇所もある。

彼自身を——その醜い容貌を——最も憎み嫌った。近眼でショボショボして、つぶれさうな眼や、低くて、さきの方ばかり申しわけのやうに上を向いてゐる小さな鼻や、鼻より突出してゐる大きな口や、黄色い大きな乱杭歯や、それらの一つ

一つを、彼は毎日鏡を見ながら呪った。(『中島敦全集 2』 p.218)

上記引用以外にも、三造の「その肉身に対する軽蔑や憎悪」などの描写が、作中において散見される。プールの傍で偶然に出会った学校の後輩の前で、三造は「自分の生っ白い、痩せた身体が、その中学生に対して恥づかしかった」と感じ、着物を脱ぐとすぐにプールに飛び込んだ。その後、プールのなかで泳ぐ三人の中学生を見ると、三造は彼らの強靱な肉体に憧れ、「その真黒な身体を、率直に伸びた足を、筋肉の盛上った肩つきを羨ましいものに思った」と、作中に描写されている。

もう一つは、「精神への蔑視」である。中学の時の三造は、友人と共に始めて色街へ足を運び、一人の朝鮮人娼婦の部屋へと入ったが、一人でフランス作家サン・ピエールの悲しい純愛物語『ポオルとヴィルジニイ』(1787年)を読み始めるという奇妙な展開となる。結局、三造と朝鮮人娼婦との間に果たして男女関係が生じたかについては、作中では明らかになってはいないが、彼の色街体験話が同じ学校の上級生の耳に入り、三造は二人の体の大きい五年生に裏山へ連れて行かれ、目茶苦茶に殴られることになった。

腕力がない、といふことが、現在の彼にとって如何に致命的なことであるか、を、彼は考へて見た。その前には、学校の成績の如きものは、何等の価値もないのであった。それは、どうしても口惜しいことであった。しかも、それは彼にとって、どうしてもならないことであった。(『中島敦全集 2』 p.232、下線——筆者、下同)

三造が、自分には「腕力がない」ことを自覚したのは、まさに上述した「肉体への屈服」そのものだと考えるが、一方でこの表現には肉体的な差があるため優位に立つ上級生の「精神への蔑視」をも明示している。また、下線部の「学校の成績の如きものは、何等の価値もない」の一節から、中学生時代の三造がすでに知の無力さに絶望しかけていることが窺い知れる。これは、まさに三造のモデルである中島敦自身の実体験だと言えよう。

周知のように、中島敦は非常に才知に長けた人であった。「中島敦年譜」(『中島敦全集別巻』筑摩書房、2002年)では、京城府公立京城中学校時代の中島の学年成績が常に上位だったと記されている。かつての同級生らの証言からも中島の秀才ぶりを垣間見ることができる。例えば、洗春海という龍山小学校・京城中学校時代の同級生は「龍山小学校からのこと」のなかで、中島敦について、次のように書き綴っている。

特に秀才だったとの印象が強く、算数、国語など抜群でしたが、体操とか図画な

どはそれほどでもなかったと思います。五年から中学に合格したのですが、体の関係か何かで改めて六年で受験、トップで入学したと担当の青木先生から聞きました<sup>12</sup>。

また、京城中学校時代の同級生であった稲本晃は「秀才中島敦君」において、

彼（中島敦——筆者）が毎年、学科平均九四点という開校以来の成績で一番であり、したがって毎年第一組の組長をつとめていましたが、（中略）中学一年ですすでに四書五経を読破し、多くの和漢の書を読みふけていると聞かされて、その文学的素養が素晴らしく、到底われわれの及ぶもつかぬ文学的偉材であると共に、試験勉強などしていることは見たこともないといふ友人のことばに、数理学科にも試験準備なく満点のとれる科学的頭脳も併せもった古今に稀な逸材である（略）<sup>13</sup>。

と、中島の秀才ぶりを賞賛している。

以上のように、中島敦は少年期から秀才と呼ばれ、漢文系の家庭で生まれ育ったこともあり、東洋思想は無論のこと、西洋分野の教養もかなり深いものであった。その一方で、幼少期からの病弱な体に加え、二十歳ごろ宿痾となった喘息の発作が始まり、1932年秋に朝日新聞社の入社試験を受けたが、身体検査で不合格となった。中島敦は、決して長いとは言えない彼の生涯において、その年月の多くを持病に苦しめられながら過ごし、折角恵まれた才能と膨大な知力を存分に発揮することができなかった。病弱な中島敦にとって、肉体の劣位から逃れられないままでは、たとえ他人より優れる知力を持っていても、その精神優位性はある意味で、桎梏のようなものになってしまうのである。これは『プウルの傍で』の三造の人物像にも反映されている。この作品において、自らの知力（精神）には格別の優越感を持ちながらも、体力（肉体）では人一倍の劣等感を感じる三造とは、間違いなく中島敦自身のことなのである。『プウルの傍で』のメインテーマは「肉体」と「精神」の二元論的問題に置かれ、前者は「自らの弱い肉体への軽蔑」と「他人の強い肉体への屈服」の問題で、後者は「自らの精神への自負」「他人の精神への蔑視」の問題である。

これらの問題は『北方行』にも継承されている。『プウルの傍で』の＜三造物語＞は、中島敦の実体験に近いものだが、『北方行』の＜三造物語＞はそれを軸にしつつも、物語をさらに発展させたと考えられる。

次に、『北方行』について考察しておきたい。『北方行』の第一篇の主人公・三造は「芸



術こそは人生に於て最も崇高なものであるといふ浪漫的な偏見」を持つ、ある意味で一種の芸術至上主義者だと言える。彼は、自身の内部で様々な西洋の芸術家らの肖像を作り上げ、芸術によって救われるのを望んでいる。さらに、自分と現実との間に壁のようなものを作り上げ、現実世界から自身を一層遠ざけていくしかない。

彼（三造——筆者）は、自分と現実との間に薄い膜が張られてゐるのを見出すやうになった。そして、その膜は次第に、そして、つひには、打破り難いまでに厚いものになって行った。彼は、その、寒天質のやうに視力を屈折させる力をもつ、[半透明な]膜をとほしてしか、現実を見ることができなくなって了った。彼は、ものに、現実に、直接触れることができない。彼がものに触れ、ものを見、又は行為する場合、それは、彼の影がものに触れ、ものを見、又は行為するのである。（『中島敦全集 2』 p.109）

上述の三造と現実との間にある「膜」とは、彼が主体性に欠ける行動を取り、ひたすら他人によって定められた既成概念に従いながら、先入観を持って周囲を見るといった行為だと考えられる。頭初、その膜の存在は三造に満足を与え、彼が文明人または知識人としての証拠にもなっていた。しかし、現実にもぶつかった後、その満足感次第に希薄なものとなり、かわりに現実が客観的に見えなくなる恐れが生じる。こうしたなかで三造は「生きる」とは何なのかについて真剣に考えはじめ、今まで自分が生きる真似ばかりし、決して自ら直接生きたことがないという事実気づいた。例えば、彼は自分が作家となるように生まれついていると自負しながらも、「人生鑑賞家」になるように運命づけられて生まれきたという奇妙な自覚を持ち合わせていた、というような点である。

だが、一流の作家になるために、まず既成概念に頼らず真正面から自分や周囲と真摯に向き合わなければならないのは言うまでもない。他人の目を通じて人生を概念的に観察するという「人生鑑賞家」のままでは、いつになっても自分の満足できる作品を創作することはできない。これに気づいた三造は、今まで自己分析の過剰や行為への怯懦を捨て、既成概念にとらわれず、客観的に周囲を観察できるような行動者になるため異国の地へ旅立った。

ここで、北平へ向かう船上での三造と、彼の日本語の教え子である英国海軍軍人トムソンとの間の交流部分の表現に注目したい。『北方行』の第一篇において、三造とトムソンのそれぞれの視点から見る相手の人物像が詳細に描かれている。

まず、三造から見るトムソンの人物像である。

英国人にしては随分脊の低い、[が、]健康さうに赤く日焼のした顔、白い頸から赤い顔へと、その境目の以下にもはっきりした元気のいと顔が笑ってゐた。(中略)脊がひくく、赤い顔をした、髪の毛の薄い、少しばかり短気で、子供っぽく、精力絶倫で、至って正直な、だが、有色民族の前で、彼等に対する侮蔑を隠すこと位は礼儀(又しても大英国紳士の礼儀)として心得てゐる Richard Thomson。(『中島敦全集 2』 p.116-117)

次に、トムソンから見る三造の人物像である。

奇妙な男であつた。強度の近眼鏡の奥から光つてゐる細い気の弱さうな眼、げっそりこけた頬から眼立って突出して、猿に似た口許を見せてゐる上下の顎骨。反抗心を以て常に結ばれてゐる厚い唇。最後に胃弱者らしい青黄[色]い艶のない顔色。それらは多く貧弱な相貌をもつた此の国人達の中にあつても格別貧相なものであつた。(『中島敦全集 2』 p.121)

以上のように、第一篇では二人の外形の描写に多くの言葉が費やされている。特に、「健康さうに」「はっきりした元気のいと顔」「精力絶倫」といったトムソンに対して、作者は彼と正反対な人物・三造(「奇妙」「弱さうな」「げっそりこけた頬」「艶のない顔色」「格別貧相な」)を作り出した。強靱な肉体の持ち主へ一種の憧憬を示すという点(「肉体への屈服」とも言える)からみれば、『北方行』の三造は『プールの傍で』の三造の人物像と相通じるものがある。

また、二人が1930年夏南京政府と北方の軍閥との間の抗争に関するニュースについて討論する場面では、トムソンは「面白いですね。北平で戦争になると面白い。」などと述べ、一見、特別な見解を持っていないように見える。これに対して、三造はこの自分と一年近くも付き合っている男が「何といふ馬鹿だらう」と思い、トムソンが「学問のない、趣味の低い異国人」だと、相手の精神への蔑視を隠そうともしない。ほかにも、英国人のトムソンの前では、三造がお互いの人種の差異に敏感に反応する様子が明らかに描かれている。例えば、初対面の場面において、トムソンは三造のことを「young man」と呼び、道を尋ねようとする際、三造は反射的に烈しい口調で反論し、三造は微笑んでいるトムソンを見て、これを「自らの優越を知って相手に寛大であらうとするものの微笑」だと解釈した。

三造は、相手が俗人であることに対する軽侮を忘れた点に対して、また白色人種である

という理由のみで相手に幾分阿諛に近い気持ちを抱いたかもしれない点に対しても、激しく自分を責めるのであった。特に、後者については、彼は常に嚴重に自分を戒めていた。白色人種的なものに対する、それだけ故の尊敬を打ち捨てねばならない、と常に自分に言い聞かせた。この気持ちは、時にトムソンの目にあまりに子供っぽい反抗として映ったが、三造にはこれに気づくだけの余裕すらなかった。トムソンと一緒にいる間中、彼は皮膚の色の差異についてのこだわりで終始した。一緒に外出する時も、従者のように見られるのを恥じて、必要以上には彼と口もきかなかった。さらに、人種的な差別から生じる文化的な劣等感が、三造のなかに深く根を下ろしているのである。

総括すると、『プウルの傍で』と『北方行』の三造は、「肉体への屈服」「精神への蔑視」の面において類似しているが、後者では「肉体」と「精神」の二元論的問題に加え、さらに西洋人と付き合う日本人が感じ取ったアイデンティティーの問題を取り入れ、作品をより深化させたと言える。『北方行』以前の作品の中に、異なる国家や民族に属する主人公が直面するアイデンティティー問題が盛り込まれるもの（『巡査の居る風景——一九二三年の一つのスケッチ——』『D市七月叙景（一）』『虎狩』）もあるが、そのいずれもが「日本（人）対朝鮮（人）」という構図のなかに成立している。一方、『北方行』においては、「権安生」という朝鮮人青年の話に多少触れられるものの、実際中島文学の朝鮮物はこれで終焉を迎えており、その後中島敦は次第に中国の舞台へと目を向けるようになっていった。

最後に、『北方行』の未完の三造物語と伝吉物語の展開を完成させた作品として知られる『狼疾記』について述べておきたい。この作品の主人公・三造は、中学校時代から「生」そのものへの懐疑を持ち始め、周囲の世界や社会への違和感が年齢とともに増加していく。彼は、自らの運命のみならず、周囲に存在するすべての生き物の運命について、その「運命の不確かさ」に不安を感じ、そこに大きな恐怖感を抱いている。例えば、三造は「父」の存在に関する不確かさを感じている。

あの通りの凡てを備へた一人の男が、何故自分の父であり、自分と此の男との間に近い関係がなければならなかったのか、と愕然として、父の顔を見直すことが其の頃屢々あった。何故あの通りでなければならなかったのか。他の男ではいけなかったのだらうか？（『中島敦全集 1』 p.408）

中島敦自身の幼児期からの家庭生活に目を向けると、父・中島田人との関係が決して良好なものとは言えないことがわかる。彼がわずか一歳の時、両親の離婚により、「生みの母の顔も知ら」ずに育てられてきた。二人の継母との仲は険悪なものであり、「母」不在の家

庭の中で育った中島が、家という概念に対して曖昧さを帯びたものとして認識したのであることは想像に難くない。父母の離婚、父親の二度の再婚、継母の死去や結婚生活の問題などは中島敦の生涯に深く影響しているはずであり、家族的題材は人並み以上にあったはずであるが、そういうことは彼自身の文章からではなく、他人の書いた年譜から知られるのみである。ただし、『狼疾記』の三造の身から、こうした複雑な生活環境が中島敦に与えた影響を読み取ることができる。

人間の自由意志の働き得る範囲の狭さ（或ひは無さ）を思はない訳に行かない。  
俺達は、俺達の意志でない或る何か訳の分らぬもののために生れて来る。俺達は  
其の同じ不可知なもののために死んで行く。（『中島敦全集 1』 p.409）

人生とは思わぬ偶然により、思わぬ方向へとその進路すら変わってしまうものかもしれない。己の意志の無力さに深い悲しみを覚える、ということであろう。自らの意志によって人生を構築することができないと苦悩している三造は、「既に人々が夙うの昔に卒業して行った事柄」から脱出できておらず、常に不安を感じ、すべてに対して疑心暗鬼になっている。これは、三造の性情にも深く繋がりがあることと見ることができる。彼の性情とは、「形而上学的とっていい様な不安」を抱えているということである。世界の根本的な成り立ちの理由（世界の根本原因）や、物や人間の存在の理由や意味などは、実際に見たり確かめたりできないものについて考える学問分野である。形而上学における主題の中でも最も中心的な主題に存在の概念がある。三造が感じた「形而上学とっていい様な不安」は、実は自らのアイデンティティへの不安だと言ってもよかろう。この不安から生まれてきたのが次の二つの願望である。

- 一、「あらゆる事柄（あるひは第一原理）を知り尽くし度い」ということ
- 二、「出来る限り多くの事物が（あるひは其の事物の原因が）自分の理解を絶した彼方にあればいと」ということ

（『中島敦全集 1』 p.415）

この二つの希求は、一見すると正反対の二つの願望だが、『狼疾記』において、三造はこう説明する。

前者は誰にでもある・成人の言葉でいへば「自己を神にしたい」欲望だったが、

後者は「此の世界を絶対信頼に値する・確乎たるものと信じ度い」といふ・その逆の——つまり、此の世界の不確かさ・哀れさに対する恐怖から生れた強い希求だった。「自分の様なチツボケな存在から凡てが理解されて了ふやうな世界では、其の中に棲むことが何としても不安だ。自分などには其の一端すら理解できないやうな・大きな・確乎たる存在に身を任せ度い」といふ・小さい者の恐怖から生まれた・捨鉢的な強い願望だった。(『中島敦全集 1』 p.415-416)

この矛盾の中に隠れているのは、前述したような、「<乏しさ>を嫌い、<豊かさ>を希求していた」ものであり、「<自我>の問題、<存在論的な苦悶>を追求していた」ものでもあるといえよう。さらに、三造は自らの生き方について、次のように考える。

一つは所謂、出世——名声地位を得ることを一生の目的として奮闘する生き方である。固より、実業家とか政治家とか、さういふものは、三造自身の性質からも、又彼の修めた学問の種類から云っても、問題にならない。結局は、学問の世界に於ける名誉の獲得といふことなのだが、それにしても、将来の或る目的（それに到達しない中に自分は死んで了ふかも知れない）の為に、現在の一日一日の生活を犠牲にする生き方である点に、変りはない。

もう一つの方は、名声の獲得とか仕事の成就とかいふ事をまるで考へないで、一日一日の生活を、その時に充ち足りたものにして行かうといふ遣り方、但し、其の儼の生えさうな程陳腐な欧羅巴出来の享受主義に、若干の東洋文人風な拗ねた侘びしさを加味した・極めて（今から考へれば）うじ／＼といぢけた活き方である。

(『中島敦全集 1』 p.419)

三造は第二の生活を選択した。これは病弱な身体への配慮の故だとも考えられるが、主な原因は彼の<臆病な自尊心>、つまり、世俗的な才能と行動力を欠いていることであり、自らが自負する非世俗的な才能が他人に認めてもらえないという事実を極力避けようとしていたことに起因する。

総括するならば、『プールの傍で』『北方行』『狼疾記』の三つの<三造物語>のなかで類似的な三造像が作り上げられたとはいえ、それぞれの作品においては、それぞれに多少の相違点も確認できる。『プールの傍で』の場合は、主人公の少年期の思い出がテキストの大

半数を占めており、三造は完全に中島敦の分身だといってよい。しかし、『北方行』とその後継作品である『狼疾記』の場合は、『プールの傍で』の「肉体」と「精神」の二元論的問題というメインテーマを継承しつつも、体験的要素を活用する私小説的手法への寄りかかりが捨てられ、異なる国家や人種のなかで感じ取った自己のアイデンティティーの探求や存在への不安へと作品の重点が置かれている。

### 第三節 <白夫人母娘の物語>に潜むことばとアイデンティティーの問題

周知のように、中島文学におけるヒロインの造形はそもそも数が少なく、主に初期作品群（『下田の女』『ある生活』『喧嘩』『蕨・竹・老人』『巡査の居る風景』）に集中している。『北方行』以降の作品（紀行文の『夫婦』『夾竹桃の家の女』『マリヤン』を除く）においては、女性が主人公として登場したものはほとんどみられない。こうした「ヒロイン不在の現象」について、藤村猛は（1）戦争期という時代に対する配慮；（2）主人公が何らかの問題を抱えていて、女どころではないという設定；（3）中島敦には小説家としての識見やプライドが存在し、恋愛を描くことを避けようとする意識があった<sup>14</sup>、といった三つの側面から解釈している。

確かに、中島敦の作品においては、「恋愛」というテーマは歓迎されず、男女関係についてもほとんど触れていない。強いて言えば、初期作品群においては、『下田の女』（1927年）『ある生活』（1928年）における思春期の男性が感じ取った女性の不可解さや『喧嘩』（1928年）で取り上げられる家庭関係の構図の試みがあった程度である。また、中島敦の朝鮮体験をもとにして書かれた『巡査の居る風景』（1929年）においても、ヒロインの金東蓮が登場しているとはいえ、主人公はあくまでも男性巡査の趙教英である。特に注目したいのは、震災で夫を亡くした金東蓮が娼婦に身を転じるという設定は、中島敦がこの作品に時代背景である関東大震災（1923年）を取り入れるためだという点である。言い換えるならば、時代背景をはじめとした作品の多岐にわたる諸問題を、より明快に描き出すための補助役として、ヒロインの金東蓮が存在している。

従って、中島文学には単純な恋愛テーマへの試みは全くないとはいえないまでも、これらの試みは初期作品群にしか見られないのである。これは、藤村猛が指摘した「小説家としての識見やプライド」の故だと言うよりはむしろ、恋愛テーマを試みてはみたが、これが自分とは相性が合わないことに気づき、それ以上作品に盛り込むことを諦めた結果ではなかろうか。『巡査の居る風景』の金東蓮であれ、『北方行』の白夫人母娘であれ、その後の中島敦のヒロインの人物設定は、恋愛のテーマからかけ離れ二つの国家・人種のなかで

生きる個人のアイデンティティーの探求のような、一層深くて広い中島敦らしいテーマを負うことになっていく。

こうしたなかで、『北方行』のヒロインの設定について、「女性を描き、性の問題を扱っていること」<sup>15</sup>はほかの作品には見られず、『北方行』の女性たちの「モラル意識が薄く、理性よりも性欲に身を任せて、現実に関心を閉ざそうとしている。」<sup>16</sup>という従来の指摘もあるが、これはこの作品の〈白夫人母娘の物語〉に潜むことばとアイデンティティーに関する作者の思索を重要視しないものであり、作品への十分な洞察となっているとは言い難いと考えられる。特に、作中において中国の国籍に入った日本人女性と日中混血児の娘を、ヒロインとして配置しなければならない理由こそが、『北方行』読解の重要な課題だといえる。

『北方行』の第二篇のストーリーは、友人の追悼式に参加した白夫人によるその場での回想から始まり、主に白夫人母娘を中心に展開している。白夫人の回想では、富豪の息子である白雄文は、20年前に東京のある私立大学へ留学し、前川柳子（白夫人）の家に下宿していた。当時、まだ15歳の前川柳子は、学校で「あなたの家に支那人があるのね」と言われた為、「支那人で、間が抜けてゐる」という理由で、白雄文に近づこうとしなかったが、その後、彼女は白雄文に対して穏やかで寛容な愛情を抱き始めた。さらに、クリスチャンの家庭で育ってきた前川柳子は、白雄文に聖書を与え、教会で洗礼も受けさせた。親戚からの反対を押し切った二人がようやく結婚し、白夫人（白柳子）となった前川柳子は、白雄文との間に長女の麗美、次女の英美と、未子の秀文をもうけた。その後、二人は中国で新しい生活を始めたが、ほどなく白雄文が他界し、後には白夫人と三人の子だけが北平（当時の呼び名は「北京」である）に残されることになった。

『北方行』の第二篇においては、白夫人母娘の日常が淡々と描かれつつも、白夫人と英美のそれぞれの視点から感じ取った自らのアイデンティティーの問題が潜んでいる。まず、白夫人の視点から考察を試みる。七年前、彼女は夫がなくなった際に、財産整理等の作業のために夫の故郷・西安へ赴き、姑と対面した。白雄文の遺骨を前にした息子に先立たれた母親と夫に死なれた妻、この二人の異国人は手を執りあつて涙を流しながらも、白夫人は、姑に対してどうしても心から同じ悲しみの気持ちの中で、溶け合うことができないことを感じていた。この原因について、白夫人は次のように分析する。

彼女は姑を出来るだけ敬愛しようと力めてみたにも係らず、やはりなほ彼女の心中には一点の傲岸さが姑を軽蔑し、姑との共鳴を妨げようとしてゐるのを彼女は発見しなければならなかった。それは決して無智や無教育への軽蔑ではなかった。

そ[の軽蔑]は明らか——彼女にはさう認めるのが辛くはあったが——人種的なそれに違ひなかった。人種？彼女はたしかに中国人になってゐる筈だった。が、十五年間の懸命な意志的な努力にも係らず——それは確かに苦しい努力だった。それは彼女自身の生来の[強い]自尊心に対してばかりではなく、同時に日本人の中に浸みこんでゐる支那人軽蔑に対する二重の闘ひだったから。その努力のために、彼女は在留日本人の支那人に対する偏見を、どんなに女らしくない言葉で以て揶揄し嘲笑したことであらう。——そして、今はこの姑とも、不自由ながら[も]（西安と北京とではまるで言葉が違ってゐたから）同じ国語で話が出来るやうになってゐながら、やはり彼女はまだこの愚かしい感情をどうすることも出来ないでゐる。今、姑と一つの感情に溶込むことを妨げてゐるものは、姑への嫉妬でも、なく、又自分もあと廿年寡婦生活を続けたら、この姑のやうになるであらうといふ不安でもなく、たゞ、この様な無智な一支那婦人と手を執合つて同じ気持ちに浸らうとしてゐる自分自身の位置の滑稽さ、そのものかも知れないのである。（『中島敦全集 2』 p.150-151）

上述したように、白夫人が持つ姑への軽蔑とは、相手の外形や教育レベルに対するものではなく、人種的相違に基づく優越感から生じるものなのである。この＜人種的相違に基づく優越感＞の問題は、第一篇の＜三造物語＞からも読み取れるが、＜三造物語＞の場合は、西洋人（トムソン）の前で劣位に立たされる日本人（三造）の人物像が描かれている。これに対して、＜白夫人母娘の物語＞の場合は、中国人（白夫人の姑）の前に立つ日本人（白夫人）は、西洋人に対する人種的劣位が人種的優位へと逆転する。つまり、『北方行』においては＜西洋人→日本人→中国人＞という構図が成立しており、このなかに共在する劣等感と優越感との交錯がこの作品の底流をなすライト・モチーフとなっている。

『北方行』を創作するにあたって、中島敦が国家と人種の問題によつてもたらされたアイデンティティーの問題に着目したことは、上述の二重構造の人種的偏見からもよく読み取れよう。中国国籍を持つ白夫人と日中混血児の娘たちが、ヒロインとして『北方行』の物語に配置されたのも、異なる国家と人種の狭間で揺らいでいる人々のアイデンティティーに対する作者の思索と関心があったためである。

さて、ここでもう一度白夫人の話に戻り、彼女の国家と人種に対する認識変化<sup>17</sup>に注目したい。二十数年前、白夫人は白文雄との結婚を両親に認めてもらうため、「愛には国籍がない」と意気揚々と説いた。日本生まれ日本育ちの彼女は、結婚後に中国の国籍を取得し、日本人同胞の前で中国の事情を代弁したりもする。この表現から、彼女が如何に中国人と



してのアイデンティティーに執着していたのかに気がつく。しかし、二十数年の中国での暮らしの中で、白夫人は自らのアイデンティティー危機に陥った。例えば、国籍を変えたとはいえ、正真正銘の日本人である彼女は、「椿」といふ字の発音も出来ない自分」が、中国人でも日本人でもないように感じる。クリスチャンである彼女にとって、たとえ現在正式な国籍を持っていたとしても、本当の意味における国籍を有していない者の魂は、一体どのような目に遭ってしまうのか、と大きな不安に苛まれる事も、一度や二度ではなかった。結婚当時、国籍など馬鹿げたことだと思った白夫人だが、今となっては彼女は国籍に起因する不安に捉えられるのである。

白夫人にとって、国籍を変えるという行為自体は容易いことかもしれないが、その国籍問題の背後に潜む人種的・文化的アイデンティティーは、そう簡単に変更できるものではない。「椿」という文字が読めなくなった自分に対して感じた恐怖感は、単に一つや二つの文字の読みを忘れてしまうという問題ではなく、日本語ということばに代表される、日本人としてのアイデンティティーが失われることに対するものだと考えられる。言い換えると、ことばによって構築されてきた自分の人種的・文化的「位置」(または、「優位」)を失うことこそ、白夫人が本当に恐れているものなのである。

次に、ことばとアイデンティティーの問題について、娘の英米の視点から見てみよう。英米の場合は、ことばの混乱によってもたらされるアイデンティティー問題を、白夫人以上に大きなものとして抱えている。混血児でバイリンガルの人であれば、逃げられない運命かもしれないが、英米は、二つの国・二つの人種・二つのことばの間でただ自我の激しい揺れ動きを体験するより他にない。

一体自分はいつも支那語で、ものを考えてゐるのだろうか？それとも日本語でだろうか？父親のゐた頃から、彼女の家庭では殆ど日本語ばかり使ってたが、彼女と、外の友達との会話はみんな支那語[この国語、それ自身さへ、ある時には日本流に支那語であり、あるときは、支那流に中国語、と彼女の頭の中で呼ばれるのであった。]一体、自分は、いつも、どちらで、ものを考へてゐるのだろうか？例へば、今、かうして、「どちらで考へてゐるだらう」と考へてゐるのは、どちらの国語でだらうか？支那語かしら。さうぢゃない。日本語だわ。けれど、これは私が今自家にゐるからで、外で、お友達の仲間にて、同じことを考へるとしたら、支那語で考へるに違ひない。きっと。彼女は、さういふ場合を想像して見ようとした。が、どうもハッキリしなかった。その場合になって見なければ分らない気がした。「今考へてゐるこの考へはどちらだらう？今のは？」と、思考しながら、

思考してゐる国語自身を考察しようとしてゐる中に、頭の中が何だか無限に内へ、うちへと折畳まれて行くやうな気がして、何が何だか解らなくなってきた。彼女は次第に考へる気力を失ひやがて快い睡眠の昏冥に陥って行くのであった。(『中島敦全集 2』 p.145-146)

上記の英美にとっての「支那語」と「日本語」は、それぞれ父（中国）のことばと母（日本）のことばを意味し、かならずしも明瞭に別のものとして分かたれることがないまま、絡み合っている「ハッキリ」しないことばとして捉えられている。本来なら、国語と母語の統一性によって構築されるはずのアイデンティティーの同一性が、英美の場合においては二つのことばの混乱ゆえに失われている。一般的に考えるならば、中国人が中国語を話し、日本人が日本語を話すのは当たり前のことであろう。日本語を話す人々は日本人の集団に入り、中国語を話す人々は中国人の集団に入るはずである。しかし、英美の場合は、一見すると二つの集団ともに入っているように見えるが、実はいずれにも入っていない。

さらに、英美は父親がいた頃、家庭では殆ど日本語ばかり使っていたが、外の友達との会話はすべて中国語であった。また、白夫人がすでに中国籍に入っていたことから考えると、英美も中国の国籍を持っていたはずだと推測できよう。英美にとっての日本語とは、「うちのことば」で、「母語」であり、一方、中国語は「外のことば」で、「国語」である。母語で話せるのは家庭内だけで、一歩社会に出たら、母語とは違う国語での生活者となる。これは、英美と白夫人に共通する問題であり、母語と国語の不一致から生まれてきた人種的・文化的アイデンティティーをめぐるジレンマでもある。

ことばと国家（人種的・文化的アイデンティティー、または帰属意識ともいえる）について、村田雄二郎はこう語っている。

ことばと国家のこうした結びつきを、ひとびとは日常あまり疑うことなく暮らしている。ことばと国家あるいは民族文化の間には、自然で強固な紐帯が存在しているという考え方も根強くある。日本人なら日本語を話すのが当然だし、日本人というのは日本語を話すひとびとの集団なのだ、というように。ここには、特定のことばが特定の集団（国家や民族）の集合意識（アイデンティティ）を構成するという前提がある。(村田雄二郎「序 漢字圏の言語」<sup>18)</sup>

確かに、ことばは民族や国家のような特定の集団をつくり、言語共同体という集合意識を構成している。ある特定のことばと、それを共用する言語共同体との関係こそが、人間

の集団形成にとって根源的であり自然である。だが、ことばと民族や国家の結びつきが、必然的なものだと一般的に考えるようになったのは近代以降のことである。近代以前の時期には、母語という概念はすでに存在していたが、国語という言葉の意識はあまり一般に共有されていなかった。母語は民族や国家との関係を持たなくても存在し、親と子との純粋な個人関係によって生まれてきたことばである。

一方、国語は「母国のことば、すなわち国語に母のイメージを乗せた煽情的でいかがわしい造語」<sup>19</sup>であり、国家を念頭に置いた、より近代的なことばである。その国語は、のちに学校教育やマスメディアを通じて普及されるようになった。言い換えると、母語は国家の境界線を見捨てることのできるが、国語は常に国家主義や民族主義と絡み合いながら存在している。

日本における近代国語の父とも呼ばれる上田万年（1867-1937）は、日清戦争直後に国語としての日本語の重要性を講演で次のように訴えた。

言語はこれを話す人民に取りては、恰も其血液が肉体上の同胞を示すが如く、精神上の同胞を示すものにして、之を日本国語にたとへていへば、日本語は日本人の精神的血液なりといひつべし。日本の国体は、あの精神的血液にて主として維持せられ、日本の人種はあの最もよき最も永く保存せらるべき鎖の為に散乱せざるなり。（「国語と国家と」<sup>20</sup>）

上田万年は、ドイツ・ロマン派の口振りを借用して、日本語を「日本人の精神的血液なり」と位置づけ、日本人という民族を作ったのが日本語という「国語」だと主張する。日清戦争が重要な転換点となり、19世紀末の日本で、「国語」という新たなことばの規範意識が成立した。近代国家の形成において、「国民」の概念の創出は必要不可欠であり、「規範的国民文化の境界を画定するための言語的な装置」<sup>21</sup>（村田雄二郎）として、「国語」に関する時代的な要請が生まれてきた。また、「面識のない人々に「国民」レベルでの一体性を認識させる」<sup>22</sup>（安田敏朗）ために、日本語は日本国民としての自覚を促し、その一体性を認識させる手段の一つとなった。さらに、子安宣邦の言葉を借りて言うならば、「「国語」を定義することはそもそも、「国語」という国家制度的な概念にかかわる政治的な言説」<sup>23</sup>なのである。よって、国語としての日本語は、国家、民族とのつながりを断ち切って純粋に個人との関係でとらえることが不可能な言語だといえる。

以上のように、ここまで〈白夫人母娘の物語〉に潜むことばとアイデンティティーの問題を整理してきた。この作業を通して浮上してきたのは、白夫人と英米が自らのことばへ

の懷疑を通して、自分のアイデンティティーの同一性をめぐる苦悶を告白していることで、ことばをめぐる認識の方法が、苦悩に満ちた自己存在を形成させる根源になっていることを示している<sup>24</sup>。

#### 第四節 『北方行』の問題点と執筆の事情との関連

『北方行』の舞台であり、東洋の都とも呼ばれる「北平」（または「北京」）は、日露戦争後の満州占領や、満州事変などの歴史的イベントが、新聞や雑誌などで報道されることによって、広く日本人に知られるようになった。その流れの中で、日本人知識人が直接に現地を足で踏むことによって書かれた記事や作品が数多く現存している。例えば、阿部知二は、北平滞在（1935年9月1日～同年9月13日）の経験に基づき、「隣国の文化——北平の印象から」という記事を『読売新聞』（1935年10月26日）に掲載し、その中において「私が書こうとするのは、その「東洋の故郷」ともいふべき支那と、この吾々の日本とに、西洋の文化がそれぞれどのやうな侵入のしかたをしてゐるかについての（前もつて断つたやうに）、旅行記的な印象だ」と述べ、中国の伝統や風習を再発見し、そこに伝統と現代の融和を感じたと語っている。ほかにも、徳富蘇峰『支那漫遊記』（民友社、1918年6月）、中野江漢『北京繁昌記』（支那風物研究会、1922年）、芥川龍之介『支那遊記』（改造社、1925年11月）、服部宇之吉『北京籠城日記』（服部宇之吉刊、1926年7月）、清水安三『朝陽門外』（朝日新聞社、1939年4月）、奥野信太郎『隨筆北京』（第一書房、1940年3月）などがある。当時、日本語の北平関連言説には、上述したやうな、自らの現地滞在体験を素材としながら、さまざまな角度から都市像や現地の人物像を抉り出すといった旅行記のやうなものも多く見られた。

一方、中島文学のなかで、外地問題への関心が伏線として機能している作品は少なくないが、『北方行』の場合は、作者自身の外地体験を素材とする今までの外地作品とは異なり、物語の舞台である北平へ中島が実際に足を運んだことはない<sup>25</sup>。この作品においては、北平という都市を表象化することなく、動乱の中原大戦の戦局の断片的なものが、作中人物の生活をリアルに描き出すための役割を果たしている。また、作品に登場する現地の中国人については、その内面の深部まで描き出すことはなく、彼らはひたすら時局を語るための補助役として作品中に現れている。こうした点は『北方行』の創作上の欠点と言わざるを得ないが、この作品の特徴の一つとして指摘される「アクチュアリティーというか、作者中島敦の現代史への関心の深さ」<sup>26</sup>と作品の成立との関連性を見逃してはいけないと考えている。

中島敦は東京帝国大学文学部国文科最終学年であった1932年秋、朝日新聞社の入社試験を受け身体検査で不合格となったが、この大陸各地の報道が集約される朝日新聞社への受験からも中島の中国情勢への関心の強さを裏付けることができよう<sup>27</sup>。また、『北方行』第四篇執筆中と見られる1935年8月7日に、滞在先の静岡・御殿場からの妻・中島タカ宛葉書に、「朝日新聞はみんなとっておいてくれ。(殊に夕刊は、)使ふのなら七月の分をつかってくれ。」と、わざわざ書き送っている。『北方行』の素材となった出来事の起きた1930年には、『東京朝日新聞』は中国情勢に多くの紙面を割き、ほぼ毎日のように継続的に報道していたためであろう。この点から、この作品における時代性に関わる描写は、主に新聞の報道記事などを頼りにしていると想定される。当時、日本在住の中島敦が、中国情勢の限られた情報の中で『北方行』のテキスト創作を試みたことには、相当な困難があったと推測できるが、その作品——特に、中原大戦をめぐる描写——に関する問題点を見逃してはいけない。また、中島はなぜあえて自らの実体験と関わらない北平を作品の舞台として設定し、昭和初期の中国の大事件である中原大戦に注目したのか、という事情を考究することも非常に重要な意味を持つと考えている。

まず、作中の三造は、自らの北平行の理由の一つについて、こう語っている。

日本や日本人の姿を眺めたいと思ったら、やはりかうして日本を離れて見る必要がありますね。かうやって此方へ来て遠くから眺めて見てはじめて、日本の良い所も悪い所もハッキリしてくるやうな気がしますね。(第四篇、『中島敦全集2』p.190)

『北方行』における北平の都市像や中国人像の描写不足という欠点は、上述したように、まさに中島敦が「北平」という場を借りて、主要な登場人物の日本人キャラクターをめぐるアイデンティティ問題を考察しようとする、中島の創作意図に起因しているのではないかと考えられる。

周知のように、中島敦は大正時代に少年期を送り、激動する昭和初期に成長した世代である。中島が生きていた近代日本を語る時、中国問題は避けては通れない問題であった。歴史を振り返ってみれば、中国問題への関心と注目から「脱亜入欧」論が生まれ、「アジア主義」もまた生み出された。つまり、近代日本にとっての中国問題は、ほとんど運命的な問題だといっても過言ではなかった。特に、『北方行』執筆の1930年代は、近代日中関係史上最悪の時代である。政治から経済、社会、文化、思想に至るまで、近代日本はこの最悪と言われる日中関係を決してまぬかれえなかったといってもいい。この時代は、満州国建国(1932年)を契機とする日本の中国大陸進出を強烈に推し進める時期であり、新たな

帝国主義化の段階を迎えるにつれ、中国問題への関心が次第に高まってゆく段階でもあった。

こうした中での中原大戦は、深刻な不況下にあった中国社会に様々な影響をもたらした。中原大戦が勃発したその年に、『東京朝日新聞』（1930年8月20日）には「支那どこに行く」（根岸侑）という文章が掲載された。

支那どこにゆく。世界の重大な問題である。過去は暫くおき最近国民党が国民革命を旗印として十余年にわたる内乱を平定し、新政府を南京に創立するや否や、北方諸将は国民党の左右両派と呼応し、政府主席蒋介石の独裁の罪を鳴らして兵を挙げ、今や北平に新政府を組織せんとして居る。南北の大軍中原に対抗せる空虚に乘じ、国民党から駆逐せられた共産党は南支那に蜂起し、その攻略する所ソヴェート政権を建立し、いはゆるブルジョアジー帝国主義者を殺りくする。利害関係を有する列国はあるひは国民政府に抗議しあるひは自衛手段に出でんとし、面倒な国際問題を引起すべき憂が生じた。今や支那の形勢はこんとんとしてその落つく先が分らなくなって仕舞った。支那の前途はどうなるだらうか、この際大いに研究する必要あると信ずる。（略）

現在では、中原大戦が中国人による内戦と位置づけられているが、1930年代においては、この大戦を含む中国国民革命と今後の行方は、その時既に中国が抱えていた国内問題のみならず、日本やアジア全体にとっての重要な問題でもあると認識されていた。さらに、中原大戦勃発後の翌年に、中村大尉事件（6月）や満州事変（9月）なども発生し、日中関係はますます険悪化していた。

中島敦が中原大戦を『北方行』の時代背景として設定したのは、彼自身が中原大戦を重要視していた証拠であるが、作品においては中原大戦の全貌を取り込まず、「一九三〇年、夏[の終り]のことで、南京政府と北方の軍閥との間の抗争がその頂点に達しようとしてみた」頃から始まり、三造が日記に「九月十日、晴」（第五篇）と書きつけるまで、テキスト内時間の現在時を展開させていく。そして、作品中で、中原大戦に関する記述は、第三篇までは断片的に情景描写や人々の会話に現れ、第四篇後半では語り手によって解説される。特に、第四篇においては、「北伐完全後、軍閥の再生を防ぐため裁兵に着手すべしてふ名の下に、実は地盤協定を目的として、蒋介石、閻錫山、馮玉祥以下[が]南京に集って編遣会議を開いた。」と、中原大戦発生の主因から語り始められる。歴史上の北伐（1928年6月4日北京入城、6月20日北京を北平に改称）は、中国の政治的統一という側面から見ると一定の

前進があったが、しかしそれは蒋介石と国民党にとって、むしろ完全なものではなかった。国民政府は軍閥混合的な色彩の政府であり、中国国民党の立場は非常に弱いものであった。

これに対して蒋介石は、中国国民党および自己の権力を強大化させるため、1929年1月に国軍の整理（裁軍問題、国民党代表選考の偏向、改組派・広西派の除名など）を開始した。旧軍閥の兵士を削減することにより、軍閥の影響力を失わせ、蒋介石側の勢力の巻き返しを図ろうとした。北伐に協力した軍閥は危機感を覚え、蒋介石に対して、次々と兵を起し、さらに北平に北方政府を樹立すると、更なる戦乱が繰り返された。こうした中で、旧広西系軍閥の李宗仁・白崇禧らが反蔣の軍を興したが、間もなく敗北した。これと踵を接して開始されたのは旧国民軍系馮玉祥の反乱であった。それがさらに発展して、閻錫山・李宗仁、最後には広東の張發奎らをも結集させ、いわゆる中原大戦へと発展し、蒋介石政権最大の危機を醸成していった。

『北方行』における中原大戦の描写は、「[かうして、九月の初めには]蘭封、周家口、臨潁から襄城・魯山に至る東西二百哩の戦線に互って、戦雲は漸く急を告げようとしてゐる」ところに止まっている。その後の歴史——例えば、張作霖の爆殺後、易幟を表明して蒋介石への接近を深め、その帰趨が注目されていた張学良が1930年9月18日に「維護和平」という通電を出し、これによって、中原大戦は事実上の終結を迎えた——などに関して一切提起されていない。また、三造の来京を祝うため、白夫人の宅で開かれた歓迎パーティーでは、数人の日本人と中国人が、時局をめぐって会話を交わす場面が描かれている。地方の軍閥の支配の下にいる農民の生存状況から、中央軍の様子や共産軍の台頭などまで、かなり幅広い会話であったにも関わらず、そこでも登場人物の内心の深部まで踏み込むことなく、中原大戦を民族の問題として捉える視点は希薄であった。

つまり『北方行』における時代背景と物語の舞台については、断片的にしか描かれておらず、特に、中原大戦中の北平の都市像を究明しようとするのは全くと言ってよい程になかったのである。また、三造を「北京から満洲の方を旅行してこようと」（第一篇 四）させる中島敦のなかには、おそらく満州事変（1931年）や満州国建国（1932年）直前の騒然たる中国東北部を舞台とする創作計画があったに違いない。

次に、管見の限りでは未だ指摘されていないことだが、『北方行』の執筆の裏には伯父の中島端（通称端蔵、号斗南）からの影響がある。中島敦と中島端の二人は、ともに同じ幼少期からの秀才であり、豊富な漢文学の知識の持ち主でもある。これに加えて、経済的には殆ど他人の援助を受けながらも、長年中国大陸に滞在していた中島端と、病弱な体質に苦しめられたにもかかわらず、朝鮮半島、中国大陸や南洋など、頻りに外地に足を運んでいた中島敦とは、人一倍エキゾチックなものが好きであるという側面でも類似しており、

生まれつきの「彷徨者魂」と「彷徨を好む気質」を持っていたのは言うまでもない。

また、中島端は、明治末期から昭和初期にかけて専ら中国問題に注目し、中国に長く渡って漢学者と交流した。遺稿『斗南存稿』<sup>28</sup>（1932年刊）が文求堂書店より上梓された時、その序文を書いたのは「清末の碩儒」の羅振玉<sup>29</sup>だったという点からみれば、中島端の当時の中国人学者や要人との交流の幅が、かなり広いものであったことがわかる。さらに、その生涯において家庭を持たなかった中島端は、何人かの甥や姪たちのなかでも特に中島敦のことを可愛がっていた。二人が一緒に過ごす時、中島端は「その頃支那からやって来た天才的な少年棋士のこと。新聞将棋のこと。日本の漢詩人のこと。支那の政局のこと。（略）共産主義のこと（略）」をめぐって、この甥に話しかけた。そして、病気で倒れて入院した中島端は、中島敦に「新聞の支那時局に関する所」を読ませてはじっと聞いていた、というエピソードが中島端をモデルにして書かれた作品『斗南先生』<sup>30</sup>に記されている。

一方、中島敦が多くの親近者の中で、ただ一人——伯父の中島端——のために、わざわざ彼を主人公にして作品まで仕上げたのには、中島敦自身にとっての中島端が鏡のような存在のためだったといえる。また、1942年7月15日、第一創作集『光と風と夢』を筑摩書店より刊行した際に、『斗南先生』の最終部に付記文を加えた形で収録した。1942年は中島敦が作家として日本文壇にデビューした年である。中島敦が『斗南先生』の執筆の10年後に、自らの初期作品の中から、『斗南先生』のみを選出して収録したのは、彼自身がこの作品を重要視している証拠なのである。

『斗南先生』は「昭和七年の頃、別に創作作品のつもりとしてではなく、あくまでも一つの私記として書かれたもの」であり、さらに原稿の欄外に「昭和八年九月十六日夜十二時半」とあるように、1932年に執筆しはじめ、1933年に初稿が完成したかと推測できる。さらには、『斗南先生』の初稿完成とほぼ同時期に、『北方行』の執筆にも着手している。1933年1月23日、同じ漢学者である伯父・中島竦からの依頼を受けた中島敦は、中島端の『斗南存稿』と祖父・中島撫山の『演孔堂詩文』（上・下）を当時の東京帝国大学図書館に寄贈した。これに関して、『斗南先生』の第一篇に詳細に記されている。

彼（中島敦——筆者）は、此の書物を、大学と高等学校の図書館へ納めに行くやうに、家人から頼まれてゐた。けれども、自分の伯父の著書を——それも全然無名の一漢詩客に過ぎなかった伯父の詩文集を、堂々と図書館へ持込むことについて、多分の恥づかしさを覚えないわけに行かなかった。三造は躊躇を重ねて、容易に持って行かなかった。そして、毎日机の上でひろげては繰返し眺めてゐた。読んで行く中に、狷介にして善く罵り、人をゆるすことを知らなかった伯父の姿



が鮮やかに浮かんで来るのである。(『中島敦全集 1』 p.42)

下線部に示されたように、当時『斗南先生』に着手する前には、『斗南存稿』を繙くのが中島敦の日課となっていた。これに、感銘を受けた中島敦は、伯父を偲ぶために『斗南先生』を書き、さらに、『北方行』の執筆に取り組みはじめたのである。

中島端と中島敦が、それぞれの作品を書き下ろした時期には、三十年近くの隔りがあるとはいえ両者とも中国情勢が激変し、日本がその対応に追われる時代に生きていたのである<sup>31</sup>。中島敦は、それまで実体験のある外地をしか描かないという創作の「手法」を破り、伯父・中島端がなくなったその年（1930年）の「北平」を作品の舞台として設定し、中原大戦の戦局に多大な関心を示したことは、熱狂的「支那通」とも言える中島端から受けた影響がそれだけ大きいものであったからかもしれない。

作品の題名のなかの「北方」は単なる「北平」のことであるのみならず、「中国東北部」をも指しているのではないかと考えられる。だが、『北方行』が未完のままに残されたこともあり、中島敦が1930年の〈昭和の中国〉に関してどこまで書くつもりであったのかは、今となっては知る由もなく、読者の推測に任せるしかない。

## 第五節 終わりに

本章は、中島敦の未完の作品『北方行』を研究対象として、主要な登場人物である三造と白夫人母娘をめぐるアイデンティティーの問題を解明し、その次に、その作品の問題点や作品執筆と中島端との関係への分析を試みたものである。

まず、作品の主題と内容を詳細に分析・考察した結果、『プールの傍で』『北方行』『狼疾記』が同じ〈三造物語〉の系譜に属していることが明白となった。これらの「三造像」の一番の共通点は、アイデンティティーの探求である。実際、中島文学全体を俯瞰すれば、アイデンティティーという主題が作品すべてに通底している。ただ、〈三造物語〉以前の作品、とりわけ初期習作（『下田の女』『ある生活』）においては、青春期の自我に関する曖昧な探求にも作品テーマとしての着目点が置かれており、私小説的手法が多用されている。また、文学的完成度に欠けるところもあり、ただの身辺小説になってしまっているのが憾みでもある。

次に、『巡査の居る風景』『D市七月叙景（一）』で、中島敦は初めて外地（朝鮮、大連）に注目し、異民族のアイデンティティー問題の究明を試みたが、外地にいる日本人のアイデンティティー問題に言及した作品は〈三造物語〉が最初である。〈三造物語〉の三作に

においては、肉体と精神の二元論的問題の探求が書かれるが、『北方行』とその以降の作品には、異なる国家や人種に直面することで感じ取った、自らのアイデンティティーへの不安が読み取れる。こうした主人公の造形の特徴は、後期作品の『南島譚』『環礁』『李陵』などからも同様に読み取れるが、その起源は<三造物語>にあると言ってもよいだろう。ここでは、中国と日本の境界の狭間に生きながら動揺しつつある、中国国籍を持つ日本人の白夫人と日中混血児の娘について、彼女たちのアイデンティティーに関する煩悶の根底に存在したのは、そのアイデンティティー形成と密接につながっている言葉の混乱であったのだと論じた。ことばと自我喪失との関連性に関しては、中島敦は「狼疾記」のなかですでに言及している。例えば、中学生だった三造は、<字>というものが変だと思い始める。

その字を一部分一部分に分解しながら、一体此の字はこれで正しいのかと考え出すと、次第にそれが怪しくなって来て、段々と、其の必然性が失はれて行くと感じられるやうに、彼（注：三造——筆者）の周囲のものは気を付けて見れば見る程、不確かな存在に思はれてならなかった。（『中島敦全集 1』 p.407）

こうした文字から生じてきた異常な感覚は、物事の非存在感、世界の喪失感、ひいては現実そのものの喪失感へと連続してゆくに相違ない。一方で、<白夫人母娘の物語>の場合には、ただの文字自体の問題のみならず、「国語」（中国語）と「母語」（日本語）の混在によってもたらされた文化や人種の問題が物語られている。こうして、決して「平等」ではない二つの言語の狭間にあえぐ主人公像は、その後の『虎狩』『マリヤン』『李陵』のキャラクターの造形にも共通しているが、その最初の試みは『北方行』にあると考える。

最後に、今まで指摘されていなかった伯父の中島端と『北方行』執筆との関係の究明を試みた。中島敦が少年時代から、「支那通」である中島端に深く影響をうけてきたという事実は『斗南先生』からはっきり読み取ることができる。中島敦があえて実体験のない北平を物語の舞台として設定したのには、当時の激変する中国の現代史への関心の故のみならず、親近者の中島端から受けた様々な影響のためでもあると考えられる。ただし、中原大戦であれ、北平の都市像であれ、中島敦が断片的にしかその姿を描けなかったことは、この作品の欠点だと言わざるを得ない。『北方行』が中島文学全体にいかなる意味を持つかに関しては、虚構小説で未完であるという限界があり、更なる推敲の余地があると仮定しても、『北方行』はやはり「昭和の中国」の一側面を描き出そうとする試みの点では評価されるべきだと考える。特に、初期作品の底流を成す、自己の存在意識とその解明を主眼にする存在論などに基づく過剰な自己分析、『北方行』以降の作品から読み取れなくなったのは、

明白な事実である。『北方行』を創作の転機として、中島敦はその後、新たな創作の道を切り開いたといえる。

注：

<sup>1</sup> 北京の中華民国時代（1930～1949）の呼称。

<sup>2</sup> 『北方行』の執筆時期を推測させる手掛りについては諸説あるが、ここでは「第一は、大学在学中からのものと推定される「ノート第一」で、ここには「北方行」の下書きに相当するものがかなり含まれている。第二は昭和8年の「手帳」で、余白に折毛伝吉の手記に通ずるメモ書きがあり（ただしこれは、「狼疾記」の三造の独白部分とも共通する）、この頃から書き始められていた、少なくとも構想があったと考えてよいであろう。第三は第四篇原稿末尾に記された「三五・八・十九」の脱稿日を示すと思われる数字である。少なくともこの日までに第四篇までが書きあげられていると見てよいであろう」と推定する勝又浩の「解題」（『中島敦全集2』「解題」筑摩書房、2001年12月、p.643）に従いたい。

<sup>3</sup> 「三造を、伝吉という、いわば中島自身の否定的要素を持った分身に対応させたこと、それ自体が無理であった。（田鍋幸信「中島敦の文学——「北方行」を中心に——」、日本大学法学部研究所『日本大学法学部 創立八十年記念論文集』所収、1967年12月、p.684-p.685）

<sup>4</sup> 『北方行』が万里の長城のような越すに越されぬ頑強な壁にぶつかって、雄図むなしく中断を余儀なくされた最大の原因は、一言でいえば、作者自身と登場人物が未分離のまま直結されすぎていることである。黒木三造の「芸術と世俗」あるいは「生への熱情」にせよ、折毛伝吉の「存在の不確かさ」あるいは「生への無関心」にせよ、そこには、中島敦自身の心のなかにふかく根をおろしている観念がそのまま投影され、その観念の図形がほぼ原形のまま敷きうつされているような傾きがある。（菅野昭正「忘れられた胎児——中島敦『北方行』——」、『梶井基次郎・中島敦 日本文学研究資料叢書』所収、有精堂、1978年1月、p.185；初出は『小説の現在』中央公論社、1974年7月）

<sup>5</sup> 「三造、伝吉という二人の双生児は、近づけば近づくほど、一人は他の一人の影とならざるを得ず、両口の「<sup>かい</sup>虻」が相争って自ら殺す如く、「北方行」は進展不可能となるのである。（中略）ほとんどの登場人物が、自意識過剰、自己分析癖の傾向をもち、（中略）行為の進展、躍動性に乏しい。このような方法では、動乱の中国で、実践を通して自己改造しようとする青年の行為は描き得ないであろう。」（濱川勝彦「北方行と『過去帳』と」、『中島敦の作品研究』所収、明治書院、1976年9月、p.46-47；初出は『国語国文』第39巻・第9号、1970年9月）

<sup>6</sup> 「単純ではないが、最も大きな理由はやはり、彼がその小説に盛り込もうとした問題があまりにも大きすぎて手にあまったのである。（中略）作家自身がかもてあまして「世界とは」「我とは」といった問題を主人公たちにふり当てて、しかもそんな人物たちをとおして更に、民族、国家、革命、戦争、言語、性等々といった大問題に取り組みせようというのだから、それは柱が細すぎるのに強引に大建築を建てるに等しい無謀な試みだったのである。」（勝又浩『中島敦の遍歴』筑摩書店、2004年10月、p.64）

<sup>7</sup> 「中国現代情勢の作品構想や執筆よりも急速で予測不可能な展開が執筆を断念させたのではないかという点である。（中略）日本国内の情報から満州事変を北京滞在者の視点から描くことは相当困難であった。」（渡邊ルリ「中島敦『北方行』に見る一九三〇年中原大戦下の中国——『北方行』序論——」、東大阪大学・東大阪大学短期大学部『教育研究紀要 第7号』所収、2010年3月、p.96）

<sup>8</sup> 布野栄一「中島敦の世界」、実方清編『日本現代小説の世界』所収、光明社、1969年10月、p.51

<sup>9</sup> 濱川勝彦『中島敦の作品研究』明治書院、1976年9月、p.39。「北方行」を評価する論説は他にもある。例えば、平林文雄は「中島敦『北方行』の研究——その成立と構成と撤退——「ノート第一」と『北方行』と『狼疾記』——」（高崎商科大学メディアセンター編集『高崎商科大学紀要』第27号、2012年12月、p.174）において、次のように述べる。

『北方行』は中絶した未完の作品ではあるが、それはその後の敦の作品制作の方向を決定したという意味で、敦にとってこの上もない重要な役割を果たした貴重な作品となったのである。」

<sup>10</sup> 伯父の中島端がモデルとなった『斗南先生』（1933年一次稿か）のなかにも、「三造」という人物が登場しているが、あくまでも語り手の役割を果たしているだけだと明記しておきたい。

<sup>11</sup> 戦前の日本語出版物には「満洲」という表記が主流であったが、戦後の漢字改革により、「洲」を廃して「州」に統一したため、ここでは「満洲」ではなく、「満州」を使うことにする。ただ、引用の場合は、原文に従いたい。

<sup>12</sup> 『中島敦全集別巻』筑摩書房、2002年5月、p.243

<sup>13</sup> 『中島敦全集別巻』筑摩書房、2002年5月、p.246-247

<sup>14</sup> 藤村猛「中島敦の作品に描かれた「女性」たち（1）——習作群から「北方行」を中心に——」（安田女子大学・安田女子短期大学編集『安田女子大学紀要』NO.31、2003年2月、p.15）

<sup>15</sup> 田鍋幸信「中島敦の文学——「北方行」を中心に——」（『日本大学法学部 創立八十年記念論文集』日本大学法学部研究所、1967年12月、p.671）

<sup>16</sup> 藤村猛「中島敦の作品に描かれた「女性」たち（1）——習作群から「北方行」を中心に——」（安田女子大学・安田女子短期大学編集『安田女子大学紀要』NO.31、2003年2月、p.24）

<sup>17</sup> 白夫人のその変化の理由に関して、中島敦の自伝作とも言われる「かめれおん日記」（1936年）の主人公「私」から示唆されることができるとも言われる。「博物の教師のくせに博物のことはろくに知らず、古い語学を嚙って見たり、哲学に近いものを漁って見たりする。それで、何一つ本当には自分のものにしてゐないだらしなさ。全くの所、私のもの見方といったって、どれだけ自分のほんものがあらうか。いそつぷの話に出て来るお洒落鴉。レヲパルディの羽を少し。ショペンハウエルの羽を少し。ルクレティウスの羽を少し。莊子や列子の羽を少し。モンテエニユの羽を少し。何といふ醜怪な鳥だ。」（『中島敦全集1』p.392-393）作中の「私」が『イソップ寓話』のあの有名な話「おしゃれなからす」のなかに出てくる「お洒落鴉」を例として挙げたのは、自分がアイデンティティー（つまり、「自我」）を持たない存在（「醜怪な鳥」）だとの認識を暗示するためだろうか。そして、「私」が自分の本来のアイデンティティーをなくしかけており、一生懸命他人を装っていることは、白夫人にも共通している。よって、これに気づいた彼女は、アイデンティティー危機に陥ったのではないかと考えられる。

<sup>18</sup> 村田雄二郎、C・ラマル編『漢字圏の近代——ことばと国家——』東京大学出版社、2005年9月、p.1

<sup>19</sup> 田中克彦『ことばと国家』岩波書店、1981年11月、p.41

<sup>20</sup> 上田万年『国語のため』富山房、1897年、p.12

<sup>21</sup> 村田雄二郎、C・ラマル編『漢字圏の近代——ことばと国家——』東京大学出版社、2005年9月、p.5

<sup>22</sup> 村田雄二郎、C・ラマル編『漢字圏の近代——ことばと国家——』東京大学出版社、2005年9月、p.39

<sup>23</sup> 子安宣邦『漢字論——不可避の他者』岩波書店、2003年5月、p.188

<sup>24</sup> これらの点については、橋本正志「中島敦「北方行」の方法——登場人物の言語認識を視座として」（『阪神近代文学研究』第6号、阪神近代文学会、2005年3月、p.80）に触発され、その考察を参考にした。

<sup>25</sup> 「中島敦年譜」（『中島敦全集別巻』筑摩書房、2002年）によると、中島敦が足を運んだことのある中国の都市は、年代順で並べると、旅順（1924年）、南満州（1925年）、大連（1932年）、杭州・蘇州・上海（1936年）となっている。

<sup>26</sup> 渡辺一民『中島敦論』みすず書房、2005年3月、p.39

<sup>27</sup> 渡邊ルリは「中島敦『北方行』に見る一九三〇年中原大戦下の中国——『北方行』序論——」（『教育研究紀要』第7号、東大阪大学・東大阪大学短期大学、2010年3月、p.106）において、似た観点に言及した。

<sup>28</sup> 中島端の著作には詩文集『斗南存稿』のほかに、『支那分割の運命』（1912年刊）、『近世外交史』（1891年刊）などがある。これらはいずれも彼自身の思想、価値観や日中関係への思索を知るための重要な資料である。例えば、『支那分割の運命』は現代の眼で見れば問題の多い書物だが、大正元年執筆を思えば、「其の論旨の概ね正鵠を得てゐることに」中島敦が驚かされたことがある。また、『斗南存稿』が出版される前に、中島端は雑誌『日本及日本人』（第592号、1912年10月）に「近視眼的支那観」を投稿した。「近視眼的支那観」のなかで、中島は「支那の事は、支那の安危にあらず、東亜全体の安危なり、また我が帝国の安危なり」と指摘しながら、複雑な国際情勢に直面する日本が持つ中国観は近視的で、修正すべきだと批判した。

<sup>29</sup> 羅振玉（1866-1940）、清末民初から満州国にかけて活躍した考古学者、教育者。皇帝文書の保存という功績がある一方で、満州国建国に関わったこともあり、現在の中国では人物的評価がわかれている。

<sup>30</sup> 『斗南先生』の構成と内容を簡単にいうと、この作品は六つの章と付記文によって成り立っており、1930年に亡くなった斗南先生の死を前にした約半年間の姿を描いたものである。また、二章から五章までは、1930年2月からのもので、斗南先生の病気から死までの内容であり、一章と六章はその二年後の1932年に、斗南先生の遺稿をめぐる語り手（「三造」＝中島敦）の思索が書かれている。そして、最終部の付記文として、それから十年後の1942年に、斗南先生への愛情を確認した語り手の思いである。この三つの時間はちょうど中島敦の高校時代、大学時代、作家時代と重なっている。

<sup>31</sup> 中島端は激動の時代に少年・青年時代を送っていて、明治と共に成長した世代である。1911年に辛亥革命が発生して清朝は倒れ、更に辛亥革命による中華民国建国も結果的には軍閥主導の北洋政府が支配する華北と中国国民党が支配する華南に分裂した。革命直前のロシアの外モンゴルの独立の策動、イギリスのチベット占領、フランスの雲南進駐などの動きは、革命後も止むことはなかった。ゆえに、欧米や日本の知識人の中には中国人は近代的な政治能力は持っておらず、中国情勢の混乱が長期化すれば自分たちの利権や在留自国民の安全も脅かされるという観点から、中国大陸を分割すべきであるという主張が現れるようになった。日本においてこうした議論の先駆をなしたと思われるのが、中島端の『支那分割の運命』である。この書は、まず袁世凱・孫逸仙の人物紹介に始まり、中国民族性への洞察から、日本の中国に対する同情を嘲笑し、一転して、当時の世界情勢、就中欧米列強の東亜侵略を指摘し、「今や支那分割の勢既に

---

成りて復動かすべからず。我が日本の之に対する、如何にせば可ならん。全く分割に與らざらんか。進みて分割に與らんか」と自ら設問したものである。『支那分割の運命』は日本人の大陸侵略の野心を煽り立てるものとして、当時の中国の人々の間で大きな影響を巻き起こしたが、その後、満蒙進出の動きが盛んになるにつれて満蒙を中国から分離して日本の勢力圏に置こうとする支那分割論が盛んになり、満洲事変や日中戦争と進展していく中で度々論じられるようになっていた。

付記：

「満州」「支那」といった名称は、日本の植民地支配との深い関わりのなかで使用されたもので、今日では不適切なものであるが、本章はあくまで歴史的用語という意味でのみ使用することにする。

## 第四章 日本植民地支配下の朝鮮物語

### ——『虎狩』をめぐる

#### 第一節 はじめに

『虎狩』(1934年)は、中島敦の思春期の一番多感な少年期の朝鮮滞在体験を小説化した作品であり、単行本『光と風と夢』(1942年7月15日、筑摩書房)の最初に収録されている。この作品は七章によって構成されている。語り手の日本人少年「私」が、父親の転職により京城(現・ソウル)の龍山小学校に転校し、そこで一人の同級生の朝鮮人少年「趙大煥」と知り合った。その経緯は、第二章から第五章にかけて詳細に書かれており、肝心な虎狩の話については、第一章と第六章で語られている。第七章においては、二人が十数年ぶりに東京で再会するシーンが描かれている。

『虎狩』は中島の初期作品とはいえ、早くから多くの評論家の目に止まっている。この作品について、最初に論評を出したのは瀬沼茂樹である。

文章こそ年令に比しすぐれているが、後年の完成度からいえば遠く及ばず、器用にまとめた感じがある<sup>1</sup>。(1964年)

瀬沼は、中島敦の後期作品との対比を行い、『虎狩』の完成度に異議を唱えながらも、初期作品として、「自己の存在をふくめて、人間存在の得体のわからぬものを暗示し、作者の志向を早くもしめしたもの」<sup>2</sup>だと評価する。この「存在性」という主題に賛成の意を表したのは、佐々木充と木村一信である。前者は、「記憶すらおのれの意のままではなく、何か見えざる巨きなものに支配されているとすれば、当然おのれも、その支配下にあるはずだ。「虎狩」の潜在化した根本主題は、こうした中島の存在論の遠心的な具象化である。」<sup>3</sup>と指摘し、『虎狩』の主題を存在論の問題に帰着する。後者は、当時中島の選びとった創作方法に注目し、「その最初の試みは、「斗南先生」においてうかがわれるが、端的に言えば、それは他者と自己との類縁・共通性を探ることによって自分とは何かを思索し、自らの生きる方向を把握しようとする主人公像の造型なのである。この方法は、素材を中国古典に得た作品、たとえば「山月記」や「弟子」「李陵」に至るまで踏襲され、中島文学の基本的パターンとなるものである。」<sup>4</sup>と述べ、自己属性の相対的位置づけと身近な他者の影響力への追求こそが中島文学の最も顕著な特徴だと分析する。ただし、これらの先行研究について、趙大煥専らを語り手の「私」にとっての対照的に引き立てた人物と位置付けて、「私」の「自

己追求者」的な気質を強調しすぎるという問題が提起される。

また、濱川勝彦は、中島敦の朝鮮人問題を扱った習作と比較しながら、『虎狩』では「私」という緩衝地帯があって、朝鮮人問題が表面に鋭くあらわれず、ヴェールにつつまれる<sup>5</sup>と評価し、『虎狩』から読み取れた朝鮮問題が表面化していると述べる。これに対して、山下真史は「中島敦は何故、趙の内面や朝鮮人問題に踏みこまない方法を選んだのか」を疑問視し、執筆当時の中島敦が抱いていた朝鮮（人）像について、「概念的な理解しか語って」おらず、「そしてまた同時に、自分は朝鮮人について概念的な理解しかできない、つまり半分しか分からないということも自覚したに違いない。その自覚が朝鮮人の内面に踏みこんで雄弁に語る方法を拒んだのである。」と反論する。ただし、『虎狩』から直接の社会批判が読み取れないという問題点に関しては、そもそも中島自身にプロレタリア文学作品を創作しようとする傾向が見られないことに加えて、当時の検閲制度への配慮のためでもあらうと考えられる<sup>6</sup>。実際、中島敦は朝鮮という時代的な「場」を借りて、友人へ思いを馳せつつも、作中の「私」の視線を通して、当時の朝鮮の実態を次第に浮き彫りにしてゆく。

本章ではまず、朝鮮で生活し朝鮮人の運命を生身に感じた「私」が見た日本統治下の政治、文化、言語の角逐と葛藤の場としての、植民地である朝鮮の一側面を見定めておきたい。次に『虎狩』において、中島敦が日本には棲息しない虎という異国趣味的な動物を作品に取り入れて、体験談としての虎狩りの場面を緻密に描写している点に着目する。日本と朝鮮におけるそれぞれの〈虎〉のイメージへの分析を織り交ぜながら、テキストの背後に潜む朝鮮事情を解説してみる。最後に、「私」と趙大煥の再会場面において、朝鮮語を母語とする趙大煥が、日本語で奇妙な間違いを起こしてしまうことをめぐって、〈言葉〉によってもたらされた記憶の混乱が意味するものを究明する。

## 第二節 「私」が見た日本植民地支配下の朝鮮の一側面

周知のように、1910年8月22日の「韓国併合ニ関スル条約」および同29日の「日韓併合に関する宣言」によって、朝鮮（当時の国号は大韓帝国）が日本の植民地とされた。日本の朝鮮植民地統治は、通常三期に分けられている。第一期は、「韓国併合ニ関スル条約」が法的に発効してから1919年の三一独立運動までの、いわゆる「武断統治期」である。これは、植民地化に反対する民族運動を弾圧するために、植民地支配の根幹に憲兵警察機構を置き、徹底した軍事的支配のもとで各方面での植民地統治の基礎をつくり、軍隊・警察による武力支配を遂行した時期である。第二期は、1931年までの、いわゆる「文化統治期」である。三一独立運動を契機にし、日本の朝鮮での統治方針は一気に「武断政治」から「文

化統治」に転向し、親日派育成・登用による民族分断、産米増殖計画による農民収奪、工業化による日本資本進出と民族産業抑圧を推し進めていた時期である。第三期は、戦争への動員、創氏改名などの「皇民化運動」による民族抹殺、戦時経済による収奪強化などが推進されていた1945年までの、いわゆる「大陸兵站基地化期」である。

その流れのなかで、日韓併合の直前の1909年に生まれた中島敦は、「宗主国の子弟として植民地で育った最初の世代」であり、「閉ざされた日本の社会に懐疑精神と異文化にかかわる新しい視点を持ちこんだ最初の人々」<sup>7</sup>のなかの一人でもある。三十六年間にわたる日本の植民地統治は、その後の韓国の社会と文化のあり方に広く深い影響を与えているが、中島敦が身近に体験できていたのはその一時期のみであり、この実体験が『虎狩』に色濃く投影されている。ただし、『虎狩』には、いくつかの時間設定の混乱が見出される。

作中において、「私」が趙大煥に誘われて「本町通りの三越」のギャラリーへ熱帯魚を鑑賞しに行くというシーンが描写されている。「本町通りの三越」とは、京城府本町1丁目52の2（現・ソウル特別市中区忠武路1街52の1）にあった京城三越支店のことである。その五階には展覧会場としての三越ギャラリーをはじめ、写真室、待合所、茶室、温室及び園芸用具売り場、稲荷神社などが設けられていた。その京城三越支店の歴史を遡ると、以下の通りである。

京城三越の創設も亦古いものである。伊藤博文公が統監の印綬を佩びて韓国に駐在せられた頃、時の三越呉服店専務日比翁助氏に出張所開設を懇請された結果、明治三十九年十月二十日、三越呉服店韓国京城出張員詰所として開店したと云ふのだから由緒も深い。当時に在っては、所長以下全員を合せて二十名に足らず、背負呉服の外廻りに或は狭隘な店舗に於ける陳列販売等に草分時代の辛酸を嘗めたものだが、日比氏の炯眼は狂はず店運は年と共に栄え、大正五年、大正十四年の二度の増改築に依り内容又遂次充実し、昭和四年九月には支店と改められたが、更に一段の躍進を企図し、昭和五年十月には、大京城の心臓部と云ふべき旧府庁舎跡七百三十坪余を買収し堂々たる新館を建築して之に移った。この一大飛躍は非常なるセンセーションを捲き起したものだが、爾来三年店運日に月に隆昌、成績益々良好にして、三越本支店の右翼に位してゐるのは欣ばしい次第である。（「京城三越の歴史」）<sup>8</sup>

以上の引用にあるように、京城三越は1906年に出張所という形で開設され、1916年と1925年二度の改築を経て、1929年に支店となり、さらに1930年に新館へ移った。京城三



越支店は、中島敦が朝鮮滞在を終えて東京に戻った 1926 年以降にできた京城のシンボルである。言い換えると、『虎狩』のなかの「京城三越支店」に関する描写は、中島敦の朝鮮滞在歴（1920-1926）からは直接生み出されないはずである。ただし、1932 年 8 月、中島敦は関東庁外交部翻訳課長から満州国執政府諮議となった叔父の比多吉を頼って大連、京城などを旅行した。その旅で彼が何を見て何を体験していたのかについては、作者の日記などの現存資料には記されていないため、必ずしも京城三越支店に足を運んだとは断言できないものの、その可能性も想定され、『虎狩』に京城三越支店が登場した背景には、この中島敦の 1932 年の京城旅行が潜んでいると推測できよう。

一方で、「中島敦年譜」（『中島敦全集別巻』筑摩書房、2002 年）に照らし合わせながら、作中の「私」と趙大煥との主要な関連事情を中島の朝鮮滞在歴の時間軸に沿って整理してみると、以下のようになる。

1920 年、「私」が趙大煥と知り合う。

1922 年、「私」と趙大煥二人とも同じ中学校に進学する。

1923 年、正月行事の虎狩を行う。

1925 年、冬の発火練習後、趙大煥は姿を消す。

1940 年か 1941 年、東京で趙大煥と再会する。

上記のように、「私」の趙大煥に関する記憶は、主に「文化統治期」期間中の 1920 年から 1925 年までの出来事である。従ってこの時系列を採ると、熱帯魚鑑賞という挿話は 20 年代前半に置かれることになり、そこでは「三越百貨店」は存在しないという齟齬をきたすことになる。さらに、1934 年の創作時点では、1940 年前後の再会は現実的に不可能であり、中島敦が創作した場面だと考えられる。こうした時間設定の混乱が『虎狩』の完成度を下げている一因になっているかもしれない。しかし逆にいえばこの作品には中島の朝鮮に対する様々な経験や思い出が雑多な形で盛り込まれており、作者が自分の目で見て体験し、感じた植民地支配下の朝鮮の一側面は、この二人の思い出の描写部分の行間から非常によく読み取れるのである。

『虎狩』のなかで、「私」と趙大煥の再会の場面を描く第七章を除き、ほかの章はいずれも二人の小学校から中学校までの出来事の描写に重点が置かれている。そして、二人の出会いについて、作中においては次のように書かれている。

趙と私とは小学校の五年の時から友達だった。その五年の二学期に私が内地か

ら龍山の小学校へ転校して行ったのだ。(中略)二人は同時に小学校を出、同時に京城の中学校に入学し、毎朝一緒に龍山から電車で通学することになった。(p.74)

これは、中島敦が父・中島田人の転職に伴い、1920年に静岡県浜松市浜松西尋常小学校から京城龍山公立尋常小学校に転入学し、その後の1922年に京城府公立京城中学校<sup>9</sup>に進学した事実と一致している。

ここで、注目したいのはテキストの裏に潜んでいる1922年という時点と京城中学校という場所である。まず、時点についてだが、前に述べた三つの植民地支配時期に合わせ、日本は朝鮮においてそれぞれの時期に対応して、「武断統治期」に第一次朝鮮教育令(1911年)、「文化統治期」に第二次朝鮮教育令(1922年)、「大陸兵站基地化期」に第三次朝鮮教育令(1938年)と第四次朝鮮教育令(1943年)の各朝鮮教育令を発令した。中島敦の年譜を合わせて考えると、「私」と趙大煥が中学校に進学した1922年とは、ちょうど第二次朝鮮教育令が勅令第19号として改定され施行された年(2月6日に公布、4月1日より施行)である。第二次朝鮮教育令の改定理由は、「内鮮共通ノ精神二期キ同一制度ノ下ニ施設ノ完整ヲ期スル」という朝鮮総督府の論告<sup>10</sup>によって明示された。これによって、理論の上では「国語ヲ常用スル」朝鮮人の内地人学校への入学が公認されるようになったが、実際には内地人学校に朝鮮人が入学することは極めて稀であった。

『虎狩』の物語の舞台の一つである、1909年5月に開校した京城居留民団立中学校を前身とした京城中学校の場合も、成績優秀な内地人生徒の多くがこの学校への入学を目指し、朝鮮の中学校の筆頭的存在であった。第二次朝鮮教育令が施行されてからは朝鮮人の入学が可能となったが、実際に内地人と机を並べて学習した朝鮮人の生徒が非常に少数であったことは下記の統計からも明らかである。

朝鮮総督府が編纂した『朝鮮諸学校一覧』(『日本植民地教育政策史料集成 朝鮮編』所収、竜溪書舎、1988年～1989年)によれば、1922年から1943年にかけて京城中学校には一学年平均4～6名、比率にして2～3%ほどの朝鮮人生徒が在籍していた。また、朝鮮全体からみれば、1922年の時点では、現地にある内地人中学校7校にいた朝鮮人生徒はわずか74名(2.4%)しかいなかった。こうした歴史事情は『虎狩』のなかにも確実に反映されている。語り手の「私」は、趙大煥から彼の名前が趙大煥であることを告げられた時、思わず聞き返したという一場面がある。その理由に関して、「私」はこう説明する。

朝鮮へ来たくせに、自分と同じ級に半島人がゐるといふことは、全く考へてもゐなかつたし、それに又その少年の様子はどう見ても半島人とは思へなかつたから

だ。(p.76)

実際、朝鮮人生徒が在学していたとはいえ、その数は本当に僅かであり、京城中学校と朝鮮人社会との繋がりも薄いものであったため、日本人の「私」が、自分は朝鮮人生徒と同じ学校にいる、ということさえ考えたことがないのも理解できよう。さらに、1927年入学のある京中卒業生は、朝鮮人クラスメートについて次のように述べている。

京城中学は日本人も朝鮮人も機会均等に受験することができた。だから私のクラス・メイトには幾人もの朝鮮人がいる。機会均等といっても日本の国語、歴史等は朝鮮人には甚だむづかしい。出題も意地悪く古文調のものが多く日本人にさえ難解だった。よほど優秀な朝鮮人でなければ合格できなかった。従って入学してきた朝鮮人は特別の人材であり頭脳も家庭もよく、経済的に恵まれた人ばかりであった<sup>11</sup>。(池尾勝巳「限りなく懐しい京城」)

『虎狩』のなかで、上述の事情を裏付ける描写が二箇所ある。

(1)

彼(趙大煥——筆者)は日本語が非常に巧みだった。それに、よく小説などを読んでみたので、植民地あたりの日本の少年達が聞いたこともないやうな江戸前の言葉さへ知ってみた位だ。で、一見して彼を半島人と見破ることは誰にも出来なかった。(p.74)

(2)

趙の父親は元来昔からの家柄の紳士で、韓国時代には相当な官吏をしてみたものらしい。さうして、職を辞した今も、いはゆる両班で、その経済的に豊かなことは息子の服装からでも分った。(p.89)

「半島人」の趙大煥が「内地人」の「私」とともに京城中学校へ進学できたのは、その一、彼が「頭脳も家庭もよく、経済的に恵まれた」、数少ない朝鮮人子弟のなかの一人であり、その二、第二次朝鮮教育令で朝鮮人の内地人中学校への入学が公認されるようになったからである、ことが上記の文章から読み取れる。

次に、『虎狩』の第三章から第五章までの物語の舞台である京城中学校の存在について考

察しておきたい。当時の京城府内の小学校卒業生について、龍山小学校の卒業生の多くが龍山中学校に進学するといった現状と違い、『虎狩』においては、趙大煥は龍山小学校を出た後に京城中学校に入ったとされている。1933年3月の統計によると、龍山小学校の卒業生（男子の部）のなかで、89人の龍山中学校進学者に対して、京城中学校進学者はわずか13人しかいなかった<sup>12</sup>。これは、京城中学校の不人気を意味しているのではなく、この学校の入学倍率が非常に高かったためである。

朝鮮随一の進学校として知られる京城中学校に関して、この学校の校歌は歌詞こそ違いますが、曲調は第一高等学校の「あと玉杯に花うけて」の節回しをそっくりそのまま使用していたことから、生徒たちはそれだけ一高に憧れていたことがうかがわれる。当時、「京城中学校→第一高等学校→東京帝国大学」が朝鮮随一のエリートコースと言われている。1924年に京城帝国大学予科が開設するまでに、京城中学校の卒業生はこのエリートコースに乗るために、日本国内の学校に進学する者が非常に多く、その内地志向は1924年以降も減退することはなかった。実際、『虎狩』の作者・中島敦もそのエリートコースを歩み、最終的に東京帝大に合格した朝鮮在住の日本人子弟のなかの一人である<sup>13</sup>。従って、『虎狩』のなかで、趙大煥が龍山中学校に入らず、「私」とともに京城中学校に進学したのは、おそらく内地人生徒のように、そのエリートコースを通して最終的に東京帝国大学受験を射程に入れていたと考えられる。

なお、朝鮮最初の内地人中学校である京城中学校の設立からみればわかるように、英国視察の経験を持つ初代校長隈本有尚（1860-1943）は、この学校の設立に関して「モデルを英国イートン校にとって国家の指導層後継者養成をめざす校格を据え」<sup>14</sup>たと述べ、学校教育が支配階層の後継人の育成に主眼を置いていた事実を明かしている。ある京城中学校の卒業生は、この在朝鮮「内地人」学校のことを次のように誇張して語っている。

京中は一千九百万の朝鮮民族に優越する立場の日本人の、いわば、異民族に対する支配階層の子弟教育機関、その意味では、東京の学習院以上に学習院的であった。かの剛骨、瀬木昱太郎先生が昂然と“京中は東京府立一中と学習院をあわせた学校じゃ”と揚言されたところである<sup>15</sup>。（花園一郎「あと京中、この比類なき中学」）

当時、外地にある内地人学校は一定の意味ですべてが「植民者養成所」だと言っても差し支えなく、朝鮮の場合はその中核にあったのが京城中学校に相違ない<sup>16</sup>。『虎狩』においては、こうした植民地意識が読み取れる場面が二箇所ある。一つは、趙大煥が上級生に睨

まれ、殴られた場所として描かれる「崇政殿」である。

学校裏の崇政殿といふ、昔の李王朝の宮殿址の前に引張られて、あはや殴られようとしたのを、折よく其処を生徒監が通りかかったために危く免れたのだといふ。  
(p.82、下線——筆者、下同)

崇政殿は1616年に創建されて、李氏朝鮮時代の宮殿の慶熙宮の正殿として知られている。また、崇政殿は王の即位式など公式の儀式が行われた場所であり、朝鮮の植民地化を視覚的に演出する装置でもある。日韓併合が断行された1910年11月に、慶熙宮址に京城中学校の新校舎が完成し、西大門外の仮校舎から移転した。こうして、官立の内地人の中学校が朝鮮王朝の王宮址に建設されたことは、総督府が京城中学校に対して高い期待をかけた証拠であり、支配者意識のあらわれだと考えられる。

もう一つは、「満州」への言及である。『虎狩』の第二章では、「私」は小学校の運動場ではじめて見かけた猛烈な砂埃などが舞い散る現象について、こう述べている。

あとで解ったのだけれども、朝鮮から満洲にかけては一年に大抵一度位はこのやうな日がある。つまり蒙古のゴビ砂漠に風が立って、その砂塵が遠く運ばれてくるのだ。(p.75)

上記のように、『虎狩』の執筆時点では作者が間違いなく中国内陸部と朝鮮半島の間にある満州の存在を意識していたことが示されている。実際、京中生であった中島敦は、三年生の夏には、個人的に従兄弟達と旅順の比多吉叔父宅に1ヶ月ほど滞在し、四年生の5月に、修学旅行で南満州（現・中国東北部）を訪れたのである。京中生の植民地意識が朝鮮半島を超えて当時の満州の地へも拡大されたなかで、こうした満州修学旅行は、京中生にとって満州への関心を深める直接的契機となった。

『虎狩』のなかで、「日本語があまり達者でない」半島人として登場する趙大煥の父親が、息子を日本の「植民者養成所」である京城中学校に進学させたのは、恐らく将来的には東京帝国大学をはじめとする日本の各帝大への入学、将来は朝鮮人管理職や、医者か弁護士のような上級職についてほしいという願望の故かもしれないが、一方で趙大煥は父親が苦心して組み立ててくれたライフプランから逸脱してしまったのである。例えば、作中において、趙大煥が京城中学校の学校生活に違和感を感じる場面が描かれている。

元来、彼（趙大煥——筆者）は奇妙な事に興味を持つ男で、学校でやらせられる事には殆ど少しも熱心を示さなかった。剣道の時間なども大抵は病氣と称して見学し、真面目に面をつけて竹刀を振回してゐる私達の方を、例の細い眼で嘲笑を浮べながら見てゐるのだった（略）（p.79）

京城中学校の大きな特徴のひとつに、野球、サッカー、クラブはもちろん、剣道や柔道などでも朝鮮を代表して、度々内地遠征をしたということが挙げられる。初代校長の隈本有尚は、「寄宿舎に於ける訓育の要旨」として、「五、武術及遊技 撃剣、柔術、水泳、野球、庭球、蹴球、器械体操、徒歩等を奨励して以って体力の増進を計らしむ。」<sup>17</sup>と定め、文武両道な指導層の後継者<sup>18</sup>を育成していく決意を表している。ただし、趙大煥は京中のその教育方針に共感を持ってないことに加えて、「途で会った時の敬礼はもとより、その他何事につけても上級生には絶対服従といふ」学校の慣習に従うこともできなかった。それ故、彼は以前から内地人の上級生に睨まれ、何度もいじめられたことがある。その理由について、語り手の「私」は次のように分析する。

第一、趙は彼等に道で逢っても、あまり敬礼をしないといふ。これは、趙が近眼であるにも拘らず眼鏡を掛けてゐないといふ事実に因ることが多いもののやうだった。が、さうでなくても、元来年の割にませてゐて、彼等上級生達の思ひ上った行為に対しても時として憫笑を洩らしかねない彼のことだし、それにその頃から荷風の小説を耽読する位で、硬派の彼等から見て、些か軟派に過ぎてゐたので、これは上級生達から睨まれるのも当然であつたらう。（p.82）

また、趙大煥は「上級生の一寸した冗談をさも面白さうに笑ったりする私達の態度の中に「卑屈な追従」を見出して、それを苦々しく思」い、威張る上級生に対して批判的な見方をしている。そのため、何度も上級生から「生意気だぞ。貴様！」と叱られたことが『虎狩』のなかで描かれている。上位の者に「卑屈な追従」をして周囲に溶け込んでいくことができない、これが「私」から見た少年趙大煥の人物像なのである。

そして、二人の思い出が描かれている第五章の終盤において、この「生意気」な趙大煥は京城中学校から姿を消す運命を迎えた。三年生の時の冬に、三年生以上の生徒が京城の漢江南岸の永登浦の近くで行った発火演習がその運命の契機となった。その夜、趙大煥は数人の上級生にテントから外に呼び出され、散々痛い目に遭わされた。「私」は上級生の立ち去る気配がした後、趙大煥の傍に行つて彼を慰めようとしたが、趙大煥は突然ワッとい

う声を立てて体を冷たい砂の上に投げ出した。彼は背中を震わせながらおうおうと声をあげて赤ん坊のように泣き始めた。趙大煥のその「平生に似ない真素な慟哭」に動かされた「私」は、彼を助け起こし、テントの群れから離れて漢江の本流の方へと歩み出した。そこで趙大煥は泣きながら「私」を咎めるような調子でこう言った。

——どういふことなんだろうなあ。一体、強いとか、弱いとか、いふことは。——

——俺はね、（そこで一度彼は子供のやうに泣きじゃくって）俺はね、あんな奴等に殴られたって、殴られることなんか負けたとは思ひやしないんだよ。ほんたうに。それなのに、やっぱり（ここでもう一度すすり上げて）やっぱり俺はくやしいんだ。それで、くやしくせに向って行けないんだ。怖くって向って行けないんだ。——

——強いとか、弱いとかって、どういふことなんだろう……なあ。全く。——と、その時、彼はもう一度その言葉を繰返した。

(p.85-86)

それまで、「私」は学校では圧倒的な多数の日本人に囲まれている趙大煥に自分が朝鮮人だという意識を持たせないように努めて気を遣り、それに、趙大煥の方も自分で一向それを気にしていないらしかったが、実際に彼がこの点に非常に気にしていたことは、上記の文からよくわかる。発火演習の日に、「裸の、弱虫の、そして内地人ではない、半島人の」自分を見せてくれた趙大煥を目の前にした「私」は、彼の発した言葉が「現在の彼一個の場合についての感慨ばかりではないのではなからうか」と自問する。強者としての上級生の前で、趙大煥は無論弱者の立場に立たされている。さらに、「強い」統治者（日本人）からみれば、趙大煥は「弱い」被統治者（朝鮮人）に属する人間に相違ない。京城中学校に進学したことで、趙大煥は将来的には支配階級の仲間入りを保証されている。しかし、「強い日本人」と「弱い朝鮮人」という日本植民地支配下における既定の力関係の構図に反抗する力を持たない趙大煥は、最終的にそこから逃げ出し、姿を消すしかない。

第五章の最後に、四年生に上がる前に、趙大煥は「私」にさえ一言の予告も与えないで、突然学校から姿を消してしまう。そして、「私」が彼の父親に尋ねたところ、趙大煥は「支那の方へ一寸行ったから」と言われてしまう。その後、「彼がある種の運動の一味に加はって活躍してゐるといふ噂」、「彼が上海に行って身を持崩してゐるといふやうな話」などが

流れてくることは、最終的には趙大煥が民族解放運動に身を投じたことを暗示している。

第一次朝鮮教育令（1911年）を公布してから、朝鮮では「忠良なる国民」を育成することを本義と定めて同化教育が施行されており、日本の植民地支配に従順な臣民を作り出そうとしていたが、その一方で、近代国家としての独立を期す朝鮮民族の独立運動家も途絶えることがなかった。今までの先行研究などでは等閑視されてきたが、植民者養成所と言われる京城中学校において、当時の日本にとっての異端者・趙大煥を生み出したという皮肉な事実が、『虎狩』に仕込まれた重要な伏線<sup>19</sup>であったことが、以上の考察を通じて証明できる。

### 第三節 虎狩体験の裏に潜む〈日本〉と〈朝鮮〉

『虎狩』において、虎と関わる内容は第一章と第六章となるものである。第一章の冒頭には、次の一節が書かれている。

私は虎狩の話をしようと思ふ。虎狩といってもタラスコンの英雄タルタラン氏の獅子狩のやうなふざけたものではない。正真正銘の虎狩だ。(p.73)

ここで言及された「英雄タルタラン」とは、フランスの小説家であるアルフォンス・ドーデの三部作（『陽気なタルタラン』『アルプスのタルタラン』『ポール・タラスコン』）に登場する、タラスコンを生まれ故郷とする架空の英雄で、世界を股にかける冒険家のことである。タルタランは冒険物語を耽読するが、実際には行く度胸がない。その後、自分のほら話のせいで、植民地アルジェリアへ行くこととなる。最後に、イスラム教徒の飼育する盲目のライオンを仕留めるが、故郷では「タラスコンの英雄」として歓迎され、人々は彼の冒険談に夢中して耳を傾ける。

楠井清文は、『虎狩』の冒頭で言及されたタルタランの話が「読者の読みの方向を規定する「指標」の一つとなり、「虎狩」の読者は、この作品の「記憶」を参照しながら、「タルタラン氏の獅子狩」のような滑稽譚ではなく、迫真に満ちた「私」の物語への期待を高めることになる。」<sup>20</sup>と指摘する。確かに、虎狩の物語という異国趣味的な題材を導入に用いている点に、読者を意識した技法が指摘できる。ところが、もう一歩進んで考えてみると、中島敦がドーデの作品のキャラクターをピックアップしたのは、自分の『虎狩』がフィクションではなく、正真正銘の体験談であることを示したかったためであると考えられる。



では、「私」の虎狩体験では一体どのような物語が語られるのか。この点を検討する前に、まず日本と朝鮮半島における「虎」のイメージについてそれぞれ確認しておきたい。周知のように、虎の生息地はユーラシア大陸（ロシアを除く）だけであり、日本にはいなかった。にもかかわらず、海によってつながる人と物の交流により、虎は日本では古くから知られる動物である。朝鮮半島や中国に渡った日本人は、生きた虎を見聞し、虎にまつわる様々な説話や習俗に接し、それらを日本に持ち帰った。虎は目に見えない霊力を持ち、虎皮が人の命を守るために効果を発揮するという古来の信仰の影響を受け、江戸時代には朝鮮通信使の贈答品として虎皮が持ち込まれたり、虎の骨や歯が貴重な薬として一部で取引されたりした。文化面においては、虎は龍虎図などの伝統ある絵画<sup>21</sup>のなかでその存在感を保ってきた。また、日本では虎が登場する固有の神話や伝説は基本的にはないと言ってもよいが、実際、虎は日本の古典文学には度々登場している。日本最古の和歌集『万葉集』にも詩人が伝え聞く虎を題材にして詠んだ歌<sup>22</sup>が幾つか存在する。また、『日本書紀』には、虎が登場する最古の記録<sup>23</sup>が残されている。これらの話の共通点は、虎退治のイメージが強く浮かび上がり、朝鮮の虎を狩ること自体が日本人の武勇の象徴として語られていることである。さらに、のちの加藤清正の場合は、彼は豊臣秀吉の朝鮮出兵で出陣し、虎がいたところで兵に害を与えたために、大々的に虎狩りを行って軍の士気を高めたという。加藤清正の虎退治の武勇伝は、多くの絵や人形に造形化されて現在にも伝わっている。

一方で、朝鮮半島の住民にとって、虎は特別な意味を持つ動物である。朝鮮の虎はシベリア虎、満州虎と系統的には同類に属し、昔は広く朝鮮半島全域に棲息していた。建国神話である「檀君神話」の中にも出てくる動物で、守護神として民間信仰の対象にもなっている。朝鮮時代後期以降には山神図をはじめ、めでたい吉祥図や鶴虎図が描かれ、人々の生活と深く関わってきた。また、朝鮮の昔話には、虎が登場するものが多数あるというのが特徴の一つである。例えば、『朝鮮の民話』（金奉鉉、国書刊行会、1976年7月15日）のなかに、『虎ときこり』『山男と虎の皮』『川瀬の虎退治と兎の尻穴』など虎に関わる民話が収集されているが、ほとんどは虎を揶揄する物語である。一方、神格化された虎は、「山神」「山君」「山君子」「山霊」「山中の英雄」<sup>24</sup>などの異名さえあるほど崇拜される尊い対象でもある。

李氏朝鮮後期の思想家・漢学者である朴趾源の代表作『虎叱』には、

虎は知恵深く心清く、文武ともに兼ね備え、慈愛にみち孝心もあつい。聡明で汚れなく勇猛であり、身動き素速くかつ雄々しく、勇者たること天下に並ぶものがないと言う<sup>25</sup>。

と、人間味を持った親しみのある虎のイメージを表している。さらに、『虎叱』には、民衆の立場から偽善的な支配者である儒学者（「両班」という支配階級）を戒める朝鮮の定型的な虎が登場する。このような朝鮮における虎のイメージは『虎狩』のなかにも取り入れられている。

何しろ今から二十年程前迄は、京城といっても、その近郊東小門外の平山牧場の牛や馬がよく夜中にさらはれて行った。（中略）次ののやうな話さへある。東小門外の駐在所で、或る晩巡査が一人机に向かつてみると、急に恐ろしい音を立てとガリ／＼と入口の硝子戸を引掻くものがある。びっくりして眼をあげると、それが、何と驚いたことに、虎だったといふ。虎が——しかも二匹で、後肢で立上り、前肢の爪で、しきりにガリ／＼やってみたのだ。巡査は顔色を失ひ、早速部屋の中にあつた丸太棒を門の代りに扉にあてがったり、ありつたけの椅子や卓子を扉の内側に積み重ねて入口のつとかひ棒にしたりして、自身は佩刀を抜いて身構へたまと生きた心地もなくぶる／＼顛へてみたといふ。が、虎共は一時間ほど巡査の胆を冷させたのち、やと諦めて何処かへ行って了つた、といふのである。（p.73）

『虎狩』の執筆の「二十年程前迄」といえば、「まだ巡査の威張れる時代」の1910年代、つまり日本が朝鮮で「武断統治」を実施した時期を指している。当時、軍隊と警察による武力統治を根幹とする植民地支配の下で、巡査（日本人巡査と朝鮮人巡査を含む）は支配階級に属し、朝鮮民衆の恨みを買う対象となった。南富鎮によれば、「支配者を代表する「日本人巡査」を脅かす虎の話は、植民地という厳しい現実に置かれた朝鮮人の心を慰めるものとして広がり、それがまた心理的な抵抗にもなった」<sup>26</sup>のである。

確かに、虎が弱者である朝鮮民衆だとする指摘には一理あるが、ただ、これはすでに「二十年程前」の虎のイメージである。1920年代の時点に生きる「私」にとって、虎が「動物園か子供雑誌の挿画以外に、自分の間近に、現実的に」現れてくるとは夢にも考えられなかった。また、作品の冒頭に出てきたその二匹の虎がどうしても「私」には本物のような気がしなくて、脅かされた巡査自身のように、「サアベルを提げ靴でもはき、ぴんと張った八字髭でも撫上げながら、「オイ、コラ」とか何とか言ひさうな、稚気満々たるお伽話の国の虎のやうに思へてならなかったのだ。」と、作中において、支配階級を驚かす虎のイメージに対する「私」の違和感が記されている。

この背景には、『虎狩』の執筆時点には、朝鮮ではすでに虎の棲息は確認できなくなって

いたという事実がある。中島敦と同世代の日本人子弟である碓井隆次<sup>27</sup>は自らの京城暮らしを記録した『京城四十年』のなかで、以下のように述べている。

加藤清正以来有名になっただけで、虎は動物園以外ではお目にかかれないのが実情だった。私の小学校の頃に、日本人のさる金持が、わざわざ虎狩りに来て、大勢の勢子をつかってやっとしとめた、一、二頭の虎を前に、とった写真が新聞に出ていたのをおぼえているくらいである<sup>28</sup>。

碓井隆次は、1920年代の時点では、朝鮮での野生の虎が本当に珍しい存在であることを明かしたのである。さらに、月刊誌『朝鮮』（1926年1月号）に掲載された吉田雄次郎<sup>29</sup>の「虎と朝鮮」には、1919年（大正8年）から1924年（大正13年）までの、虎と豹の地方別捕獲数が記録されている。そのなか、1924年の朝鮮虎の捕獲数が10頭と記されており、これが公式には朝鮮最後の虎と言われている。よって、「私」と趙大煥が京城の郊外で行われる虎狩りに参加したのは1923年、つまり朝鮮の虎が絶滅する直前である。『虎狩』の第一章において、虎狩りの話をしようとする「私」は「今時そんな所に虎が出て堪るものかと云って笑はれさうだが」と言い出すのも、朝鮮における虎の絶滅の事実に基づくものである。

では、朝鮮の虎はなぜ急速に絶滅に追い込まれたのか。その背後には、日本の植民地支配の要素が潜んでいる。総督府の『朝鮮彙報』（1917年8月号）の「害獣駆除に関する調査表」には、1915年（大正4年）、大勢の警察官と憲兵、役人、猟師、勢子が動員され、大規模な駆除作戦を行ったことが掲載されている。これで、駆除された虎は11頭、翌年は13頭である。この官憲による駆除作戦は、虎狩りだけの目的だが、ほかに追い出した豹、熊、ヌクテーなどの動物も数多かった。こうした大人数を動員して徹底的に行った駆除作戦が虎を滅ぼした直接的な原因だと考えられる。さらに、鹿、イノシシ、ウサギなど、虎の餌となるものも激減し、それが虎を滅ぼす間接的な原因ともなった。

吉田雄次郎の「虎と朝鮮」（『朝鮮』1926年1月号所収）にある「朝鮮における虎・豹による被害統計」を見ればわかるように、1919年（大正8年）から1924年（大正13年）にいたる間、虎に殺された人は総計14人、負傷した人は16人もいたという。こうした虎による被害を防ぐために、総督府は大規模な駆除作戦を実施したとも言われるが、実際、武断統治を行っていた日本支配者層は虎を捕る猟師が猟銃などの武器を所有することを恐れて、朝鮮人猟師から銃を取り上げるために、虎駆除作戦を実施したと考えてもよい。言い換えるならば、1910年代における朝鮮の虎の急速な大量絶滅の背後には、次々と後が絶え

ない独立運動に対する総督府の恐怖感と警戒が隠れているのである。

最後に、『虎狩』において、一体どのような虎狩りの物語が語られているのかについて、主に、(1) 動物園での虎見物；(2) 正真正銘の虎狩りといった二つの場面から第六章を考察してみたい。「私」と趙大煥の思い出に多くの話が費やされた後、第六章でようやく虎狩りの本題に戻る。中学校一年の1月、ある日学校が終わった「私」が、いつものように趙大煥と二人で電車の停留所まで来ると、彼はいい話があるから次の停留所まで歩こうと言う。彼は歩きながら、「私」に彼の父親と一緒に虎狩りに行きたくないかと言い出す。「私」は虎狩りなどということは今まで考えてみたことがなかったが、ぜひ無理にも連れて行ってもらいたいと頼む。趙大煥の話によると、彼の父親は殆ど毎年のように虎狩りを行っていたが、自分を連れていくのは初めてだという。そのため、趙大煥も興奮して、二人はこの冒険の予想、特に、どの程度まで自分たちは危険に曝されるであろうかという点について色々と語り合う。普段「日鮮融和」を唱えながらも趙大煥との親交を快く思っていなかった父親の目を盗むため、「私」は親戚の家へ遊びに行くという口実で出かける。その前日に、生きた虎に関して殆ど何も知らない「私」は予備知識を得るため、一人で昔の李氏王朝の御苑であり、今は動物園となった昌慶苑に行く。この昌慶苑には、動物園のほかに、当時規模と内容とも東洋一と称せられる温室をもつ植物園や朝鮮古代の美術品を陳列している博物館が設置されており、日本植民地者にとっての誇らしい場所だと言われていた。

昌慶苑に関しては、1926年出版の『京城案内』のなかでこう紹介している。

昌慶苑のあるところで李王家の庭園である。先づ正門わきで入場券を買って苑内に入る。正門が弘化門、第二の内門が明政門、其の奥が明政殿で唐時代の宮殿建築を模したものである。これ等の建築と南大門と昌特宮の正門である敦化門の五つが京城における最古の建築物で五百年前の姿を其の儘残してゐる。右が植物園左が動物園真向ふが博物館と云ふことになる。動物園には内地に棲息せぬ山猫、ヌクテ、高麗雉、虎、豹、獐等朝鮮産の珍しい動物が中々多い<sup>30</sup>。

昌慶苑の動物園は1909年に開園し、今の韓国では一番大きく歴史の古い動物園<sup>31</sup>である。1920年代では、姿を消された野生の朝鮮の虎に出会うチャンスがほとんどないため、虎をはじめ、「朝鮮産の珍しい動物」を見るには昌慶苑が最適な場所であろう。「私」はその動物園で生活する朝鮮の虎の様子を丹念に観察し、次のように緻密に描写している。

スティイムの通ってゐる檻の中で私から一米と隔たらない距離に、虎は前肢を行

儀よく揃へて横たはり、眼を細くしてゐた。眠つてゐるのではないらしいが、側に近づいた私の方には一顧だに呉れようとしない。私は出来るだけ彼に近づいて、仔細に観察した。確かに仔牛ぐらゐはありさうな盛上った背中の肉付。背中は濃く、腹部に向ふに従つて、うすくなつてゐる、その黄色の地色を、鮮かに染抜いて流れる黒の縞。目の上や、耳の尖端に生えてゐる白毛。身体にふさはしい大きさに頑丈に作られたその頭と顎。それにはライオンに見られるやうな装飾風な馬鹿々々しい大きさはなく、如何にも実用向きの獰猛さが感じられた。このやうな獣が、やがて山の中で私の目の前に躍り出してくるのだと思ふと、自然に胸がどきどきして来るのを禁ずることが出来なかつた。暫く観察してゐた私は今まで気がつかないでゐた事を発見した。それは、虎の頬と顎の下が白いといふことだ。それから又、彼の鼻の頭が真黒で、猫のそれのやうに如何にも柔かさうで、一寸手を伸ばしていぢつて見たいやうに出来てゐることも私を喜ばせた。私はそれらの発見に満足して立去らうとした。(p.90)

元来、エキゾチックな物事が好きな「私」にとって、日本に棲息しない虎の見物に興味津々であつた様子が、まさに上述のとおりである。しかし、虎が「私」に一瞥さえ与えてくれず、「私」は侮辱を受けたやうな気がして、最後に虎の唸るやうな声を立てて彼の注意を惹こうと試みたが、虎はその細く閉じた目をあけようとさえしなかつたのである。

本来なら、虎は山岳地帯や森林に隠れていることが多く、滅多に人前に姿を現さない動物である。しかも、内向的で警戒心が強く、孤独な生活を送ることが多いと知られている。ただ、総督府の虎駆除作戦によって野生の虎はほとんど全滅し、残りわずかの虎は動物園で飼われる羽目になった。こうした朝鮮における日本植民地支配の影響の一側面が、「私」が見た当時の朝鮮の虎事情を通じて詳細に描写されている。

『虎狩』第六章の終盤に、「私」は趙大煥の父が指揮する虎狩りの現場へ行つてその一部始終を目撃したことが描かれている。その日、「私」と趙大煥以外にも、趙の父親や朝鮮人下僕らが一緒に雪明かりの京城郊外へ行き、何時間も待たされたあげく、ようやく一匹の虎が現れた。

一匹の黒黄色の獣が私達にその側面を見せて雪の上に腰を低くして立つてゐる。

(中略) 虎は——普通想像されるやうに、足をちぢめ揃へて、跳びかかるやうな姿勢ではなくて——猫がものにじゃれる時のやうに、右の前肢をあげて、チョツカイを出すやうな様子で、前に進み出さうとしてゐる。(p.96)

そこへ激しい銃声が響き、虎が倒れる姿を見た「私」は、ただ呆気にとられて遠くからぼうっとして眺めているだけであった。ただ、「私」がもっと驚いたのは、不意に虎に出会い、恐怖のあまり気を失った朝鮮人の勢子への趙大煥の態度である。趙大煥は、その気を失って倒れている男のところへ来ると、足で荒々しくその体を蹴返して見ながら「私」にこう言う。

——チョッ！怪我もしてゐない。—— (p.97)

これは、趙大煥が前から期待していたような惨劇の犠牲者にならなかったことに憤っているのである。そばで見ている趙の父親も、息子はその勢子を足でなぶるのを止めようとしめない。「私」はその姿に「彼等の中を流れてゐる此の地の豪族の血」を見たような気がする。

つまり、本来の朝鮮社会にある「支配者～被支配者」という関係において、趙大煥は朝鮮人勢子に対して優越感と軽蔑心を持つ支配者の一人なのである。しかし、一方で圧倒的な多数の支配者である日本人子弟に取り囲まれた京城中学校の環境は、朝鮮人という精神における被支配者の立場を際立たせないではおかなかったのである。日本植民地支配下における朝鮮人支配階層の人間としての倨傲と不安、という裏腹な感情が趙大煥の人物像に共存していることが以上の考察から確認できる。

#### 第四節 <言葉>と植民地支配の問題

第七章では、趙大煥が黙って姿を消してしまっただけの日からの十数年後、二人が再会したことが語られている。東京帝国大学の学生となった「私」は、友人に本を探るように頼まれ、本郷通りの古本屋を一通り巡る。その後、赤門前から本郷三丁目の方へ向かって歩いているところ、そこで、「一人の背の高い——その群集の間から一際、頭だけ抜出てゐるやうに見えた位だから、余程高かったに違ひない——痩せた三十恰好の、ロイド眼鏡を掛けた男」を見かける。この男の外見について、作中において、次のように丁寧に描写されている。

古い羊羹色の縁の、ペロリと垂れた中折を阿弥陀にかぶった下に、大きなロイド眼鏡——それも片方の弦が無くて、紐がその代用をしてゐる——を光らせ、汚点だらけの詰襟服はボタンが二つも取れてゐる。薄汚ない長い顔には、白く乾いた

唇のまはりに疎らな無精髭がしょぼしょぼ生えて、それが間の抜けた表情を与へてはゐるが、しかし、又、其の、間の迫った眉のあたりには、何かしら油断の出来ない感じをさせるものがあるやうだ。いって見れば、田舎者の顔と、掏摸の顔とを一緒にしたやうな顔付だ。(p.99)

本郷三丁目付近に現れる詰襟学生服を着用する男は、おそらく学生だろうと推測できる。ただ、帝大生の「私」の目に映ったのは、「田舎者の顔と、掏摸の顔とを一緒にしたやうな顔付」で、うらぶれた姿をした男である。これらの記述は、エリートコースから外れて、「上海に行って身を持崩してゐると」(第五章) 噂される趙大煥の人物像に呼応している<sup>32</sup>。作中において、「私」は自分が出会った男が趙大煥だとはすぐにわからなかった。「私」は男の風変わった様子を見つめ、向こうは急に「旧知を認める時のやうに」こちらに向かって頷いてみせる。「私」は自分の記憶の隅々を探し始め、「何か非常に長い間忘れてゐたやうなあるもの」が見つかった気がする。そして、男は「私」の方へ歩み寄ってきて、「煙草を一本くれ」と言い出す。「私」はバットの箱を彼の前に差し出し、それを受け取った男は急に妙な顔をして、黙ってバットの箱をそのまま「私」に返そうとする。すると、彼は独り言のようこう言う。

——言葉で記憶してゐると、よくこんな間違をする。—— (p.100)

男の説明によると、彼は本当に求めていたのは煙草ではなく、<sup>マツチ</sup>燐寸であったのである。彼は自分がなぜこの馬鹿馬鹿しい間違いをしたのかを考え、それは「記憶が悉く言葉によつたためである」と結論づける。

感覚とか感情ならば、うすれることはあても混同することはないのだが、言葉や文字の記憶は正確なかはりに、どうかすると、とんでもない別の物に化けてゐることがある。彼の記憶の中の「燐寸」といふ言葉、もしくは文字は、何時の間にかそれと関係のある「煙草」といふ言葉、もしくは文字に置換へられて了つてゐたのだ。…… (p.101)

前述したように、趙大煥にとって、本来なら朝鮮語は母語であり、日本語は他国語である。つまり、朝鮮語は「感覚」や「感情」で自然に吸収できた言葉であり、日本語は「言葉」や「文字」で覚えた言葉である。

朝鮮における日本植民地の支配方針のなかで、教育は重大な役割を果たした。特に、朝鮮人の民族性を抹殺するための同化教育が重視されていた。1911年8月23日に公布された第一次朝鮮教育令の本質は、「教育ハ特ニカヲ徳性ノ涵養ト国語（日本語）ノ普及トニ致シ以テ帝国臣民タルノ資格ト品性ヲ具ヘシムルコトヲ要ス」という寺内正毅総督の言葉の中に言い尽くされている。1920年代に入ると、朝鮮全土の学校での日本語教育の普及が一層促進され、そのなか、朝鮮人子弟を対象とする公立学校では、朝鮮語や漢文の時間は著しく制限され、そのかわり日本語や日本の地理、歴史が教えられたのである。

こうした当時の朝鮮において日本語が絶対的優位性を持つ現状は、『虎狩』第六章からも読み取れる。「私」以外のメンバー全員が朝鮮人という環境のなかで、趙大煥はひたすら「私」と二人きりで話しつつ、大人たちとは殆ど言葉を交わさない。彼は「私」の前で「あまり朝鮮語を使ふのを好まないやうであり、「時々向ひ側から与へられる父親の注意らしい言葉にも極く簡単に返事するだけ」である。言い換えるならば、当時、京中生であった趙大煥はまだ、エリートコースに乗って将来的に支配階層の仲間入りをすることを強く望んでおり、専ら日本語に代表される日本の文化や社会の世界に入ろうとしていたのである。しかし、その後、朝鮮半島から姿を消してしまう趙大煥は、独立運動に投身し、日本の支配階層にとっての異端者となった。「感覚」や「感情」で覚えた母語としての朝鮮語なら必ず何の問題もないであろうが、「言葉」や「文字」で強制的に意識させられた外国語としての日本語だからこそ、彼の記憶が「とんでもない別の物に化けて」上述したような奇妙な間違いを引き起こしてしまったと言えよう。

## 第五節 終わりに

中島敦は『虎狩』において、直接的な社会批判を全面に出さず、日本人子弟の「私」の視点から、日本植民地支配下の朝鮮の一側面をよく観察し、素直に描き出した。「朝鮮」という本質的に悲痛な「場」に、趙という複雑な、即ち純化されていない「他者」を追求したために、作品の結晶度は低くなった<sup>33</sup>と、藤村猛が指摘したように、今までの『虎狩』論はこの作品の文学的な完成度に対してあまり高い評価を与えていない。本章では、『虎狩』において、「京城」という時代的な「場」を巧みに生かしながら、植民者養成所とも言われる「京城中学校」とエキゾチックな虎狩りの場面の描写を通じて、所々に散見する植民地朝鮮の異空間的要素が有機的に取り込まれている点を観察できた。

まず、第三章から第五章にかけて共通する物語の舞台である京城中学校は、日本人統治者層の二世・三世を育成する、1920年代の朝鮮における中核機関だと知られている。



第二次朝鮮教育令（1922年）の公布とともに、京中に進学できた趙大煥は、その中学校に在籍している、わずか数名の朝鮮人生徒のなかの一人である。本来の朝鮮人支配階層であった「両班」の出身であったことに加えて、日本人の母親を持つ趙大煥は、無論将来有望であったのだが、学校では日本人上級生にいじめられる対象となる。京城中学校の「絶対服従」という慣習に従えない彼は、最終的に「京城中学校→第一高等学校→東京帝国大学」という朝鮮随一のエリートコースから脱出し、当時の日本統治者層にとっての異端者となる運命を迎えるより他に進む道がない。

次に、第一章と第六章のなかで描かれる虎狩りの場面について、日本に棲息しない虎をめぐって、朝鮮と日本におけるそれぞれの虎のイメージを考察してみた。1920年代の朝鮮の虎の絶滅の背後には、1910年代の総督府が指揮する大規模な虎駆除活動が起因と見られ、さらに、この虎駆除作戦は、武器を持つ朝鮮人猟師から銃を取り上げるためのものでもあった。

最後に、第七章の二人の十数年ぶりの再会場面について、日本語で奇妙な間違いを起こす趙大煥に注目し、エリートコースから外れ、異端者となった趙大煥と朝鮮における日本語教育問題との関連性を論じた。『虎狩』執筆までの1931年から1933年に至る間、中島敦はよい創作環境に恵まれず<sup>34</sup>、翌年の1934年によく精神的にも経済的にも収拾がつくようになった。そこで書かれた『虎狩』には、大学時代の文学的沈黙を経て、時の文壇に出ようと試みた中島敦の姿勢が見られる。中島敦の朝鮮物（『巡查の居る風景』『プールの傍で』『虎狩』）の最終作である『虎狩』は、単に朝鮮人同級生への思い出を物語化するのみならず、第三者の視点から1920年代の朝鮮という場所とそこに生きる人を客観的に伝えるようとする作品にほかならない。

注：

<sup>1</sup> 瀬沼茂樹「中島敦入門」（『日本現代文学全集』第82巻所収、講談社、1964年10月）

<sup>2</sup> 瀬沼茂樹「中島敦入門」（『日本現代文学全集』第82巻所収、講談社、1964年10月）

<sup>3</sup> 佐々木充「主題と方法」（『近代文学資料 中島敦』桜楓社、1968年3月、p. 36）

<sup>4</sup> 木村一信「中島敦「虎狩」論——方法と主題——」（熊本女子大学編『熊本女子大学学術紀要』第30巻、1978年3月、p. 19）

<sup>5</sup> 濱川勝彦『中島敦論の作品研究』明治書院、1976年9月、p. 27

<sup>6</sup> ほぼ同時期に発表された、朝鮮に勃発した「三・一独立運動」などの騒擾を描いた湯浅克衛の「カンナニ」（1935年4月）は、大幅に検閲・削除された形での発表になった。

<sup>7</sup> 渡邊一民『中島敦論』みすず書房、2005年3月、p. 219

<sup>8</sup> 百貨店商報社編『日本百貨店総覧 第1巻（三越）』百貨店商報社、1933年、p. 39-40

<sup>9</sup> 京城中学校の正式校名は、京城居留民団立京城中学校（1909年5月）→統監府中学校（1910年4月）→朝鮮総督府中学校（1910年8月）→官立京城中学校（1913年4月）→京城公立中学校（1925年4月）と変遷してきたが、本章では基本的に京城中学校とする。

<sup>10</sup> 『朝鮮総督府官報』（1922年）ソウル亜細亜文化社、論告に関する記事はp. 512-513 参照

<sup>11</sup> 『仁旺ヶ丘』編集委員会企画『仁旺ヶ丘～京城中学卒業五十周年記念誌～』京喜会、1982年1月、p. 18

<sup>12</sup> 『文教の朝鮮』1933年3月、p. 153

- 13 中島敦は1926年に京城中学校四年修了で一高分科甲類に合格して進学。そして、1930年4月に東京帝国大学文学部国文学科に入学した。これについて、島内景二は次のように述べる。「一九二六年、中学校の正規の修学年限は五年だが、敦は四年を修了した時点で、天下の秀才たちが憧れる第一高等学校（東京大学教養学部の全身）の文科甲類に合格した。当時は、全国どこの旧制高校からも東京帝国大学へ進学する道は開かれていたが、お膝元の第一高等学校（一高）で学ぶのが理想である。／この快挙は、現地の新聞「京城日報」にも報じられた。」（島内景二『中島敦「山月記伝説」の真実』文藝春秋、2009年10月、p.31）
- 14 『仁旺ヶ丘』編集委員会企画『仁旺ヶ丘～京城中学卒業五十周年記念誌～』京喜会、1982年1月、p.356-357
- 15 『仁旺ヶ丘』編集委員会企画『仁旺ヶ丘～京城中学卒業五十周年記念誌～』京喜会、1982年1月、p.356
- 16 例えば、京城中学校の第31回（1943年）卒業生である詩人村松武司は、「朝鮮に生きた日本人——わたしの「京城中学」——」を総括して次のように記している。「人々は例外なく、むかしの学舎をなつかしむだろう。わたしも素直に、いまは廢校となった「京城中学」を思う、と言おう。それは朝鮮近代史の真只中にあった植民者養成所であった。いま養成所は消え去ったが、植民者たちが消えたわけではない。」（『季刊三千里』第21号、三千里社、1980年2月、p.73）
- 17 『朝鮮及満洲』第57号、1912年8月、p.3
- 18 そのほか、『虎狩』において、学校の教育方針として、三年生以上の生徒たちが発火演習を行う場面が描かれている。「その日、三年以上の生徒は漢江南岸の永登浦の近処で発火演習を行った。斥候に出た時、小高い丘の疎林の間から下を眺めると、其処には白い砂原が遠く連なり、その中程あたりを鈍い刃物色をした冬の川がさむ／＼と流れてゐる。そしてその遙か上の空には、何時も見慣れた北漢山のゴツ／＼した山骨が青紫色に空を劃つてゐたりする。さうした冬枯の景色の間を、背囊の革や銃の油の匂、又は煙硝の匂などを嗅ぎながら、私達は一日中駆けずり回った。」
- 19 『虎狩』の執筆（1934年）前に、京城中学校から出た異端者に関わる出来事が二つあったことを挙げておきたい。一つは、中島敦の京中時代の先生の一人、プロレタリア詩人「新井徹」として知られる内野健児（1899-1944）が、1928年7月にプロレタリア詩人としての活動故に罷免されたことである。内野健児は1921年の春に渡航し、大田中学校教諭を経て1925年9月、京城中学校教諭となったが、後に京城中学校の教諭として免職・朝鮮追放となった唯一の例となった。もう一つは、1931年9月27日、旧日本軍の満州侵略に反対する「反帝同盟」が摘発され、「京城帝国大学反帝同盟事件」関係者として京城帝国大学生ら22名（内地人3名、朝鮮人19名）が起訴され、その中の一人が京城中学校出身の平野而吉（当時京城帝国大学法学科一年）だった。既存資料には明記されていないが、中島敦が異端者としての趙大煥を造形したのは、こうした歴史的事実によって示唆されたためかもしれない。
- 20 楠井清文「中島敦「虎狩」論——語り手の手法と「虎」イメージの分析を中心に——」（立命館大学日本文学会『論究日本文学』第90号、2009年5月、p.43）
- 21 例えば、奈良の法隆寺に伝わる国宝、玉虫厨子には、有名な捨身飼虎が描かれている。
- 22 例えば、柿本人麿の歌に、「仇みたる虎が吼ゆると、諸人のおびゆるまでに」というのがあり、また、境部王の「虎にのり、ふるやをこえて」というものもあります。
- 23 545年（欽名6年）に妻子を伴って百済へ使した膳臣<sup>かしわで</sup>の巴提使<sup>はすひ</sup>が大雪の夜、虎に我が子を食われたその翌朝、彼は雪に印した虎の足跡を辿って虎を見つけると、虎を刺殺して報復したという話が見られる。
- 24 崔仁鶴『朝鮮昔話百選』日本放送出版協会、1974年11月、p.303
- 25 仲村修、オリニ翻訳会『韓国古典文学の愉しみ 下——洪吉童伝 両班伝ほか』白水社、2010年3月、p.146
- 26 南富鎮「＜娼婦＞と＜虎＞の朝鮮表象——中島敦＝（静岡大学人文学部『人文論集』NO.56-2、2005年、p.12）
- 27 1909年、京城生まれ。京城日出小学校、龍山中学校、京城大学を卒業後、京城第二高女、京城女子師範学校、淑明女子専門学校教員を歴任。
- 28 確井隆次『京城四十年』生活社、1980年2月、p.107
- 29 吉田雄次郎は『朝鮮狩猟解説』を出版した、総督府の技手である。
- 30 『京城案内』京城教育会、1926年6月、p.17
- 31 1984年に、昌慶宮の復元を行うため、動物園と植物園が現在のソウル大公園の場所に移転することになった。
- 32 湯浅克衛は「敦と私」において、このうらぶれた姿で現れる趙大煥が「昭和初年の共産党弾圧と、地下運動にまきこまれ、或いは脱落して荒廃した顔になった」（『中島敦全集』第2巻付録「ツシタラ3」所収、文治堂書店、1960年）と指摘している。
- 33 藤村猛「中島敦「虎狩」論」（安田女子大学日本文学会『国語国文論集』第33号、2003年1月、p.74）
- 34 当時、中島敦の私生活面において、橋本タカとの結婚が父に猛反対され、健康問題で朝日新聞社の最終

---

面接で不合格になってしまった。さらに、大学院への進学などの事情もが相次ぎ、確かによい創作環境に恵まれていたとはいえない。その期間中に書いたものは、卒論『耽美派研究』、『プウルの傍で』、『斗南先生』とD・H・ロレンスの『息子と老人たち』（木村行雄らと共訳）しかなかった。

## 第五章 南洋行に関する一考察

### ——「南の空間」における〈境界性〉を中心に

#### 第一節 はじめに

中島敦は、わずか33年の短い人生の中で、目まぐるしいほどに居住地を移動した作家である。朝鮮半島をはじめ、中国や南洋などの異質な空間体験の連続は、中島文学に大きな影響を及ぼしたと考えられる。中でも、1941年6月から1942年3月にいたる期間、中島が南洋庁編修書記として当時の日本委任領であった南洋群島（現・ミクロネシア）に赴任した事は特に注目すべきである。これは、南洋行によって生み出された作家の心境変化のみならず、中島文学の変貌にも繋がる重要な転換点の一つと見なされる故である。南洋の旅以前に仕上げた作品には自伝的な物が多く、個人的な不安や疑惑が行間に漂っている。一方、帰朝後に書き下ろした作品からは一人の作家としての決意が如実に読み取れる。つまり、中島の南洋行は、小沢秋広が指摘したように「東京に戻ってから敦が示す激しい燃焼のような創作活動のためには、訪れたあと去らねばならぬ、不可欠のステップ」<sup>1</sup>だと言えよう。

先学の研究において示されたように、中島は南洋で多数の挫折を味わされた一方、新たな認識も得られた。しかし、体調の回復・経済的問題・創作への願望などが凡て叶わなかったとはいえ、「南の空間」における〈境界性〉への認識が、中島文学に大きな刺激を与えたことはまだ指摘されていない。イギリス人作家・ロバート・ルイス・スティーブンソン（1850-1894）のサモア島における晩年の生活を再現した著作『光と風と夢』<sup>2</sup>（1941）から、中島敦の〈南〉という空間への関心が読み取れる。更に、南洋物と現地滞在中に出した妻・中島タカ宛の書簡<sup>3</sup>などから、中島は未開の世界としての〈南洋〉に憧れがあったことがわかる。しかし、コロールに南洋庁が設定されてから19年目となる1941年（昭和16年）の南洋は、もはや作家の想像上の南洋ではなくなっていた。スペイン領時代とドイツ領時代を経て、日本委任領時代に入っていた南洋は、未開の「南の空間」とはいえ、本来の南洋とはかなり変わっていたに違いない。

しかしながら、作家が見た当時の南洋は文明と未開の〈境界〉的な位相に置かれていたのである。なお、南洋物に出てくる近代的な時間、病気などへの批判から中島が覚えた戦争や植民地への不快感をも洩らしている。また、帰朝後に仕上げた『李陵』（1942）から読み取れる〈匈奴〉への理解は、匈奴が持っている未開社会らしさに一因があると思われる。さらに、作中人物の李陵が一種の〈境界〉に生きる人間だと言えよう。〈南洋行〉は中島

文学でもっとも大きな転換点だとも言われてきたが、本章ではこの「南の空間」における<境界性>を中心に、南洋物の分析及び『李陵』との関連性を考察してみたい。

## 第二節 『光と風と夢』における想像上の南洋

中島敦の遍歴を考察すると、<南>初体験は1936年（昭和11年）3月の小笠原諸島の旅であり、この経験を元にして作られた短歌を1937年末に歌稿『小笠原紀行』にまとめた。この歌稿は『光と風と夢』と共に、作家の<南>という空間への関心を示している。しかしながら、『光と風と夢』と『小笠原紀行』との大きな相違点は、この作品は体験談ではなく、想像上の南洋を取り入れたものだという点である。中島は『光と風と夢』において、厳密な資料調査によって得られた創作材料を使いこなしたとはいえ、自らの南洋に対する願望や憧憬から出発してこの長編小説を書き上げたと考えてもよい<sup>4</sup>。スティーブソンが作品のモデルに選ばれた主因は、二人が幾つかの共通点を持っている故だと考えられる。共通点の一つとして、中島とスティーブソンが「南」へ向かう動機の一つとなるのは自分自身が罹っている<病>である。

南洋へ出発する前に、中島が友人へ出した葉書の中に「冬は、また何処か暖い所を探して出掛けます。」（1941年4月1日、氷上英広宛）「僕の病気は冬に悪いので、いっそ南洋へでも行ったら、と考へ[てある]たのです。」（1941年5月31日、田中西二郎宛）「喘息から逃れる為に南洋（パラオ）へ行くことになりました、今月末にたちます」（1941年6月22日、吉村睦勝宛）などと書かれており、作家は長年の喘息に苦しめられていたため、寒さの厳しい関東地方より、一年中暖かい南洋のほうが体調管理にとって好ましいと判断した上で、1941年6月に南洋行を決行したと考えられる。

スティーブソンは、1888年以降保養の地を求めて太平洋の島々をめぐる歩き、タヒチ、マルケサス、ハワイなどを転々とした後、1890年にサモアに定住するようになった。中島は『光と風と夢』の冒頭で「爾来、彼（スティーブソン——筆者、下同）は健康地を求めて転々しなければならなくなった。南英の保養地ボーンマスでの三年の後、コロラドを試みては、といふ医者言葉に従って、大西洋を渡った。米国も思はしくなく、今度は南洋行が試みられた。」と書いており、スティーブソンも作家と同じ、体調療養のため南洋へ向かうことが示されている。

共通点の二つ目には、創作の面において、中島は南洋滞在中に妻・タカへの手紙の中で「実は、この十一月一パイ迄に、オレは或る仕事をするつもりだったんだが、（内地を出発する時も、そのつもりで、原稿用紙などを持って来たんだが）（略）」<sup>5</sup>と書いており、この

「或る仕事」は小説を書くことだと判断できよう。スティーブソンは1894年に脳溢血で急死するまでのサモア島での四年間、肺結核などに苦しみながらも精力的に小説『カトリオナ』(1893年刊)・未完の大作『ハーミストンのウィア』(1896年刊)・紀行文『南海にて』(1890年刊)・書簡集『ヴァイリマ・レターズ』(1895年刊)などを執筆し続けた。恐らく中島はスティーブソン同様、南方の大地で自らの創作力を存分に試してみたかったのだと推察される。

最後に、私生活の面において、中島は2歳ごろ父母の不仲のため祖母の元で育てられ、二人の継母との仲も悪く、決して暖かさに溢れた家で成長してきたのではない。さらに、中島敦年譜(『中島敦全集別巻』筑摩書房、2002年)によると、彼は22歳の時に一高の同級生・伊庭一雄の姉が経営する芝の桜田本郷町の麻雀荘に勤める橋本タカを知り、結婚を決意するが、父の反対で同居は卒業後ということになる。これに相似しているのは、スティーブソンが自分より11歳年上のアメリカ既婚女性・ファニィに恋し、家族の猛反対に対抗しながら、離婚後のファニィと結ばれるようになった点である。また、『光と風と夢』において、スティーブソンの文学者志望や結婚を巡っての親子の険しい対立が描かれている。作家と作中人物の事情は全く一致しているとは言えないが、複雑な家庭環境を持つ点で共通していると言っても差し支えないだろう。『光と風と夢』を書くにあたっては、以上に示した三つの共通点が重要な創作動機になっている。

また、芸術家や作家として、スティーブソンは英・米・独の三国による植民地支配の下に生きているサモアの人々に対して強い同情心を持つ行動者でもある。これは、中島の小説の中にもよく反映されている。例えば、植民地政策について、スティーブソンは「(前略) 政治的实际に疎いのは事実だったが、植民地政策も土着の人間を愛することから始めよ、といふ自分の考が間違っているとは、どうしても思へなかった。」という。そして、サモア島や島民への感情については、「今の私にとって、其の「直接に感じられるもの」とは何か、といへば、それは、「私が最早一旅行者の好奇の眼を以てでなく、一居住者の愛着を以て、此の島と、島の人々とを愛し始めた」といふこと」だと記されている。

最後に、自分のサモアでの役割について、スティーブソンは「サモアで自分のしたこと、しようと欲したこと、其の政治的自由に就いては自分の力の及ぶ所でないとするも兎に角、土人の将来の生活、その幸福の為に今後も尽くそうとしてゐること」という確信を示し、「私は、サモアとサモアの人々とを愛してをります。」と明言する。

総括すると、スティーブソンには中島自身が見られ、また作家としての抱負をも託されているのだ。中島の描くスティーブソン像について、ポール・マッカーシー・オクナー・深山信子は「病身、地理的および芸術的な孤立、政治力の不足、自己懷疑などのさまざま

な制約をうけながら、それらに対して果敢に立ち向かった人間として造型されている。」<sup>6</sup>と指摘する。『光と風と夢』の世界には、こうしたスティーブソンに対する強烈な共鳴を反映しながら、当時の南洋の代名詞とも言える「未開社会」への作家の強烈な憧憬も含まれている。ここで、この〈想像上の南洋〉は一体どのような風景なのかを確認しておきたい。

太陽と大地と生物とを愛し、富を軽蔑し、乞ふ者には与へ、白人文明を以て一つの大なる偏見と看做し、教育なき・力溢るゝ人々と共に闊歩し、明るい風と光との中で、労働に汗ばんだ皮膚の下に血液の循環を快く感じ、人に嗤はれまいとの懸念を忘れて、真に思ふ事のみを言ひ、真に欲する事のみを行ふ。(p.107、下線一筆者、下同)

欧羅巴の豚のやうな、文明のために去勢されて了つたものとは、全然違ふ。実に野生的で活力的で逞しく、美しいとさへ言つていゝかも知れぬ。(p.107)

木の葉一枚をとって見ても、サモアの脂ぎった盛上るやうな強い緑色と違って、此処のは、まるで生気のない・薄れかゝつたやうな色に見える。肋膜が治り次第、早く、あの・空中に何時も緑金の微粒子が光り震へてゐるやうな・輝かしい島へ帰りたい。文明世界の大都市の中では窒息しさうだ。騒音の煩はしさ！金属のぶつかり合ふ硬い機械の音の、いらだたしさ！（p.164）

以上のように、『光と風と夢』から抜粋した例文から、当期中島の南洋観を垣間みることができる。輝く太陽の下で、生気に溢れる南洋の大地で教育と無縁な島民らが威勢よく働き、生きている姿。それに、日本などの文明社会と違い、環境の面においても人種の面においても、「未開」状態のまま時代の流れに取り残されている南方の大地。これらは、1936年（昭和11年）に書き下ろした『狼疾記』冒頭の一節によく呼応しているのではないかと思われる。

スクリーンの上では南洋土人の生活の実写がうつされてゐた。眼の細い・唇の厚い・鼻のつぶれた土人の女達が、腰に一寸布片を捲いただけで、乳房をぶら／＼させながら、前に置いた皿のやうなものの中から、何か頻りにつまんで喰べてゐる。(中略) 砂地に照りつける熱帯の陽の強さは、画面の光の白さで、それとはつきり想像される。(p.405)

この映画を見た途端に、主人公の三造は昔のことを思い出す。

原始的な蛮人の生活の記録を読んだり、其の写真を見たりする度に、自分も彼等の一人として生まれてくることは出来なかったものだらうか、と考へたものであった。確かに、と其の頃の彼は考へた。確かに自分も彼等蛮人共の一人として生れて来ることも出来た筈ではないのか？そして輝かしい熱帯の太陽の下に、唯物論も維摩居士も無上命法も、乃至は人類の歴史も、太陽系の構造も、すべてを知らないで一生を終へることも出来た筈ではないのか？ (p.406)

中島の分身とも言われる三造の心境は、実は作家自身の考えそのものなのだと言えよう。中島がなぜ未開社会へ強烈な関心を示したのかについて、ただ元来エキゾチックなものが好きであったが故だと一言で片付けるのは早計である。

ここで、1934年から1936年にかけて彼の周辺に発生したいくつかの出来事に注目したい。作家は、自らの朝鮮体験を題材にして書き上げた作品『虎狩』を4月末『中央公論』新人募集の懸賞小説に応募したが、7月に選外佳作という結果となる。当時まだ文壇デビューを果たしていない中島にとって、この結果はまさに彼の創作への情熱に水を差したと考えられる。更に、年譜によると、この年の9月に命を危ぶまれるほどの喘息が起こり、決して順風満帆な生活ではなかったようである。『狼疾記』を書き下ろした1936年（昭和11年）に「二・二六事件」が発生し、世の中はますます不安定になった。こうした一連の事情を受け、中島は段々暗くすさんでいく文明社会の日本から脱出し、明るい未開社会の南洋へ飛び込みたいという自らの心境を、作中人物のステューブンソンに託しているとみられる。また、これが後ほど南洋行を決行した一因にもなっている。

### 第三節 南洋物から見る現実の南洋

1941年、当時横浜高等女学校の教諭であった中島敦が休職し、南洋への転勤を決めた理由は、前述した体調問題、創作問題と南方憧憬のほか、さらに経済問題もある。中島タカが書いた「思い出すことなど」の中に、「南洋にはお金のために行ったと思っています。義母コウさんの借金、それは浦和の志津伯母さんに用だてて貰っていたのですが、すべてそれを返済して参りました。」<sup>7</sup>という一節があり、よりよい収入を得るためという動機があったことがうかがわれる。



中島はこの四つの願望を抱えながら、6月28日にサイパン丸で横浜港から出発した。7月7日に初登庁し、「任南洋庁編修書記 給三級俸」という辞令を受けた。主な仕事は植民地用の国語教科書を作るための準備、調査ということである。では、〈現実の南洋〉で中島敦は一体何を体験したのであろう。ここで、上記の四つの願望が全て破綻してしまうことに注目したい。

まず、高温多湿な南洋では、体調快復への願望が叶わなかったことは言うまでもない。7月パラオに到着した後まもなく、アシーバ赤痢による高熱と下痢にかかり、おまけに8月下旬にデング熱にも見舞われ、9月まで体調は思わしくなかった。現地に住んでいる日本人にとって堪えられないほどの南洋の蒸し暑さと予想外の高物価によって、体調面においても経済面においても、中島敦の当初の期待は凡て裏切られてしまったのである。

次に、太平洋戦争勃発とともに戦地に近いパラオでは厳重な灯火管制が敷かれ、夜机にむかうことなど到底できなくなり、結局「沢山持って行った原稿用紙はそのまま持って帰ることにな」<sup>8</sup>ってしまった。異国で時間的余裕を持ちながら、念願の小説執筆に存分の力を傾けてみたいという望みも叶えられなかったのである。

加えて、中島敦は南洋に到着して早々に官吏生活に嫌気がさし、教科書編修という仕事への情熱も失っていったのである。昭和10年代の日本は、帝国主義的な拡張を進める全体主義国家であった。日本の植民地政策の実態と島民たちの生活が見えてくればくるほど、その一端を担うことになる教科書作りという仕事への疑念と挫折感が大きくなってくるのである。

一見すると、中島敦の南洋行はこの様に挫折と失敗ばかりを味わった旅のようだが、凡そ八ヶ月の南洋滞在中、中島は公学校を見学したり、また近隣諸島の巡視を行ったことなどから、当地の現状を一定程度には把握できていた。『光と風と夢』における資料調査などを通じて作られた物語の舞台に過ぎない〈南洋〉とは決して一致しない、〈現実の南洋〉へ飛び込んだ中島は、現地の島民と直接触れ合う日々を過ごした。この体験によって感じた南洋の〈不可解〉と〈境界性〉が、帰朝後の彼の精力的な創作活動に多大な影響をもたらした。

また、南洋体験とフィールドワークをもとにして書き上げた南洋物（作品『南島譚』<sup>9</sup>『環礁——ミクロネシア巡島記抄——』<sup>10</sup>、日記や書簡など）は、南洋体験から生まれた挫折感と無力感が主眼として描かれていると言われるが、現地での中島が体験した〈境界性〉と文化浸透への疑念も読み取れる。更に、当時の南洋が文明と未開の〈境界〉的な位相に置かれていたという現状への作者の複雑な感情は、南洋物から改めて見てとれる。

まず、作品『南島譚』と『環礁——ミクロネシア巡島記抄——』において、中島敦が感

じ取った南洋の<不可解>をよく読み取れる箇所を挙げてみたい。

(1)

さうして、この島民の心理や生活感情の不可解さは、私にとって、彼等に接することが多くなればなる程益々増して行く。(『雞』より、p. 242)

(2)

何故? 如何なる動機が此の老人をこんな状態に陥れたのか? どんな私の言葉が彼を怒らせたのか? いくら考へて見ても全然見当さへつかない。(『雞』より、p. 243)

(3)

南洋に四五年もゐて、すっかり島民が判ったなどといふ人に会うと、私は妙な気がする。椰子の葉摺の音と環礁の外にうねる太平洋の波の響との間に十代も住みつかない限り、到底彼等の気持は分りさうもない気が私にはするからである。(『雞』より、p. 243)

(4)

何故こんな詰まらない事をこんなに有難がるのか、却って此方が面喰つて了った位である。(『雞』より、p. 249)

(5)

あの時計自体よりも、あの時計の事件によって私の心象に残された彼の奸悪さと、今の此の雞の贈り物とをどう調和させて考へればいいのだらう。人間は死ぬ時には善良になるものだ、とか、人間の性情は一定不変のものではなく同じものが時に良く時に悪くなるのだ、とかいふ説明は、私を殆ど満足させない。その不満は、実際にあの爺さんの声、風貌、動作の一つ一つを知りつくして、さて最後に、それ等からは、凡そ期待されない此の三羽の牝雞にぶつかった私一人だけの感ずるものなのかも知れない。さうして恐らくは、「人間は」といふのではなしに、「南海の人間は」といふ説明を私は求めてゐるのもあらう。それは兎も角として、南海の人間はまだ／＼私などにはどれ程も分つてゐないのだといふ感を一入深くしたことであった。(『雞』より、p. 250-251)

(6)

何故、此の島には赤ん坊が生まれぬのか。(中略)では、何故だ。何故、赤ん坊が生れぬか。私には判らぬ。恐らく、神が此の島の人間を滅ぼさうと決意したからであらう。非科学的と笑はれても、さうでも考へるより外、仕方が無いやうである。(『寂しい島』より、p. 256-257)

(7)

何故若い島民の女が(それも産後間もないらしい女が)そんな気持になったか(中略)酷い侮辱を受けでもしたやうに、明らかに怒った顔付をして(中略)視線をむけもしなかった。怒ってゐる顔付ではなく、全然私を認めないやうな、澄ました無表情な顔であった(『夾竹桃の家の女』より、p. 263)

(8)

斯んな身体の少年が、どうして(未だに家柄の次には腕力が最もものを言ふ筈の)島民の間で衆人を懼れさせることが出来るか、誠に不可思議に思はれた。(『ナポレオン』より、p. 271)

(9)

あの強情な不貞腐れた少年が、一体どうしてそんな事をする気になったものか。(中略) どちらとも私には判らぬ。(『ナポレオン』より、p. 276)

以上の九箇所の引用文に示されたように、作家の南洋への戸惑いを表す言葉が少なくない。中島敦は生涯において異国を舞台にして多くの作品を創作した。『狼疾記』の主人公・三造が「あらゆる事柄(あるいは第一原理)を知り尽くし度い」という希求は実に作家の南洋に対する願望だと言える。にもかかわらず、「不可解」だらけの南洋行から中島が感じていたのは挫折感や無力感しかないように見えてくる。しかし、一人の南洋女性を形象化した作品『マリヤン』を考察すると、作家が南洋の<境界性>を認識することは、南洋や島民を理解する契機になったのではないかと思われる。

南洋庁が編集した『南洋群島要覧』には、当時の南洋の人口事情が明確に記録されている。南洋で一番文明化が進んでいたパラオ地方を例として挙げてみると、1922年に現地の日本人とパラオ人の比率はまだほぼ同一だったが、1935年から日本人の数が急増し、1941

年になるとパラオ人の数の約三倍まで上回った。加えて、日本人のうち、男性が女性の約二倍になっていた。こうした背景の中で、日本人と島民の間に生まれてきた混血児の存在は容易に理解できよう。中島は作品『夾竹桃の家の女』のなかで混血児に言及した一節がある。

実際、その若い細君は美人とって良かった。パラオ女には珍しく緊った顔立で、恐らく内地人との混血なのではなからうか。(p. 263)

よって、混血児が純血の島民に比べると一層奇麗に見えてくるのがわかる。だが、中島は作品の冒頭で非混血児のマリヤンの容貌を以下のように好評する。

マリヤンの容貌が、島民の眼から見て美しいかどうか、之も私は知らない。醜いことだけはあるまいと思ふ。少しも日本がかった所が無く、又西洋がかった所も無い（南洋で一寸顔立が整ってあると思はれるのは大抵どちらかの血が混ってゐるものだ）純然たるミクロネシヤ・カナカの典型的な顔だが、私はそれを大変立派だと思ふ。人種としての制限は仕方が無いが、其の制限の中で考へれば、実のび／＼と屈託の無い豊かな顔だと思ふ。(p. 282)

これと対照的なのは、マリヤンは「自分のカナカ的な容貌を多少恥づかしい」と考えている点である。現地の島民は大別するとチャモロ族とカナカ族に二分され、前者は後者とスペイン人との混血だと言われ、生活の様式はかなり先進的のようである。チャモロ族は石造の家に住み、服や靴などを着用して暮らしている一方で、カナカ族が床のある家を持ち、裸で暮らす人が少なくなるのはそれからかなり後の話なのである<sup>11</sup>。

中島敦は、マリヤンが自らのカナカ族の身分を恥づかしく感じた理由を主に二つにまとめた。一つは「彼女はインテリであって、頭脳の内容は殆どカナカではなくなっているからだ」；もう一つは現地での「温帯基準」と「熱帯基準」の共存によってもたらされた一種の混乱の故である。日本を含め、はやく発展を遂げた文明社会で馴染まれている「温帯基準」は、南洋の昔ながらの「熱帯基準」にぶつかり、現地での＜境界性＞現象を押し広めることを加速させたのである。

前述したように、未開への憧憬は中島がこの南洋行を決行する一つの要因になっている。だが、現地滞在中の作家が書いた葉書のなかに、このような一節がある。

自然の眺は豊かですが、どうも、まだ文化が恋しくて困ります。いっそパラオか、ずっと未開の島だったら、却っていいのですが。(1941年7月17日、山口比男宛、p. 567)

つまり、完全に文明化されている場所、あるいは未開状態のままで残され、異国情緒に溢れる場所が、中島にとって理想的であったと言えよう。南洋世界へ飛び込む前に、作家の想像上の島民像は『光と風と夢』から読み取れるように、「インテリ」という言葉などと無縁で力溢れた人種である。そのため、<カナカの容貌>と<カナカではない頭脳>の持ち主としてのマリヤンから中島が感じた違和感は大きいに違いない。

マリヤンは「私（注：中島敦）の良く知ってゐる一人の島民女の名前」であり、作家が南洋で親友となった民俗家・彫刻家・画家・詩人の土方久功（1900-1977）のパラオ語教師でもある。作中人物のH氏（注：土方久功をモデルにする人物）は、パラオ地方の古譚詩を収集し、日本語訳を付ける仕事に従事している。パラオの現地語には文字が無いため、H氏は島民を訪ね歩き、パラオの古譚詩をアルファベットで書き取って記録する方法で収集する。マリヤンにはその記録の添削をしてもらっていた。その際に、「私」が「ほう、英語が出来るのか」と感服したとの描写より、マリヤンは一般の島民と異なり、より<文明化>されている事が明白に読み取れる。さらに、H氏の説明によると、マリヤンは内地の女学校に二三年通ったことがあり、それにパラオでは有名なインテリ混血児（英人と土人）の養父を持ち、英語が出来るのも当然のようだ。

当時現地の教育事情を調べたところ、次の通りである。

三〇年間にわたる日本の支配下では、学校規則や科目、修学年数において若干の変遷はあるものの、基本的に初等教育においては、邦人移民の児童が小学校で学び、ミクロネシアの児童は公学校（本科三年、補習科二年）で国語教育を受けた。卒業後、優秀な学生へは木工徒弟養成所や看護婦養成所などの専門教育、酋長の子弟へは、日本での教育の道も用意されていた<sup>12</sup>。

よって、マリヤンは「酋長の子弟」として相当な家柄と内地教育に恵まれた島民だということになる。

一方、彼女の結婚生活は幸福なものではない。H氏の話によると、マリヤンには五歳の娘がいるが、夫は嫉妬などの原因で彼女に追い出されたから今はいないということである。しかし、中島はそれが「二人の頭脳の程度の相違」の故だと考えている。また、マリヤン

の家は他の島民の家と同じ外形をしているが、屋内のテーブルの上に厨川白村の『英詩選訳』と岩波文庫の『ロティの結婚』が置かれているのは、「私」にとって言うまでもなく予想外のことである。

さういふ雰囲気の中で、厨川白村やピエール・ロティを見つけた時は、実際、何かへんな気がした。少々いたましい気がしたといってもいい位である。尤も、それは、其の書物に対していたましく感じたのか、それともマリヤンに対していたましく感じたのか、其処迄はハッキリ判らないのだが。(p. 285-286)

英文学者・評論家の厨川白村によって書かれた『近代の恋愛観』（改造社、1922）はその時代のベストセラーとなり、厨川自身は恋愛至上主義を鼓吹し、当時の知識層の青年に大きな影響を与えた人である。訳本『英詩選訳』の第一巻と第二巻はそれぞれ1922年、1924年にアルスから出版され、多くの恋愛詩が収められている。なお、海軍軍人出身のフランス人作家ピエール・ロティの『ロティの結婚』では、イギリスの海軍士官ロティが、滞在先のタヒチでマオリ族の少女ララフと出会い恋に落ちるが、結局ロティはララフを置いて帰国を決め、捨てられたララフは苦悩の揚げ句、命を落としてしまう。

マリヤンの家に恋愛に関連する書籍が置かれているのは、彼女自身が恋愛について考えている証拠だと判断できよう。マリヤンのインテリ性は、「私」とH氏に賛美される原因となるが、彼女が結婚できなくなる主因にもなっている。これはH氏の話によって証明されている。

家柄の関係で、(パラオでは特に之がやかましい) 滅多な者を迎へることも出来ず、又、マリヤンが開化し過ぎてゐる為に大抵の島民の男では相手にならず。結局、もうマリヤンは結婚できないのぢやないかな、と、H氏は言つてゐた。(p. 287)

ただ、マリヤンが内地で教育を受けたとはいえ、「私」やH氏よりも更に豊富な知識を持ち合わせているという訳ではないだろう。つまり、H氏が彼女を「開化し過ぎ」と評価したのは、彼女が内地人である自分や友人の「私」よりも開化している故ではなく、普通の島民に比較すると必要以上に「開化」しているという意味においてなのである。

前述したように、日本の委任統治の下に生きている被統治者である南洋の島民は、初等の国語教育などを受ける権利を持ちながらも、内地人のように高等学校以上に進学することが殆ど許可されていない。卒業後、優秀な島民学生のため用意されている進路は、木工

徒弟養成所や看護婦養成所などの専門学校に入るより他に存在しない。

まとめるならば、当時日本の南洋教育対策として、日本語の読み書きができるようになり、一定程度の技術を身につければ、これが南洋庁が提唱する「開化」そのものなのである。こうした中で、マリヤンは言うまでもなく異例である。なお、1941年の南洋はもはや中島の想像上の南洋ではなく、複数の価値観が混乱している場所だ。マリヤンが住んでいるコロールという町は南洋で一番文明化が進んでいる所だとはいえ、熱帯基準と温帯基準が共存し、一種の混乱に満ちた文明と未開の＜境界＞的な位相に置かれていた場所でもある。これは『マリヤン』の中で明確に反映されている。

マリヤンの住んであるコロール（南洋群島の文化の中心地だ）の町では、島民等の間にあっても、文明的な美の標準が巾をきかせてあるからである。実際、此のコロールといふ街（中略）には、熱帯でありながら温帯の価値標準が巾をきかせてある所から生ずる一種の混乱があるやうに思はれた。（中略）此处では、熱帯的のものも温帯的のものも共に美しく見えない。といふより、全然、美といふものが、——熱帯美も温帯美も共に——存在しないのだ。熱帯的な美を有つ筈のものも此处では温帯文明的な去勢を受けて萎びてあるし、温帯的な美を有つべき筈のものも熱帯的風土自然（殊に其の陽光の強さ）の下に、不均合な弱々しさを呈するに過ぎない。此の街にあるものは、唯、如何にも植民地の場末と云った感じの・それであつて、妙に虚勢を張った所の目立つ・貧しさあかりである。（p. 283）

コロールの街には岩波文庫を扱つてゐる店が一軒も無い。（中略）とにかく、此の町は之程に書物とは縁の遠い所である。恐らく、マリヤンは、内地人も含めてコロール第一の読書家かもしれない。（p. 286）

前述したような、マリヤンの島民の身分と「内地人も含めてコロール第一の読書家」というインテリ性における＜境界性＞は、彼女が結婚できなくなる主因になっている。また、マリヤンの友達日本人ばかりで、内地人の商人の細君達との会話においてもいつもイニシアティブを持っているようである。H氏は「マリヤンが今度お嬢さんを貰ふんだったら、内地の人でなきゃ駄目だなあ。」と言い出した時に、マリヤンはしばらく返事せずについて、そして「でもねえ、内地の男の人はねえ、やっぱりねえ。」と言ってまた黙っていた。島民の男性と結婚する場合は彼女の「インテリ性」が不都合の原因になるが、一方で内地の男性と結婚する場合には彼女の「島民」であるという身分が問題になる。マリヤンは『ロテ

『ロティの結婚』について「昔の、それもポリネシアものことだから、よく分らないけれども、それでも、まさか、こんなことは無いでせう」と言い、現実の南洋は決してこんなものではないという不満の意を漏らす。

ここで、異人種の間における〈不可解〉への理解不能の現状を訴えるマリヤンの姿が見られる。さらに、「私」とH氏が一時内地へ帰る時に、「いずれ又秋頃に帰って来るよ。」と言うと、マリヤンは「内地の人といくら友達になっても、一ぺん内地へ帰ったら二度と戻って来た人は無いんだものねえ。」と答えた。このセリフに南洋と内地の〈境界〉に生きている一人の島民女性の苦悩と動揺が表される。『ロティの結婚』は『蝶々夫人』のような異人種の恋愛悲劇の系統に属する物語と言うならば、作品『マリヤン』はまさに二つの文明の狭間で揺るがされた恋愛悲劇の話だとも読み取れる。

中島敦は更に南洋物において、中島敦は〈温帯〉の侵入によって生まれてきた近代的な時間、病気などへの批判をも洩らしている。南洋は「潮気と暑気とのために懐中時計の狂ひ勝ちな」場所であり、「年齢を数へるといふ不自然な習慣が此の辺には無い」（『幸福』）土地でもある。中島は、この熱帯の大地で「一体、時間といふ言葉が此の島の語彙の中にあるのだろうか？」（『真昼』）と疑問に感じる。また、1941年9月2日付中島タカ宛の封書でも、「腹がへれば喰ひ、客がくれば喰ひ、淋しければ、喰ったもんださうだ。」と記している。このような年齢を数える習慣も、きちんと決めた食事の時間と回数もない島民たちが、科学と合理主義を至上とする近代文明を絶対的な存在として信奉するはずはないと、中島敦はしみじみと感じ取っている。

言い換えると、近代文明と産業発展に伴って生じた精密な時間概念は、温帯の文明が浸透しなければ島民にとって不必要なものだったのである。また、作品『幸福』の中で「此の島から遙か南方に離れた文化の中心地コロールには、既に、皮膚の白い人間共が伝へたといふ悪い病が侵入して来てゐた。」と書いており、本来南洋に存在しない「性病」や「空咳」<sup>13</sup>などの病気も〈温帯〉の侵入と共に、島民の健康を害するようになっていたことがうかがえる。統治者側の一官吏としての中島敦は自分たちのことを「文明人」と呼びながら、「土人が嫌ひだからではない。土人を愛するからだよ。僕は島民（土人）がスキだよ。」と1941年11月9日の中島タカ宛の封書の中に記している。よって、『狼疾記』の三造に託していた作家自身の島民への憧憬から、〈文明人〉としての自覚を持つようになったのである。また、この自覚のもとで客観的な目線を養うことができたことは、以下の引用文から読み取れる。

お前は島民をも見てをりはせぬ。ゴーガンの複製を見てをるだけだ。ミクロネシ



ヤを見てをるのでもない。ロティとメルヴィルの書いたポリネシアの色褪せた再現を見てをるに過ぎぬのだ。そんな蒼ざめた殻をくつつけてある目で、何が永遠だ。哀れな奴め！（中略）確かに、未開は健康ではない。少くとも現代では。しかし、それでも、お前の文明よりはまだしも澁刺としてゐはしないか。いや、大体、健康不健康は文明未開といふことと係はり無きものだ。現実を恐れぬ者は、借り物でない・己の目でハッキリ視る者は、何時どこやうな環境にゐても健康なのだ。（『真昼』より、p. 279）

即ち、最初の未開の南洋への憧憬が、南洋住民になってから次第になくなり、中島は島民らと直接に接触することによって真の南洋、つまり文明と未開の＜境界＞的な位相に置かれていた南洋に目覚めていった。こうした両義的な空間への複雑な感情は南洋物のみならず、帰朝後書き上げた重要な作品『李陵』からも読み取れる。では次に、南洋物と『李陵』の類似点を具体的に示してみたい。

#### 第四節 南洋行と『李陵』

『李陵』は中島敦が1942年（昭和17年）10月に仕上げた作品である。この作品の原稿を書きついで後、2カ月も経たないうちに作家は世田谷の岡田病院で長年の病魔に命を奪われてしまった故に、題名をつけぬままに、遺族から原稿用紙77枚の原稿が深田久弥に渡されたという。中島敦の残した紙片には、「李陵・司馬遷」「漠北悲歌」「莫北」「莫北悲歌」などの文字が書き散らされていたが、深田久弥は「出来るだけ私の主観を入れない、淡白な題を選ん」<sup>14</sup>で『李陵』と名づけたというのである。この作品は深田久弥の手を経て、1943年の『文学界』7月号に発表された<sup>15</sup>。

『李陵』は騎都尉<sup>16</sup>李陵、太史令<sup>17</sup>司馬遷、及び平和使者蘇武三人の男の生涯を描いた小説である。作品の構成面において考えてみると、第一章・第三章は匈奴との戦争で生け捕られ、その後胡地に暮している李陵と胡地で出会った蘇武の話であり、第二章は、李陵の行為を弁護した結果、宮刑に処されて『史記』の仕上げに没頭する司馬遷の話である。

まず、『李陵』と南洋物のそれぞれの舞台を比較してみたい。『李陵』の舞台である「漢朝一匈奴」について、漢武帝の支配の下で、発展の頂点を迎えた強大国家・漢朝は、周辺の異民族（匈奴）に対する優越感を抱いていたことは言うまでもないだろう<sup>18</sup>。これに類似しているのは南洋物の舞台である「日本—南洋」という関係構図なのである。当時の宗主国・日本が植民地・南洋に対して抱く感情は、恐らく匈奴への漢朝の優越感に近いものが

あると言えよう。

次に、中島と李陵それぞれ異国での遭遇における「不本意」について考察する。中島は「全く考へれば考へる程、僕は愚かな男です。折角与えられた一年間を思ふ様に使ひもせず、気も進まぬ、無理な仕事に身を任ねるのだから、全く気違沙汰」だと思い、「恐らく僕の幽霊は、書かれなかった原稿紙の間をうろつき廻ることでしょう。全く何もかも目茶苦茶です」（1941年6月28日、中島田人宛の手紙）と南洋生活にがっかりした様子を示す。また、横浜での暮らしは裕福とは無縁のものであったが、戦時下極端な物質不足の南洋の土地で、夏でさえ、病気に苦しむことになったのは中島の意志ではないと思われる。「（私は）自分の本当に望むことが、出来ないんだ。どうして本郷町のあの家を離れなけりゃならなかったんだ？あの家で平和な生活を、つづけては、どうして、いけないんだ？」（1941年8月22日、中島田人宛の手紙）と中島は自らに問いつづけたのである。加えて病弱のため、「何時でも、これで、全く、腐るよ。何一つ予定通りに出来な」（1941年9月2日、中島タカ宛の封書）だった。

このような自らの意志によって人生を構築できないという「不本意」は、『李陵』のなかにも頻繁に出てくる。中島は『李陵』を書くにあたって、典拠<sup>19</sup>とされる『漢書』の「李陵・蘇武伝」の大枠を守っているものの、様々な箇所では細微な書き換えを行い、独特な李陵像を仕上げた。ここで、注目したいのは、原典との相違点から李陵の「不本意」が非常に読み取れるという点である。例えば、李陵が五千の部下と共に危うきを冒すことを武帝に請願すると、武帝は当時の居延に屯していた強弩都尉・路博徳に李陵一行を迎えようという命令を出した。これは僅か五千歩兵しか供されていない李陵にとっては好都合とも言えるが、ここから思わぬ展開が始まる。この路博徳という者は李陵より年配であるのみならず、嘗て霍去病の部下として、軍功を揚げた老将である。彼は自分とは親子のような年齢差がある李陵に従うことが気に食わず、密かに「秋は匈奴軍には有利な時期なので、李陵と共にここで年を越し、来年の春を待つことにする」という手紙を都への使いに託した。これを見た武帝は李陵を卑怯な奴だと思い、激怒した武帝は路博徳と李陵それぞれに宛てて詔を下した。この詔の相違点は以下のようである。

『漢書』の「李陵・蘇武伝」で、「迺詔博徳吾欲予李陵騎云欲以少擊衆今虜入西河其引兵走西河遮鉤營之道」<sup>20</sup>（日訳：「博徳を廻って詔す。吾、李陵へ騎兵を予けんと欲す。云く、寡を以て衆を撃つ。今、虜は西河に入る。其に兵を引き西河に走り、鉤營（地名）への道を遮断せよ。」（日訳——筆者、下同）を記する。

一方、『李陵』では、この詔は次のように変えられている。「李陵は少を以て衆を撃たんと吾が前で広言した故、汝は之と協力する必要はない。今匈奴が西河に侵入したとあれば、

汝は早速陵を残して西河に馳せつけ敵の道を遮れ」という内容である。下線を引いた部分  
は中島敦が独自に創作したものだと考えられる。二通の詔の内容には大きな相違点は見あ  
たらないが、『李陵』では「李陵と協力しない」こと及び「李陵を残す」ことをはっきりと  
書き入れ、逆鱗に触れるとつい感情的に物事を処理してしまう、わがままな武帝像をより  
鮮明に我々の前に描き出したのである。又、武帝の見殺しと路博徳の非協力は李陵が後日  
匈奴との戦の中で惨敗してしまうことの伏線とも読み取れる。

李陵は騎都尉として西辺の酒泉・張掖に射を教え、兵士の指導役を担当していた。騎都  
尉は、奉車都尉、駙馬都尉とともに漢武帝のもとに仕え、秩は比二千石である。無論権臣  
ではないが、衣食の心配いらずの生活をしていた李陵は、わざわざ自ら進んで五千騎弱を  
率いて匈奴の地に入らなければ、後日の反逆罪にも問われずに武人として漢で無事に一生  
を終わらせられたかもしれない。李陵の運命はもしかすると武帝へ出戦を請願した時から  
違う方向に変わりつつあったのかもしれない。しかも、これを変える力を李陵は持たず、  
ただ不本意なまま運命に翻弄されることしかできない。更に、単于との戦いで全滅してし  
まった際には、「李陵・蘇武伝」には「陵與韓延年俱上馬壯士從者十餘人虜騎数千追之韓延  
年戰死陵曰無面目報陛下遂降」<sup>21</sup>（日訳：李陵は韓延年とともに馬に乗る。従う壯士は十何  
人いる。匈奴の騎兵数千があとを追いかけてきて、韓延年は戦死してしまった。李陵が申  
す。「陛下と会う面目がない」そのまま降参した。）を記する。一方、『李陵』では「(前略)  
李陵は、突然背後から重量のある打撃を後頭部に喰って失神した」ので、生捕られてしま  
うのである。

中島敦が創作した李陵は坳典となった『漢書』とは違い、自ら匈奴に降参するのではな  
く、「失神」してやむをえずに虜になってしまうのである。そのまま戦地で没してしまうなら  
、国のために命を落とすことは「忠」「義」とも世に賞賛されるはずだが、李陵は自ら命  
を絶つことができず、捕えられて匈奴の虜に降ったのである。時機があつたら単于の首を  
取って漢に戻るとというのが李陵の計画だが、これを知らない漢の武帝は敵に投降した李陵  
の行動に激怒し、彼の妻子眷属家財などの処分を行ってしまう。さらに、匈奴軍を卒いて  
漢軍と激戦した漢の降将の李緒に関わる知らせが誤って伝わったため、漢に残していた李  
陵の一族も悲惨な運命に遭ってしまう。家族の悲報を耳にした李陵は、武帝への怨恨の念  
を生じさせ、漢へ戻る理由もなくなったと考えた揚句、自分を士として礼遇してくれる匈  
奴の単于に降伏することにする。この一連の出来事は、殆ど李陵の意志で決められたもの  
ではないことは言うまでもないだろう。失神したがゆえに、やむを得ず匈奴の地へ連れて  
行かれた李陵の身に、無理しながら南洋行を決行し、不本意な異国生活を送らざるを得な  
い中島敦の影が落ちている。

最後に、南洋への「私」の目線と匈奴への「李陵」の目線について考察する。

例 (1)

(注：ある公学校の日本人先生の島民学生への強圧的な態度に対して) 私も亦畏敬と賛嘆の念を以て此の挨拶に聞入った。但し、それ以外に若干の不審の表情をも私は浮かべたのかも知れぬ。(『雞』より、p. 241)

武人たる彼は、今迄にも、煩瑣な礼のための礼に対して疑問を感じたことが一再ならずあったからである(『李陵』より、p. 515)

例 (2)

確かに、未開は健康ではない。少なくとも現代では。しかし、それでも、お前の文明よりはまだしも澁刺としてゐはしないか。いや、大体、健康不健康は文明未開といふことと係はり無きものだ。現実を恐れぬ者は、借り物でない、己の目でハッキリ視る者は、何時どのやうな環境にゐても健康なのだ。(『真昼』より、p. 279)

初め一概に野卑滑稽としか映らなかつた胡地の風俗が、しかし、その地の実際の風土・気候等を背景として考へて見ると決して野卑でも不合理でもないことが、次第に李陵にのみこめて来た。(『李陵』より、p. 514)

例 (3)

(注：狩り出されて行く夫を見送った後、間もなく他の男と肉体関係を結ぶ島民に対して) これも我々に判らぬことはない(中略) 斯うした気持の原型が我々の中に絶対に無いと言ふ方があれば、それは余りにも心理的な反省に欠けた人に違ひない。(『雞』より、p. 242)

たしかに、胡族の粗野な正直さの方が、美名の影に隠れた漢人の陰険さより遙かに好ましい場合が屢々あると思つた。諸夏の俗を正しきもの、胡俗を卑しきものと頭から決めてかゝるのは、余りにも漢人的な偏見ではないかと、次第に李陵にはそんな気がして来る。(『李陵』より、p. 515)

例 (4)

土人が嫌ひだからではない。土人を愛するからだよ。僕は島民（土人）がスキだよ。南洋に来てゐるガリガリの内地人より、どれだけ好きか知れない。単純で中々可愛い所がある。オトナでも大きな子供だと思へば間違ひない。昔は、彼等も幸福だったんだらうがねえ。（1941年11月9日、中島タカ宛の封書より、『中島敦全集3』p.631）

他に利用する目的は無く、唯士を遇するために士を遇してゐるのだとしか思はれない。とにかく此の単于は男だと李陵は感じた。（中略）さういふ一日の後、夜、天幕の中で今日の獲物を糞の中にぶちこんでフウ／＼吹き乍ら綴る時、李陵は火影に顔を火照らせた若い蕃王の息子に、不図友情のやうなものをさへ感じることがあった。（中略）無論、全体としては漢軍の成功と匈奴の敗戦とを望んでゐたには違ひないが、どうやら左賢王だけは何か負けさせたくないと感じてゐたらしい。（『李陵』より、p.509-510）

上記のように、南洋物と『李陵』における他国や異族などへの言及には、幾つかの類似点があったと言えよう。例（1）は、日本人先生が現地の学生に対する強圧的な態度への不審、南洋での日本文明の浸透や、中華文明の重要な象徴——「礼」に対する疑問から、他国での「私」と「李陵」其々の母国への疑念が書かれている。例（2）は、「私」の目に映った未開と文明の境地にある南洋から感じた澁刺で健康とも言える性質と、＜李陵＞が感じた野蛮社会の匈奴における合理性から、中島敦の異文化への理解する姿勢が感じられる。例（3）は、南洋物には島民の気持ちの原型が日本人の中にもあるかもしれないと書かれているが、『李陵』において、匈奴の粗野な正直さを卑しきものにするという偏見への反論から、この作品で他国や異族への理解が進んだと考えられる。例（4）は、南洋の島民への愛情を示す「私」と、「何時の間にか此の地に根を下ろして了った数々の恩愛や義理」を覚えた李陵像が見られる。多数の挫折と＜不可解＞に遭遇したものの、中島敦の南洋行への肯定的な姿勢が以上の例から読み取れる。

さらに、異国で決して愉快とは言えない目に遭い、中島は「人間がひとりぼっちだなどということは今更、判りきつ」（1941年6月28日、中島田人宛の手紙）ていた。この「ひとりぼっち」という一言から読み取れた作家の寂寞感『李陵』からも感じられるが、李陵は「あ々我もと天地間の一微粒子のみ、何ぞ又漢と胡とあらんやと不図そんな気のする」と感嘆し、南洋への理解し難しさのようなものを匈奴に抱きながらも、最後には匈奴を理解し、そこに溶け込もうとする。こうした意味で、中島が当時の状況をもとにして書き下

ろした南洋物は、『李陵』の系譜に連なるといえる。

作品『マリヤン』の主人公・マリヤンと同様に、李陵もまた二つの社会に揺るがされる存在である。蘇武と司馬遷のような自らの信念に忠実しながら行動する「絶対者」と違い、中島敦は漢と匈奴の間で動揺しつつある<境界者>としての李陵像を作り出したのである。

木村一信は、「いずれも彼等は絶対者の傍にあって、その絶対者からの逆反照によって自己とは何かを把握することに腐心していることがわかる。つまり、作品の主人公達は自分を在るがままの存在として肯定する根拠を有しておらず、それゆえ、他者との関係においてしか自己存在を確めえないという傾向が見られるのである。他者との関係における自己存在の捕捉という視点を設定すること自体のうちに、作家の主たる関心、主人公に付与しようとするテーマが窺える。」<sup>22</sup>と指摘する。

李陵はまさしく木村一信が指摘したように、他者との関係によって自己存在を確かめている人物であり、漢と匈奴の<境界>に生きながら自我を認識するように努めている存在でもある。「飛将軍」李広の孫として、また騎射の名手として知られる李陵は、名将としての高いプライドの持ち主であり、臆病な男だとは考え難い。武帝が李陵の一族を無残に殺害することがなければ、彼は変節することもなかったかもしれない。従って、李陵の寝返りには武帝の性格に起因していると考えられるが、李陵は自分が変節した原因を凡て武帝に帰することができず、自分が取った行動に常に疑問を持っている。匈奴の右校王と単于の婿になっても、李陵は「心は未だにハッキリしない」と感じ、また「此の匈奴の俗に化した終生安んじてみられるかどうかは、新単于への友情を以てしても、まださすがに自信が無い」と不安や動揺を示している。李陵が匈奴で蘇武と再会する時に感じた圧倒的なく絶対性とは、恐らく彼自身のこうした不安や動揺に繋がっているだろう。蘇武は匈奴に投降し、裕福な生活に恵まれることより、むしろ荒れ果てた北海の地で羊を放牧するほうを望んだ。彼の「清冽な純粋な漢の国土への愛情それは、義とか節とかいふ外から押しつけられたものではなく、抑へようとして抑へられぬ、こん／＼と常に湧出る、最も親身な自然な愛情」である。蘇武のその感情は漢の中央政府に対するものと言うよりも、漢そのものへの尊敬と未練である。

一方、武人の李陵は、文官に治められている漢と離れて以降、次第に匈奴の社会に慣れ、融け込んでいくのである。漢が新しい統治者・昭帝を迎え、匈奴と再び友好関係を結ぼうと動き出す際に、李陵は一度帰国の機会を与えられたが、「又辱しめを見るだけのことはないか?」と思い、動揺しながらもやはりここで帰国の誘いは断った。つまり、漢の騎都尉であった李陵は匈奴へ親しみを感じるが、匈奴の右校王になった後は完全に現地に溶け込むことができず、逆に漢への未練を持つようになる。言い換えると、李陵は漢と匈奴の

間で揺れ動く<境界者>である。

中島敦が『李陵』を創作する昭和10年代は、国際形勢も日本国内の雰囲気も次第に陰悪なものになり、日本国内では「天皇への忠誠」及び「万世一系」の絶対性を強調する狂気じみた宣伝ブームが生まれた時代である。敵に投降行動を取る李陵は、当時の日本政府が望んでいる「忠誠勇武」の兵士像と比較する時、望ましくない存在に違いない。しかしながら、中島は『李陵』において、一方的に蘇武を英雄化し、李陵を臆病な「逆賊」扱いすることもせず、かえって漢と匈奴の境界に生きている、一種の「認識者」の李陵像を創作した。

川口久雄は「天地間の一粒子——中島敦の『李陵』」の中で、李陵と「外国に使して君命を辱しめなかった」蘇武と比較しつつ、こう書いている。

投降し虜囚となった李陵は、それ以後中国歴朝の専制君主の治下にあつて政治的に無視され否定され続ける。その風をうけて、我が国の歴代の社会にあつても、殆ど故事としてさえもとりあげられなかった。そして蘇武漢節の故事のみがとりあげられ語りつかれた。『菅家文草』の詩人も、『和漢朗詠』の編者も、祖父の李広は讃えても李陵をとりあげず、蘇武雁札をくりかえしとりあげても、李陵死闘をおくびにも出さない。敦の『李陵』の訴えの強烈さは、こうした中国・日本の歴史的な精神風土にあつて、その通念をくつがえしたことにあるのではないか<sup>23</sup>。

南洋体験から得た<境界性>への認識が、中島敦に<絶対性>を重んじる「通念」を覆す力を与えたのである。作家の匈奴社会への理解と独特な李陵像を仕上げた背景の中に、1941年の南洋行の影が見られる。

#### 第五節 終わりに

本来の中島敦の南洋論は植民地関係や原典分析などを対象にして執筆された物が多いが、本章は作家が現地で認識した<境界性>を主な視点にして、南洋物の分析及び帰朝後に書き下ろした作品『李陵』との関連性を考察してみた。

まず、中島はサモア島でのスティーブンソンの晩年生活を描いた長編小説『光と風と夢』を通じて未開社会への憧憬を示し、それに体調・創作や経済問題などの原因も加えて南洋行を決行した。作家の想像上の南洋と島民像は、生气や情熱に溢れている一方、未開や無知のイメージが強かった。にもかかわらず、想像上の南洋と決して一致しない現実の南洋

で、作家は多数の挫折と〈不可解〉に遭遇した。それ故、南洋行で味わされた失敗が中島の文学世界に大きな刺激を与えたという見方も少なくない。

しかし、南洋物の一つの作品『マリヤン』を考察するにあたって、一人の島民女性に接触する際に作家が認識した〈境界性〉は、こうした〈不可解〉だらけの南洋世界と向き合う良い契機になっていることがわかる。更に、中島は当時の南洋が文明と未開の〈境界〉的な位相に置かれ、温帯基準と熱帯基準の共存で一種の混乱に満ちている現状にも目覚めた。中島は南洋へ向かう前は常に「借り物」で周囲を観察していたが、南洋滞在中に「己の目」で見る者になるよう決心がついた。

即ち、この南洋行を通じて作家としての中島敦の心境が変化したのみならず、中島文学の根底をなす作品主題もまた大きな変貌をとげたといえる。なお、南洋物と『李陵』における二つの舞台および作中人物の視線の類似点より、こうした〈境界性〉への複雑な感情が、南洋物の他に『李陵』からも読み取れた。漢と匈奴の間に生きている李陵はマリヤン同様、一種の〈境界者〉である。昭和10年代の戦争背景のもとで、中島が〈境界者〉の李陵像を作り上げたことは、一見すると不思議なようにも思われるかもしれないが、実際はその原点に南洋行が存在しているのだ。

注：

<sup>1</sup>小沢秋広『中島敦と問い』河出書房新社、1995年6月、p.222

<sup>2</sup>原題は「ツシタラの死」だったが、後ほど出版側の要請で「光と風と夢」に改称され、また発表当時は紙不足により雑誌が薄くなっており、著者による一部削除及び短縮を経て掲載されている。第十五回芥川賞の候補に挙げられるも落選した。「ツシタラ」はサモア語で「物語を語る人」という意。この作品は、1942年（昭和17年）7月に筑摩書房によって出版された、中島敦の処女集『光と風と夢』の中に収められたのだ。他に、『古譚』四篇、『斗南先生』、『虎狩』がある。

<sup>3</sup>「僕は今迄の島でヤルートが一番好きだ。一番開けてみないで、スディヴスンの南洋に近いからだ」1941年10月1日中島タカ宛の書簡より

<sup>4</sup>『光と風と夢』の材源調査を主題にする論文は、岩田一男の「『光と風と夢』と Vailima Letters」(『一橋大学研究年報人文科学研究 I』1959年5月)などを参照。

<sup>5</sup>1941年11月9日の中島タカ宛の封書より

<sup>6</sup>ポール・マッカーシー・オクナー・深山信子「中島敦のマイクロネシア、そして戦争体験」(『世界文学のなかの中島敦』所収、せりか書房、2009年12月)

<sup>7</sup>高橋英夫・勝又浩・鷺只雄・川村湊編『中島敦全集別巻』筑摩書房、2002年5月、p.228

<sup>8</sup>中島タカの「思い出すことなど」より

<sup>9</sup>1942年11月に今日の問題社より出版された『南島譚』は中島敦の第二創作集である。この中に、『南島譚』『環礁——マイクロネシア巡島記抄』『悟浄出世』『悟浄歎異』『古俗』『過去帳』がある。『古俗』以外はすべて本書によって初めて発表された。「南島譚」という総題の下に、『幸福』『夫婦』『雞』があり、「環礁——マイクロネシア巡島記抄」という総題の下に、『寂しい島』『夾竹桃の家の女』『ナポレオン』『真昼』『マリヤン』『風物抄』がある。

<sup>10</sup>木村一信は『昭和作家の〈南洋行〉』において、『環礁——マイクロネシア巡島記抄——』を次のように高評した。「中島の代表作と言われる「山月記」や「弟子」「李陵」と比べても遜色のない佳品だ」(世界思想社、p.53)

<sup>11</sup>「南洋群島とはどんな所か」を参照(『南洋群島写真帖』所収、小菅輝雄編、南洋群島協会、1978年5月)

<sup>12</sup>松本和子『マイクロネシアの日本語』より(『日本語学』Vol.29-6、明治書院、2010年6月)

<sup>13</sup>原文は次のようである：「その病には二つある。一つは、神聖な天与の秘事を妨げる怪しからぬ病であつて、コロールでは男が之にかかる時は男の病と呼ばれ、女がかかる場合は女の病といはれる。もう一つの



---

方は、極めて微妙な・徴候の容易に認め難い病気であって、軽い咳が出、顔色が蒼ざめ、身体が疲れ、痩せ衰へて何時の間にか死ぬのである。」(『幸福』より)

<sup>14</sup> 深田久彌「中島敦の作品」より

<sup>15</sup> 「中島敦君は昨年十二月四日に亡くなられた。本誌に載せた『李陵』はその最後の作で、まだ草稿のまま、題さへついてゐない。中央公論二月号に載った『弟子』の元の題が『子路』であったから、いま仮りに僕が『李陵』と付けておいた。/中島君の原稿はいつも、殆ど一字の消しもない位、きれいな字であったから、それは推敲を重ねた草稿を清書されたからであらう。『李陵』は所々判読に迷ふやうな、文字通りの草稿で、中島君にすればまだ直したい所があったのであらうが、君の生命が遂にそれを許さなかった。校正が出てから、二ヶ所相当長い脱落箇所を発見したが、もう時日がないので、いづれ本にでもなる時、補正することにする。その他僕の考へだけで判読した所も多く、幸ひに大過なからんことを願つてゐる。」(深田久彌「故中島敦君」より)

<sup>16</sup> 騎都尉(きとい)は前漢以降の官職名。前漢においては、光禄勳(郎中令)に属し、官秩は比二千石であった。

<sup>17</sup> 太史令とは、天文星暦や国家の記録をつかさどる官。

<sup>18</sup> 政治面において、高度の中央集権制度が実施され、秦の制度を漢の制度に変えることに成功する。また、経済面において、水利施設を完備させ、高度の農業技術を普及させる。さらに、製塩・鑄鉄・造幣の権力を奪い返す。軍事面では、最終的に強敵・匈奴に勝つことができた。文化面では、儒学を国学にし、王権思想を強化する政策をとるのである。『中国通史』第二冊(范文瀾編、人民出版社、2009年)から抜粋し、論者が訳したものである。

<sup>19</sup> この作品の典拠は、佐々木充の研究(『中島敦の文学』桜楓社、1973年6月)を手始めに、今はかなり明らかになっているのだ。

<sup>20</sup> 『百衲本二十四史 漢書 四部叢刊史部』「李廣蘇建伝第二十四 班固 漢書五十四」漢書十七 民国19年8月 商務印書館(神奈川近代文学館所蔵)

<sup>21</sup> 『百衲本二十四史 漢書 四部叢刊史部』「李廣蘇建伝第二十四 班固 漢書五十四」漢書十七 民国19年8月 商務印書館(神奈川近代文学館所蔵)

<sup>22</sup> 木村一信『中島敦論』双文社、1986年2月、p.179

<sup>23</sup> 中村光夫ら編『中島敦研究』筑摩書房、1978年12月、p.174

付記：

『南島譚』『環礁』『李陵』からの引用は『中島敦全集1』による。封書と書簡からの引用は『中島敦全集3』による。

## 第六章 南洋表象と〈南〉の記憶

### ——『南島譚』と『環礁』を中心に

#### 第一節 はじめに

『南島譚』と『環礁——ミクロネシア巡島記抄——』（以下、『環礁』）は、中島敦の1941年7月から1942年3月までの約八ヶ月の南洋滞在体験や見聞に基づき書かれた短編集である。『南島譚』の表題の下に『幸福』『夫婦』『雞』の三篇、『環礁』の下に『寂しい島』『夾竹桃の家の女』『ナポレオン』『真昼』『マリヤン』『風物抄』の六篇が収められている。これらのはじめて所収された中島敦の第二作品集『南島譚』<sup>1</sup>は、『新鋭文学選集 2』として、1942年11月に今日の問題社から刊行された。

1941年3月末、中島敦はそれまで八年間勤めてきた横浜高等女学校を一年間の保留付きで休職し、6月28日に南洋庁<sup>2</sup>内務部地方課へ赴任するため妻子を残してサイパン丸で横浜を出航、7月6日に任地のパラオ諸島<sup>3</sup>のコロール島<sup>4</sup>に到着すると、翌日に初登庁した。現地の公学校や警察の制度を作り、島々の統治をするという南洋庁の主な仕事と異なり、中島敦の仕事は、南洋庁地方課国語教科書編修書記の肩書きが示すように、南洋群島<sup>5</sup>の現地人（大別すると、チャモロ人とカナカ人に分けられる）の子弟たちが通う公学校<sup>6</sup>で使用する「国語」（日本語のこと）教科書の編纂<sup>7</sup>であり、その準備としての学校視察や授業参観を行うことである。南洋滞在中の視察旅行は、全部で四回<sup>8</sup>となるが、中島敦は視察旅行で現地の俗習や現状を見聞し、これらの実体験を『南島譚』、『環礁』、「南洋の日記——昭和十六年九月十日ヨリ昭和十七年二月二十一日迄」や書簡<sup>9</sup>などに詳細に記録したのである。その中、ルポルタージュ風の『環礁』には、随所に出張旅行の途中のスケッチのような描写が見られる。従って、中島敦における南洋表象と〈南〉の記憶を考察するにあたって、とりわけ『南島譚』と『環礁』を詳論する必要がある。

一方で、これまでの先行研究において、『南島譚』と『環礁』を論及したものが比較的に数少ないことに加えて、作品の特徴を概観することに重点を置く傾向が見られる。例えば、『南島譚』『環礁』の特色に関して、奥野政元と和田博文は、それぞれ中島と南洋の人間との間に「同じ人間としての基盤そのものを共有し得ないところからくる」<sup>10</sup>不可解さの認識、両作に遍在している「不可解」を「不可解」のまま見つめようとする眼差<sup>11</sup>と指摘するが、両氏の論説を同じ観点に帰着することができよう。

また、『南島譚』『環礁』の舞台である南洋という〈場〉の独自性について、川村湊は「文字文化社会の「中国」と、無文字文化社会の「南洋」という対比」が中島敦の作品史の中

に現れてくると述べながら、中島が「幼少期から経巡ってきた日本内地、朝鮮半島、「満州」といった<アジア>とはまた違った世界」<sup>12</sup>としての南洋そのものに注目する。最近の論説を例として挙げると、山下真史は、現地で様々な予想外の出来事に遭遇した中島敦は自分が「所詮傍観者でしかあり得ない」と意識し、「島民の痛みをわかったように書く事への恥じらい、そして何よりも自分自身が<土人たちを不幸にする>日本人の一人であるという苦い認識」を持ちながら、そこから得た「それらの自己相対化の眼差し」<sup>13</sup>こそが、『南島譚』『環礁』の方法だと結論づける。

なお、昭和10年代は「南進ブーム」の黄金時代と呼ばれるが、この間に出版された南洋関係出版物は官庁出版物が圧倒的な比重を占めており、一方で個人による作品がそれほど多くなかった。日本人によって関連文学作品がたくさん書き残された朝鮮半島や台湾とは異なり、南洋群島は比較的日本の知識人との縁が浅いものであったといえるかもしれない。昭和30年代に編集された『世界紀行文学全集』の第13巻「樺太、朝鮮、台湾、南洋諸島編」（修道社、1960年）には、文学者ではない矢内原忠雄（1893-1961、経済学者・植民政策学者）の『南洋群島旅行日記』『ヤップ島旅行日記』や田口卯吉（1855-1905、経済学者・歴史家・実業家）の『グムの舞踏会』『ヤップの石貨』も含まれていることから、南洋群島を素材にして創作された文学言説はいかに少ないか、という現実を垣間見ることができよう。

ただし、南洋群島と関わった文学者は少ないとはいえ、南洋関連言説の存在を見逃してはいけない。中島敦と同時代の日本人作者によって書き下ろされた作品を考察することによって、その時代の南洋表象を正確に把握し、中島敦の『南島譚』『環礁』の位置付けと特徴がより明瞭になるためでもある。

本章では、まず、中島敦と同時代の南洋関連言説などを考察することで、その時代の普遍的な南洋表象を取り上げたい。その次に、中島敦文学において、『山月記』や『李陵』などの成熟度の高い作品と比較すれば、『南島譚』と『環礁』は文学作品としての知名度は未だにそれほど高くないため、これらの諸作を順番に分析し、そこに託された作者の<南>の記憶を究明する。ただし、『環礁』の『マリヤン』に関しては、すでに本論の第五章「南洋行に関する一考察——「南の空間」における<境界性>を中心に」のなかで詳しく論じられたので、ここでは繰り返さないことにする。

## 第二節 同時代の作品から見る南洋表象

前述したように、南洋群島での実体験を素材にして書かれた文学作品はそれほど多くは

ない。本節では、中島敦と同時代の〈南洋行〉体験を持つ日本人作家のみならず、ほかの日本人知識人が書いた南洋関連言説をも取り入れながら、その時代の南洋表象を把握していきたい。

まず、1941年5月から7月にかけて、南洋群島（サイパン、テニヤン、ヤップ、パラオ）へ旅し、この実体験をもとにして書かれた『赤虫島日誌』という作品を1943年5月に東京八雲書店から出した、石川達三（1905-1985）の〈南洋行〉をみてみよう。石川の〈南洋行〉の目的<sup>14</sup>について、作家自身は「南方への旅に出るために、私は殆んど何の準備もしなかった。むしろはっきりした目的さへ無かった。未知の未開の土地に対する単純な好奇心であったかも知れない。」<sup>15</sup>と軽快な口調で説明するが、現地到着早々、彼は「未知の未開の」島民と現地の風俗習慣に対して強い興味と関心を持つようになり、緻密に観察していたのである。

石川達三の南洋に対する眼差しには主に二つの特徴が見られる。一つは、南洋における日本委任統治のあり方への疑惑である。もう一つは、現地島民の現状——特に、文化的な貧困さ——をめぐる批判である。これらは、『赤虫島日誌』の前半に〈海軍省検閲済〉と注記されて収められている『航海日誌』『群島日誌』『赤虫島日誌』といった三つの「日誌」<sup>16</sup>からよく読み取れる。

1941年6月17日、石川達三は南洋神社に参拝した後、パラオ公学校を参観した。石川を迎えた公学校の校長はその時間を「唱歌の時間」にしたといい、高等科の島民の少女たちを唱歌室に集める。校長自身はオルガンを弾き、少女たちは歌い始める。これに対して、石川は少女たちが日本語で「愛国進行曲」や軍神広瀬中佐や児島高德の唄を歌わされているのを聞き、「日本の伝統を感じ得ないこのカナカの娘たちにとって、八紘一宇の精神や一死報国の観念が理解される筈はない」し、ただの「美しい鸚鵡の合唱」だと違和感を示している。さらに、軍歌の後、校長は「最後にひとつ校歌をうたおう」という。石川達三はその後の出来事を次のように記述する。

生徒たちは唱歌帳の頁をめくった。校長は白墨を握りながら拍子をとった。私は生徒の唱歌帳をのぞいて見た。五線紙におたまじゃくしを書いてその下に片仮名の歌詞をつらねてあった。コーラスははじまった。

みいつかしこきすめらぎの、深き恵みの露うけて、  
椰子の葉そよぐこの丘に、そそりて立てるまなびやは、  
日毎に集う我等の庭ぞ、あな嬉しやな、嬉しやな。

私は悲しくなって来た。元気なコーラスはますます元気に、楽しげに第二節に移った。

天恵うすきこの島に、盲人のごと産れきて、  
西も東も知らざりし、我等が眼にも日はさしぬ。  
みなまなびやの賜ぞ、あな嬉しやな、楽しやな。(『群島日誌』より)

石川達三は、日誌のなかでこの歌の「作者の支配階級意識に驚歎した」と明言し、嬉しそうに歌う少女たちを「涙なくして考えることはできなかった。」と書いている。さらに、石川は南洋群島における植民地支配の歴史を思索し、この少女たちに「かくも悲惨な民族の悲劇を教え自覚させる必要があるだろうか。こういう侮蔑的な歌をうたわせて恩を着せる必要がどこにあるか。」という感想に至っている。

スペインやドイツから日本に至って、外国支配によって本来の民族的独立性を奪われてしまった島民の現状にある程度の同情を示しながらも、石川達三は島民たちに「民族の悲劇」を自覚させる必要があるかと躊躇し、疑問視している。こうした疑惑の裏には、現地島民の文化的な貧困さをめぐる石川の批判が潜んでいると思われる。例えば、『群島日誌』には、自らの目に映された南洋島民の様子に関して、石川達三は

南洋島民の悲劇は、彼等が文字をもたなかったことに起因してゐる。文字のない民族は伝統をもたないのだ。(中略)カナカ族の黒人たちは裸の背に烈日を浴びて魚を捕へ、猿のやうに木登りをして椰子を取り、ただ今日の瞬間のみを獣のやうに生きてゐる<sup>17</sup>。

と素直に感想を述べ、文字を持たないことは伝統を持たないことに等しいと主張する。また、島民の衣装問題に着目し、現地が近代化から取り残された現状にも触れたのである。確かに、当時の南洋群島には複数の言葉が存在していたが<sup>18</sup>、文字はなかった。ただ、文字を持たない場所なら、必ず本当の〈伝統〉というものが存在しないという、石川達三のこの観点をもう少し吟味する余地がある。

石川達三の南洋での同行者で、東京のある私立大学の出身で祖父の代から南洋に住んでいる荒木耕一という人物の、南洋群島のほかの島はみんな日本化してしまったが、ヤップにはまだ古い風俗習慣がほとんど昔のままに残っているとの発言に対して、石川は次のよ

うに反論する。

しかし彼（注：荒木耕一——筆者）が言ふところの古い風俗習慣とは何であったか。男が赤い褌一つで居ること、女が腰蓑一つの半裸体であること、成育した女は首に黒い紐をかけること、男は婿に行き、財産は女から女へ伝承されること、母系社会であること。たゞそれだけであった<sup>19</sup>。

つまり、南洋群島には「古い風俗習慣」といった＜伝統＞が客観的に存在しているが、石川達三はそれを＜伝統＞として認めないのである。石川のこの現地への厳しい批判的な眼差しは、『赤虫島日記』のなかに散見されている。石川達三は「常に目的ある行動を要求されてゐるわれわれの日常から」脱出し、南洋群島での贅沢な自由な時間を期待していたようだが、実際、僅か二ヶ月の＜南洋行＞で彼が目にしたのは、「人文的にはむしろ興味の乏しい、退屈」で、日本と遥かに異なる「未知の未開の土地」であり、「蟻の這ひまはる畳に瘦躯を横たへた姿」を持つ「日本の南進政策の先端に於ける人間の有り様」だけなのである。

近代日本が南方（“外南洋”の東南アジア、“内南洋”の南洋群島を問わず）を「無知」「未開」「野蛮」と捉える視点は、公的な学校教育さらには各種のマスメディアを媒体として幼少年期から日本人の脳裡に深く繰り返して植え付けられていた。上述した段上から南洋群島を見下す視線は、むしろ石川達三個人に特有なものでないことは言うまでもない。

次に例として挙げておきたいのは、今やほとんど忘れ去られた、放浪の作家であり、「南洋通」とも呼ばれる安藤盛（1893-1938）の＜南洋行＞である。安藤盛は1932年から1937年までの間に五回<sup>20</sup>にわたって南洋へ旅に出かけた。一連の＜南洋行＞の主な目的について、二度目の南洋旅行の紀行を取りまとめて書かれた『南洋と裸人群』（岡倉書房、1933年11月2日）の「序」のなかで、安藤盛は次のように述べている。

旅行が私の生活の半分を、最近はしめてゐる。けれど旅行といふものは、学校へ入学したより以上の勉強になるので、かうしてつぎからつぎとつづけてゐるが——南洋群島を歩いて見て、いかに日本にとって重大なる地位をしめてゐるかがハッキリわかった。

南洋は満洲と共に、日本にとっては重大なる——生命線——だ。しかし、私はその重大なる理由はペンにすることを憚って、南洋の裸人群の生活を記録して、いさとか、南洋群島を未知の人々に資することにしたものが本書である。

つまり、南洋に関する知識が乏しい日本人読者のために、未知なる南洋島民の生活を記録することが、安藤盛の南洋紀行の主な目的である。当時の南洋表象を知る上で、これらの作品は重要な情報になっているが、中でも南洋への旅では、安藤は現地の女たちの生態に興味をひきつけられた。作品群のなかに南洋の女に関する詳細な描写、特に性に関する直接的な、また興味本位な表現が随所に見られる。例えば、1935年の三度目の南洋旅行を素材にして書き下ろされた『南洋記』（昭森社、1936年8月18日）には、南洋の女についてこう描かれている。

例（1）

カナカ土人の乱倫で、貞操観など全然持たないところから、我々のいふ『姦通』なる観念は通用しない。（p.71）

例（2）

この豚の仔をまだ十三四の少女から、子を抱いた女まで、小脇へかたとへたり抱いたりして歩いてあるばかりでなく、人間も何もなく一方の乳房を我が子へ、片方の乳房をその豚の仔に啜らせてゐる珍風景である。（中略）乳房を啜らせて、それから受けるところの、変態的な性の刺戟を食うためである。（p.79）

『南洋記』は、オセアニア研究家の山口洋児が『日本統治下ミクロネシア文献目録』の解説で、「五版以上版が重ねられている」と説明したように、安藤盛の著作としてはもっとも売れ行きがよかった著書である<sup>21</sup>。この作品の中で、安藤は南洋の女を観察し、性習慣をはじめとする現地の人々の習俗を批判的な眼差しで紹介したのである。また、南洋の文明化の問題について、安藤盛は島民が「原始的な生活の中へ、身も魂もとろけ込ませて」おり、南洋庁があるコロールに「すこしばかりは文明の風が吹いてゐる」と認識し、日本人という優越感が見え隠れしている。

さらに、昭和期の南洋には、日本人の人口数が島民の人口数を上回っていたのが紛れもない事実である。1936年（昭和11年）の南洋庁の調査<sup>22</sup>によると、「内地人」の55,948人に対して、島民（チャモロ族とカナカ族を含む）は50,524人に止まっている。こうした中で日本人と島民の間に混血児が生まれてくるのも全然不思議なことではない。ただ、混血児の存在については、安藤盛はかなり厳しい視線で観察していた。

この地上へ、混血児といふ、変態的な民族の存在することを、私としてはあまり望まない。悲しみの肉塊ではないか、それに重大なことは——国家が勃興するには、単一な血を持った民族の団結によってこそ初めてなされる。異人種の血がまじった民族は、国家として、果して、歓迎すべきであらうか——ただ、さう考へるだけだ。(p.105)

安藤盛によると、島民の血が混じった混血児は、単一民族国家としての日本の団結と発展を害する存在となる。これは、時代に合わせて世受けを狙ったとしか思えないほど常識外れの内容で、そこには南洋島民に対する愛情は少しも感じられない。島民を軽蔑し、文明人としての自負を堅持する観点は、当時のほかの南洋関連言説にもたくさん見られるが<sup>23</sup>、一方で、強い南方憧憬を持ち、島民や南洋の事情に同情と理解を示す日本人知識人が少ないながらも存在していた。

まず、横光利一や川端康成と共に新感覚派として活躍していた小説家・歌人である中河与一(1897-1994)の<南洋行>を見てみよう。中河は「南方の未開地が好きで、頹廢した歐洲文明などに対しては何の魅力も感じない」<sup>24</sup>といい、南方への強い憧憬の念を抱き、1930年に南洋群島を遍歴していた。この紀行を1934年12月20日に『熱帯紀行』として竹村書房より発刊し、さらに1940年『熱帯圏』と改題したものを第一書房から出している。それはいくつかの南方の小説と紀行文によって編集されているもので、旅行の所産と南方への憧憬によって成立している。

『熱帯紀行』において、中河与一は南洋世界を美しく描き、文明人としての自負や誇りを捨て、南洋島民の現状を高く賞賛している。例えば、まともな衣装もしなく、ほぼ裸の姿で人の前で現れてくる南洋島民に関して、中河はこう述べている。

#### 例(1)

裸形の人夫が大勢乗ってゐた。彼等はココア色の魁偉な身体に赤い褌をしめてゐた。これは醜行の記号か、それとも甘い思ひ出か、胸や腕や足に、十字架や、女の顔や、魚の入墨を入れたり、又耳たぶに穴をあけて、それをひっぱってゴムのやうな長い輪にして、それを頭に巻きつけたりしてゐた。皆、猛獳な顔つきをしてゐる。然し赤道に近いこのやうな烈しい光線の中では、實際彼等の野蛮さこそ、最も美しい。そして吾々の皮膚は余りにしなびて、どうにも刺戟が弱すぎるやうに思はれた<sup>25</sup>。(下線——筆者、下同)



例 (2)

カナカ族ののんきさに至っては、年中、褌と腰巻きとをしたきりで、如何なる魅力ある生活と服装とが流行して来ても、常に其れが自分達の褌や腰巻きには及ばないと考へてゐる事である。だから、彼等は新しい生活に何の誘惑をも感じない。

「着物なんて着てゐる連中は、畢竟彼等の身体が醜いからだ」

何時か彼等の一人が云ったさうであるが、大きい刀を腰に吊って、街を歩いてゐる彼等の姿を見ると、さう豪語するのが如何にも当然に思はれる<sup>26</sup>。

当時、南洋を見聞してきた多くの日本人は、南洋島民の衣装問題を現地の近代化と文明化の無さを裏付ける証拠の一つとして認識していたが、下線部が示したように、中河与一は島民の野蛮さを評価し、文明人の「吾々の皮膚は余りにしなびて、どうにも刺戟が弱すぎる」と批判する。これは、上述の例 (1) と例 (2) から読み取れる。

さらに、スペインの文化、ドイツの文化、近くにある米領グアムを通じてくるアメリカの文化、さらに日本の文化が南洋の「原始的の色彩の中で緩慢に入りまじってゐる」ように感じた中河は、石川達三と正反対の観点——「無論それは文化と名づけるほど高等なものでは毛頭ない。」——を提出し、南洋島民を凌駕する文明人の自負や誇りを完全に捨てたと見られる。こうした文明人の集団から脱出し、島民の立場で物事を判断する日本人知識人はほかにも見られる。戦前、美術界では川端龍子をはじめ、杉浦佐助、儀間比呂志、北川民次、赤松俊子（のちの丸木俊）らが南洋群島を訪れ、南洋美術協会が設立されるなど南洋に関心を向ける画家や彫刻家は多かった。

ここで、画家の川端龍子（1885-1966）の南洋関連言説を見てみよう。川端はサイパン、テニアン、ロタ、ヤップ、パラオの諸島を五十二日をかけて旅し、1935年1月1日から同月15日にかけて、『朝日新聞』に『南洋を描く』を掲載していた。そのなかで、川端は南洋島民の性的習慣の独特性を認めながらも、これらはすべて島民たちの本来の伝統に相應しい行動にほかならないと指摘する。

寧ろ南洋島民の淫靡的に伝えられる一面は、彼等の有りの儘を——それで有りったけの生活の表白にしか過ぎないのである。猥雑な種は寧ろ文化人に隠されているらしい。たとえばヤップの女人が人前で仔豚に乳房を与えつつある一事にしても、乳房の大を誇る彼女等の第一目的であることだが、それ以上の付度は——蓋し文化人が狎やテリヤを愛飼する裏の目的と同一であるとすれば、何もそうし

た淫習が南洋島民だけの特性でもあるまい。

まこと南洋の地を踏んで、たとえばヤップの裸女の生活にしてからが、その大自然にぴったりとした無垢の姿として、珍しく、美しく受感する以外には何物も無い。仮にそれに謀叛気を出すとすれば、寧ろ淫靡的な性念を此方が多分に持合わせていると云うものだろう<sup>27</sup>。

川端龍子は南洋島民の裸の姿が「その大自然にぴったりとした無垢の姿」と肯定し、現地の裸女を見て淫靡的な性念を持つのは<文化人>と自称する日本人のほうだと容赦なく喝破した。さらに、南洋の女が乳房を仔豚に啜らせるという行為に関して、川端は島民の本来の美意識の視点から、それが「乳房の大を誇る彼女等の第一目的」だと指摘し、それ以上の邪推——例えば、前述した安藤盛の「変態的な性の刺戟を貪るため」(『南洋記』)という批判——は「文化人が狆やテリヤを愛飼する裏の目的と同一であるとすれば、何もそうした淫習が南洋島民だけの特性でもあるまい」と、<文化人>自身の問題に帰着したのである。

中河与一と川端龍子のような、<文明人としての日本人>と<未開人としての南洋島民>という対立関係を絶対視せず、現地の習慣と伝統に理解と共感を示す日本人知識人が少ないながらも存在していた。とはいえ、実際、南洋群島の島民について、ほとんどの日本人は当時の日本の大衆文化のなかで描かれる島民のイメージをそのまま持ち、未開で、無知で、裸体で、好色である<野蛮人>だと理解していた。このようなステレオタイプな見方は、日本が委任統治を実施した直後の時点ですでに定着し<sup>28</sup>、その後、南洋滞在経験を持つ日本人は現地の日本人社会で暮らし続け、南洋社会との接触を持とうとしなかったため、このステレオタイプな南洋イメージはそのまま残っていた。

こうした中で、1941年から1942年に至るまでの南洋での実体験を素材にして書かれた、中島敦の南洋物(『南島譚』と『環礁』)の存在は注目すべきである。中島は現地の伝説や習俗などを取り入れながら、島民との直接的な接触によって客観的な南洋表象をスケッチしようとする。次の節では、中島敦の南洋物をめぐって緻密な分析と考察を行い、中島における<南>の記憶を明らかにしたい。

### 第三節 『南島譚』における<昔の南洋>

中島敦の作品群のなかに、題名に「譚」という文字が含まれているのは『古譚』(1941年4月)と『南島譚』のみである。『古譚』とは、古い昔の話ということである。これを総題

にした四つの昔話（『狐憑』『木乃伊』『山月記』『文字禍』）の舞台は其々であり、また主人公の身に発生した出来事もまちまちであるが、いずれも古来の伝説・記録に取材した話で、作者の実体験を素材にしたものではない。勝又浩が「中島敦にはその習作期から短篇を並べてそれらを一つの総題のもとに括るクセがあつ」<sup>29</sup>たと指摘したように、確かに中島文学にはいくつかの短篇が一つの総題の下に置かれるという傾向がある。中島のその「クセ」はある独特の体系志向に繋がり、彼の何らかの意図や意識の反映でもある。

これは『南島譚』からも見てとれる。『古譚』と同様、『南島譚』を総題にした三つの物語『幸福』『夫婦』『雞』はすべて中島敦の南洋の個人体験とは無関係で、先行テキストのキャラクターを『南島譚』の舞台に登場させたのである（ただし、『幸福』の場合だけは、先行テキストにおける周の尹氏とその家の下僕を南洋島民と入れ替えた<sup>30</sup>）。そのうち、『幸福』は中国古典文学作品『列子』より素材を仰いだもので<sup>31</sup>、『夫婦』はパラオの集会所（アバイ）に描かれた絵物語を下敷きとしている<sup>32</sup>。『雞』は当地で知り合った民俗学者・彫刻家である土方久功<sup>33</sup>の記録を用いた作品である。

また、三つの作品には一つの共通点が潜んでいる。これは、作品の舞台はいずれも＜昔の南洋＞となっていることである。よって、『幸福』『夫婦』『雞』を『南島譚』という総題の下に置かれているのは、昔の南洋表象を記録しようとする中島敦の創作意図に基づくものである。1942年8月31日付、『文学界』編集部庄野誠一宛の中島敦の書簡に、

先日お送り申上げました原稿の下書を昨日読返して見ました所余りの酷さに我乍らいやになって了ひました。殊に二番目の「夫婦」と題するものなど、全く冷汗が出ます。どうしてあんなものをお送りしましたものが、さぞご迷惑なすったことと存じます。

それで、甚だ勝手な事ばかり申しますが、其の後書いて見ました短いもの二つ（やはり南洋もの）を別便でお送り致します故あの「夫婦」の代りに、その中の一つをお選び下さるやう（もし採れる程度のものでしたら）願ひしたいのです。

（『中島敦全集 3』 p.668）

とあって、『南島譚』という総題の下にある『幸福』『夫婦』『雞』の三篇<sup>34</sup>は1942年8月下旬には脱稿、『文学界』に送付されていた事が判明し、また「短いもの二つ」とは『寂しい島』と『マリヤン』を指すことがわかる。南洋から帰朝後の中島敦は庄野誠一に『南島譚』三篇の原稿を送ったのは、自らの南洋物に対してある程度の自負と期待があったからなのであろう。ただ、『南島譚』にせよ、『環礁』にせよ、文学作品としての知名度がそれほど

高くないため、諸作の内容を簡単に確認しながら考察してゆく必要がある。

まず、『幸福』は次のような物語である。これは、「昔、此の島に一人の極めて哀れな男がゐた。」という一節から始まり、島一番の貧乏人で、醜い外見で周囲から嘲笑される召使と彼の主人たる島の第一長老との間に起きた奇妙な話であり、原稿用紙15枚あまりの短編である。この召使は、「怠け者の揃った此の島の中で、此の男一人は怠ける暇が無い」と言われるほど、女性の仕事<sup>35</sup>以外のあらゆる卑しい仕事を任せられ、朝から晩まで命がけで働いていた。ウドウド（パラオ地方の貨幣）など一つも持っていないため、これによってはじめて贖うことの出来る妻を持てるわけがない。しかも身分が最も卑しいので、長老の前を通る時でさえ、立って歩くことを許されず、匍匐して膝で歩くしかない。彼は自らの運命を格別辛いとは思わず、いわゆる「足るを知ること斯くの如き」人間だが、やはり病や労働の苦しみを少しでも減ってほしいと島の神々に祈願したところ、毎晩奇妙な夢を見るようになる。夢世界の中で、この男は自分の主人たる長老になり、何の不自由もない生活を送っている。彼は大いに驚き、夢の中ながら夢ではないかと疑い不安でたまらない。翌日目覚めたら、やはり今までと同じ子屋に住んでいるが、それ以降、毎晩、長老となる夢を見ている。そして、この召使はいつの間にかでっぷりと太り、生き生きとして元気いっぱいに見えてくる。

一方、この長老は、圧倒的な権勢と財産を持ち、人々の想像以上に贅沢な生活を送っていた。召使が長老になった夢を見た頃から、長老はその惨めな貧しい召使に変身してしまった夢を見始める。ありとあらゆる仕事を課せられた結果、長老は次第に痩せ衰え、空咳までするようになる。元気になった召使を見て不思議に思う長老は、召使から夢の真相を聞いて「夢の世界が昼の世界と同じく（或ひはそれ以上に）現実であることは、最早疑ふ余地が無い」と思うようになる。しかし、長老の夢のことを聞いた召使は「夢が昼の世界よりも一層現実であることを既に確信し」、特に驚かなかった。

この作品で注目すべきなのは、召使に関する描写（特に、外貌と性格）および長老（主人）と召使（奴隸）が夢の世界における身分と境遇の逆転である。まず、作中において、長老の外貌に関してはあまり言及されていないが、一方で、召使のほうは詳しく描写されている。

髪の毛が余り縮れてもをらず、鼻の頭がすっかり潰れてもをらぬので、此の男の醜貌は衆人の顰笑の的となつてゐた。おまけに唇が薄く、顔色にも見事な黒檀の様な艶が無いことは、此の男の醜さを一層甚だしいものにしてゐた。(p.221)

南洋群島の事情を熟知している矢内原忠雄は『南洋群島の研究』（岩波書店、1935年10月3日）のなかで、南洋島民の外貌についてこう書いている。

南洋群島の島民は通常ポリネシア人、メラネシア人、マレー人等の雑種と解せられ、諸島によってその混血の組合わせ及び程度を一様にしない。或は軀幹長大なるものあり日本人位の大きさのものもあり、皮膚暗褐色なるあり黄褐色なるあり、頭髮滑かなるあり縮れて居るのもあり、島々により全体的印象を多少異にするのみならず、同じ島の住民の間にも顕著なる体型の差異を見出す。（＜第四節 人種＞p.12-13）

下線部で示されたように、『幸福』において、南洋島民のなかで一番醜い人間と造形された召使は、矢内原忠雄が描写した現地島民の平均的な顔立ちの特徴をも備えているのが事実である。召使は最も貧しい暮らしを送り、物置小屋の片隅に住み、犬猫の餌しか食べられず、家中のあらゆる卑しい勤めを強いられているにもかかわらず、自分の生活に満足している<sup>36</sup>。すなわち、彼には従順の精神が深く浸透しているのである。この従順性は召使の性格上の特徴のみならず、ほかの南洋島民にも共通している。例えば、「南洋通」と呼ばれる安藤盛は『南洋と裸人群』（岡倉書房、1933年11月2日）において、「彼等（注：南洋島民——筆者）には何の野心もない。」（p.214）と指摘している。また、『岩波講座 近代日本と植民地① 植民地帝国日本』（大江志乃夫ら編集、岩波書店、1992年11月5日）のなかにも、南洋島民の従順性について次のように述べている。

同じく日本の植民地だった朝鮮、台湾が伝統的に中国文化圏に属し、日本とかなりの文化的類似性をもっていたのに比べ、ミクロネシア人は技術的にはまだ未発達段階にあり、比較的従順で、外国支配に抵抗したこともなく、大洋に散在する島々に離れて暮らしていた。（p.189-190）

ミクロネシアにおける日本の統治は、現地住民の反対、日本人の不満、外国からの批判などに悩まされたことがなかった、といえるだろう。ミクロネシアの人々は、日本の統治に対してなんらの抵抗をも示さず、南洋庁の職員や増大する日本人移民に対して暴力をふるうこともなかった。（p.195）

以上、主に『幸福』の召使の外貌と性格を考察するにあたって、第一に、極端な醜貌と

いう要素を除き、召使の外貌は一般的な南洋島民に一致している；第二に、性格の面においては、召使はほかの島民と同様、従順で到底支配者に逆らうことができない人間である。中島敦が召使を『幸福』の主人公に設定したのは、まさしくこの人物を南洋島民の代表として造形したかったためである。『幸福』の終盤に、中島敦は物語をこう締め括る。

今は世に無きオルワンガル島の昔話である。オルワンガル島は、今から八十年ばかり前の或日、突然、住民諸共海底に陥没して了った。爾来、この様な仕合せな夢を見る男はパラオ中にみないといふことである。(p.228)

『幸福』の創作時期は 1942 年である。「今から八十年ばかり前の或日」といえば、1860 年前後となる。つまり、南洋群島が独立自主を失い、スペインの勢力下に置かれた時期である。その後、南洋群島はドイツに買収され（1899 年）、さらに、日本の委任統治領（1919 年）となった。戦後は信託統治領としてアメリカに移り、1994 年になってようやく独立を取り戻した。南洋は長期間にわたって外国に支配されていたが、「今から八十年」前にスペインの支配勢力が入り込んでから、現地における支配と被支配の構図がすでに急変し、『幸福』の召使のような低層階級の島民たちは再び被支配者から自らの土地の支配者に逆転する機会がなくなったのである。中島敦は、物語の舞台であるオルワンガル島が「突然、住民諸共海底に陥没して了」い、「爾来、この様な仕合せな夢を見る男はパラオ中にみない」と書いたのは、植民地化されて以来、＜支配－被支配＞の逆転の不可能を暗示していると考えられる。

『幸福』と同様、『夫婦』と『雞』のなかにも、＜昔の南洋＞が点描されている。『夫婦』はパラオ本島の島民なら誰でも知っている、ギラ・コシサンとその妻エビルの話である。ギラ・コシサンは大変大人しい男で、「かかあ天下」で知られている。一方で、エビルは浮気者であり、大変な嫉妬屋でもある。彼女は村のあらゆる女に向かって「ヘルリス」を仕掛けて勝つため、その情事は結果からみれば正しいものとなるしかない。ある日、二人の部落に、リメイという女性が「モゴル」に来た。リメイはギラ・コシサンと恋に落ち、さらにヘルリスでエビルに勝った後、ギラ・コシサンと一緒に自分の部落へ戻ってしまう。これを知ったエビルは散々暴れてみたが、まもなく妻を亡くしたばかりのある島民男性と男女関係を結ぶ。結局、二人ともそれぞれの幸福な後半生を送ったとのことである。

この物語において注目すべきなのは、昔の南洋が表象される習俗への言及で、全部で二箇所確認できる。一つは、「ヘルリス」である。ヘルリスとは、昔のパラオ地方の女同士の間起きた喧嘩のことである。恋人を取られた（あるいはそう考えた）女は、相手のとこ

ろへ押しかけ、みんなの前で相手に戦いを挑むのである。口喧嘩のみならず、腕力をもって勝負を決することも度々ある。もう一つは、「モゴル」という制度である。昔のパラオでは、男子組合の共同家屋にほかの部落から未婚の女が泊まり込み、家事しながらも娼婦のような仕事をするのである。

ただ、「ヘルリス」にせよ、「モゴル」にせよ、いずれも昔の南洋の習俗にほかならない。中島敦の南洋滞在中のパラオ地方では、ヘルリスのような恋愛トラブルはあったが、『夫婦』の最後に、「最近コロールの町に出て購めたに違ひない・揃ひの・真青な新しいワイシャツを着込み、縮れた髪に香油をべつとりと塗り付けて、足こそ跣足ながら、仲々ハイカラないでたち」でハモニカを吹きながらそのトラブルを見る「現代風な青年」が描かれ、当時のパラオではすでに昔の南洋の価値観が失われていることを暗示している。また、未婚の女性の男性への奉仕といわれる「モゴル」は「<sup>どいつ</sup>独逸領時代に入ると共に禁絶されて了ひ、現在のパラオ諸島には其の跡を留めて」いない。現地において近代化の波が押し寄せてゆくにつれ、「モゴル」のような、＜文明人＞の倫理観と道德観に反する南洋独特な習俗（つまり、昔の南洋の記憶）はむろん伝承されることは不可能である。こうして、植民地化されて以来、次第に消失してゆく昔の南洋の習俗や価値観に対して、中島敦は＜文明人＞の立場から差別的な眼差しを持たず、淡々と自らの疑惑を物語っているだけである。このような視線は、『雞』においても見られる。

『雞』の素材になった話が土方久功のエッセイ『雞』（『土方久功著作集』第六卷所収、三一書房、1991年11月15日）に書かれている。土方久功自身もエッセイのなかで、それを裏付けるような話を書いている。

もう大分前に亡くなった中島敦は、パラオに来ていた頃、毎日かかさず私の家に入りびたっていた。そして私の日記帖をあちこち引きずり出しては読んでいたが、時々「土方さん、この話、僕にくれませんか」と言った。「ああ、どうぞ」と私は答える。こんな話を、話のまま私が持っているよりも、敦が何かの材料に使ってくれた方がいいにきまっているから<sup>37</sup>。

中島敦は、土方久功の体験談を素材として取り出して自らの『雞』を創作し、新たな主人公像を造形した。中島の『雞』と土方の『雞』との共通点および相違点を次のようにまとめてみた。

まず、両作の共通点は以下のようなものである。

- (1) 主人公の老人は民俗学者の「私」の民俗調査の助手であるという設定
- (2) 「私」が病気になった老人の転院のことを斡旋したため、その礼として老人は自分病死後、三人の島民にそれぞれ頼んで「私」のところへ三羽の雞を送ったという筋立て

次に、相違点（注：土方久功の『雞』／中島敦の『雞』という順）は、(1) 主人公の名前（ギラメスズ爺さん／マルクープ爺さん）；(2) 主人公の品格（優しい心を持った人で、いつも「私」の頼む人形や民芸的な木彫りの小道具などを丹念に彫って持ってきてくれる／最も常習的な密告者で、約束した以上の値段を要求し、時には贖物や盗んできたものを「私」に売る）；(3) 懐中時計事件（「私」の時計を盗んだのはギラメスズ爺さんではなく、アマラエルという別の爺さん／時計を盗んだのはマルクープ爺さん本人）；(4) 「私」の爺さんに対する感情（老人の純粋で一途な気持ちに感動され、一種の尊敬の意を持っている／時計事件によって「私」の心象に残された老人の奸悪さへの嫌悪と、雞をもらった後に受けた感動とが混じり合っている）と、主に四点ある。

両作を比較した結果、中島敦の『雞』と土方久功の『雞』とは、筋立てがほぼ同じであることが分かる。ただ、土方のギラメスズ爺さんは従来のステレオタイプな島民像と正反対で、誠実で勤勉な人物である。これに対して、中島のマルクープ爺さんは狡猾で信用ならない人物だが、島民生活にとって大切な雞をもって「私」に礼をするほど、一般的な南洋島民から感じられない思いやりがある。言い換えると、ギラメスズからは絶対的な「善」しか見られないが、マルクープには「善」と「悪」が同時に混在し、「私」の理解できる領域をはるかに超えているのである。南洋群島が植民化されて以来、現地の島民は狡猾で不誠実だというイメージが固定化されてきたなかで、中島敦は土方久功の『雞』の題名と筋立てをそのまま使用しながらも、善悪共存する新たな主人公像を創作した。これは、＜文明人＞と自称する植民者の目には絶対的な「悪」にしか映らないというステレオタイプな島民像への一種の反発と否定とも読み取れよう。

以上、『南島譚』は、中島敦の実体験とは無関係で、今やすでに見られない昔の南洋の習俗（記憶）や、島民像を絶対視しないという見方が描かれていることを考察できた。一方、もう一つの中島敦の南洋物である『環礁』は、ほとんど作者自身の南洋見聞に基づいて書かれたもので（『ナポレオン』を除く）、いわゆる＜今の南洋＞をスケッチした作品群である。次の節では、『環礁』に託された中島敦の＜南＞の記憶について分析を試みたい。



#### 第四節 『環礁』における〈今の南洋〉

中島敦は南洋滞在中、公学校視察のため四回にわたって南洋群島を周遊していた。中島は旅の途中で見聞した〈今の南洋〉を巨細となく記録し、六つの短編作品（『寂しい島』『夾竹桃の家の女』『ナポレオン』『真昼』『マリヤン』『風物抄』）によって構成される『環礁』を書き下ろした。これらの旅行から、中島は主に二つの経験をしたのである<sup>38</sup>。一つは、南洋本来の自然の美を堪能することである。もう一つは、島民の生活を考察し、現地に関する理解を一層深めることである。例えば、『寂しい島』には、語り手の「私」（＝中島敦）が視察旅行で訪ねた離島の自然風景をこう点描している。

島の中央にタロ芋田が整然と作られ、その周囲を蝟樹やレモンや麵麩樹やウカル等の雑木の防風木が取巻いてゐる。その、もう一つ外側に椰子林が続き、さてそれからは、白い砂浜——海——珊瑚礁といった順序になる。美しいけれども、寂しい島だ。(p.255)

夕方、私は独り渚を歩いた。頭上には亭々たる椰子樹が大きく葉扇を動かしながら、太平洋の風に鳴ってゐた。潮の退いたあとの湿った砂を踏んで行く中に、先刻から私の前後左右を頻りに陽炎のやうな・或ひは影のやうなものがチラ／＼走ってゐることに気が付いた。蟹なのである。灰色とも白とも淡褐色ともつかない・砂と殆ど見分けの付かない・一寸蟬の脱け殻のやうな感じの・小さな蟹が無数に逃げ走るのである。(p.257-258)

このような緻密な風景描写は、中島敦の南洋物には散見されているが、それ以外の作品には滅多に見られない。エキゾチックな物事が好きな中島敦が、これまでの生活環境とは全く違う南洋の地の自然風景をそこまで詳細にスケッチしたのは、彼の強烈な南方憧憬のためであろうと見ることができる。

さらに、『寂しい島』のなかで、中島敦は現地の人口減少の問題に目を向けたのである。この作品の舞台である離島には、ただ一人の女の子（五歳）を除き、二十歳以下の子供が一人もいない。実際、南洋群島が日本の委任統治領となって以来、島民の人口減少の問題は重要な現実問題として屢々取り上げられていた。現地で実施された三回の島勢調査（1920年、1925年、1930年）の結果、島民の人口総数自体は若干の増加傾向にある一方、ヤップ本島の「カナカ」において著しい減少がみられることが判明した。当時、ヤップ本島にお

いては死亡率が出生率を大幅に上回り、1926年から1930年の間に人口の約三分の一（二千人）が減少していた<sup>39</sup>。

『寂しい島』のなかの離島では、子供が一向に生まれることなく、出生率はほぼゼロとのことである。しかも、現存の人口は百七十八人しかない。これらの描写はヤップ本島と全く事情が一致しているとはいえないが、ただ、中島敦は『寂しい島』を創作するにあたって、ヤップ本島のことを参考にした可能性が高い。

また、当時、中島敦は国語編修書記を務めており、「微官にしかすぎないかもしれないが、それでもやはりれっきとした“帝国の役人”であることに違いない」<sup>40</sup>ため、彼は日本支配下の南洋群島の人口問題に関心を持つのも当然のことであろう。性病の蔓延や避妊の事実がなく、食料にも恵まれている島には、なぜ子供が生まれてこないのか。これに関して、中島敦は多少疑惑を感じたものの、だからと言ってその人口減少の問題の科学的根拠を究明するために、『寂しい島』を書いたわけではない。作中において、「私」は島の最後の女の子に甚だ浪漫的な空想を抱き、「素晴らしく美しく伶俐な子」と想像していたが、実際に訪ねてみたところ、「肥ってこそゐたが、うす汚い、愚かしい顔付の、平凡な島民の子で（中略）腕や脚一面に糜爛した腫物がはびこってゐた」女の子に大いに失望してしまう。

エキゾチックなものが好きで、ロマン主義的な趣味を濃厚に持っていた中島敦は、おそらく日本から遠く離れている南の地でロマンチックな境遇を期待していたが、『寂しい島』から読み取れたように、この期待を実現することはなかった。よく似た体験は『環礁』のもう一つの作品『夾竹桃の家の女』のなかにも存在している。『夾竹桃の家の女』の語り手である「私」は、ある村を訪ねたところ、途中で疲れを感じたため、勝手に島民の家に上がり、腰かけて休むことにする。そこで、赤ん坊を抱いている、一人の島民の女性に出会う。お互いの言葉がわからず、二人とも口を開こうとしないが、その沈黙のなかに、「私」は女性の目のなかに異常なものを感じる。

私には先程からの、女の凝視の意味が漸く判って来た。何故若い島民の女が（それも産後間もないらしい女が）そんな気持になったが、病み上りの私の身体が女のさういふ視線に値するかどうか、又、熱帯ではこんな事が普通なのかどうか、そんな事は一切判らないながら、とにかく現在のこの女の凝視の意味だけは此の上なくハッキリ判った。（p.263）

最初、女性の視線に「僅かながらエロティッシュな興味を感じて」いた「私」は、結局、身体の衰弱のため、女性に日本語で「サヨナラ」と別れを告げるしかできない。これに対

して、女性はひどい侮辱を受けたように、明らかに怒った顔つきをする。しかし、数時間後、村ですれ違った時、彼女は視線を向けようともせず、全然「私」を認めないような「澄ました無表情な顔」をしている。

『寂しい島』と同様に、この作品にもロマンチックな出会い、あるいは原始的な誘惑からの脱出が書かれている。ただ、『夾竹桃の家の女』において、もう一つ奇妙な記述が見られる。登場した島民の女性には、わずか数時間前の出来事、すなわち「過去」の記憶を消去する能力を持っていることである。言い換えると、彼女にとって、「いま」があるだけであり、「むかし」というものは存在しないのである。このような奇妙な島民像は、「ナポレオン」の主人公・ナポレオン少年の人物像にも一致している。

『ナポレオン』は『南島譚』の『雞』と同様、作品の素材になった話が土方久功のエッセイ『ナポレオン』（『土方久功著作集』第六卷所収、三一書房、1991年11月15日）に書かれている。また、中島敦の「南洋の日記」の1941年12月19日の記事に、この作品の素材となった話を土方久功のノートで読んだ記述<sup>41</sup>がある。『ナポレオン』には、ナポレオンという名前を持つ南洋の不良少年の身に発生した妙な話が書かれている。ナポレオン少年は窃盗や悪性の悪戯のため、コロールからS島やT島へ転々と流刑される。最初のS島でわずか二年しか経たないその時、少年は母語のパラオ語をすっかり忘れ果て、S島のトラック語ばかりしゃべるようになる。中島が描く、同様の新天地での生活によって、本来の母語が話せなくなってゆくという事象については、ナポレオン少年には「言葉や文字で記憶する、あるいは記憶するという意味での「過去」を一切消去するという能力を持っている」<sup>42</sup>（鷲只雄）という指摘に賛成したい。

中島敦は、それまで言葉や文字を覚えることによって人間は事物の影や概念によってとらわれてしまう世界（『文字禍』『悟浄歎異』『悟浄出世』などの舞台）を描き続けてきた。だが、『夾竹桃の家の女』の島民の女性にせよ、『ナポレオン』のナポレオン少年にせよ、いずれも言葉や文字で記憶する「過去」を持たない人物である。こうしたキャラクターを造形したのは、南洋物の目指すもの——文字のない南洋社会の探求と表象を描き出すこと——のためなのである。

最後に、『風物抄』について見てみよう。この作品において、公学校視察旅行に出る「私」がクサイ、ヤルート、ポナペ、トラック、ロタ、サイパンで見聞したものが淡々と語られている。特に、注目したいのは、沖縄（人）への言及である。

（略）何処やらで単調な琉球蛇皮線の音がする。（中略）ベコンベコンといふ間のびた蛇皮線の音は相変らず聞えるが、何処の家で鳴らしてゐるのか、一向に判

らぬ。(中略)

出た角の所に劇場があつて、其の中から頻りに蛇皮線の音が響いて来る。(だが、之は、先刻から私の聞いて来た音とは違ふ。私の道々聞いて来たのは、劇場のそれの様な本式の賑かなのではなく、余り慣れない手が独りでポツン／＼と爪弾してゐたやうな音だった) 此処は沖縄県人ばかりの為の——従つて、芝居は凡て琉球の言葉で演ぜられる——劇場である。私は、何といふことなしに、小屋の中へはひつて見た。相当な入りだ。出しものは二つ。初めのは標準語で演ぜられたので、筋は良く判ったが、極めて愚劣なく、すぐり。第二番目の、「史劇北山風雲録」といふのになると、今度は言葉がさっぱり分らない。私にはっきり聴き取れたのは「タシカニ」(此の言葉が一番確実に聞き分けられた。)「昔カラコノカタ」「ヤマミチ」「トリシマリ」等の数語に過ぎぬ。曾てパラオ本島を十日ばかり徒歩旅行した時、途を聞く相手が皆沖縄県出の農家の人ばかりで、全然言葉が通じないで閉口したことを憶ひ出した。(p.307)

さらに、「南洋の日記」や妻・中島タカ宛の書簡のなかにも沖縄への記述が散見されている。

十二時半より、公学校にて、海軍慰問演芸会を見る。沖縄踊多し、面白きものも少からず。(1941年10月25日、(土)、p.478)

沖縄人の春島より移転し来るに遭ふ。(1941年10月28日(火) 晴、p.479)

シナパールに着くに、沖縄県人会とかにて、合歓の木蔭にて相撲をとり、それを人々集り見る。(1941年11月23日(日) 晴、p.483)

琉球史劇、北山風雲録なる看板に惹かれて彩帆劇場に入る。開演前に沖縄舞踊数種あり。何処やらに単調な蛇皮線の音す。(1941年11月27日(木) 晴、p.484)

沖縄人の家。牛、山羊。家に帰る小学校生徒。(1941年12月5日(金) 曇・晴、雨、p.485)

学校下の琉球人の家にて道を訊ぬるに、主人は内にありて子供をして云はしむる

に、子供は徒らに人を恐れてハッキリせず。(中略) さるにてもカミリヤンガル部落の青年の傲岸と、琉球人の曖昧・不親切とは全く腹の立つことなり。(1942年1月26日(月) アイミリーキ、p.496)

ヒマだから、今日は夏島町演芸会(〇〇慰問)を見た。沖縄踊りが沢山あって面白かった。日本の踊は、をかしくて見ちゃみられない。(1941年11月3日付の中島タカ宛の書簡、p.621)

下線部で示したように、『風物抄』において沖縄を代表する伝統楽器である「蛇皮線」(三味線)、沖縄踊りや言葉などが頻りに提起されており、中島敦が沖縄の習俗や文化伝統に関心を覚えていたことは確かである。

南洋群島への日本人移民は、昭和10年代においてピークを迎えていた。例えば、月刊誌『南洋群島』<sup>43</sup>第1巻第5号(1935年6月)には、「移民大洪水」の見出しで、当時沖縄からたくさんの方が南洋群島へ渡航していたことが報道されている。

南洋の新天地を目指して突進する移民の群は毎渡海とも夥しい数に上り先づ便船毎に百名以上は渡航してゐる盛況ぶり、これら移民はまづ大部分南洋興発会社に働くべき、それを当込んで渡航する移民で大部分は沖縄移民である。(中略) 従来南洋に働く移民は沖縄人が最も耐熱性に富んでゐたものといはれてゐたが、幾多の経験から北海道東北移民でも決して活動する上において支障をきたさぬと裏書されたのによるものといはれてゐる。いずれにしても南洋を目ざす移民は宛ら洪水の如くである。(p.98)

また、南洋庁内務部企画課が出した「第九回 南洋庁統治年鑑 昭和十四年」<sup>44</sup>(1941年8月30日刊行)には、1939年(昭和14年)の「戸口」(12月末日現在)と「邦人本籍別人口」(毎年十月一日現在)が明確に記述されている。総人口129,104人の中に、日本人移民が75,286人もいて、すでに総人口の半分以上を占めている。さらに、現地の日本人の総人口を本籍別で分けて見ると、一番人が多いのは沖縄県(45,701人)で、二位の東京府(4484)のほぼ十倍となっている。1941年から1942年までの南洋滞在中に、中島敦が直面したのは、沖縄県人が現地の日本人移民総人口の半数以上を占めているという現状である。公学校視察旅行のみならず、普通の日常生活のなかにも、沖縄人と出会う機会が多くあったに相違ない。こうした中、『環礁』や日記などに沖縄人が登場しても全然おかしくないだ

ろう。

また、全く通じない沖縄方言や「曖昧・不親切」な沖縄人のようなややマイナスな記述があるため、中島は「沖縄の人たちに心を寄せることが出来なかったように見える」<sup>45</sup>（仲程昌徳）と指摘されているが、これらの記述にあまりメクジラを立てることは、むしろ中島敦によって客観的にスケッチされた南洋表象の文化的な意味を減殺させてしまうことになるだろう。昭和 10 年代の南洋関連書物にはステレオタイプな南洋表象が遍在しており、中島敦ほどに南洋や現地の住民（沖縄人も含む）を客観的にそのまま描き出そうとする人は皆無に等しかった。

#### 第五節 終わりに

中島敦は南洋の異民族に対して日本語を普及するために、サイパンへ単身赴任したが、現地到着早々にその仕事への熱意を失ってしまった。東京帝国大学という日本における最高学府の出身者である中島敦のまわりに居た者は、ほとんどが中卒レベルで、中学校を出たらすぐ働き始めてすでに「二十年も三十年もつとめ上げた」という経歴の持ち主ばかりであった。そこへ途中から飛び込んできた若い中島敦が、学歴があるため課長の次に高い給料を受け取り、周囲から親愛の情を持たれなかったのである。幸い、現地で知り合った唯一の親友・土方久功とともに群島を周遊し、中島敦は現地の様々な習俗や伝統文化に関心を持ち、これらの見聞を『南島譚』『環礁』にまとめ、南方へ旅立つ前の「新しい未知の環境の中に己を投出して、己の中にあって未だ己の知らないでゐる力を存分に試みる」（『真昼』、p.278）という期待を果たしたといえよう。

本章は、『南島譚』『環礁』への考察を主な目的としているが、まず、中島敦と同年代の日本人知識人が書いた南洋関連言説の特徴を究明した。日本支配下に置かれる南洋と現地の島民に対して、理解と共感を示す日本人（中河与一、川端龍子）も見られるが、多くの人は南洋の文化的な貧困を批判し（石川達三）、色眼鏡で裸体の島民を興味本意で観察していた（安藤盛）。当時の南洋関連言説においては、作者の日本人としての優越感が見え隠れしており、南洋島民が未開で、無知の＜野蛮人＞であるというステレオタイプな見方が散見された。

一方、『南島譚』『環礁』においては、中島敦は現地の伝説や習俗などを取り入れながら、島民との直接的な接触によって客観的な南洋表象をスケッチしようとしたのである。＜昔の南洋＞を記録する『南島譚』にせよ、＜今の南洋＞を舞台として書かれる『環礁』にせよ、いずれも南洋の習俗と現地の島民に好意と理解を抱き、可能な限り客観的に南洋表象を描

き出そうとしたからである。

中島敦は、島民に支配者的な態度を示していた日本人の偏狭なナショナリズムから脱出し、日本の価値観（文化）を相対化しながら、日本と異なる南洋の現実を広い視野で捉えていた。中島のこの差異と個性の存在を許容するという見方は、少年期からの長期間の外地滞在体験に影響されたものであり、南洋物のみならず、帰朝後に書き下ろされた作品（『李陵』など）の一つの底流にもなっている。

注：

<sup>1</sup> 目次は、南島譚、環礁（ミクロネシア巡島記）、悟浄出世、悟浄歎異（沙門悟浄の手記）、古俗、過去帳という順に並んでいる。

<sup>2</sup> 1922年（大正11年）に設置された南洋庁は、当時拓務大臣の管轄下にあり、長官官房のほか、内務、拓殖の二部にわかれ、地方課の属する内務部には、ほかに企画、財務、税務、警務、土木の五つの課があった。地方課は、群島全体の行政、教育、文化を扱う課で、内務部の中心である。なお、朝鮮半島や台湾には総督府が置かれ、南洋群島と樺太には「庁」が置かれていた。

<sup>3</sup> パラオ諸島は西太平洋、フィリピン東方にある小島群である。パラオ本島のほかにコロール島、ペリリュウ島（ピリュウ島）、アンガウル島など比較的大きな七島と無人の二十の島からなる。

<sup>4</sup> コロール島には、日本の植民地統治の現地行政機関である南洋庁が置かれ、日本人は一万三千人、南洋の首都である。ほかに、サイパン（主要島：サイパン島、テニアン島、ロタ島）、ヤップ（主要島：ヤップ島）、パラオ（主要島：バベルダオブ島 [パラオ本島]、コロール島、アンガウル島）、トラック（主要島：春島、夏島、水曜島）、ボナペ（主要島：ボナペ島、クサイ島）、ヤルート（主要島：ヤルート島）の各島に6支庁が置かれていた。

<sup>5</sup> 南洋群島（「旧南洋群島」、「内南洋」、「裏南洋」とも呼ぶ）は、現在の北マリアナ連邦、パラオ共和国、ミクロネシア連邦、マーシャル諸島共和国を領域とする太平洋諸島の島々である。1543年以来スペインの勢力下にあったが、1899年ドイツに買収された。そして、第一次大戦中に占領し、パリ講和会議で国際連盟からの委任統治領として日本が1919年から支配権を握るようになった。これによって、日本は国際会議で正式の植民地保有国と認められ、念願の欧米列強の仲間入りを果たすことができたのである。その統治領は、1400余の島々からなり、原住島民は合わせて5万、そして、南進熱に煽られて進出した日本人は、昭和の最盛期には10万を越えると言われる。農業、鉱業、漁業などに携わっていた。パラオ諸島はその後アメリカに移り、1994年に独立した。

<sup>6</sup> 公学校という称呼は1898年（明治31年）に定められた「台湾公学校令」にはじまる。1923年、南洋庁は「南洋庁公学校規則」を發布し、8歳から14歳までの島民子弟への教育を行った。三年制で二年以内の補習科も併設。日本語教育に半分の時間をあて、修身、算術、地理、体操などの教科を学ばせた。1930年までに24の公学校に7400人の児童が通い、南洋群島の就学率は5割を超したという。さらに、コロール公学校には木工徒弟養成所も設けられていた。1930年代になると、この養成所は電気、自動車修理などの学科を増設し、現地の若者の技術者養成センターとなった。

<sup>7</sup> 「教科用ノ編修及審査ニ関スル事務ニ従事」するもので、1941年3月から執行、定員一名、採用は中島敦が最初で最後である。当時南洋群島の公学校で使用されていた『公学校本科国語読本』と『公学校補習科国語読本』の第5次編纂を行うのが、中島敦の使命となる。

<sup>8</sup> (1) 第一回視察旅行：1941年9月15日から公学校視察のため、パラオを出発し、11月5日まで二ヶ月ほど南洋群島を旅していた。パラオから船で東へ、トラック（チューク）諸島の夏島（現・デュブロン島）、ボナペ（ボンペイ）島、クサイ島、マーシャル群島のヤルート島に行き、帰路は同じコースを逆に辿って、夏島を根拠地にして冬島、秋島などトラック諸島の島々を巡ったのち、夏島から空路でパラオに帰着した。

(2) 第二回視察旅行：1941年11月17日にパラオを出発し、海路北東にヤップ、ロタ、テニアン島、サイパンと直進し、サイパンからの帰りテニアン島に寄って、12月14日にパラオに戻っていた。(3) 第三回視察旅行：1942年1月17日から31日まで、土方久功とパラオ本島一周の徒歩旅行を敢行した。(4) 第四回視察旅行：1942年2月5日から7日まで、ペリリュウ島、20日と21日はアンガウル島の視察に向かっていた。

<sup>9</sup> 筑摩書房版の第二次の『中島敦全集』の第三巻には、このうち五十通の書簡類が収録されていたが、残りの三十数通は、第三次の筑摩版『中島敦全集』の第三巻にはじめて収録された。

<sup>10</sup> 奥野政元『中島敦論考』桜楓社、1985年4月、p.186-187

- <sup>11</sup> 和田博文『単独者の場所』双文社、1989年12月、p.166
- <sup>12</sup> 川村湊「無文字社会の誘い——中島敦と＜アジア＞的なもの」(勝又浩、木村一信編『昭和作家のクロノトポス 中島敦』双文社、1992年11月、p.71/p.79)
- <sup>13</sup> 山下真史『中島敦とその時代』双文社、2009年12月、p.185
- <sup>14</sup> ほかに、南洋で一人暮らしの弟の様子を見たいのも南洋旅行の理由の一つである。なお、木村一信は「石川達三の＜南洋行＞の根底には、自らの改造、新しい出発を企図しての厳しい世界へ身を委ねるといった要素があった」(『昭和作家の＜南洋行＞』世界思想社、2004年4月、p.50)と指摘する。
- <sup>15</sup> 石川達三『赤虫島日記』東京八雲書店、1943年5月、p.3
- <sup>16</sup> 1941年10月『航海日誌』を『中央公論』に、11月『群島日誌』を『日本評論』に、12月『赤虫島日誌』を『改造』に発表。
- <sup>17</sup> 石川達三『赤虫島日記』東京八雲書店、1943年5月、p.44
- <sup>18</sup> 「ミクロネシア諸島人の言語は大体に於てマレー・ポリネシア語系に属するといはれて居るが、決して各地同一の言葉を用ひて居るのではなく、方言以上の相違がある。(松岡静雄『ミクロネシア民族誌』p.39、岩波書店、1943年)
- <sup>19</sup> 石川達三『赤虫島日記』東京八雲書店、1943年5月、p.45-46
- <sup>20</sup> 第一回目は、1932年12月18日にサイパン、23日にヤップ島、25日にコロール島に到着、翌年早々に帰国した。第二回目は、1933年4月に、サイパン、パラオ、トラック諸島、ポナペ、マーシャル諸島を駆け巡り、現地で暮らす日本人の状況を観察し、6月に帰国した。第三回目は、1935年にテニアン島、ロタ島、サイパン、セレベスなどを回って、日本人の活動状況を調べた。第四回目は、1936年に、パラオ、ニューギニア、セレベス、ダバオなどを訪問した。第五回目は、1937年にサイパン、パラオ、ニューギニアなどを訪れた。
- <sup>21</sup> 青木澄夫『放浪の作家安藤盛と「からゆきさん」』風媒社、2009年3月、p.103
- <sup>22</sup> 南洋庁編『南洋庁統計年鑑4』青史社、1993年11月、p.4-5
- <sup>23</sup> 例えば、昭和期の実業家である大宜味朝徳(1897-1977)は『南洋群島案内』(海外研究所、1939年)のなかで、次のように述べている。  
「彼等(注：南洋島民——筆者)の智識程度も、亦極めて低級に属す。彼等の視界は其の住する弾丸黒子の小さな天地に劃せられ、其の経験は祖先伝来の範囲に局限せられ、所謂伝統は彼等唯一の精神的信条なり、其の偶々艦船の発着するあり、之を通じて近世文明の一端に触れるとするも、唯、之れ皮相の接触のみ。又極めて稀に欧米に航したる者あり、又我が国占領以来観光の為来朝したる者可成り多しと雖、真に之れ瞥見一過、恰も夢中に在るものにして、観察利用の方途に至りては、多きを現在の彼等に望む能はざるなり。故に彼等の平常を観るに、極めて少数なる優秀者を除き其の大多数は、僅かに千百の数字の計算に惑ひ、計算を案じて商取引を為す能はず。目前の利欲に迷ひて後日の計を為すを知らず、物の真価を認識する能はずして、唯、一時の用を糊塗するに過ぎず。(略)然れども顧みて吾が国統治以来教育の成績を観るに、土人の児童は記憶力、理解力共に相当の発達を示し、特に技芸の科目に於てその得意なるを見る、唯数の觀念に於て著しく幼稚の程度にあるを認むるも、尠くとも学校内に於ける土人児童の精神的発達の進程は、内地児童に比し、特に顕著なる差別を認むる能はず。その発達の最高限度は、兎も角として、彼等をして始終最適の環境に在らしめば、相当の程度までは啓発し得らるるものなるを想はしむ。」(『南洋群島案内』大空社、2004年2月、p.112-113(1939年発刊の『南洋群島案内』の復刻))
- <sup>24</sup> 『中河与一全集』第11巻(隨筆、紀行、絵画論)角川書店、1967年8月、p.196
- <sup>25</sup> 中河与一『熱帯紀行』竹村書房、1934年12月、p.210
- <sup>26</sup> 中河与一『熱帯紀行』竹村書房、1934年12月、p.213
- <sup>27</sup> 『世界紀行文学全集 第13巻』修道社、1960年、p.300
- <sup>28</sup> 例えば、1914年(大正3年)12月、日本文部省が現地に派遣した視察第一陣の一員である檜林兵三郎は、報告「新占領南洋群島ノ視察報告」のなかで、「怠惰」で「性的放縦」という通俗的な「未開人」イメージを描いている。南洋島民は「性怠惰にして勤勞を嫌ひて安逸を求め」る一方で、「男女關係の如き往時は一夫多妻にして淫風盛」であり、「姦通私通墮胎等盛に」行われている。そして、これは「彼等が豊富なる天与の産物を有し、為めに生存競争なく、又衣食の途を講ずるの必要なきに因る」と結論づけたのである。(坂野徹『帝国日本と人類学者 1884-1952』勁草書房、2005年11月)
- <sup>29</sup> 勝又浩「解題」より(『中島敦全集1』ちくま文庫、2009年9月、p.480)
- <sup>30</sup> これに関して、閻瑜の「物語の舞台を南洋の島に変更したのは、『南島譚』という総題の下に収めるためと考えられる。」(『新しい中島敦像——その苦悩・遍歴・救済』桜美林大学北東アジア総合研究所、2011年3月、p.222)という指摘に賛成したい。
- <sup>31</sup> 『幸福』の出典について、主に二つの説が存在している。大西雄二郎(「中島敦の側面」、『中島敦全



集』第2巻月報「ツシタラ」第3輯所収、文治堂書店、1960年6月）はこの作品がブレーズ・パスカルの『パンセ』によるものだと指摘するが、佐々木充（『幸福』——三つの世界、『中島敦の文学』所収、桜楓社、1976年6月20日）はこの論説に反対し、中国の古典作品『列子』（周穆王第八章）が『幸福』の中心的な素材となっていると述べる。『列子』は中島敦の愛読書の一つであり、これより素材を仰いだ作品はほかに『名人伝』や『わが西遊記』（「悟浄出世」と「悟浄歎異——沙門悟浄の手記——」）がある。よって、『幸福』を創作するにあたって、『列子』を参考にした可能性が高いと思われる。

<sup>32</sup> 須藤直人「中島敦の混血表象と南洋群島——ポストコロニアル異人種間恋愛譚——」（立命館大学国際言語文化研究所『立命館言語文化研究』20巻1号、2008年9月、p.60）

<sup>33</sup> 土方久功（1900-1977）、彫刻家・画家・詩人・民俗学者。1929年より、あわせて十数年をミクロネシアのパラオ諸島、ヤップの離島、ヤップの離島サタワヌで過ごし、各地の神話伝説や民俗文化を収集、研究した。戦後は主に彫刻家として土俗的な木彫を多数残している。主著に『流木』『サタワヌ島民話』『パラウ神話伝説』、著作集全八巻（三一書房）がある。土方は中島敦と知り合った1941年には、42歳であったから、33歳の中島より9歳の年上であった。中島敦がパラオに着いた翌日に二人が知り合い、中島の現地にいるほとんど唯一の心を通わせた友人となり、以後、各地を旅行するなど親しく交際し、帰国時も同道した。

<sup>34</sup> これらの下書きがそれぞれ、『幸福』『夫婦』は「ノート第四」に、『雞』は「ノート第五」に収められている。原稿用紙で『幸福』15枚、『夫婦』20枚、『雞』24枚。この三篇の原稿には「遠い島の話／中島敦」と総題が付されていて、本来作者の考えでは『山月記』や『文字禍』に『古譚』と総題を付したように、これら三篇も「遠い島の話」としてくくろうとする意図があったと思われるが、結果としてそれは実現されず、放棄されたようである。（『中島敦全集1』「解題」より）

<sup>35</sup> 印東道子によると、「オセアニア、東南アジアの社会では、男女の分業が明確に分離されている場合が多い。パラオも例外ではない。タロイモの栽培は女性の役割であり、船で魚を獲ってくるのは男性の仕事である。この点では、父系であろうが、母系であろうが、ほかのオセアニア社会と同じなのである。」とのことである。（印東道子『ミクロネシアを知るための58章』明石書店、2005年11月、p.203）

<sup>36</sup> その理由に関して、中島敦はこう総括している。第一、「自分に、視ることや聴くことや呼吸すること迄禁じ」られていないことである。第二、重労働の中から「婦人の神聖たる芋田耕作だけ」が免除されていることである。第三、カヌーに乗って海に出ている時、長老の船が近くにあつて、彼は止むを得ずに海に飛び込んだが、鯨に三本の足指しか喰われなかったことである。第四、空咳と性病両方で苦しめる人もいる中で、自分が空咳だけに罹り、「少なくとも一つの病だけは免れたこと」である。第五、海藻のような髪は「明らかに容貌上の致命的缺陷には違ひない」が、全然髪のない人より幸せである。第六、鼻が潰れて嘲笑を買うが、全然鼻のなくなった人もいるのである。

<sup>37</sup> 土方久功『土方久功著作集』第六巻、三一書房、1991年11月、p.75

<sup>38</sup> ボール・マッカーシー、オクナー・深山信子は『世界文学のなかの中島敦』（せりか書房、2009年12月）において、似た観点に言及した。

<sup>39</sup> 坂野徹の『帝国日本と人類学者1884-1952』（勁草書房、2005年11月）を参照。

<sup>40</sup> 川村湊『作文のなかの大日本帝国』岩波書店、2000年2月、p.41

<sup>41</sup> 「十二月十九日（金）二日来の喘息、愈々面白からず、夜、土方氏方に到り、南方離島記の草稿を読む、面白し。「プール島（人口二十に足らず）に、パラオより流刑に會ひし無頼の少年あり、奸譎、傲岸、プール島民を傾使す、已に半ばパラオ語を忘る。この少年の名をナポレオンといふと」「無人島へレン礁に海鳥群れ集へること。島に上れば、たちどころに数十羽を手掴みにすべしと。卵も又、とり放題。捕りし鳥共の毛をむしり、直ちに焼きて食するなり」（『中島敦全集3』筑摩書房、2002年2月、p.488）

<sup>42</sup> 鷺只雄『芥川龍之介と中島敦』翰林書房、2006年4月、p.292

<sup>43</sup> 『南洋群島』は不二出版により、第1巻第1号（1935年2月発行）から第9巻第10号（1943年12月）まで、不二出版により全26巻の復刻版として、2009年から2011年にかけて刊行された。

<sup>44</sup> 南洋庁編『南方資料叢書11-四 南洋庁統計年鑑4』青史社、1993年11月、p.2-3

<sup>45</sup> 仲程昌徳『「南洋紀行」の中の沖繩人たち』ボーダーインク、2013年6月、p.204

付記：

『南島譚』『環礁』からの引用は『中島敦全集1』による。「南洋の日記」と書簡からの引用は『中島敦全集3』による。

## 第七章 『李陵』に関する一考察

### ——「匈奴」という接点について

#### 第一節 はじめに

中島敦は、1942年3月に親友の土方久功と共に南洋から帰朝すると、気候激変のため激しい喘息と気管支カタルを発病した。中島は持病に苦しみながらも、作品の執筆に全力を傾け、生涯最後の年に次々と力作をこの世に残してくれた。『李陵』は、『名人伝』とほぼ同時に書き下ろした1942年における作品群の中の一つである。この作品の原稿を書きついだ後、2ヶ月も経たないうちに長年の病魔に病院で中島は命を奪われてしまった。それ故、この原稿は生涯の友である深田久弥が『李陵』と命題し、中島死後八ヶ月の1943年7月に『文学界』で発表された。

『李陵』は、自らの出陣を武帝に懇願し、戦場で匈奴と苦闘する様子を描く第一章の「李陵篇」、生け捕られた李陵を弁護した故に、宮刑（去勢される刑）に処され、『史記』の仕上げて没頭する歴史家を語る第二章の「司馬遷篇」、及び匈奴で暮らす李陵と現地で出会った蘇武を述べる第三章の「李陵・蘇武篇」によって構成されている。

この構成について、荒正人は、『旧約』のヨブとして生きぬく限り、私たちの前には、李陵、蘇武、司馬遷の三つの道しか開けていないであろう。作家はどの道を指しているか。李陵かもしれないし、司馬遷かもしれぬし、蘇武かもしれぬ。いや、三人の道を時間的にも、空間的にも遠く眺めている。三つの道をならべて論じ抜くということは、この作品の製作動機にはなっていない。李陵に力点はおいているが、それは構成の便宜のためで、他の二人の生き方も巧みに織り交ぜながら、中心人物李陵の姿を鮮明に写しだしている。<sup>1</sup>と指摘し、主人公が三人であると示す。

また、平野謙は、「李陵は、それぞれ芸術家（司馬遷）と行為者（蘇武）という対極の中間に主人公を位置づけることによって、悟浄と子路というひきさかれた対立を、一篇の作品構図のなかに統一しようとしたものだろう」<sup>2</sup>と述べ、中心人物があくまでも李陵に相違ないことを提示する。他にも、「「李陵」の主人公は無論李陵だが、実はその李陵をあやつっているのは、史記の作家である司馬遷であるという意味で、彼を中心に考えるべきである。」<sup>3</sup>（三浦朱門）という司馬遷中心説もある。

以上のように、李陵・司馬遷・蘇武三人の登場人物を抜き出し、人物像の比較に力点を置く先行研究が数多く存在しているが、作中における「匈奴」という舞台の重要性が等閑されてしまう傾向が見られる。

本来なら、司馬遷が「李陵の禍」の関係で無残な宮刑に処されたのは歴史上の一大事件だが、それでもわざわざ第二章の「司馬遷篇」を持ち出さなくても、『李陵』全体の構造と成立には多大な影響を与えてしまう恐れはない。つまり、第一章と第三章、第二章がそれぞれ独立した作品として成り立つ可能性も十分ある。

では、何故中島敦は『李陵』に司馬遷の物語を挿入したのか。中島の残したメモ書きには、「李陵・司馬遷」「漠北悲歌」「莫北」「莫北悲歌」などの文字が書き散らされている。周知のように、「漠北」（または「莫北」）とは、ゴビ砂漠の北の地域である。現在はモンゴル国に当たる地域だが、『李陵』の物語の舞台となる漢朝においては、主に匈奴のことを意味している。また、匈奴は「胡」とも呼ばれ、アジアにおける最初の強大な騎馬民族国家の建設者として、紀元前4世紀頃から5世紀にかけて、モンゴル高原を中心とした中央ユーラシア東部を勢力圏に置いた遊牧騎馬民族をも指している。匈奴は李陵にとって大きな存在であるばかりでなく、司馬遷にも生涯癒えぬ傷を負わせる原因を作ることになった存在である。『李陵』について、沢田勲は「漠北で生涯を送ることを決意した李陵の苦悩を、彼の心情に深く分け入って描いた昭和文学の傑作」だと評価すると同時に、「嫉妬や保身が渦巻く漢の宮廷に比して、粗野ではあるが質実剛健に生きる人々として匈奴が描かれている。」<sup>4</sup>とも指摘する。すなわち、中島は異空間と異民族としての「匈奴」を強く意識しながら、『李陵』の執筆に当たったと言えよう。

本章は、まず、何故この作品に司馬遷の物語が織り交ぜられたのかについて、登場人物の李陵・司馬遷・蘇武それぞれと「匈奴」との接点を厳密に論述したい。次に、作家の創作プロセスを整理した上で、『李陵』に託された昭和10年代の日本の現実を分析する。

## 第二節 『李陵』から見る李陵の匈奴体験と匈奴観の変化

中島敦は『李陵』を創作するにあたって、典拠とされる『漢書』など<sup>5</sup>を参考にしつつも、細微な箇所において、若干の改変を加えたり、叙述をふくらませたりしている。「中島敦 蔵書目録」<sup>6</sup>（田鍋幸信編）には、『李陵』の原資料と見られる関連文献がある。例えば、『史記（一）』（塚本哲三編、有朋堂、大正8年）、『史記平準書・漢書食貨志』（加藤繁訳注、岩波文庫、昭和17年）、『四部叢刊』（商務印書館、民国年間刊行、[百衲本二十四史は中島田人（中島敦の父）が直接注文購入、欠本が少しある]）が挙げられよう。なお、本章における『漢書』と『史記』の原文引用は、すべてその「百衲本二十四史」（国立国会図書館所蔵）からのものであることを明記しておく。

『李陵』と原資料との比較作業に関しては、佐々木充の研究（『中島敦の文学』桜楓社、

1973年)をはじめとして現在ではかなり進められ、その異同はかなり明らかになっているため、ここでは重複して述べないことにする。一方、李陵・司馬遷・蘇武の物語が相互に如何に関連し、展開し、収束するのかについて、「匈奴」そのものの重要性への理解は十分ではないと考えている。

ここで、まず、李陵の匈奴体験が始まるまでの経緯を簡単に述べておきたい。天漢2年(前99年)の夏、匈奴の侵略に抵抗する武帝將軍が率いる軍の輜重に当らせようとした武帝の決定にもかかわらず、四十そこそこの血気盛りの李陵は、輜重の役よりは五千の部下と共に危険を冒すことを武帝に請願すると、武帝は大いに喜び、李陵の請願を快諾する。酒泉・張掖(漢の地名)から荒れ果てた北の地に進行した後、途中李陵の軍を迎えに行つた強弩都尉・路博徳の嫉妬のため、孤立無援のまま匈奴の地に深入りと余儀なくされ、さらに、ある一人の漢兵の寝返りで窮地に落ちいってしまう。その一連の事件に遭遇したのは、すべて予想外の出来事である。僅か五千の歩卒を率いて深く匈奴の地に入り、匈奴数万の師に囲まれた揚句、惨敗の地に陥ってしまうことは当然だとも言えよう。結局、李陵は戦場で、突然背後から後頭部に大打撃を喰って失神し、生け捕られてしまう。

ここから、李陵の匈奴体験が本格的に幕を開けるのである。李陵が見た匈奴という異空間は、一体いかなる風景だったのか。『李陵』においては、次のように描写されている。

家は絨帳穹廬、食物は羶肉、飲物は酪漿と獸乳と乳酢酒。着物は狼や羊や熊の皮を綴り合はせた旃裘。牧畜と狩獵と寇掠と、この外に彼等の生活はない。一望際涯のない高原にも、しかし、河や湖や山々による境界があつて、单于(匈奴の王——筆者)直轄地の外は左賢王右賢王左谷蠡王右谷蠡王以下の諸王侯の領地に分けられてをり、牧民の移住は各々その境界の中に限られてゐるのである。城郭も無ければ田畑も無い国。村落はあつても、それが季節に従ひ水草を逐つて土地を変へる。(下線——筆者、下同、p.508)

そして、『漢書』「匈奴伝第六十四上」の冒頭に書かれた匈奴の地理、習俗などと比較してみたい。

匈奴其先夏後氏之苗裔曰淳維唐虞以上有山戎獯允薰粥居于北邊隨草畜牧而轉移其畜之所多則馬牛羊其奇畜則橐佗驢羸馱騊駼騾奚逐水草遷徙無城郭常居耕田之業然亦各有分地無文書以言語爲約束兒能騎羊引弓射鳥鼠少長則射狐菟肉食士力能彎弓盡爲甲騎其俗寬則隨畜田獵禽獸爲生業急則人習戰攻以侵伐其天性也其長兵則弓

矢短兵則刀鋌利則進不利則退不羞遁走苟利所在不知禮義自君王以下鹹食畜肉衣其皮革被旃裘(漢書二八 匈奴伝卷第六十四上 班固 漢書九十四 秘書監上護軍琅邪県開国子顔 師古注)

匈奴の祖先は、夏后氏の後裔であり、その名は淳維という。唐と虞の世以前には、山戎・獯兪・薰粥などの種族が北の地に住み、牧草を求め、家畜を追って移居する。その家畜の多くは馬・牛・羊で、特殊なものとしては、駱駝・驢馬・騾馬・馱駝・駒駝・驛奚などがある。水や草を追って移動し、城廓も定住地も農耕の生業もなかったが、それぞれの領域はある。文書を持たず、ことばで約束を交わす。子供も羊を乗りこなし、弓で鳥や鼠を射る。少し大きくなったら、狐や兎を射ってその肉を喰らう。青年男子は力持ちで、弓も引け、全員騎兵になる。その習俗として、平時は牧畜し、禽獣を狩猟して生業とし、戦時には人々はみな軍事を訓練して侵略攻伐するが、これはその天性に基づくものである。離れての戦には弓や矢を用い、接近戦には刀と矛がある。有利とあれば進み、不利とあれば退いて、遁走することが恥だと思わない。利益のあるところ、これを得るのに礼義をかえりみない。君主より以下みな家畜の肉を常食とし、その皮革を身にまとい、旃裘を着た。(日訳——筆者、下同。)

下線部によって、『李陵』の詳細かつ具体的な匈奴描写は、『漢書』に基づいて加筆した可能性がかなり高いことがわかる。また、『漢書』の先行史料である『史記』の「匈奴列伝第五十」における匈奴描写は『漢書』にほぼ承継されているため、あえてここで引用をしないことにする。匈奴人の日常生活が主に遊牧生産、狩猟活動、戦闘行動の三つから成り立っており、衣食住をはじめ、匈奴での暮らしは、完全に漢の生活と異なる遊牧騎馬民族の奇異な生活だとも窺い知ることができる。

歴史上の漢朝は、漢武帝の支配の下で、発展の頂点を迎えた。政治面において、高度の中央集権制が実施され、秦以来の制度を漢王朝に定着させることに成功する。また、経済面において、水利施設を完備させ、高度の農業技術を普及させる。さらに、製塩・鑄鉄・造幣の権力を奪い返す。軍事面では、最終的に強敵・匈奴に勝つことができた。文化面では、儒学を人民教化の国学として定め、王権思想を強化する政策をとる<sup>7</sup>。そもそも、武帝自身は中国の歴代皇帝のなかでも英雄君主として勇名をはせた皇帝である。『漢書』の著者であり、あの名高い班固も、武帝を評して「雄材大略」(抜群の才能と深遠なる知謀の持ち主)と称している。武帝の功績を外交と内政の両面から評価すると、「外交の面では北方の

宿敵匈奴に対して攻勢に出て西域への交通路を整備したこと、内政では儒教を国教化して学問の体系を整え、文人官僚を登用して後世の儒教社会の基礎を作ったことなど<sup>8</sup>（阿辻哲次）が挙げられる。

こうした中央集権制度を強化しつつあった漢朝は、無論当時周囲の権力の中心にあった。その背景の下において、漢朝の人々が、文化の面をはじめ、様々な分野で他民族に対する優越感を持っていたことは言うまでもない。例えば、『漢書』「武紀第六」における「匈奴將軍趙破奴出令居」の注には「臣瓚曰匈奴水名在匈奴中去令居千里見匈奴伝」（臣瓚曰く。匈奴、水名。匈奴中に在り。令居を去ること千里。匈奴伝に見ゆ。）という一節がある。つまり、「匈奴」の「匈」とは、地名もしくは河の名前であり、その付近にいた民族を「匈族」と呼んでいた可能性が極めて高い。だが、古来、中華民族が異民族を名付ける時、その民族の本来の呼び名を漢字に当て、後ろに蔑視した語あるいは動物名をつけるのが一般である。「匈奴」の「奴」はまさしくその範疇に入る命名といってもよからう。

漢で生まれ育った李陵に、このような優越感がなかったとは考えられない。だが、豪放な武将であった彼が当時の漢王朝の国学と高く尊重されていた儒学の經典に馴染んだりもしないはずである。故に、文官の目には当然の存在としか映らなかった礼儀作法に関して、李陵は「煩瑣な礼のための礼に対して疑問を感じたことが一再ならずあった」のである。

他方、李陵にとって、匈奴の生活体験からもたらされた刺激は実に大きいものであった。彼の匈奴観は、一定不変なものではなく、時が経つにつれて、変化したといえる。匈奴に生け捕られた直後は、当然ながら李陵はまず帰朝の機会を狙い、異文化の世界へ足を踏み入れることを拒否していた。だが、匈奴の社会において、李陵は意外なことに虜囚となったにもかかわらず予想外の厚遇を受けていた。それは、祖父の李広の名声が匈奴まで鳴り響いた故に、「祖父の風ありといはれた騎射の名手」である李陵までが匈奴に優待されたのであろう。また、はじめて漢軍に対する作戦を聞かれた時、李陵は強い抵抗感を持ちながら口を開かなかったが、単于は強いて返答を求めようとしなかった。その後、漢と匈奴の戦には出られないと明言した李陵に対して、単于は再びこうした要求をしなくなったが、待遇は依然として変らない。そこで、李陵は、「他に利用する目的は無く、唯士を遇するために士遇してゐるのだとしか思はれない。とにかく此の単于は男だ」と深く感服した。また、「食を頒ける時も強壯者が美味をとり老弱者に余り物を与えるのが匈奴の風であった。此処では、強き者が辱しめられることは決してない。」という匈奴の伝統に関して、武人の李陵は強く感銘を受けた。

一方、李陵の父は彼が生まれる数ヶ月前に若死にし、李陵は李広に自分の孫として手塩にかけて育てられてきた。匈奴と七十数回に及ぶ大小の戦いをへた経験豊富な李広は、し

しばしば匈奴と戦うが良い戦果を得られず、紀元前 119 年の匈奴攻撃の際には、李広は高齢を理由に外されそうになったものの、これに猛抗議してようやく参戦が許された。文帝・景帝・武帝三代の帝王に仕えた老将軍である李広は、朝廷に対して二心なき忠誠を貫いていたにもかかわらず、戦功を認められることなく自決して人生の幕を閉じることとなった。李広の死の関係で、李陵の叔父・李敢は衛青のことを怨み、自ら衛青の邸に赴いて彼を侮辱した。すると衛青の甥である霍去病は狼をする時、意図的に李敢を射殺した。武帝はそれを知りながらも、霍去病を庇い、李敢は鹿の角に触れて死亡したと発表させた。

上述のように、強き者が辱められることは決してない匈奴、と三代の老将軍・李広さえも侮辱され憤死してしまうような漢朝との大きな相違は、言うまでもなく歴然としている。だが、李陵の匈奴観における変化は、上述した漢と匈奴との客観的な事情の相違からのものみならず、匈奴の地と人々との関わりが深まり、次第に明確になってきた。例えば、単于の長男である左賢王は李陵から騎射を教わり、その若者に対して、李陵は意外にも友情を感じる事が、作品『李陵』のなかで描かれている。

後日、匈奴軍が北伐の軍を進めた因杆将軍・公孫敖の軍勢と戦う際に、左賢王の戦績を気遣っている李陵は、激しく自分の考え方を責めた。つまり、単于と左賢王への好感を抱き始めたとはいえ、当時の李陵にとっては、漢の将軍（漢人）という立場から物事を思索し、漢軍の勝利が第一義だと切願するのが当たり前のことだったのであろう。その中、李陵の身分変化を促した契機は、彼が匈奴軍へ戦争術を教える、同じ降将の李緒と間違えられたせいで、漢にいる一族が無残に処刑されてしまったことである。その悲報を耳にした李陵は激怒し、直ちに李緒を殺した。李緒と醜関係があった大閼氏（単于の母）の存在を考慮し、単于は「心配は要らぬ」と言い、李陵を北の方へ一時避難させた。まもなく大閼氏が病死し、再び単于のところに呼び戻された際の李陵は、人間がすっかり変わったように見えた。

本来なら、代々将軍を輩出する李氏一族に連なる勇猛果敢な将軍であった李陵は、無論「精忠報国」の猛将になるのが当然だったが、「李緒殺害事件」が一段落した後、彼は右校王に任命され、単于の婿までになり、漢の将軍ではなくなった。そして、李陵は初めて胡地の風俗を理解しようと努力する。言い換えれば、李陵は肉親の死によって帰朝を断念し、さらに、「漢将」という身分を捨てきることを代価にしてやっと異文化の世界に足を踏み入れることができたのである。

李陵は最初、匈奴の風俗や習慣に対して違和感と抵抗感を持っていたが、新しい身分を手に入れることによって、彼の中にまた新しい匈奴観が生まれてきた。例えば、『李陵』のなかに、以下の一節がある。

野卑滑稽としか映らなかった胡地の風俗が、しかし、その地の実際の風土、気候等を背景として考へて見ると決して野卑でも不合理でもないことが、次第に李陵にのみこめて来た。(p.514)

ここで、「野卑滑稽」から「野卑でも不合理でもないこと」への認識転換に注目してほしい。捕虜となった後、李陵の目に映された匈奴の生活は、奇異なものばかりであった。それは、必ず漢に残されていた家族のもとへ帰るという強い信念を持ちながら、匈奴があくまでも短期滞在の異国にすぎないと思う故だったのであろう。だが、肉親の死後、もはや帰国への希望を失ってしまった。これから第二の母国になるかもしれない匈奴の土地に対して、李陵ははじめて客観的な事情（「その地の実際の風土、気候等」）に基づき、相手の文化と風俗を理解しようと試みる。同時に、母国（漢）の習俗に対する李陵の疑惑も見逃してはいけない。例えば、以下の一節を見てみよう。

たとへば今迄人間には名の外に字がなければならぬものと、故もなく信じ切つてゐたが、考へて見れば字が絶対に必要だといふ理由は何処にもないのであった。(p.515)

「字」（あざな）とは、古代中国で成人男子に実名以外につけられた名のことである。歴史的に、中国の人は個人に特有の名として姓（氏）と諱（名）と字の三つの要素を持っていた。諱は軽々しく用いられることは忌避され、同時代人に対しては、親や主君などの特定の目上の人物だけが諱を使用し、それ以外の人間が諱で呼びかけることは極めて無礼なこととされていた。逆に、そういった諱で呼びかけられる立場にある者がわざわざ字で呼びかけることは、立場とは別に一定以上の敬意を示すことになる。

『李陵』の文末に、武帝の死と昭帝の即位とを報じるため、漢の使者として匈奴に到着した任立政らは、李陵の故人である。李陵の帰朝を願う任立政は、李陵に向かって、次のように話しかける。

少卿よ、多年の苦しみは如何ばかりだったか。

少卿よ、帰ってくれ。富貴などは言ふに足りぬではないか。どうか何もいはずに帰ってくれ。(p.522)



「少卿」は、李陵の字である。ここで、あえて長年の親友の字を呼ぶのは、一種の敬意を表したかったのであろう。しかし、中華文化系統の記号のひとつとして周知されている「字」について、李陵は、その存在の意味を否定しようとしている。それは、漢の礼制度そのものを拒否する姿勢だと読み取れるし、また李陵自身が、漢人に軽蔑されるはずの匈奴の「功利主義」を知らず知らずのうちに受け入れた証拠でもある。ここまでを総括すると、最初は匈奴全体に対して違和感と抵抗感を覚えながらも、漢の軍人としての自分の意志を貫こうとした李陵だったが、彼は肉親の死によって帰朝を断念し、次第に異郷の風土や習俗に馴染み、漢人による匈奴に対する蛮族視という立場から脱出し、匈奴の実情に基づきながらその地を客観視しようとする。

以上が、中島敦が描いた李陵の匈奴体験と匈奴観の変化である。

### 第三節 司馬遷の匈奴征伐批判と「李陵の禍」

では、李陵の匈奴体験と司馬遷の物語との繋がりが如何なるところにあつたのか。その問題にアプローチするために、まず「李陵の禍」から話す必要があるだろう。李陵の戦死を確信していた武帝は、李陵が捕虜になったという報告を受けて激怒した。李陵の妻子家財等の処置について計った際には、武帝の逆鱗に触れることを恐れていた臣下が、口を揃えて李陵を激しく論難した。しかし、ただ一人、司馬遷だけは違っていた。

先行史料の『漢書』「李広蘇建伝第二十四」には、司馬遷の弁護ぶりが巨細に記録されている。

陵事親孝與士信常奮不顧身以殉國家之急其素所畜積也有國士之風今舉事一不幸全軀保妻子之臣隨而媒蘖其短誠可痛也且陵提步卒不滿五千深輮戎馬之地抑數萬之師虜救死扶傷不暇悉舉引弓之民共攻圍之轉鬥千里矢盡道窮士張空拳冒白刃北首爭死敵得人之死力雖古名將不過也身雖陷敗然其所摧敗亦足暴于天下彼之不死宜欲得當以報漢也(李広蘇建伝第二十四 班固 漢書五十四 秘書監上護軍琅邪県開国子顔師古注)

陵は親に仕えて孝であり、士と交わっても信義あり、常に奮って一身を顧みず国家の危急に殉じる。その平素積み蓄えたところには、国士の風格がある。いま事を挙げ、一度不幸に陥ると、わが身を全うし妻子を保ちたる臣が、ここぞとばか

り陵の一失をあげつらって罪を問おうとしているのは、誠に痛恨に耐えない。ともあれ陵は五千に満たぬ歩卒を率いて兵馬の地深く踏み入った。数万の敵軍を重傷の者の手当てもままならぬ窮地に追い込んだ。敵は弓を引く民のことごとくを投入して、共に陵を取り囲んだ。陵の軍は転戦千里、矢尽き道に窮まり、士卒は空穹を張り、白刃を犯し、死を賭して敵と闘った。人の死力を尽くさせえたことでは、古来の名将でもこれに過ぎる人がない。その身は陥り敗れたとはいえ、その敵を砕き破ったこともまた天下に顕彰するに足るものである。彼が死ななかったのも、何らかの事宜を得て漢に報いようと考えたのである。

以上の主な内容は、『李陵』の作品でもほぼそのまま忠実に承継された。

陵の平生を見るに、親に事へて孝、士と交はって信、常に奮って身を顧みず以て国家の急に殉ずるは誠に国士の風ありといふべく、今不幸にして事一度破れたが、身を全うし妻子を保んずることをのみ唯念願とする君側の佞人ばらが、此の陵の一失を取り上げて之を誇大歪曲し以て上の聡明を蔽はうとしてゐるのは、遺憾此の上極まりない。抑々陵の今回の軍たる、五千に満たぬ歩卒を率ゐて深く敵地に入り、匈奴数万の師を奔命に疲れしめ、転戦千里、矢尽き道窮まるに至るも尚全軍空弩を張り、白刃を冒して死闘してゐる。部下の心を得て之に死力を尽さしむること、古の名将と雖も之には過ぎまい。軍破れたりとはいへ、その善戦のあとは正に天下に顕彰するに足る。思ふに、彼が死せずして虜に降ったといふのも、潜かに彼の地にあつて何事か漢に報いんと期してのことではあるまいか。……

(p.497)

『漢書』にせよ、『李陵』にせよ、いずれも (1) 李陵の人柄と武功を誉め称え；(2) 「全軀保妻子の臣」(自分の身の安全をはかり、妻子を養うことばかりを考える)のことを容赦なく罵倒し；(3) 匈奴との戦いで李陵の勇姿を評価し；(4) 李陵は捕虜になったとはいへ、必ず何か時機を待っているに相違ない、という順に司馬遷の弁護風景が描かれている。

一見したところ、危険を冒しながらも弁護を敢行した司馬遷と弁護対象である李陵とは、信頼厚い旧友のように思われがちかもしれないが、実際、この二人はあまり深い関係を持つ知人ではない。司馬遷の遭遇を知った李陵の反応について、中島敦は次のように述べている。

李陵は別に有難いとも気の毒だとも思はなかった。司馬遷とは互に顔は知ってゐるし挨拶をしたことはあっても、特に交を結んだといふ程の間柄ではなかった。むしろ、厭に議論ばかりしてうるさい奴だ位にしか感じてゐなかつたのである。

(p.514)

この表現と見るだけだと、やや冷酷薄情の李陵像に仕上げたようだが、実際のところ、二人の関係は中島が描いた通りだと言える。では、司馬遷は何故自らの命を落とす覚悟で李陵を弁護したのか。これについて、吉原英夫は、以下のように述べている。

司馬遷は、敗戦の理由を李陵一人の責に帰そうとする宮廷の雰囲気憤りを、持ち前の俠気から、李陵を弁護した。司馬遷に他意はなかつたと思われるが、武帝はその発言を、自分のとつた今回の作戦を批判するものと受け止めたと考えられる。李陵の人格は立派であり、李陵が五千人の歩兵で十万を越す匈奴の大軍を敵にまわして善戦したと言うことは、敗戦の原因が武将李陵の戦闘の方法や統率力にあつたのではなく、武帝の作戦にあつたということになるからである<sup>9</sup>。

上記のように、武帝は司馬遷が李陵を弁護した裏には自らの作戦の不備への批判が潜んでいると疑っていると指摘されるが、筆者は「李陵の禍」の裏にはさらに分析の余地があるのではないかと考える。その一例として挙げておきたいのが、李陵を弁護した際の司馬遷自らの心境である。

僕與李陵、俱居門下。素非能相善也。趣舍異路、未嘗銜盃酒、接慇懃之餘權。然僕觀其爲人、自守奇士、事親孝、與士信、臨財廉、取與義。分別有讓、恭儉下人、常思奮不顧身、以徇國家之急。其素所蓄積也。僕以爲有國士之風。夫人臣、出萬死不顧一生之計、赴公家之難、斯以奇矣。今舉事一不當、而全軀保妻子之臣、隨而媒孽其短。僕誠私心痛之。

僕と李陵とは、俱に門下に居る。素より能く相善きに非ざるなり。趣舍路を異にし、未だ嘗て盃酒を銜み、殷勤の餘權に接せず。然れども僕其の人と爲りを觀るに、自守の奇士にして、親に事へて孝、士と與にして信、財に臨んで廉、取與には義あり。分別には讓る有り、恭儉にして人に下り、常に奮して身を顧みず、以て國家の急に徇はんことを思ふ。其の素より蓄積する所なり。僕以て國士の風有

りと為す。夫れ人臣は、萬死に出て一生の計を顧みず、公家の難に赴く。斯れ以て奇なり。今事を挙ひて一たび當たらず、而るに軀を全うし妻子を保つての臣、随ひて其の短を媒蘖す。僕誠に私かに心に之を痛む。(司馬遷「報任少卿書」[「任少卿に報ずるの書」]、竹田晃『新釈漢文大系 第83巻 文選(文章篇)中』明治書院、1998年7月より、ルビ省略)<sup>10</sup>

上記のように、二人の関係は確かに親密なものではなかったが、李陵を弁護した主因として、司馬遷は「信念を曲げぬ英傑」と「国士の風有り」という点を挙げたのである。また、『史記』「李將軍列伝第四十九」において、司馬遷は李陵の祖父である李広を「才気は、天下無双なり」と激賛し、多大な好意を示した。故に、「祖父の風あり」と言われる李陵までを引き立てたのも容易に理解できよう。

だが、李陵を弁護し、自分を極めて不利な立場に追い込んでしまうのは、ただ李陵を讃えながら、「全軀保妻子」の連中たちを批判するために冒した冒険だとは考え難い。司馬遷の弁護論は李陵平生の行状を述べたものだったが、この弁護の最重要部分は匈奴征伐における李陵の勇敢な行為である。言い換えると、李陵が匈奴軍を相手に死力を尽くして戦い、彼に勝る將軍がいないと司馬遷が賞賛することは、同時に匈奴戦争の最高責任者である武帝將軍のことを責めるということにも繋がる。例えば、『史記』「衛將軍驃騎列伝第五十一」には、次のように見える。

蘇建語余曰吾嘗責大將軍至尊重而天下之賢大夫毋稱焉願將軍觀古名將所招選擇賢者勉之哉大將軍謝曰自魏其武安之厚賓客天子常切齒彼親附士大夫招賢絀不肖者人主之柄也人臣奉法遵職而已何與招士驃騎亦放此意其爲將如此(「衛將軍驃騎列伝第五十一 史記百一十一」)

蘇建が私に語って言うよう、「かつて私は大將軍を責め、『尊貴の身分でありながら、天下の賢大夫は誰も大將軍をたたえない。將軍には、昔の名將に鑑み、賢者を選んで登用するように』と言ったところ、大將軍はこれを辞謝して、『魏其侯・武安侯らが賓客を厚遇して以来、天子は常に齒をくいしばり無念であった。かの士大夫を親しみ手なづけ、賢者を招き不肖を退けることは、人主の権柄に属することで、人臣としてはただ法を奉じ職に従うだけでよい。士を招こうなどとは思わぬ』と言われた」と。驃騎もまたこの意にならったもので、將軍としての彼らのあり方は、このようであったのである。

霍去病は衛青と並んで匈奴との戦争の最高責任者であり、蘇建の言葉を借りて驃騎將軍霍去病の人事に関する見解を批判するのは、つまり彼らの武帝の意に迎合する行為への司馬遷自らの批判なのではなかろうか。なお、『史記』「蒙恬列伝第二十八」の中に、秦代の將軍として匈奴との戦う責任者であった蒙恬について、司馬遷はこう書いている。

吾適北邊自直道歸行觀蒙恬所爲秦築長城亭障塹山堙谷通直道固輕百姓力矣夫秦之初滅諸侯天下之心未定痍傷者未瘳而恬爲名將不以此時強諫振百姓之急養老存孤務修衆庶之和而阿意興功此其兄弟遇誅不亦宜乎何乃罪地脈哉（蒙恬列伝第二十八史記八十八）（『四部叢刊 百衲本二十四史』商務印書館、民国年間）

私は北の辺境に行つて直道（九原から甘泉に通ずる道路）から帰り、途中蒙恬が秦のために築いた長城の要塞を見たが、山を掘り、谷を埋めて直道を通じたこと、誠に民の労苦を顧みないものである。秦が諸侯を滅ぼした当初、天下の人心はまだ安定せず、傷痍の者もまだ癒えなかった。名将の恬としては、この時においてこそ人民の危難を救い、老人を養い孤児を憐れみ、庶民の融和をはかるようにしなければならなかったのである。ひたすら上意におもねって、自身の功を立てることにつとめた。こうして兄弟ともども誅殺に遇うのも当然ではなかろうか。どうして罪を地脈ごときに帰することができるのでしょうか。

秦王朝が成立した直後、まずは国内を安定させるべきにもかかわらず、始皇帝の意に阿るため、蒙恬は匈奴征伐を始めるのである。蒙恬の行為への批判が上記の引用文から読み取られる。高祖以来文帝に至り、漢王朝は匈奴の力を恐れ、公主（皇女）を単于に嫁がせ、匈奴と和親を結んできたが、これは中華思想を持つ漢王朝にとっては耐え難い屈辱であった。武帝は対匈奴戦争に訴え、中華名譽を回復するためでもあるし、万民の願望の達成ゆえであると言ってもよかろう。ところが、外征を始めて以来、漢王朝各方面にわたる財政支出拡大で財政悪化が進み、『漢書』「昭紀第七」に、武帝末年の社会に及ぼした惨害が記載されている<sup>11</sup>。ここで、『李陵』の創作時期（太平洋戦争の最中）に注目してほしい。当時（1942年）の日本国民生活は戦争が長期化するにつれて、極度に低下していた。東京に戻った中島敦の目には、周辺の悲惨な情景が、まるで『史記』から読み取れる秦と漢の匈奴政策に重なり、司馬遷の批判に共感したのかもしれない。

最後に、「李陵の禍」の話に戻すと、司馬遷が漢の匈奴政策に対して批判的な見解をもつ

ていたことが朝廷（武帝）に知られたことで、李陵一族の処置問題について召問され、ついに「李陵の禍」事件の導火線に火をつけたと推測できよう。つまり、司馬遷が李陵を弁護したことで宮刑を処されたと思われがちだが、「李陵の禍」の裏には武帝の匈奴征伐に対する司馬遷の密かな批判の姿勢が誘因として潜んでいるのである。

#### 第四節 『史記』から見る司馬遷の匈奴観

前述したように、司馬遷は李陵の物語を歴史に書き残す上で重要な役目を担った人物であり、彼の『史記』は中島敦の『李陵』の重要な参考史料の一つである。これについて、武田泰淳は司馬遷が「匈奴問題が最も重要性を示した武帝治下の人」だと位置付けており、「匈奴列伝第五十」が「匈奴問題の集大成である。精密な歴史的研究」<sup>12</sup>だとも述べている。従って、漢人の立場から離れつつ、匈奴の騎馬遊牧民的な生き方・風俗習慣が自分に適しているということを理解しようとする中島敦の李陵像には、歴史上の司馬遷の匈奴観が投影されている。

ここでは、まず、司馬遷の匈奴観について触れてみたい。司馬家は周の時代から史官として務め、その後晋と秦を経て、漢の代となって四代目の史官となったのが司馬遷の父・司馬談である。その司馬談が息子に施した教育として、主に、二つが挙げられる。一つは、歴史家の素質をしっかりと身につけるための勉学である。青年期の司馬遷は、孔安国と董仲舒という二人の高名な先生について学んでいた。孔安国は孔子の子孫の一人にあたる人物であり、五経（易・書・詩・礼・春秋）博士でもある。董仲舒は武帝のシンクタンクのなかの重役として、学者と政論家の両分野で華々しく活躍していた。この二人は、それぞれ『尚書』（堯の時代から周の時代までの王の記録をまとめた歴史書）と『春秋公羊伝』（『春秋』という古典に対する公羊派といわれる学派の解釈を集めた書物）を専門にしており、歴史の資料の読み方や歴史哲学を司馬遷に教授していた。もう一つは、諸学の伝授を終えた後の長距離旅行である。司馬遷は二十歳の時、太史公（太史あるいは太史令ともいわれる。歴史官のこと）であった父のあとを継ぐため、約二年間の長い旅に出たのである。中国の南方から東方を巡り、各地の古跡を訪ね、伝説を聞き、風俗を調べ、彼の地理的・歴史の見聞を大いに広めた<sup>13</sup>。

それに関して、佐藤武敏は、司馬遷の旅行先から考察し、この大旅行の目的を「国家の祭祀箇所の探訪、儒教の礼の学習、史跡の調査の三つがある」<sup>14</sup>と結論づけた。また、中島敦は、『李陵』のなかで「当時としては変った教育法であったが、之が後年の歴史家司馬遷に資する所の頗る大であったことは、いふ迄もない。」とも高く評価する。その後、郎中（天

子の身边を護衛する侍従官)に任命された司馬遷は、武帝の随員として旅に出たり、南方の少数民族の視察に派遣されたりしていた。これらの旅行先は南方と東方が中心であり、北方の長城を越えて匈奴領内にまで入ることはなかった。

一方、高祖の時代において、漢と匈奴の間では(1) 公主を単于の妃に差し出し、(2) 皇帝と単于との間で兄弟の約束を交わし、(3) たくさんの贈り物(絹・酒・米等)をして和睦を保つことになった。そして、この関係は高祖以後しばらく続くことになったが、文帝・景帝のときには(4)「関市を通ずる」、すなわち国境に貿易場を開くという条項も加えられたのである<sup>15</sup>。その後、武帝期に入り、漢と匈奴の間には「モノ」と「ヒト」の交流が絶えず、たとえ匈奴体験がなくても、相手の情報を寄せ集めることができたと推測できる。例えば、匈奴領内で長く暮らしていた張騫という人物は、タリム盆地タクラマカン砂漠の向こうに点在する西域諸国の地理、人口、兵力、産物に関する貴重な情報、すなわち『漢書』「西域伝」に紹介されている西域三十六国の実情を漢へ伝えたのである。

また、当時、重要な史料は宮廷に揃っており、司馬遷はそれを自由に利用できる立場にあった。よって、実際に匈奴へ足を運んだことのない司馬遷は、先行史料と匈奴生活体験者から得た情報に基づき、『史記』の「匈奴列伝第五十」を完成させたと考えられる。この「匈奴列伝第五十」は、司馬遷の匈奴観を知るための重要な史料なのである。

ここで、特に言及しておきたいのは、「匈奴列伝第五十」における中行説という宦官の事跡である。武帝の祖父である文帝は、宗室の娘を公主に仕立てて新しく即位した老上稽粥単于の閼氏(妻)とする際に、中行説を公主の付き添いとして同行させた。だが、中行説は匈奴に到着すると、直ちに単于へ忠誠を誓い、単于の臣下として厚遇されるようになった。匈奴を安定化させるため、中行説は様々な分野において単于に進言し、また、漢から来た使者たちが吹っかけてきた論争では、ことごとく彼らを論破した。例えば、漢の使者が言う「匈奴の風俗は老人を賤しめます」に対して、中行説は、以下のように述べている。

匈奴明以戰攻爲事其老弱不能鬥故以其肥美飲食壯健者蓋以自爲守衛如此父子各得久相保何以言匈奴輕老也(匈奴列伝第五十 史記一百十)

匈奴は公然と戦争を本業としている。老弱者は戦えない故、もっぱら壮者に美食を与え、それで自らも国を守っていると思っているのである。それでこそ父老もそれぞれ長く身を保つことができる。どうして匈奴が老人を軽んずるなどと言えよう。

上述のように、中行説は匈奴の客観的な現状から説明し、美味を壮者に与える裏には、老人を保護する意図が潜まれていると主張する。匈奴では父や兄が死ねば継母や嫂を自分の妻にするという習慣への漢の使者からの非難について、中行説は堂々と次のように反論する。

匈奴之俗人食畜肉飲其汁衣其皮畜食草飲水隨時轉移故其急則人習騎射寬則人樂無事其約束輕易行也君臣簡易一國之政猶一身也父子兄弟死取其妻妻之惡種姓之失也故匈奴雖亂必立宗種今中國雖詳不取其父兄之妻親屬益疏則相殺至乃易姓皆從此類且禮義之敝上下交怨望而室屋之極生力必屈夫力耕桑以求衣食築城郭以自備故其民急則不習戰功緩則罷于作業嗟土室之人顧無多辭令喋喋而占々冠固何當（匈奴列伝第五十 史記一百十）

匈奴の習俗では、人は家畜の肉を食い、その乳汁を飲み、その皮を着る。家畜は草を食い、水を飲み、季節によって移動する。それゆえ、人々は戦時には騎射を練習し、平時には平和を楽しむのである。その法制は簡易で実行しやすく、君臣の間も気軽で、一国の政治はちょうど一身のように自在である。したがって、例え匈奴は国が乱れても、かならず同宗同種のもを立てて王とする。ところで、中国では、うわべを飾って父兄の妻をめとらないが、親属はますます疎遠となり、ひいては互いに殺しあい、結局革命となって、帝王の姓を易えるようになる。それはすべてこうした事情に基づくのである。その上強いて礼儀をおこなう弊害として、上下こもごも恨みあい、競って家屋を造り土木を起し、結局は生計力を尽くしてしまう。また農耕と養蚕につとめて衣食を求め、城郭を築いて自ら防備するから、人民は戦時にも攻戦に習わず、平時には農耕に疲れる。ああ泥の家に住む漢人よ、顧みて喋々佔々と多言を弄するな。冠をつけていたと行って、いったい何の益があろう。

これらの反論から見ると、中行説が実によく匈奴の地理・習俗・制度などを理解していることがわかる。中行説と漢からの使者との議論に関して、「漢の現状に対する中行説の批判の舌鋒は鋭い。彼の口を借りて、司馬遷自身が思いのたけをほとぼしらせているのではないかと思えてくる。」<sup>16</sup>という林俊雄の指摘に賛成の意を表したい。司馬遷が、痛快なまでにその議論を悉く記録したのは、彼自身も匈奴の価値観を認めていたということなのではないか。こうした匈奴の騎馬民族的な生活風習を理解しようとする傾向は、『李陵』の中



にも散見される。例えば、中島敦は、李陵の口を借りて次のように語っている。

引用 (1)

厚い皮革製の胡服でなければ朔北の冬は凌げないし、肉食でなければ胡地の寒冷に堪へるだけの精力を貯へることが出来ない。固定した家屋を築かないのも彼等の生活形態から来た必然で、頭から低級と貶し去るのは当らない。漢人の風を飽く迄保とうとするなら、胡地の自然の中での生活は一日と雖続けられないのである。 (p.514)

引用 (2)

漢の人間が二言目には、己が国を礼儀の国といひ、匈奴の行を以て禽獣に近いと見做すことを難じて、単于は言った。漢人のいふ礼儀とは何ぞ？醜いことを表面だけ美しく飾り立てる虚飾の謂ではないか。利を好み人を嫉むこと、漢人と胡人と何れか甚しき？色に耽り財を貪ること、又何れか甚しき？表べを剥ぎ去れば畢竟何等の違ひはない筈。たゞ漢人は之をごまかし飾ることを知り、我々はそれを知らぬだけだ、と。漢初以来の骨肉喰む内乱や功臣連の排斥擠陥の跡を例に引いてかう言はれた時、李陵は殆ど返す言葉に窮した。(中略) たしかに、胡族の粗野な正直さの方が、美名の影に隠れた漢人の陰険さより遥かに好ましい場合が屡々あると思った。諸夏の俗を正しきもの、胡俗を卑しきものと頭から決めてかゝるのは、余りにも漢人的な偏見ではないかと、次第に李陵にはそんな気がして来る。 (p.515)

下線で示した通り、中島敦が作り上げた李陵像には、司馬遷の匈奴観が実に多く投影されている。特に、引用 (2) のところ、李陵が漢と匈奴の本質を明辨する単于に言い負かされる場面は、中行説が漢の使者を激しく論破する場面を想起させる。中島敦と司馬遷は、それぞれ二人の登場人物（単于と中行説）の口を借りて、匈奴習俗の合理性と表裏一体を訴えながらも、礼儀の国と自称する漢の虚偽性を容赦なく暴いたと言っても過言ではない。

総括すると、中島敦が司馬遷の物語を『李陵』に書き加えた理由として、一つは、創作面において、「李陵の禍」の経緯と理由を説明しておく必要があり、その裏に隠されている「匈奴」という要素を明らかにするためでもある。もう一つは、「国家」としての匈奴または「民族」としての匈奴を客観視しようとする点に関して、中島敦が司馬遷の匈奴観に共感を覚え、それを作中の李陵の匈奴体験と匈奴観の変化に反映させたためである。

## 第五節 『李陵』の蘇武像と昭和10年代の英雄像

『李陵』の第三章「李陵・蘇武篇」における李陵と蘇武との再会場面は、すべて李陵の視点から描かれ、蘇武の主観が記されていないことは従来から指摘される通りである。これに関して、李陵の目線で作られた蘇武像に関する先学の主な観点を概括していえば、以下の四点である。

### 観点 (1)

「李陵の中の蘇武が浄化されて行けば行く程、反照的に李陵の矮小性、不純性（仮にそう言うておくとして）がますます明らかになるという関係が一方にある反面、そうした蘇武の偉大さや自己の卑小さを知っているのも李陵に他ならないから、両者の落差は実は李陵の苦悩の深さ、誠実さとして読者には響いてくるという関係も、ここには成立しているのである。それが、李陵の目を通してのみ描かれる蘇武という視点の果す働きである。」<sup>17</sup>（勝又浩）

### 観点 (2)

「祖国漢の文化を絶対視し、みずからを圍繞する異文化をけっして認めようとはせず、ただ祖国愛にのみ動かされて漢節を守りぬく蘇武は、異文化の存在を認め、漢文化をも相対化せざるをえなくなってきた李陵にたいして、捨てたはずのみずからの過去への回帰を迫るのだ。」<sup>18</sup>（渡辺一民）

### 観点 (3)

「李陵と蘇武の対照は、運命により漢に帰れないまま異国に骨を埋める者と、漢に忠節を貫いて漢に迎えられる者の対照ではない。さらには、史上に愛国者と売国奴という正反対の評価を課した、運命の過酷を浮き立たせるための対照でさえもない。対照されているのは、「聞える」ことを意識する李陵と、そんな意識を知らない蘇武である。「漢にまで聞えない」こと、「人に知られざること」を憂えないのが蘇武であり、これを憂慮するのが李陵である。」<sup>19</sup>（小沢秋広）

### 観点 (4)

「この時代、＜純粹＞はキーワードであった。反米感情の裏返しとして、純粹な

日本精神、大和魂などが持てはやされた時代であった。純粹なく国土への愛情を持ち、忠節を守る蘇武はたしかに当時の理想像であっただろう。<sup>20</sup> (山下真史)

李陵と蘇武との落差によって、前者の人物像の造形を一層深化させたという勝又浩の観点(1)は、今までの多くの先行研究に見られる代表的な説である。漢と匈奴の狭間で揺らぐ李陵と、漢の世界に終始する蘇武との相違点は、実に鮮明で比較しやすいところがある。その相違点から出発し、李陵の漢に関する記憶を呼び戻せたのが蘇武であり、彼が李陵と漢との間の架け橋のような存在だと解釈したのは観点(2)の渡辺一民である。一方で、観点(3)の小沢秋広は従来の「愛国・売国」の観点から離れ、李陵自身の問題に注目する。すなわち、自らの行動が「聞こえる」(つまり、評価される)かどうかのところに、李陵と蘇武の対立が存在するとの論である。それに、観点(4)の山下真史は、蘇武像と『李陵』の創作背景である昭和10年代との関連性に触れている。

上記のように、李陵にとっての対照的な存在として蘇武が描かれているという見解が先行研究の大半を占めており、人物像の創作と時代との関連性についての研究はすでに十分であるとはいえない。

先行研究によって既に指摘されているように、『李陵』の掲載された『文學界』(昭和18年7月号)には、火野葦平の「軍隊教育」という文章が巻頭に掲げられ、三好達治の「山本元帥」、齋藤史の「アッツ島の勇士」という詩歌が載せられている<sup>21</sup>。

その背景に、1939年9月に始まった第二次世界大戦の参加国としての日本は、1941年12月8日に真珠港攻撃を発動し、これが引き金となって、太平洋戦争が一気に勃発したという要因が見られる。当時、日本国内では「天皇への忠誠」及び「万世一系」の絶対性を声高に謳う狂気じみた宣伝ブームに乗ることになった。1936年、陸軍の戒嚴司令官・香椎浩平の「兵に告ぐ」をラジオで放送し、その中に「天皇殿下に背き奉り、逆賊としての汚名を永久に受けるやうなことがあつてはならない」ことを明確に強調した<sup>22</sup>。また、天皇の敕語によく言及されたのは「臣民の忠誠勇武」であった。だが、日本は米国との対戦で制空権と制海権を次第に失ってゆき、孤立しはじめた各拠点は次々と凄惨な玉砕の舞台となってしまった。例えば、1943年5月に、当時の山崎保代大佐が率いる2500名の守備隊が圧倒的なアメリカ軍に対して戦い続け、5月29日に「思い残す事はない。使用し得る兵力は百五十名、一団となって、全部残らず討ち死する決意である……。天皇陛下万歳」という決別電を日本に送り、最後の突撃を行って全滅を迎えた。一方、本土では、彼らは日本軍の鑑と讃えられ、戦意高揚と国民の士気を鼓舞する材料になった<sup>23</sup>。一度このようなムードになると「玉砕」しなければ卑怯者という烙印をおされ、日本兵は捕虜となったことが分か

ればたちまち不名誉であるとされた。一例としてまず挙げておきたいのが、オーストラリアのカウラ会第五代会長・紀川政俊の証言である。

我々の受けた教育によれば、戦争捕虜は必ずや殺されるはずでした。しかし捕虜生活がどんなものであろうかは、誰も教えてくれなかったのです。いったん捕虜となった者は、たとえ生きて終戦を迎えられたにせよ、その後は絶望的な人生を送らねばならない。たとえ日本に帰れたとしても、人のいない孤島のような場所に連行され、軍隊によって銃殺刑に処されるのだ。我々はそう思っていました。歴史を通じて、敵の捕虜となった日本人などそれまで唯の一人もいなかったのです。万が一生き残ったにせよ、もとの社会に復帰できるなどとは、夢にも思っていないませんでした<sup>24</sup>。

1941年12月8日、特殊潜航艇の艇長として真珠湾攻撃に加えた酒巻和男海軍少尉は、機器の故障や米軍の攻撃などで座礁し、そこで自爆を試みたが意識を失った状態で米兵に捕らえられた。すると、大本営は十名の写真から酒巻だけを削除し、「九軍神」として発表した。酒巻の家族は人々から「非国民」と非難され<sup>25</sup>、それ以後捕虜になった者たちは親族が「非国民」とされるのを恐れ、偽名を申告し、「ジュネーブ条約」に基づいて家族に手紙を出すようなことも控えることが多かった<sup>26</sup>。結果、その者たちは「未帰還」（戦死またはMIA）となった。『李陵』が発表されたのは、まさしくこのような「生きて虜囚の辱を受けず、死して罪禍の汚名を残すこと勿れ」といった「戦陣訓」が広く国民の義務と見なされていた時代であった。大岡昇平は、戦争中の日本の歴史小説の一般的傾向について、次のように述べている。

戦争中の統制下の歴史小説は、過去から現在の「積極的」対応物を選び出して来ることによって、戦争に協力した。われわれは昔から愛国的民族だったのだ。だから、これからも国を愛し、若く美しく逞しく戦わねばならぬ、黙って死なねばならぬ、という煽動文学となった<sup>27</sup>。

このような記述にもかかわらず、太平洋戦争の戦局の悪化と共に、中島敦『李陵』のような歴史の矛盾と無残さを主題とする作品も現れたことに、大岡は驚嘆を隠さなかった。確かに、昭和10年代の日本が求めていた英雄像は、決して李陵のような人物ではなかった。逆に、蘇武のほうが、「従容として悠久の大義に生きることを悦びとすべし」（「戦陣訓 第

七 死生観)にも、「恥を知る者は強し。」(「戦陣訓 第八 名を惜しむ」)にもふさわしいキャラクターだったといえる。中島敦は、史料に依拠しながらも、「鑑」のような蘇武像を造形した。蘇武像に関する中島の独創は、昭和10年代という独特な時代背景に深く繋がっているのである。

そこで、まず、『李陵』の蘇武像の創作プロセスについて述べてみたい。

李陵が匈奴に降りるより丁度一年前(前98年)、蘇武は平和の使者として捕虜交換のため匈奴へ派遣され、その同行者の一人が匈奴の内紛に関係したために、使節団全員が囚われる羽目になった。思わぬ運命の展開に直面せざるをえない蘇武が取った行動は、その場で自ら命を絶つことであった。『李陵』に登場する重要人物三人は、いずれも自らの意志で運命をコントロールすることができず、狂わされた運命を背負うしかない窮地に立たされた者達であった。しかし、蘇武が取った行動は、李陵や司馬遷と根本的に違ったものである。李陵は、生き捕られた後も、帰国の希望の光を失うことなく、まずは生きることを選択した。また、宮刑に処された司馬遷は、親子二代の宿願である『史記』を完成するため、惨めながらも「一つの書写機械」になって残りの人生を生き抜こうとした。よって、三人のなかで、すぐに死の道を選んだのは、蘇武のみなのだ。『漢書』「李広蘇建伝第二十四」において、蘇武が自殺を図る場面が次のように記載されている。

武曰事如此此必及我見犯死重負國欲自殺勝惠共止之(李広蘇建伝第二十四 班固 漢書五十四 秘書監上護軍琅邪県開国子顔 師古注)

武は、「そうした事情なら、必ず我に及んでくるに違いない。匈奴に犯されて死ねば、国家に二重に負くことになる」と言って、自殺しようとする。勝と恵がともにこれを止めた。

その後、単于は衛律(匈奴に投降した漢将)に命じ、蘇武を招いて投降させようとした。すると、

武謂惠等屈節辱命雖生何面目以歸漢引佩刀自刺(李広蘇建伝第二十四 班固 漢書五十四 秘書監上護軍琅邪県開国子顔 師古注)

武は恵らに、「臣節を屈し使命を辱しめるならば、生きていても、何の面目あつて漢に帰れよう」と言って、佩刀を引きよせて自ら刺した。

蘇武の自殺行為はいずれも未遂で終わったが、下線部に明確に示されたように、その行動の裏には「国家」と「臣節」が潜んでいる。蘇武にとって、やむをえず匈奴に捕らえられるにせよ、積極的に自ら降伏するにせよ、双方とも本来の「君臣」という上下関係を崩してしまう、すなわち「節」を失わせるという堪え難い行動に違いないのである。

その「節」とは、「信を為す所以なり、竹を以てこれを為る。柄の長さ八尺、旌牛の尾をもって其の朶を為すこと三重」（『後漢書』「光武帝紀」の李賢注）の意味である。自殺を念頭に入れた蘇武が死守したかったのは、まさしく漢の臣下として、朝廷に対する「忠」を重んじる「臣節」だと言える。『李陵』のなかにも、中島敦は蘇武が「稀に見る硬骨の士である」と評価し、「漢節を持した牧羊者」といった史実を再現している。

一方、李陵は違う。李陵と蘇武は約二十年の旧友だが、李陵が匈奴に投降した後、二人の間には、ほとんど音信が絶えていた。そして、再会できたのは、単于への降伏を拒んだ蘇武が、北海（バイカル湖）のほとりに移され、北方の無人地域での牧畜生活を始めてから数年後のことである。当時、すでに即位した新しい単于は、蘇武の安否を確認するため、彼と長年の友情を持つ李陵に「北方行」を頼んだのである。匈奴に降りた李陵にとって、節操高き蘇武に会いたいという気持ちは微塵もなかったのは推測できる。だが、それによって単于の命令に背くわけにはいかないため、李陵はやむをえず北へ向かった。

『李陵』のなかで、蘇武の居場所について、以下のように描かれている。

姑且水を北に遡り鄧居水との合流点から更に西北に森林を突切る。まだ所々に雪の残ってある川岸を進むこと数日、漸く北海の碧い水が森と野との向ふに見え出した頃、此の地方の住民たる丁靈族の案内人は李陵の一行を一軒の哀れな丸木小舎へ導いた。(p.517)

この地理や風景の描写は、『漢書』にも『史記』にも見当たらない。中島敦が「父祖伝来の儒家に育った」（『狼疾記』）といっても、このような匈奴の地理についての専門的な知識を有していたとは考えられない。村田秀明によると、『李陵』を執筆するにあたって、現存している中島敦の蔵書の中で、テキストとして使用されたと思われるものはいくつかあったが<sup>28</sup>、『李陵』関係地名が書き入れられていた『新制最近世界地図 増訂改版』「第五回支那（中華民国）地図」と『東洋古代史』「第四章 亜細亜南北両系統民族の抗争」が大いに利用され、『李陵』の成立に重要な役割を果たした<sup>29</sup>。

また、中島敦の旅歴を考察すると、旅順（1924年）、南満洲（1925年）、大連（1927年、

1932年)などへ足を運んだことがある一方で、かつての漢の時代の匈奴地域までを旅した体験がないことがわかる。つまり、人跡未踏の北海に関する生々しい地理と風景の描写は、中島が以上に示されたテキストを参考しながら、自ら創作したものなのだ。そこで、李陵一行の前で現れたのは、「頭から毛皮を被った鬚ぼう／＼の熊の様な山男の顔」をしている蘇武である。彼のその数年間の生活が全く惨憺たるものだったことは、後ほど李陵の記述で明らかになる。

中島敦によると、蘇武の「清冽な純粋な漢の国土への愛情それは、義とか節とかいふ外から押しつけられたものではなく、抑へようとして抑へられぬ、こん／＼と常に湧出る、最も親身な自然な愛情」である。蘇武のその感情は、漢の中央政府に対するものと言うよりも、漢そのものへの尊敬と未練だと考えられる。これは、蘇武と李陵の最大の相違点だといえよう。

李陵の場合は、彼が名将としての高いプライドの持ち主であり、自分の名を天下後世に残したいと考えていてもおかしくないが、李陵の匈奴への感情が本質的に一転したきっかけは、匈奴軍を卒いて漢軍と激戦した漢の降将の李緒と間違えられたせいで、漢に残していた彼の一族が悲惨な運命に遭った事である。悲報を耳にした李陵は新旧の恨みが重なって胸が引き裂かれそうであった。李緒と間違えられたせいで一族がこのような惨めな羽目になったと思ひ込んだ李陵は、悲報を聞いたその夜に李緒を殺害してしまう。これを聞いた単于は、李陵を罰するどころか、「心配は要らぬ」とあっさりと許してくれた。叔父の李敢とほぼ同じように見える行動を取ったが、二人の結末には天と地の差があり、その刺激は李陵にとっては大きかったに違いない。その上、李陵は武帝への怨みを生み出し、漢に戻る理由がなくなったと考えた揚句、自分を士として礼遇してくれる匈奴の単于に降伏することにする。従って、李陵の寝返りには肉親の惨死が原因していると考えられる。

他方、蘇武の場合は、匈奴に投降し、裕福な生活に恵まれることより、むしろ荒れ果てた北海の地で羊を放牧するほうを望んだのである。「飢餓も寒冷も孤独の苦しみも、祖国の冷淡も、己の苦節が竟に何人にも知られないだらうといふ殆ど確定的な事実も」蘇武の平生の節義を改めなかったのである。だが、『李陵』では、蘇武が李陵に向かって語った言葉より、三年間つづけて匈奴の於軒王から衣服食料等を救済してもらったことが分かる。また、李陵が蘇武と別れた時にも、十分な数の食糧衣服を残している。その後も、時々人を遣わしては食品・牛羊・絨氈を贈っていた。無論、於軒王と李陵が贈ったものは匈奴のものである可能性は極めて高い。もし蘇武がひたすら漢の中央政府へ自らの忠誠を示したいならば、匈奴からのものを一切断るのは普通であり、これらを残らず受け取る行動は、非常に不自然だといえる。

中島敦も作品のなかでそれを疑問視している。例えば、北海で蘇武と再会した李陵は、まず「此の男は何を目あてに生きてゐるのか」「何故早く自ら生命を絶たないのか」と怪しんだ。李陵の立場から見ると、漢へ復歸の目処が見えず、音信不通の北海で辛うじて生き延びるよりも、むしろ直ちに自殺したほうが道理条理に通じるだろう。

蘇武は、最初に「臣節」を死守しなければならないと思って自殺しようとしたが、北海での暮らしを始めて以来、多少変わってきたように受け取られる。ただ、蘇武の変化は、決して李陵の転向と同じものではない。

李陵の転向には、主に二つの起因が存在している。一つは、前述したように、漢に残した一族が成敗された故である。『李陵』の最後に、武帝の死と昭帝の即位を報じるため、匈奴に到着した漢の使者が、李陵を漢へ呼び返そうとする一節がある。しかし、李陵は「帰るのは易い。だが、又辱しめを見るだけのことではないか？如何？」と言い、誘いを拒否した。さらに、使者と別れた際、李陵は舞いながらこう歌った。

径万里兮度沙幕  
為君将兮奮匈奴  
路窮絶兮矢刃摧  
士衆滅兮名已隳  
老母已死雖欲報恩将安歸  
(p.524)

万里をへて 沙幕を渡り  
主君のため 将となって匈奴に奮う  
路に絶し 矢刃くだけ  
士衆滅び 名すでに潰れ  
老母すでに死す 恩に報いんと欲するも また何処かに帰せん  
(日訳——筆者)

「老母已死雖欲報恩将安歸」という一句に注目すれば、漢の王朝ではなく、肉親の恩に報じることこそが李陵にとっての第一義だと分るだろう。匈奴に生け捕られた頭初、李陵は密かに単于の命を狙っていた。しかし、その時、李陵の一番の心配事は、たとえ単于を討っていても、その首を持って脱出することができなければ、「漢に聞こえることはあるまい」とのことであった。「聞こえる」というのは、自らの功績を漢の朝廷に認めてもらい、



今まで厚遇されていなかった李氏一族の運も、これでやっと開けるようになるのではないか。

もう一つの起因は、作品のなかで明確に記されている。

李陵自身が希望のない生活を自らの手で断ち切り得ないのは、何時の間にか此の地に根を下して了った数々の恩愛や義理のためであり、又今更死んでも格別漢のために義を立てることもならないからである。(p.518)

李陵は、単于の娘を娶り、匈奴人の血を引いた子をもうけたのは史実である。これについて、中島敦も作中で言及した。

彼（注：李陵——筆者）の妻は頗る大人しい女だった。未だに良人の前に出るとおづ／＼してろくに口も利けない。しかし、彼等の間に出来た男の児は、少しも父親を恐れないで、ヨチ／＼と李陵の膝に匍上って来る。その児の顔に見入りながら、数年前長安に残してきた——そして結局母や祖母と共に殺されて了った——子供の倂を不図思ひうかべて李陵は我しらず慚然とするのであった。(p.151)

つまり、中島は『李陵』において「恩愛」と「義理」を重んじる李陵像を仕上げたのである。

では、蘇武の場合はどうだろう。蘇武が、異国で新しい家族に恵まれ、第二の人生を歩み始めた李陵と根本的に違ったのは、蘇武からみれば、匈奴は最初から最後まで「異国」の存在に過ぎなかった点に他ならない。例えば、於靬王と李陵が贈ったものは、蘇武にとって命を維持するための生活必需品、つまり特別な意義は一切存在しておらず、ただの「モノ」にすぎない。ここで、異民族の習俗や文化を排斥しつつ、母国の漢に固執する『李陵』の蘇武像が見えてくる。また、蘇武は李陵にとっての「鑑」のような存在である。中島敦はあえて史実に逆行し、匈奴と全く関わりを持たない蘇武像を作り上げたのである。この点を裏付ける重要な証拠として挙げておきたいのは、蘇武が匈奴で現地の女性との間にもうけた子のことが、『李陵』のなかで抹殺されてしまったことである。歴史上の蘇武が19年ぶりに帰還した翌年、息子の元は桑弘羊及び燕王らの謀反に加えていたために、連座して死んだ。蘇武自身も桑弘羊らと旧交があったため、官職を免じられたが、数年後には昭帝が崩御し、即位した宣帝に再び起用された。宣帝が老いた蘇武に同情し、ほかの子がないのかと臣下をやって聞いたところ、蘇武は次のように述べる。

前發匈奴時胡婦適產一子通國有聲問來願因使者致金帛贖之(李広蘇建伝第二十四班固 漢書五十四 秘書監上護軍琅邪郡開国子顔 師古注)

「以前、匈奴から帰るとき、たまたま胡妻が一子通国を産み、音信がある。どうか使者の手から金や帛を与えて贖い、これを引き取らせていただきたい」と願った。宣帝はこれを許可し、通国を漢に来てもらい、郎に任じた。

一方、『李陵』の最後には次の一節がある。

蘇武と別れた後の李陵に就いては、何一つ性格な記録は残されていない。元平元年に胡地で死んだといふことの外は。(中略) 漢書の匈奴伝には、その後、李陵の胡地で儲けた子が烏藉都尉を立て、単于とし、呼韓邪単于に対抗して竟に失敗した旨が記されてある。(中略) 李陵の子とあるだけで、名前は記されていない。

(p.525)

同じ匈奴と漢との間にもうけた混血児だが、李陵の子と蘇武の子の境遇は全く正反対だと言える。李陵の二人の子のうち、一人は漢の朝廷に殺され、もう一人は漢の歴史から排除されてしまった(ある意味での「殺された」とも言えよう)。それによって、李陵一族は完全に漢から消えたのである。前述したように、昭和10年代の日本では、敵の捕虜になってしまう日本兵が軍部またはマスコミによって意図的に姿を消され、本土では「死んだ人」と見られた。中島敦が『李陵』のなかで「鑑」のような蘇武像を作り上げたのは、まさにその時代のムードを反映するためであり、また国家と英雄像について問いかけたかったのである。

#### 第六節 終わりに——司馬遷と中島敦

1941年12月8日に始まった対米英戦争の戦火は一举に太平洋一帯に広がってきた。当時、ミクロネシアの島々巡回から帰還した中島敦はその絶筆エッセイ『章魚木の下で』に「気候ばかりでなく、周囲の空気が一度に違ったので、大いに面喰った」と書いている。それは、戦時的、軍事的体制の下で、文化的、文学的空間は変化せざるをえなかったのである。1941年2月、中島敦は転地療養と文学に専念することを真剣に考え始めた。1942年南洋か

ら帰国してきた中島敦は、戦時下の文学者のあり方について積極的に考えたことを、次の『章魚木の下で』から引用した文を見れば明白である。

- 思へば自分は今迄章魚の下で、時局と文学とに就いて全く何とノンビリした考へ方しかしてゐなかつたことかと我ながら驚いた。(p.22)
- 書くものの中に時局的色彩を盛らうと考へたこともなく、まして、文学などといふものが国家的目的に役立たせられ得るものとは考へもしなかつた。(p.23)
- 文学も戦争に役立ち得るのかと其の時始めて気が付いたのだから、随分迂闊な話だ。(p.23)
- 章魚木の島で暮してゐた時戦争と文学とを可笑しい程截然と区別してゐたのは、「自分が何か実際の役に立ちたい願ひ」と、「文学をポスターの実用に供したくない気持」とが頑固に素朴に対立してゐたからであつた。(p.24)

こうして、作家・中島敦は戦争状態を離れて単純に文学を語ろうとしたが、次第に両者を無関係な二つのものに分かれて考えることが無意味に思われるようになり、最後に一本の筆を握って「何か実際の役に立ちたい」と思うに至つたのである。しかしながら、ポスターの実用のためにはなりたくない。つまり、中島敦は戦争背景の下で、『李陵』を書き下ろしたが、それは国民の参戦意欲を向上させるためでもなく、戦争を正当化させるためでもない。一人の作家の立場から、自分の訴えを当時の大衆に伝えようとしたのである。

敵に投降行動を取る主人公李陵は、昭和10年代の日本政府が望んでいる「忠誠勇武」の兵士像と比較すると、望ましくない存在だと思われる。しかし、中島敦の書いた『李陵』は、一方的に蘇武を英雄化し、李陵を臆病な「逆賊」扱いをすることをせず、かえって「我もと天地間の一微粒子のみ、何ぞ又漢と胡とあらんやと不図そんな気」がする「認識者」の李陵を創作した。そうしたファナチックな軍人精神に、直接的な批評と反抗が許されるような時代ではなかつた。中島敦は自分のことを「南洋呆け」と韜晦し、『李陵』を通じて、少なくとも戦争や軍国体制に対する密かな抵抗を試みていると見ても間違いないだろう。『李陵』に込められた反戦の文脈から、戦争や国策や時局に文学的に協力しない抵抗文学者としての中島敦の側面が垣間見られる。日常から非日常の戦争状態に巻き込まれて、「人手の足りない此の際、宜しく筆を捨てて何等かの実際的な仕事に就いた方が、文学の為にも国家の為にもなろう」(『章魚木の下で』)と思つた中島敦は、文学を高い所に置いたので、「此の世界に於ける代用品の存在を許したくない」(『章魚木の下で』)のである。これは、不意に極めて残酷な宮刑に処された後も、筆を捨てずに『史記』を書き続けた司馬遷に相

似しているのではなからうか。

前述したように、元周から祖輩代々史官として王朝に仕えてきた太史令・司馬遷は、幼少の頃から諸学の伝授を受け、さらに中国全土の大旅行をした経験も持つ人材である。司馬談は武帝が泰山に登って天を祭った時にたまたま病気になり、武帝のお供をすることができず、悲しみ憤る限りに世を去ってしまった。その後、司馬遷は父の宿願を受け継ぎ、規模雄大の史書を後世に残す仕事に取り組み始めた。「何処迄も陽性で、良く論じ良く怒り良く笑ひ就中論敵を完膚なき迄に説破することを最も得意としてゐた」(『李陵』) 司馬遷であったが、天漢 3 年の春に、突如に「李陵事件」に巻き込まれたあげく、宮刑に処されてしまい、その後「知覚も意識もない一つの書写機械」(『李陵』) になったのである。そして、稿を起してから十四年もかかって漸く仕上げたのが『史記』である。

ここで、『史記』の創作原因を二つの面において明らかにしたい。作品『李陵』にも言及されるが、一つは、時代という要素である。武帝が即位する際まで、漢王朝は既に百年もの間天下を支配してきた。秦の王朝の始皇帝の反文化政策(焚書坑儒のこと)によって、消滅し、或いは隠匿されていた書物が次々と世に現れはじめ、漢の朝廷ばかりではなく、時代が史の出現を要求している時であった。もう一つは、家庭という要素である。司馬談は史書を編集することを生涯の仕事とし、残念ながらこの願いを叶えぬまま他界してしまった。父に引き続いて、『史記』を修纂する任務は言うまでもなく司馬遷が背負うことになった。こうした中で、司馬遷が思案をこらして取ったのは「述而不作」(述べて作らず)という方針であった。つまり、歴史の事実をありのままに記録することだと言ってもよい。

漢の文化を支えてきた六家(陰陽家、儒家、墨家、名家、法家、道家)中の「道家」以外の他の五家に対して、司馬遷は批評的な態度を取ると言われる。道家の第一人者と数えられる荘子の主な考え方は「無為自然」であり、歴史家の司馬遷にとって、その「無為自然」は「記録」ということで、つまり無為自然のままに歴史を書くことなのである<sup>30</sup>。

しかしながら、司馬遷は漢の中央政府が仕返しをすることを恐れ、生前に『史記』を奏進しなかった<sup>31</sup>。王国維の「太史公行年考」において述べた観点を要約すると、大体次のようである。

記言記事雖古史職然漢時太史令但掌天時星歷不掌紀載故史公所撰書仍私史也況成書之時又在官中書令以後其為私家著述甚明故此書在公生前未必進御(王忠愨公遺書内編 海寧王国維『觀堂集林卷第十一 史林三』1928年)

古史の職に属するとはいえ、漢の太史令は天文歴法を司る職であり、記録を扱わ

ない。故に、司馬遷が執筆したのは私選の書であった。とりわけ完成の時、司馬遷はまだ宮中で中書令を務めており、『史記』は明らかに私選の書である。故に、司馬遷は生前、それを武帝に捧げることがなかったのだろう。（日訳——筆者）

さらに、『史記』を後世に流伝させるために司馬遷が考えたのは、武帝の格別な計らいに密かに報い、彼の功績を大衆に伝えようとするところである。例えば、「太史公自序」に、封禪は武帝の功業の一つとしてあげられる<sup>32</sup>。「封禪」とは、天命を受けて天下を支配する王者は山東省にある泰山の頂上で最高の天神を祈るのが封であり、泰山の麓の梁父山で地の神を祈るのが禪であるとされている。高祖以来この盛儀を実施したのは武帝が最初の人である。漢王朝の正統性を天下に諭す目標を達成する面から考えれば、それは特筆に価する功績には間違いないのである。他に、「河渠書」で武帝の水利灌漑工事の成功を讃えることも司馬遷の慎重な考慮だろう。ただし、これらは武帝に媚び諂うためではなく、前述したように親子二代の心血を注いで編集できた『史記』を後世に伝播するためなのである。

「李陵事件」で腐刑に見舞われた後の司馬遷も、家族の悲報を耳にした李陵のように、まずは武帝の無情さを怨んだ。ただ、彼は歴史家であり、帝王を評価する上で、私怨を加えて史書を書いてはいけないということをはっきり理解していたのである。また、自尊心の高い司馬遷にとって、奸臣は怨恨の対象としてさえ物足りない気がする。結局、「我在り」という事実だけが悪かったという結論に辿りついた。「李陵事件」に遭わされた前後の司馬遷の変化に注目してみると、陽気で「我在り」の主張者から、「我」はみじめに踏み潰され、修史のため余命をつなぐ「一つの書写機械」へと変わっていたのである。こうした「我在りの喪失」という主題は中島敦の他作品の中によく見えているが、『李陵』においてもこの底流をなしている。

前述したように、『李陵』が創作する際の特殊な戦争背景を加えて考えてみると、李陵も司馬遷も蘇武も時代（あるいは、運命）に翻弄されつつ、自らの力で人生を構築することができない人物だと言える。これは、昭和10年代の戦争下ではごく普通に見られる人世の縮図なのではなかろうか。中島敦の『李陵』には、まさしくこのような昭和10年代の現実が託されているのである。

---

注：

<sup>1</sup> 荒正人「中島敦論」（『中島敦全集別巻』筑摩書房、2002年、p. 45）

<sup>2</sup> 平野謙「解説」（『現代日本文学全集 79』筑摩書房、1961年7月、p. 420）

<sup>3</sup> 三浦朱門「中島敦の文学」（『近代文学鑑賞講座 18』角川書店、1959年12月、p. 152）

<sup>4</sup> 沢田勲『匈奴——古代遊牧国家の興亡』東方書店、1999年1月

<sup>5</sup> 『李陵』の参考史料として、『漢書』の「李広蘇建伝」「司馬遷伝」「匈奴伝」、『史記』の「李將軍列伝」「太史公自序」「匈奴列伝」「李陵・蘇武伝」と国訳漢文大成『文選』の「任少卿ニ報ズル書」「蘇武ニ答フル書」

などが挙げられよう。

<sup>6</sup>『日本文学研究資料叢書 梶井基次郎・中島敦』（有精堂、1986年8月）に収録。

<sup>7</sup>范文瀾編『中国通史』第二冊（人民出版社、2009年）から抜粋し、筆者が訳したものである。

<sup>8</sup>阿辻哲次『漢字の歴史』大修館書店、1989年11月、p.113

<sup>9</sup>吉原英夫「李陵の禍」（漢文学会会報50号『中国文化——研究と教育——』1992年6月、p.39-40）

<sup>10</sup>竹田晃『新釈漢文大系 第83巻 文選（文章篇）中』明治書院、1998年7月、p.177

<sup>11</sup>「海内虚耗戸口減半」などの記述がある。

<sup>12</sup>武田泰淳『司馬遷——史記の世界——』講談社、1984年7月、p.185

<sup>13</sup>司馬遷は「太史公自序」において、その長距離旅行をこう語っている。「二十歳のとき、遷は南方を旅行した。まず、長江、淮水に遊び、会稽山に登って山上の禹穴（禹を祀ったという洞窟）を探勝した。ついで九疑山を訪ね、沅水、湘水に舟を浮かべた。そこから北上して汶水、泗水を渡り、斉と魯の都で学業を修め、孔子の遺風に接した。鄒、嶧では郷射の礼を学んだ。鄆、薛、彭城では苦しい旅をつづけたが、やがて、梁、楚を経て帰国した。」

<sup>14</sup>佐藤武敏『司馬遷の研究』汲古書院、1997年9月、p.145

<sup>15</sup>堀敏一『中国と古代東アジア世界』岩波書店、1993年12月、p.68

<sup>16</sup>林俊雄『スキタイと匈奴 遊牧の文明』講談社、2007年6月、p.222

<sup>17</sup>勝又浩「李陵」の構図」（日本文学研究資料刊行会編『日本文学研究資料叢書 梶井基次郎・中島敦』1986年8月、p.265）

<sup>18</sup>渡辺一民『中島敦論』みすず書房、2005年3月、p.203-204

<sup>19</sup>小沢秋広『中島敦と問い』河出書房新社、1995年6月、p.165-166

<sup>20</sup>山下真史『中島敦とその時代』双文社、2009年12月、p.240

<sup>21</sup>川村湊『狼疾正伝——中島敦の文学と生涯』河出書房新社、2009年6月、p.300

<sup>22</sup>三宅雪嶺『同時代史 第六巻』（全六巻）岩波書店、1979年1月、p.348

<sup>23</sup>保阪正康『昭和の戦争と独立——二十一世紀の視点で振り返る』山川図書出版社、2013年7月

<sup>24</sup>ハリー・ゴードン著、山田真美訳『生きて虜囚の辱めを受けず——カウラ第十二戦争捕虜収容所からの脱走——』清流出版、1995年11月、p.12-13

<sup>25</sup>酒巻和男『捕虜第一号』新潮社、1949年

<sup>26</sup>ハリー・ゴードン著、山田真美訳『生きて虜囚の辱めを受けず——カウラ第十二戦争捕虜収容所からの脱走——』清流出版、1995年11月

<sup>27</sup>大岡昇平『歴史小説の問題』文藝春秋、1974年8月、p.176

<sup>28</sup>「四部叢刊百衲本二十四史『史記』、『漢書』、『漢文叢書 史記』（塚本哲三編、有朋堂、大正9年7月）、『史記平準書・漢書食貨志』（加藤繁訳注、岩波文庫、昭和17年9月）、『支那通史 上册』（那珂通世著、岩波文庫、昭和17年5月）、『世界歴史大系第三巻 東洋古代史』（橋本増吉著、平凡社、昭和8年10月）、『新制最近世界地図 増訂改版』（三省堂、昭和14年12月）などが挙げられた。

<sup>29</sup>村田秀明「中島敦「李陵」関係地図」（熊本大学文学部国語国文学会『国語国文学研究』第29号、1993年12月）

<sup>30</sup>武田泰淳は『司馬遷——史記の世界』（講談社）の中で、この観点に言及した。

<sup>31</sup>この危険性は、林田慎之助の『司馬遷——起死回生を期す』の中にも指摘される。次のようである。

「帝の目に触れていならば、たちどころに禁書となり、司馬遷が八つ裂きの刑に処せられていたことは、まちがいないであろう。」

<sup>32</sup>原文：漢興以来至明天子獲符瑞建封禪改正朔易服色受命於穆清沢流罔極海外殊俗重詎款塞請來獻見者不可勝道臣下百官力誦聖德猶不能宣尽其意（「太史公自序」より）

日訳：漢が建国された以来初めて聞いた話だが、明天子（武帝のことを指す）が瑞祥を象徴する麒麟を獲得したため、封禪式を行った。正月の初日を設定し、服の色を変え、自分が天の指示で王者となったことを示す。今後、無限の恩沢を人民に施す。海外の異民族は何度も通訳によって漢を訪問する。漢王朝と関係を結ぶため、貴重な貢物を捧げに参る人は数えられないほど多い。臣下百官はいくら天子の美德を賛美しても足りない気がするのである。（日訳——筆者）

付記：

『李陵』からの引用は『中島敦全集1』による。『章魚木の下で』からの引用は『中島敦全集2』による。

## 終章 中島敦文学を総括して

わずか33歳の若さでこの世を去った昭和期の作家である中島敦は、同時代のほかの作家と比較すると、作品の量はそれほど多くはないかもしれないが、物語としての面白さと思想的な深みを持つ秀作を後世へ残してくれた作家である。特に、1950年代から作品『山月記』が高校国語教育の定番教材となったのを契機に、中島は現在でも「国民作家」と言い得るような知名度を保っている<sup>1</sup>。

中島敦研究は、『古譚』を総題とする『山月記』と『文字禍』について『三田文学』の「雑誌論評欄」（1942年3月）に掲載された無署名の文章<sup>2</sup>をはじめとし今日に至るまで、実に多くの研究者によってなされてきた。それらの論考は、主に典拠論（漢文学や中国思想からの影響を含む）、存在論や時代論などである。しかし、中島が短い人生において目まぐるしいほどに居住地を移動したことと作品の舞台となる異国的空間（「異空間」）との関連性に焦点を当てる研究は、既に十分に重視されているとはいえない。幼少期の転居経験、少年期の朝鮮生活、中国への数度の旅、病弱な体質に苦しめられながらも決行した南洋行など、これらの異空間の探求と表象への考察は、中島文学を総括しようとする際、大きな意義と必要性があると考えられる。従って、筆者は本論において主に中島敦が実際に足を運んだことのある異空間を舞台とする作品（『北方行』『李陵』は例外）を研究対象として考察を行った。これらの作品を物語の舞台で大別すると、朝鮮物（『巡查の居る風景』『虎狩』）、中国物（『D市七月叙景』『北方行』『李陵』）、南洋物（『南島譚』『環礁』）となる。また、作品の創作時期は、1929年から1942までの間に包含されており、中島敦の創作活動の全期（1927-1942）<sup>3</sup>にほぼ重なっている。つまり、ここで取り上げられた作品は、中島敦の文学の特徴を総括できるものだといえる。

本論は、七章に分けて中島文学における〈異空間の探求と表象〉を考察し、それぞれ以下のような結論を見出した。

第一章では、同時代の朝鮮表象の文学言説を整理し分析を行い、強い日本・日本人と対照的な弱い朝鮮・朝鮮人を描き出す作品が当時の主流であった中で、朝鮮人の視点から書かれた中島敦の『巡查の居る風景』の独特性を考察した。作中の主人公たる趙教英と『虎狩』の主人公・趙大煥はともに、被支配者でありながら、支配側に立つ人間でもあった。こうした多重化された社会的立場によってもたらされた自我認識の亀裂の問題に着目し、両者の人物像に関する分析を試みた。

第二章では、『D市七月叙景』を中心に、作家が見た昭和初期の大連表象についてテキスト分析を試みた。当時、大連は日本人、ロシア人、中国人が混在し、歴史的にも政治的にも、三つの民族による渦巻き状の葛藤の中心地であった。中島敦は、支配したロシアと支配する日本、そして支配され続ける中国の、そのいずれをなくしても大連という街は形成されなかった、という本質的な条件に焦点をあて、満州生活者上層部の満鉄総裁と、中層部の満鉄社員と下層部の中国人苦力を、それぞれの断章の主人公として登場させた。三つの階層の間には明確な相関関係は存在しないものの、三者の日常生活に散見される「不安」と「混乱」には、いずれも植民地支配による非日常的要素が潜んでいる点で共通することを究明した。『D市七月叙景』は、即物的日常描写と植民地の非日常的要素を同時に取り入れ、日本人である「おのれ」と中国人である「他人」の共通点、すなわちますます植民地化されてゆく日本の支配の実情への不安を抉り出した作品である。

第三章では、『北方行』を研究対象として、主要な登場人物である三造と白夫人母娘をめぐるアイデンティティーの問題を解明し、その作品の問題点や作品執筆と中島端との関係への分析を試みた。〈三造物語〉の系譜に属する『プールの傍で』『北方行』『狼疾記』、この三作における「三造像」には肉体と精神の二元論的問題への探求の視点が類似しているものの、『北方行』とその以降の作品には、異なる国家や人種に直面しながら感じ取った自らのアイデンティティーへの不安感がうかがわれた。そこで、中国と日本の境界の狭間に生きながら動揺しつつある白夫人と娘がアイデンティティー危機に陥ったのは、主に「国語」と「母語」の混乱の故だという点を指摘した。最後に、『斗南先生』や伯父・中島端の著作を考察するにあたって、今まで指摘されていなかった中島端と『北方行』執筆との関係性を洗い出した。

第四章では、朝鮮物の『虎狩』における「京城」という時代的な「場」を巧みに生かしながら、植民者養成所とも言われる「京城中学校」とエキゾチックな虎狩りの場面の描写を通じて、作品には所々に散見する植民地的な要素が有機的に取り入れられている点を考察した。主人公の趙大煥は、本来の朝鮮人支配階層であった「両班」の出身であり、将来を約束されたはずのエリートであるにもかかわらず、最終的に反日運動に身を投じて当時の日本統治者層にとっての異端者となる運命を迎えたことには、当時の日本の朝鮮政策への作家の密かな疑問が表されていると判断した。

第五章では、中島敦が南洋群島で認識した〈境界性〉を主な視点にして、南洋物の分析



及び帰朝後に書き下ろした作品『李陵』との関連性を考察してみた。中島は当時の南洋が文明と未開の＜境界＞的な位相に置かれ、温帯基準と熱帯基準の共存で一種の混乱に満ちている現状に目覚めたがゆえに、この南洋行を通じて作家としての中島敦の心境が変化したのみならず、中島文学の根底をなす作品主題もまた大きな変貌をとげたといえる。なお、南洋物と『李陵』における二つの舞台および作中人物の視線の類似点より、こうした＜境界性＞への複雑な感情が南洋物の他に、『李陵』からも読み取れたことを究明し、李陵は一種の＜境界者＞であることを明らかにすることができた。

第六章では、同年代の日本人知識人が書いた南洋関連言説の特徴を究明した上で、中島敦の南洋見聞に基づく『南島譚』『環礁』の両作品を考察した。未開で無知の南洋島民、というステレオタイプな見方が流布されていた当時の主流の南洋関連言説と異なり、『南島譚』『環礁』においては、いずれも南洋の習俗と現地の島民に好意と理解を示し、可能な限り客観的に南洋表象を描き出そうとしたことが両作品を通してうかがわれた。これにより、中島敦は日本の価値観（文化）を相対化しながら、日本と異なる南洋の現実を広い視野で捉えていたのであると結論付けた。

第七章では、『李陵』における「匈奴」という異空間を視座に、李陵・司馬遷・蘇武三人の登場人物の関係について再解釈を試みた。匈奴は李陵にとって大きな存在であるばかりでなく、司馬遷にも生涯癒えぬ傷を負わせる原因となったため、中島は異空間と異民族としての「匈奴」を強く意識しながら、『李陵』の執筆に当たったと考えられる。また、この作品に司馬遷という人物を取り入れた理由として、司馬遷が李陵を弁護したことで宮刑に処されたのみならず、「李陵の禍」の裏には武帝の匈奴征伐に対する司馬遷の密かな批判の姿勢が、その誘因となっているという真相を抉り出した。最後に、作家の創作プロセスを整理した上で、時代に翻弄され、自らの力で人生を構築することができない李陵・司馬遷・蘇武は、昭和10年代の戦争下ではごく普通に見られる人世の縮図であるという昭和初期の日本の現実なのだと結論付けた。

以上、本論は朝鮮半島、中国東北部、南洋群島、匈奴といった異国的空間を舞台にして書かれた作品を研究対象として、中島文学における＜異空間の探求と表象＞を厳密に論じたものである。これらの考察を通じて見えてきたのは、作品の行間に潜む当時の日本の現実への中島敦の関心と視線である。言い換えるならば、中島敦の朝鮮物、中国物と南洋物においては、それぞれ朝鮮表象、中国表象、南洋表象が緻密に描き出されていると同時に、

作者が抱いた日本（人）像も潜在しているという結論に達した。

まず、『巡査の居る風景』『虎狩』においては、中島敦の朝鮮滞在体験（1920-1926）に基づく描写が多く、主に当時の京城風景（街の日常風景、京城中学校など）と朝鮮人（巡査の趙教英、「私」の同級生の趙大煥など）の生活様子が点描されている。ただし、物語の時間となる 1920 年代という時点で、朝鮮が日本の植民地支配下に置かれてからすでに 10 年以上経過していた。第一次朝鮮教育令や第二次朝鮮教育令の公布と実施、同化政策の遂行、「武断政治」から「文化政治」への朝鮮支配の政策変更などなど、こうした一連の政策の影響や現地在住の日本人の存在を無視して、当時の朝鮮表象を語る事が困難だったのである。特に、『巡査の居る風景』の趙教英と『虎狩』の趙大煥が直面したアイデンティティ問題（自我認識の亀裂）は、日本の植民地政策によって必然的に発生したものである。日本が朝鮮で同化政策を推進していた 1920 年代には、中島敦と同時代の日本の知識人のほとんどは、日本（人）としての自負を抱きながら朝鮮（人）に対して蔑視的な見方を表露していた。そんな状況下で、中島敦は作品のなかで異端者の朝鮮人キャラクターを創作することで、当時の朝鮮における日本の植民地支配（特に、同化政策の必要性と効果性）への疑問を呈したのである。

次に、『D 市七月叙景』『北方行』『李陵』においては、それぞれ大連、北平（現・北京）、匈奴という異空間をめぐる物語が進行しているが、各作品には日本（人）の存在と影響が色濃く投影されている。例えば、『D 市七月叙景』の場合は、中国人労働者が登場したとはいえ、中島敦が満鉄の総裁や日本人職員の描写に多くの筆墨を費やしていた。『北方行』の場合は、中国（人）への言及が少ないことに加えて、表面的な描写で掘り下げ不足という問題が見られた。一方で、北平へ渡った日本人（黒木三造、白夫人、折毛伝吉）や日中混血児（麗美、英美、秀文）に関して、中島敦はこれらの登場人物の人種的・文化的アイデンティティの問題を大きく取り上げた。『李陵』の場合は、中国歴史上の漢王朝と匈奴との葛藤をめぐるストーリーが物語られている。一見すると、作者が生きていた昭和初期の日本とは無関係のようだが、実際、主人公・李陵の匈奴体験や司馬遷の匈奴政策への批判などが、中島敦自身の異国体験や日本の植民地政策への疑惑に一致するものである。つまり、中島敦の中国物に属するこの三つの作品は、順々に (1) 1920 年代の大連 (2) 1930 年の北平 (3) 紀元前の匈奴を物語の舞台に設置したが、そこにはそれぞれ 1920 年代、1930 年代、1940 年代における日本の寓意的な表象が見られるのである。

最後に、『南島譚』『環礁』においては、日本委任領の南洋群島（現・ミクロネシア）での語り手の「私」（中島敦）が見聞した出来事が描かれている。コロールに南洋庁が設置されてから 19 年目となる 1941 年の南洋群島は、すでに中島敦が期待していた未開の南洋で

はなくなり、未開と文明の境界的な位相に置かれていた。特に、太平洋戦争が勃発した後、戦地に近いパラオでの生活は中島敦にとって極めて大変であった。同時代の多くの日本人が、統治者目線で被統治者の南洋（人）を「無知」「野蛮」「未開」と捉えていた中で、中島敦は自らの南洋物のなかで、現地の伝統や風俗への戸惑いを示しながらも、その存在の合理性を認識していた。さらに、『南島譚』における〈昔の南洋〉と『環礁』における〈今の南洋〉を考察するにあたって、日本人と南洋島民の間に生まれてきた混血児への作者の関心や、科学と合理主義を至上とする近代文明の侵入への批判が読み取れた。

上記のように、中島敦は自らの作品に多様な異空間を取り入れることによって、1920年代から1940年代までの日本の現実を巧みに盛り込んでいたのである。中島は遺稿『章魚木の下で』のなかで「戦争は戦争。文学は文学。（中略）書くものの中に時局的色彩を盛らうと考へたこともなく、まして、文学などといふものが国家的目的に役立たせられ得るものとは考へもしなかった。」と述べているが、実は彼の作品には国策的色彩がないものの、時代性が薄いものでは決してないことが本論の考察で明らかになったと思われる。

---

注：

<sup>1</sup> 中島敦という作者と『山月記』という作品が、今もほとんどの日本人に知られている理由について、小森陽一はこう指摘する。「中島敦が、いわゆる戦争協力文学を書かなかったがゆえに、敗戦後の「国語」教育の教材として、安心して使用できたということである。同時に、『山月記』が、日本が侵略していた中国の「小説」、すなわち『人虎伝』を基盤して成立したものであったがゆえに、一種の贖罪的機能を持っていた、ということ。／しかし何よりも重要なことは、日本近代文学が抑圧しつづけてきた、漢文的な意味での「小説」の世界を、内容的にも、そして形式的にも、さらには、近代口語がその身からそご落としてきた、漢文的な文体において、体現していたという事実である。すなわち、中島敦の『山月記』には、近代日本の「小説」が失いつつあった伝統的な漢文的「小説」の生命が脈々と流れていたのである。」（勝又浩・山内洋編『中島敦『山月記』作品論集』クレス出版、2001年10月、p.357-358）また、島内景二は『中島敦「山月記伝説」の真実』（文藝春秋、2009年10月）において、「『山月記』が今日まで生き続けたのは、文学史上の奇跡と言ってよい」（p.23）と高く評価する。

<sup>2</sup> 「中島敦の「古譚」は、近頃のがさつな文壇には珍らしい理智的な作品であって、それだけ目立って見える。しっかりしたねれた筆致で気品があり、悪ふざけてない面白さを持ってゐた。」

<sup>3</sup> 中島敦は1927年に最初の習作『下田の女』が第一高等学校校友会発行の『校友会雑誌』（第313号）に掲載され、1942年に遺稿『章魚木の下で』（『新創作』新年号（第5巻第1号）に掲載、豊国社、1943年1月1日）を書き下ろした。

## 主要参考文献

排列は出版年月（刊行年）の新しいものから順に表示する。

### 【論文】

平林文雄「中島敦『北方行』の研究——その成立と構成と撤退——「ノート第一」と『北方行』と『狼疾記』——」（高崎商科大学メディアセンター編集『高崎商科大学紀要』第27号、2012年12月）

松本和子「ミクロネシアの日本語」（明治書院『日本語学』Vol.29-6、2010年6月）

渡邊ルリ「中島敦『北方行』に見る一九三〇年中原大戦下の中国——『北方行』序論——」（東大阪大学・東大阪大学短期大学部『教育研究紀要 第7号』、2010年3月）

権錫永「「ヨボ」という蔑称」（『北海道大学文学研究科紀要』第132号、2010年）

楠井清文「中島敦「虎狩」論——語り手の手法と「虎」イメージの分析を中心に——」（立命館大学日本文学会『論究日本文学』第90号、2009年5月）

須藤直人「中島敦の混血表象と南洋群島——ポストコロニアル異人種間恋愛譚——」（立命館大学国際言語文化研究所『立命館言語文化研究』20巻1号、2008年9月）

藤村猛「中島敦「D市七月叙景（一）」論」（安田女子大学、安田女子短期大学編『安田女子大学紀要 NO.34』2006年2月）

渡邊ルリ「中島敦『李陵』論」（奈良女子大学国語国文学研究室『叙説』第33号、2006年）

南富鎮「＜娼婦＞と＜虎＞の朝鮮表象——中島敦＝（静岡大学人文学部『人文論集』NO56-2、2005年）

橋本正志「中島敦「北方行」の方法——登場人物の言語認識を視座として」（『阪神近代文学研究』第6号、阪神近代文学会、2005年3月）

川村湊「中島敦伝2 植民地の“虎”」（『アイ・フィール』NO.30、2004年11月）

藤村猛「中島敦の作品に描かれた「女性」たち（1）——習作群から「北方行」を中心に——」（安田女子大学・安田女子短期大学編集『安田女子大学紀要』NO.31、2003年2月）

藤村猛「中島敦「虎狩」論」（安田女子大学日本文学会『国語国文論集』第33号、2003年1月）

吉田光男「士族と両班のあいだ——歴史の時間・文化の時間」（韓国・朝鮮文化研究会『韓国朝鮮の文化と社会』第1号、風響社、2002年10月）

安福智行「D市七月叙景（一）論——「満洲日報」を視座として——」（佛教大学国語国文学会『京都語文』、2001年10月）

村田秀明「中島敦「李陵」関係地図」（熊本大学文学部国語国文学会『国語国文学研究』第

29号、1993年12月)

吉原英夫「李陵の禍」(漢文学会会報50号『中国文化——研究と教育——』、1992年6月)

橋谷弘「一九三〇・四〇年代の朝鮮社会の性格をめぐって」(『朝鮮史研究会論文集』27号、1990年3月)

山下真史「中島敦『虎狩』論」(東京大学国語国文学会『国語と国文学』9月号、1987年)

木村一信「中島敦「虎狩」論——方法と主題——」(熊本女子大学編『熊本女子大学学術紀要』第30巻、1978年3月)

菅野昭正「忘れられた胎児——中島敦『北方行』——」(中央公論社『小説の現在』、1974年7月)

鷺只雄「初期中島敦論——「虎狩」を中心に——」(『国文学言語と文芸』第76号、1973年5月)

濱川勝彦「北方行と『過去帳』と」(『国語国文』第39巻・第9号、1970年9月)

田鍋幸信「中島敦の文学——「北方行」を中心に——」(日本大学法学部研究所『日本大学法学部 創立八十年記念論文集』、1967年12月)

岩田一男『『光と風と夢』と Vailima Letters』(『一橋大学研究年報人文科学研究 I』、1959年5月)

#### 【単行本】

保阪正康『昭和の戦争と独立——二十一世紀の視点で振り返る』山川図書出版社、2013年7月

仲程昌徳『「南洋紀行」の中の沖縄人たち』ボーダーインク、2013年6月

閻瑜『新しい中島敦像——その苦悩・遍歴・救済』桜美林大学北東アジア総合研究所、2011年3月

仲村修、オリニ翻訳会『韓国古典文学の愉しみ 下——洪吉童伝 両班伝ほか』白水社、2010年3月

ポール・マッカーシー、オクナー深山信子『世界文学のなかの中島敦』せりか書房、2009年12月

山下真史『中島敦とその時代』双文社、2009年12月

京城中学校同窓会誌、百周年記念事業実行委員会編『さらば京中！—時人を待たず—』2009年12月

島内景二『中島敦「山月記伝説」の真実』文藝春秋、2009年10月

川村湊『狼疾正伝——中島敦の文学と生涯』河出書房新社、2009年6月  
青木澄夫『放浪の作家安藤盛と「からゆきさん」』風媒社、2009年3月  
川村湊ら『中島敦 生誕100年、永遠に越境する文学』河出書房新社、2009年1月  
林俊雄『スキタイと匈奴 遊牧の文明』講談社、2007年6月  
加藤聖文『満鉄全史「国策会社」の全貌』講談社、2006年11月  
鷺只雄『芥川龍之介と中島敦』翰林書房、2006年4月  
坂野徹『帝国日本と人類学者1884-1952』勁草書房、2005年11月  
印東道子『ミクロネシアを知るための58章』明石書店、2005年11月  
村田雄二郎、C・ラマール編『漢字圏の近代——ことばと国家——』東京大学出版社、2005年9月  
渡辺一民『中島敦論』みすず書房、2005年3月  
勝又浩『中島敦の遍歴』筑摩書店、2004年10月  
木村一信『昭和作家の〈南洋行〉』世界思想社、2004年4月  
渡邊一民『〈他者〉としての朝鮮 文学的考察』岩波書店、2003年6月  
子安宣邦『漢字論——不可避の他者』岩波書店、2003年5月  
南富鎮『近代日本と朝鮮人像の形成』勉誠出版、2002年7月  
井上ひさし、こまつ座『井上ひさしの大連 写真と地図で見る満洲』小学館、2002年1月  
勝又浩・山内洋編『中島敦『山月記』作品論集』クレス出版、2001年10月  
岡田浩樹『両班——変容する韓国社会の文化人類学的研究』風響社、2001年2月  
西澤泰彦『図説 満鉄「満洲」の巨人』河出書房新社、2000年8月  
川村湊『作文のなかの大日本帝国』岩波書店、2000年2月  
京城龍山公立小学校同窓会・龍会発行『龍山小学校史・龍会史』1999年12月  
西澤泰彦は『図説 大連都市物語』河出書房新社、1999年8月  
沢田勲『匈奴——古代遊牧国家の興亡』東方書店、1999年1月  
竹田晃『新釈漢文大系 第83巻 文選（文章篇）中』明治書院、1998年7月  
佐藤武敏『司馬遷の研究』汲古書院、1997年9月  
上田博／木村一信／中川成美編『日本近代文学を学ぶ人のために』世界思想社、1997年7月  
黒川創『〈外地〉の日本語文学選（3）朝鮮』新宿書房、1996年3月  
ハリー・ゴードン著、山田真美訳『生きて虜囚の辱めを受けず——カウラ第十二戦争捕虜収容所からの脱走——』清流出版、1995年11月  
田山録弥『定本 花袋全集 第28巻』臨川書店、1995年8月

小沢秋広『中島敦と問い』河出書房新社、1995年6月

池田浩士編『カンナニ 湯浅克衛植民地小説集』インパクト出版会、1995年3月

川村湊『南洋・樺太の日本文学』筑摩書房、1994年12月

堀敏一『中国と古代東アジア世界』岩波書店、1993年12月

南洋庁編『南洋庁統計年鑑4』青史社、1993年11月

勝又浩、木村一信編『昭和作家のクロノトポス 中島敦』双文社、1992年11月

大江志乃夫ら編集『岩波講座 近代日本と植民地① 植民地帝国日本』岩波書店、1992年11月

土方久功『土方久功著作集』第六卷、三一書房、1991年11月

川村湊『異郷の昭和文学——「満州」と近代日本——』岩波書店、1990年10月

鷺只雄『中島敦論——「狼疾」の方法』有精堂、1990年5月

和田博文『単独者の場所』双文社、1989年12月

阿辻哲次『漢字の歴史』大修館書店、1989年11月

田鍋幸信編『中島敦・光と影』新有堂、1989年3月

日本文学研究資料刊行会編『日本文学研究資料叢書 梶井基次郎・中島敦』有精堂、1986年8月

木村一信『中島敦論』双文社、1986年2月

朝鮮総督府『旧植民地・占領地域用教科書集成 一九二二年～一九二八年 朝鮮総督府編纂教科書』あゆみ出版、1985年翻刻出版

奥野政元『中島敦論考』桜楓社、1985年4月

木村遼次『大連物語』星共社、1983年12月10日

『仁旺ヶ丘』編集委員会企画『仁旺ヶ丘～京城中学卒業五十周年記念誌～』京喜会、1982年1月

木下杢太郎『木下杢太郎全集 第十卷』岩波書店、1981年12月

田中克彦『ことばと国家』岩波書店、1981年11月

碓井隆次『京城四十年』生活社、1980年2月

中村光夫、氷上英広、郡司勝義編『中島敦研究』筑摩書房、1978年12月

小菅輝雄編『南洋群島写真帖』南洋群島協会、1978年5月

濱川勝彦『中島敦の作品研究』明治書院、1976年9月

金奉鉉『朝鮮の民話』国書刊行会、1976年7月

鶴見俊輔編『近代日本思想大系 24 柳宗悦集』筑摩書房、1975年6月

山中襄太『語源十二支物語』大修館書店、1974年11月

崔仁鶴『朝鮮昔話百選』日本放送出版協会、1974年11月  
大岡昇平『歴史小説の問題』文藝春秋、1974年8月  
武田泰淳『司馬遷——史記の世界——』講談社、1972年10月  
山辺健太郎『日本統治下の朝鮮』岩波書店、1971年2月  
実方清編『日本現代小説の世界』光明社、1969年10月  
佐々木充『近代文学資料1 中島敦』桜楓社、1968年3月  
中河与一『中河与一全集 第11巻』角川書店、1967年8月  
伊藤整ら編『日本現代文学全集 第82巻』講談社、1964年10月  
志賀直哉／佐藤春夫／川端康成監修『世界紀行文学全集 第13巻』修道社、1960年9月  
福永武彦編『近代文学鑑賞講座 第18巻』角川書店、1959年12月  
三宅雪嶺『同時代史 第六巻』岩波書店、1954年8月  
酒巻和男『捕虜第一号』新潮社、1949年11月  
石川達三『赤虫島日記』東京八雲書店、1943年5月  
松岡静雄『ミクロネシア民族誌』岩波書店、1943年1月  
奥野信太郎『随筆北京』第一書房、1940年3月  
清水安三『朝陽門外』朝日新聞社、1939年4月  
大宜味朝徳『南洋群島案内』海外研究所、1939年、2004年2月復刻版  
阿部知二『北京』第一書房、1938年4月  
中河与一『熱帯紀行』竹村書房、1934年12月  
朝鮮総督府編『朝鮮の姓』第一書房、1934年3月初版、1977年8月復刻  
百貨店商報社編『日本百貨店総覧 第1巻（三越）』百貨店商報社、1933年  
安藤盛『南洋と裸人群』岡倉書房、1933年11月  
朝鮮総督府警務局編『大正十五年 朝鮮警察の概要』大和商会印刷、1926年8月  
朝鮮総督府学務局編『大正十五年 朝鮮教育要覧』大和商会印刷所印刷、1926年7月  
服部宇之吉『北京籠城日記』服部宇之吉刊、1926年7月  
京城教育会編『京城案内』京城教育会、1926年6月  
芥川龍之介『支那遊記』改造社、1925年11月  
田山花袋『満鮮の行楽』大阪屋号書店、1924年1月  
国民文庫刊行会編『国訳漢文大成 文学部第4巻』国民文庫刊行会、1924年  
中野江漢『北京繁昌記』支那風物研究会、1922年8月  
徳富蘇峰『支那漫遊記』民友社、1918年6月  
朝鮮及満洲社編『朝鮮及満洲 第57号』朝鮮及満洲社、1912年8月



上田万年『国語のため』富山房、1897年12月

【雑誌】

朝鮮教育界編『文教の朝鮮』朝鮮教育会、1933年3月

【中文資料】

[晋]陳寿 撰、[南朝宋]裴松之 注『三國志集解 五』（全八冊）上海古籍出版社、2013年12月

范文瀾編『中国通史 第二冊』人民出版社、2009年7月

『百衲本二十四史 漢書 四部叢刊史部』商務印書館、1930年8月

【辞書】

朱信源編『標準 韓国語辞典』白帝社、2005年5月

## 初出一覧

本論の各章の初出は以下の通りである。

序章 本研究の目的とその方法及び論文の構成

書き下ろし

第一章 中島敦における朝鮮表象——『巡査の居る風景』を中心に

「中島敦における朝鮮表象——習作「巡査の居る風景」を中心に」（東京外国語大学日本専攻『日本研究教育年報 19』、2015 年 3 月）

第二章 中島敦が見た昭和初期の中国の一側面——『D 市七月叙景（一）』を中心に

「中島敦が見た昭和初期の中国の一側面——習作「D 市七月叙景（一）」を中心に」（中国杭州・浙江工商大学東亜研究所「異域之眼：日本人の漢文游记研究」国際シンポジウム会議録、2015 年 3 月）

第三章 『北方行』に関する一考察——アイデンティティの探求を視座として

「中島敦の「北方行」に関する一考察——アイデンティティの探求を視座として」（東京外国語大学大学院総合国際学研究科『言語・地域文化研究』第 22 号、2016 年 1 月）

第四章 日本植民地支配下の朝鮮物語——『虎狩』をめぐって

書き下ろし

第五章 南洋行に関する一考察——「南の空間」における＜境界性＞を中心に

「中島敦の南洋行に関する一考察——「南の空間」における＜境界性＞を中心に」（東京外国語大学大学院総合国際学研究科『言語・地域文化研究』第 19 号、2013 年 3 月）

第六章 南洋表象と＜南＞の記憶——『南島譚』と『環礁』を中心に

書き下ろし

第七章 『李陵』に関する一考察——「匈奴」という接点について

「中島敦の『李陵』に関する一考察——「匈奴」という接点について」（東京外国語大学大

学院総合国際学研究科『言語・地域文化研究』第21号、2015年1月)

終章 中島敦文学を総括して  
書き下ろし